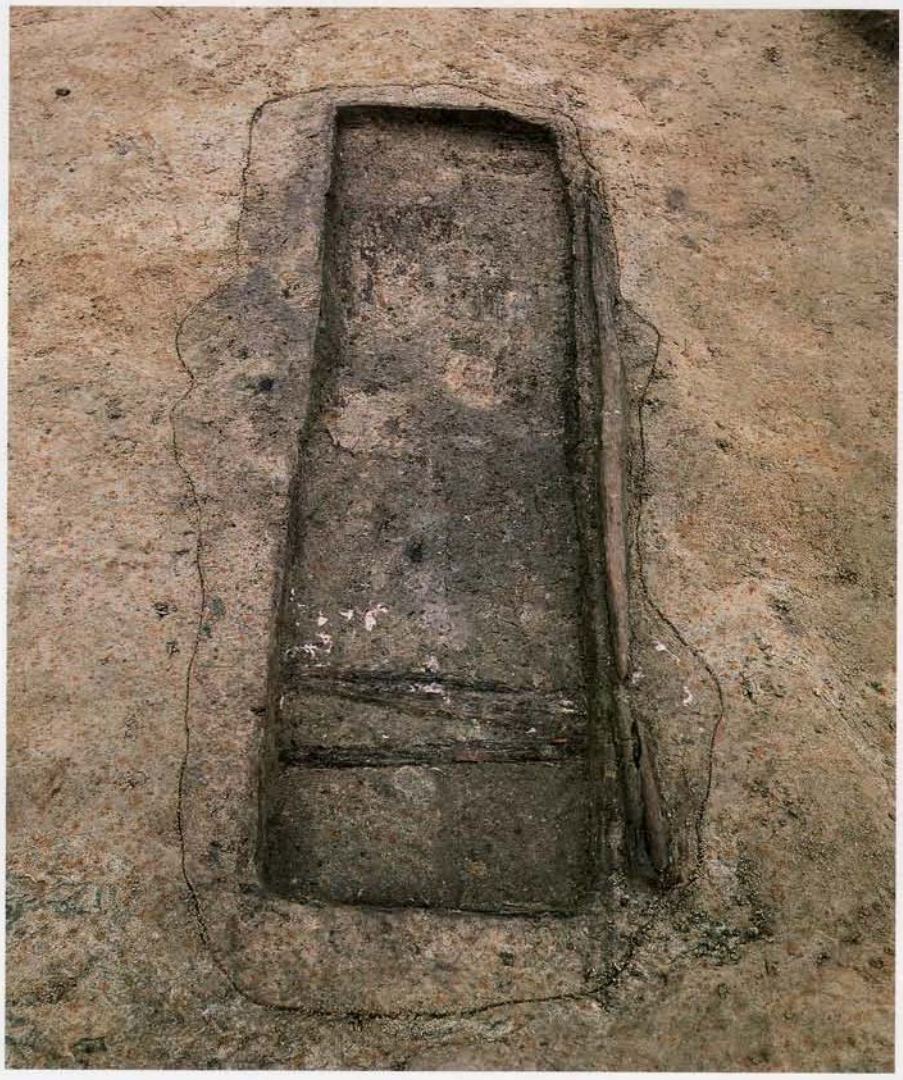
宮城県文化財調査報告書第193集

市川橋遺跡

平成15年3月

宮城県教育委員会



SK175土葬墓
(SE→)

SK184土葬墓（SE→）

SX45土器埋設遺構（W→）

SX45土器埋設遺構の土師器甕　縮尺：1/6

土器埋設遺構の土師器甕（1列目：SX45
2・3列目：左からSX1・19・3・238・75・157、SX157のみ単体）
縮尺：任意

カラー図版2

序　　文

新たな世紀、21世紀を迎え、携帯電話やパソコンなど高度情報通信機器が普及し、これらなくしての社会生活は考えられない時代となりました。これらの情報通信技術や情報処理技術はこれからも進歩し、私たちの社会生活や世の中の仕組までも変えていくことでしょう。このような日々変化していく時代の中にあって私たちの行く末を考えるとき、来し方を正確に知ることの重要性はますます増してきております。

歴史は、過去に起こった事実の積み重ねから明らかにされていかねばなりません。県内各地域は情報の共有化により均質化しておりますが、特に地域との結びつきの強い埋蔵文化財は各地域の個性溢れる歴史を明確にするためにも欠くことのできない重要な位置を与えられてきております。しかし、埋蔵文化財は道路や宅地の造成、ほ場整備などの大規模開発により年々破壊され、消滅の危機にさらされています。

このような中にあって、宮城県教育委員会では、開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発と関わりが生じた場合には積極的に保護することに努めてきております。

本書は、宮城県仙台東土木事務所との保存協議に基づき、砂押川広域基幹河川改修事業の名古曽川遊水池造成工事に先だって実施した多賀城市市川橋遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、特別史跡多賀城跡の西側に平安時代の墓域が広がっていることなどが明らかとなりました。この成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

最後に、遺跡の保存にご理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際に調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成15年３月

宮城県教育委員会
教育長　千　葉　眞　弘

例　　言

1．本書は、宮城県仙台東土木事務所が担当する砂押川広域基幹河川改修事業の名古曽川遊水池造成工事に伴い平成12～14年度に実施した市川橋遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。

2．調査は、宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3．本書の第１図は国土交通省国土地理院発行の「仙台」「塩釜」（縮尺1/50.000）、第２図は多賀城市都市計画図（縮尺1/5.000）を複製して使用した。

4．遺構平面図に付した距離の数値は、隣接する山王遺跡八幡地区の測量原点（0・0）からの距離を表しており、Ｅ15、Ｎ300などという場合は原点から東へ15m、北へ300ｍの距離であることを表す。測量原点の座標値は旧日本測地系に基づく国土座標第Ｘ系のＸ＝－188,880.000、Ｙ＝13,230.000である。

5．使用した遺構略号は以下の通りである。遺構番号は、遺構の種別に関わらず、調査の際に付した通し番号を用いている。

掘立柱建物跡：ＳＢ　竪穴住居跡：ＳＩ　土器埋設遺構：ＳＸ

溝跡：ＳＤ　土葬墓・土壙：ＳＫ

6．土色の記述については『新版標準土色帖』（小原・竹原1973）を参照した。

7．本文中に使用した「灰白色火山灰」（山田・庄司1980）は、10世紀前葉頃に降下したとみられているものである（白鳥1980、井上・山田1990）。なお、遺構断面図に付した土層註記表と、巻末の遺構属性表に記した「火山灰」とは、この火山灰を指す。

8．本文中における土師器の記述については、製作に際してロクロを使用したものを「ロクロ調整」、使用していないものを「非ロクロ調整」と表記した。

9．発掘調査及び整理・報告書の作成に際して、以下の方々と関係機関から指導、助言を賜った（五十音順、敬称略）。

石田明夫、佐藤敏幸、田中則和、千葉孝弥、藤澤　敦、

㈱古代の森研究舎、東北歴史博物館、宮城県仙台東土木事務所、宮城県多賀城跡調査研究所

10．本書は調査を担当した各調査員の協議を経て、吉野　武が執筆・編集した。

11．本書の調査成果については宮城県遺跡調査成果発表会、城柵官衙遺跡検討会でその内容の一部を報告しているが、これと本書の記載内容が異なる場合は、本書が優先する。

12．発掘調査の記録や整理した資料、出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の概要……1
第Ⅱ章　調査の経緯と経過・方法……4
第Ⅲ章　調査の成果……5
　1．旧地形と層序……5
　2．発見した遺構と遺物……6
第Ⅳ章　考察……66
　1．遺物について……66
　2．遺構について……68
　3．各時代の様相と特徴……79
　4．多賀城下の墓域……81
　5．まとめ……83
引用・参考文献……84
写真図版……93

調　査　要　項

遺 跡 名：市川橋遺跡（宮城県遺跡登録番号　18008）

遺跡記号：ＥＳ

所 在 地：宮城県多賀城市市川字中谷地

調査原因：砂押川広域基幹河川改修事業による名古曽川遊水池造成工事

調査面積：約7500㎡

調査期間：平成12年８月１日～９月１日、平成13年４月９日～６月８日、
　　平成14年９月２日～12月６日

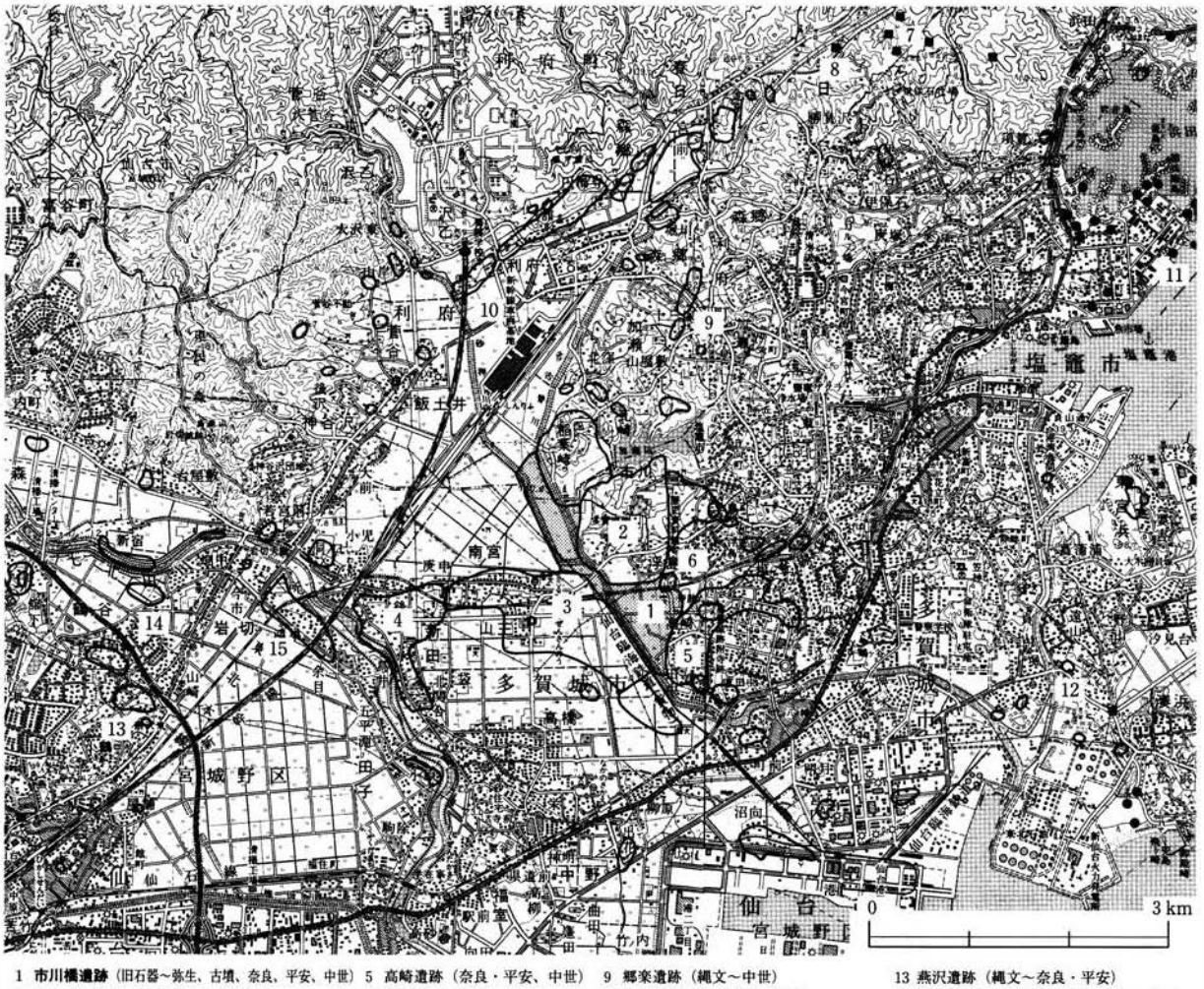
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調 査 員：平成12年度　真山　悟・須田良平・稲毛英則
　　平成13年度　真山　悟・須田良平・吉野　武・引地弘行
　　平成14年度　阿部博志・柳沢和明・須田良平・村田晃一・茂木好光・岩見和泰・
　　奥山芳明・高橋栄一・吉野　武・白崎恵介・西村　力・稲毛英則・
　　千葉直樹

第Ⅰ章　遺跡の概要

位置と地理的環境：市川橋遺跡は宮城県仙台市の中心部から北東へ約10km、多賀城市街の北西部に所在する特別史跡「多賀城跡」の南側と西側を取り巻く水田地帯に広がる東西1.4km、南北1.6km、総面積703.000㎡に及ぶ遺跡である（第1図）。遺跡は、旧石器時代から近世まで断続的に営まれているが、一般的には古墳時代～奈良・平安時代を中心とした遺跡として知られている。

地形的には仙台平野の北端部、砂押川左岸の丘陵地から沖積地へと移行する低地上に立地する。丘陵地は、陸前丘陵から派生した標高50m前後の緩やかな起伏をもつ多賀城台地で、その南西端に「多賀城跡」が所在する。多賀城跡外郭西辺のすぐ西側には名古曽川、さらに約200m西側では砂押川が南流し、両河川は外郭南西隅の約100m南で合流する。両河川の周囲には標高２～３ｍの沖積地が広がり、本遺跡はこの沖積低地上を主として東側の丘陵地と砂押川に挟まれて立地する。現況は水田主体の平坦地で、場所によっては微高地も認められる。また、沖積地には埋没した旧河川やそれらによって形成された自然堤防、泥炭層が厚く堆積する後背湿地が複雑に入り組んで分布している。



1 市川橋遺跡（旧石器～弥生、古墳、奈良、平安、中世）
2 特別史跡多賀城跡（奈良・平安）
3 山王遺跡（弥生、古墳、奈良・平安、近世）
4 新田遺跡（縄文、古墳、奈良・平安、中世）
5 高崎遺跡（奈良・平安、中世）
6 館前遺跡（古代、中世）
7 大沢窯跡（平安、中世）
8 硯沢窯跡（奈良・平安）
9 郷楽遺跡（縄文～中世）
10 八幡崎Ｂ遺跡（縄文～平安）
11 新浜Ｂ遺跡（縄文晩、弥生、奈良・平安）
12 柏木遺跡（旧石器・古代）
13 燕沢遺跡（縄文～奈良・平安）
14 岩切畑中遺跡（縄文～平安、中世、近世）
15 鴻ノ巣遺跡（弥生～中世）

第１図　市川橋遺跡と周辺の遺跡

歴史的環境：周辺には多賀城跡をはじめとして多数の遺跡が分布する。それらの調査は多賀城市教育委員会、宮城県多賀城跡調査研究所、宮城県教育委員会によって継続的に行われており、弥生時代から近世までの古地形や遺跡の様相が明らかになりつつある。その概要は近年の報告書にまとめられている（村田ほか1998、古川・佐久間ほか2001）ので、以下では、本調査と関係の深い古墳～平安時代に限定して周辺の環境を記すことにする。

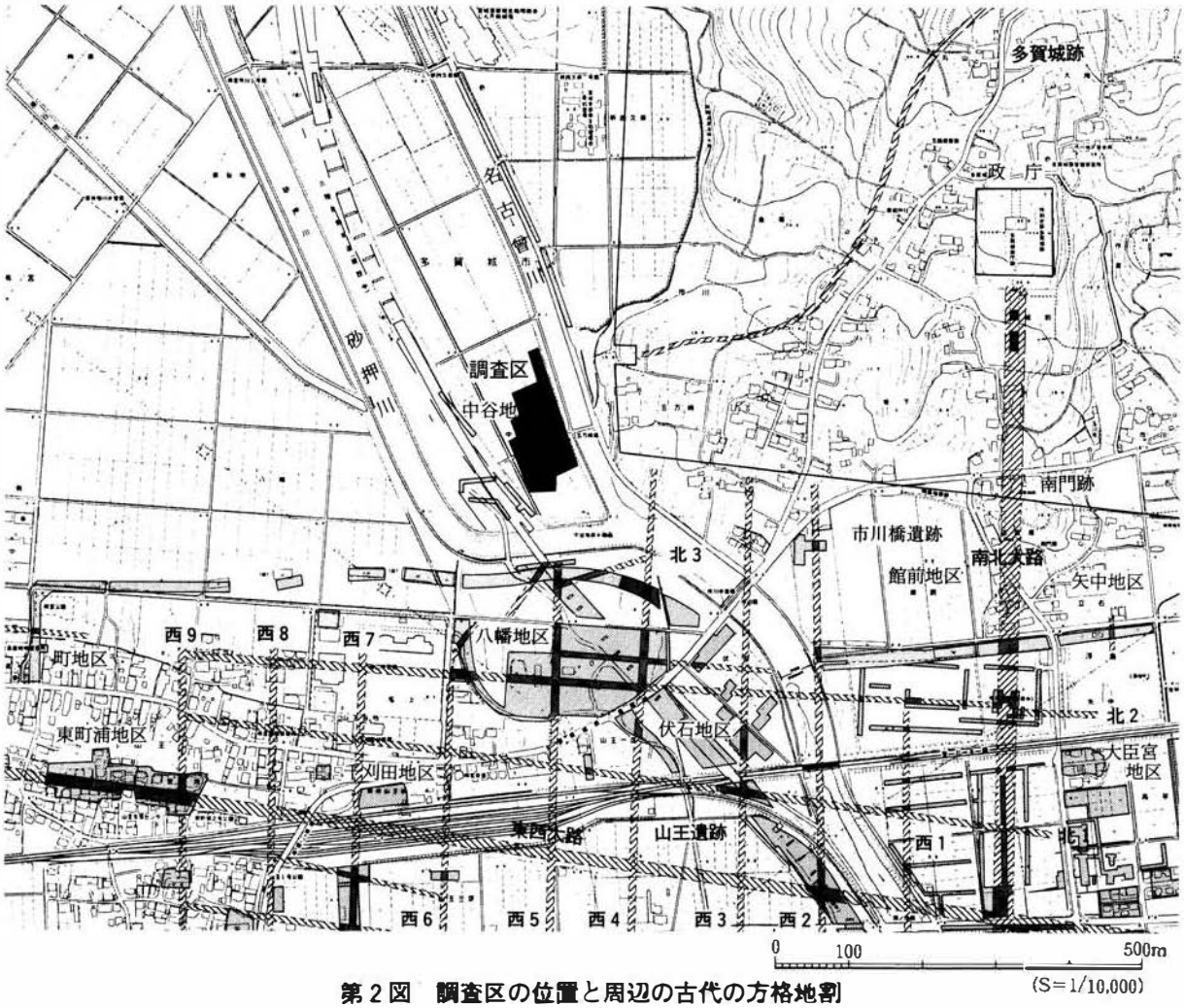
〈古墳時代〉前期には東側の丘陵上や山王遺跡の自然堤防上に集落や墓地が営まれるようになり、中期にも自然堤防上に集落が存在したことが明らかになっている。後期になると、山王遺跡八幡地区に大きな集落が形成されている。集落には多数の竪穴住居跡や区画施設跡、河川跡などがあり、重複の著しさから長期間にわたり集落が営まれていたとみられている（後藤ほか1994）。また、本遺跡館前地区でも集落が検出されており、近くの河川跡からは土器のほか木製品が多量に出土している。八幡地区と館前地区の集落については近年、旧河川に挟まれた微高地に連なる東西400m、南北60～120mに及ぶ同一集落の可能性が指摘され、区画施設の存在や、遺物に在地産の須恵器が定量含まれること、柄香炉といった特殊な遺物の存在などから、一定地域の基幹となる集落とみられている（後藤・村田ほか2001）。一方、当期の古墳には横穴式石室をもつ稲荷殿古墳、多賀城外郭南門西側で発見された田屋場横穴墓群があり、後者の造営には山王・市川橋遺跡の集落の居住者が関わったとみられている（宮城県多賀城跡調査研究所1986・2001）。

〈奈良時代〉神亀元年（724）頃、本遺跡の北側丘陵上に律令国家の陸奥国支配の根拠地である「多賀城」が築かれる。多賀城は一辺670～1000mの不整方形の範囲を築地塀で囲み、ほぼ中央に政庁（宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所1982）、その周囲には実務官衙が配置されている。外郭南・東・西辺上には門が開かれており、南門～政庁間や東門～西門間の道路も明らかになっている（後藤・柳澤1991）。また、外郭南門の傍らには多賀城碑があり、天平宝字六年（762）に多賀城を修造した藤原朝獦の顕彰碑とみられている（安倍・平川編1989）。

一方、周辺では多賀城跡の南東約1.2kmの丘陵上に付属寺院の多賀城廃寺があるが、他には遺構が少なく、本遺跡や山王・新田・高崎遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが散在的に検出されているにすぎない。ただし、本遺跡や山王遺跡では多賀城外郭南門から南に延びる南北大路や外郭南辺に並行する東西大路が確認されており、南北大路の構築は奈良時代半ば以前に遡る可能性も考えられている（古川・佐久間ほか2001）。また、山王遺跡八幡地区では漆作業関連遺物や、鉄滓・炉壁などが出土しており、漆や鍛冶の工房の存在が考えられている（千葉・鈴木ほか1997、佐藤・佐藤ほか1997）。

〈平安時代〉多賀城の南面一帯の広い範囲で、多数の遺構がみられるようになる。特に本遺跡や山王遺跡には、幅23mの南北大路や幅12mの東西大路を基幹道路として、多賀城政庁中軸線や外郭南辺を基準とする東西・南北道路が碁盤目状に配された約1町四方の方格地割が施工されている（第2図）（千葉1994、菅原・佐藤ほか1995）。地割りは今まで南北大路の西側を中心に検出されていたが、近年は東側にも広がることや、南北大路が東西大路との交差点より南には造られなかったことが明らかになっている（千葉・鈴木2002）。

方格地割内は遺構の密度が高く、道路と方向を揃えた掘立柱建物跡、塀跡、区画溝跡、井戸跡など



第2図　調査区の位置と周辺の古代の方格地割

がみられる。遺物も土器のほかに施釉陶器、硯が多くみられ、中国産陶磁器や石帯も出土するなど、一般集落とは様相が異なる。このうち南北・東西大路交差点の北東区画では多賀城外最大級の建物群がみつかっており、官衙的区画として機能したとみられている（千葉ほか2001）。また、東西大路に面した山王遺跡千刈田・多賀前地区の区画には廂付建物跡があり、輸入陶磁器や多量の施釉陶器が出土したことから国司など上級官人の舘と推定されている。一方、東西大路を離れた区画では小規模な建物跡が主体となり、施釉陶器などの奢侈品も少なく、なかには鍛冶や漆作業の遺物が出土することなどから、多賀城に関わる作業域やそれを支えた人々の居住域とみられている。

方格地割が確認されていない地域にも重要な遺構はある。館前遺跡には四面廂付建物を中心とする建物群があり、上級官人の舘と推定されている（高倉1980）。山王遺跡東町裏地区、高崎遺跡井戸尻地区では万燈会等の仏教行事に関わる土器集積遺構が発見され、国府主催の仏教儀式が行われた可能性も指摘されている（多賀城市史編纂委員会1991）。しかし、こうした重要な遺構は少なく、山王遺跡多賀前地区や本遺跡中谷地地区の方格地割外側は水田などの耕作域となっている（菅原・佐藤ほか1996、佐藤・佐藤ほか1997）。

このように平安時代の多賀城の南側には南北・東西大路を基準とした方格地割が展開し、多賀城とその関連施設に係わる人々が居住する都市的な空間が広がっていた。それは国府多賀城の整備・充実

とも連動するものであり、律令制的支配の拡大・整備の進展が背景にある。よって、10世紀後半頃に多賀城が衰退すると周辺も次第に荒廃し、盛衰をともにしたとみられる。

第Ⅱ章　調査の経緯と経過・方法

経緯と経過：調査は宮城県仙台東土木事務所が行う砂押川広域基幹河川改修事業の名古曽川遊水池造成に伴うものである。事業計画にあたっては対象となる地域が市川橋遺跡に含まれており、かつ特別史跡「多賀城跡」の西側に隣接した地域であることから遺跡とのかかわりが問題となった。そこで、この計画の提示をうけた宮城県教育委員会は仙台東土木事務所と協議を行い、まず対象地内における遺構の分布や密度を確認するための調査を行うことにした。

確認調査は平成12年８月に行った。対象地は多賀城跡外郭西門の西側を南流する名古曽川と、さらに西側を南北に延びる三陸自動車道に挟まれた場所で、名古曽川に架かる五万崎橋のすぐ西側の水田地帯である（第２・４・５図）。対象地内には用水路が南北に縦断しており、調査はその西側で行った。その結果、古代の土器埋設遺構や溝跡が検出されたことから、東側にも遺構の存在が予想された。そこで関係者の間で協議を行い、五万崎橋西側の南北140m、東西80mの範囲約11000㎡を対象に、平成13 年度に事前調査を行うことになった。

事前調査は用水路東側をＡ区、西側をＢ区とし、平成13年４月９日から開始したが、Ａ区で多数の竪穴住居跡が検出されたため、調査の長期化が問題となった。そこで平成13年度はＡ区の調査を完了させ、翌年度にＢ区を調査することにした。Ａ区の調査終了は６月８日である。なお、６月２日には現地説明会を開催した。平成14年度は９月２日から調査を始めた。その進展に伴い、土器埋設遺構や溝跡のほかに多数の土葬墓が検出されたが、12月６日には調査が終了した。なお、調査成果は平成14年度宮城県遺跡調査成果発表会、第29回古代城柵官衙遺跡検討会で報告している。

方法：調査にあたり、遺構の検出は古代の遺構面（基本層位Ⅵ層上面）から上の土を除去して行った。検出した遺構は精査を行い、実測図と写真撮影により記録した。測量には隣接する山王遺跡と共通の原点を用いた（佐藤・佐藤ほか1997）。その座標値は国土座標第Ｘ系：Ｘ＝－188,880.000、Ｙ＝13,230.000（旧日本測地系）である。調査にあたっては原点と東西・南北軸を基準にして３ｍの方眼を組み、グリットラインは原点を（0・0）として東西・南北方向の距離で表した。Ｎ100・Ｅ100とした場合、それは原点から北へ100m、東へ100mの距離を示している。遺構平面図は1/20と1/50の縮尺を併用して作成し、断面図は1/20縮尺で作成したが、必要に応じて1/10縮尺のものも作成した。写真撮影には６×７または35㎜サイズのカラーリバーサル及びモノクロフィルムを使用した。

第Ⅲ章　調査の成果

1．旧地形と層序

調査区は多賀城跡外郭西門の約150m南西に位置し、東を名古曽川、西を砂押川に挟まれた地域である。名古曽川と砂押川はともに南流し、調査区南端から約50mの地点で合流している。調査区周辺は現状では標高3.7～4.1mのほぼ平坦な水田域であるが、調査の結果、古代においてはやや異なる地形であることが確認された。

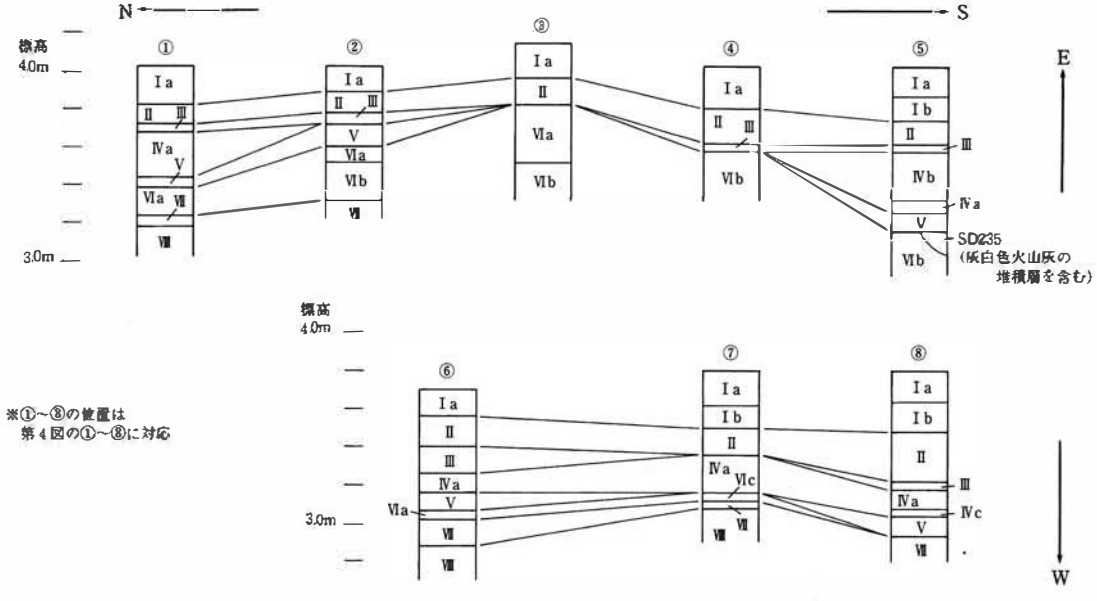
古代の遺構面であるⅥ層上面の標高（第３図）は、南北方向では調査区中央部が高く、南端と北端では低い。東西方向では東に向かって次第に高くなり、名古曽川を挟んだ対岸の多賀城跡外郭西門のある丘陵へと自然に連なる様相を示す。古代における調査対象地は外郭西門のある丘陵が南西方向に舌状に緩やかに張り出した微高地状の地形となっている。一方、現在の名古曽川は微高地の尾根を横切って直線的に流れており、不自然である。また、今回の調査でＡ区南端や東際で現在以前の流路が検出されたが、その堆積土からは磁器が出土した。このような状況からみて、名古曽川は近世以降は現在の位置を流れているが、古代も同じであったかは確証がない。むしろ別の場所にあったとみられ、調査区の西側か、あるいは調査区よりも北のほうで砂押川と合流していた可能性もある。

調査区内の基本的な土層は、上記の舌状に張り出した微高地状の旧地形を反映して堆積している。確認した土層はⅠ～Ⅷの８層に大別された。調査区内の各地点における堆積状況は柱状図として第Ⅲ図に模式的に示した。以下、各層の特徴を述べる。

Ⅰ層は黄灰色（2.5Y4/1：ａ層）や暗オリーブ褐色（2.5Y3/3：ｂ層）の粘土層で、現在の水田の耕作土及び床土である。調査区全域に分布し、厚さは15～30cmである。

Ⅱ層は酸化鉄の粒を含む褐灰色（10YR4/1）粘土層で、調査区全域に分布する。厚さは10～30cmで調査区南西隅（第３図⑧）で最も厚い。磁器が出土しており、近世以降の耕作土とみられる。

Ⅲ層は黒色（2.5Y4/1）粘土の自然堆積層で、厚さは５～15cmである。調査区の北から西、南にか



第３図　基本層序模式図

けての周辺部ほど厚く堆積し、中央部東側の最も高い部分にはほとんど認められない。西側に舌状に張り出した微高地の周辺部に分布しており、旧地形を反映した堆積状況を示す。

Ⅳ層は黒褐色（2.5Y3/1、10YR3/1など）を基調とする粘土層である。分布はⅢ層と同様で、厚さは10～30cmである。色調や層中における薄い酸化鉄の沈殿層などでａ～ｄの４層に細分される。また、ｂ層の底面は凸凹が認められることから、Ⅴ層以降の水田を含む耕作土とみられる。

Ⅴ層は暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土層である。分布はⅢ・Ⅳ層と同様で、厚さは５～15cmである。場所によって底面に凸凹が認められる場合がある。また、調査区南端では灰白色火山灰の堆積層を含むSD235溝跡の上部を覆っている。灰白色火山灰が降下した古代以降の水田耕作土等とみられる。

Ⅵ層は黄褐色の堆積層でａ・ｂの２層に細分される。ａ層は黄褐色（2.5Y5/4）のシルト質粘土層、b層は黄褐色（2.5Y5/3）の砂質シルト層である。Ⅵ層は舌状の微高地そのものを形成する層で、中央部東側の高い部分ほど分厚く堆積している。ａ層上面が今回の調査における遺構の確認面であり、それ以下が古墳時代後期以降の地山となっている。

Ⅶ層は黒色（N－1.5）粘土層、Ⅷ層は黄褐色（2.5Y5/3）の砂層で、ともに自然堆積層である。Ⅶ層は場所によってはⅧ層の砂を互層状にとりこむことがある。

２．発見した遺構と遺物

本調査では掘立柱建物跡4棟、竪穴住居跡13軒、土器埋設遺構８基、土葬墓93基、溝跡62条、土壙57基のほか、多数の小溝状遺構を発見した（第４・５図）。遺物は土師器、須恵器、赤焼土器のほか、弥生土器、灰釉陶器、瓦、土製品、鉄製品、石製品、木製品が出土している。遺物の総量は整理用平箱で60箱ほどで、その大部分は土師器と須恵器、赤焼土器である。以下、発見した遺構と遺物について遺構ごとに説明する。なお、遺構の位置を示す場合、東西はＡ・Ｂ区で示し、南北はグリットでN300以南を南、N301～360の範囲を中央、N360以北を北と呼称する。また、小溝状遺構は後述のようにＡ～Ｄ群の４つのまとまりがあるので、Ａ群小溝といった呼称を用いることにする。

Ａ．掘立柱建物跡

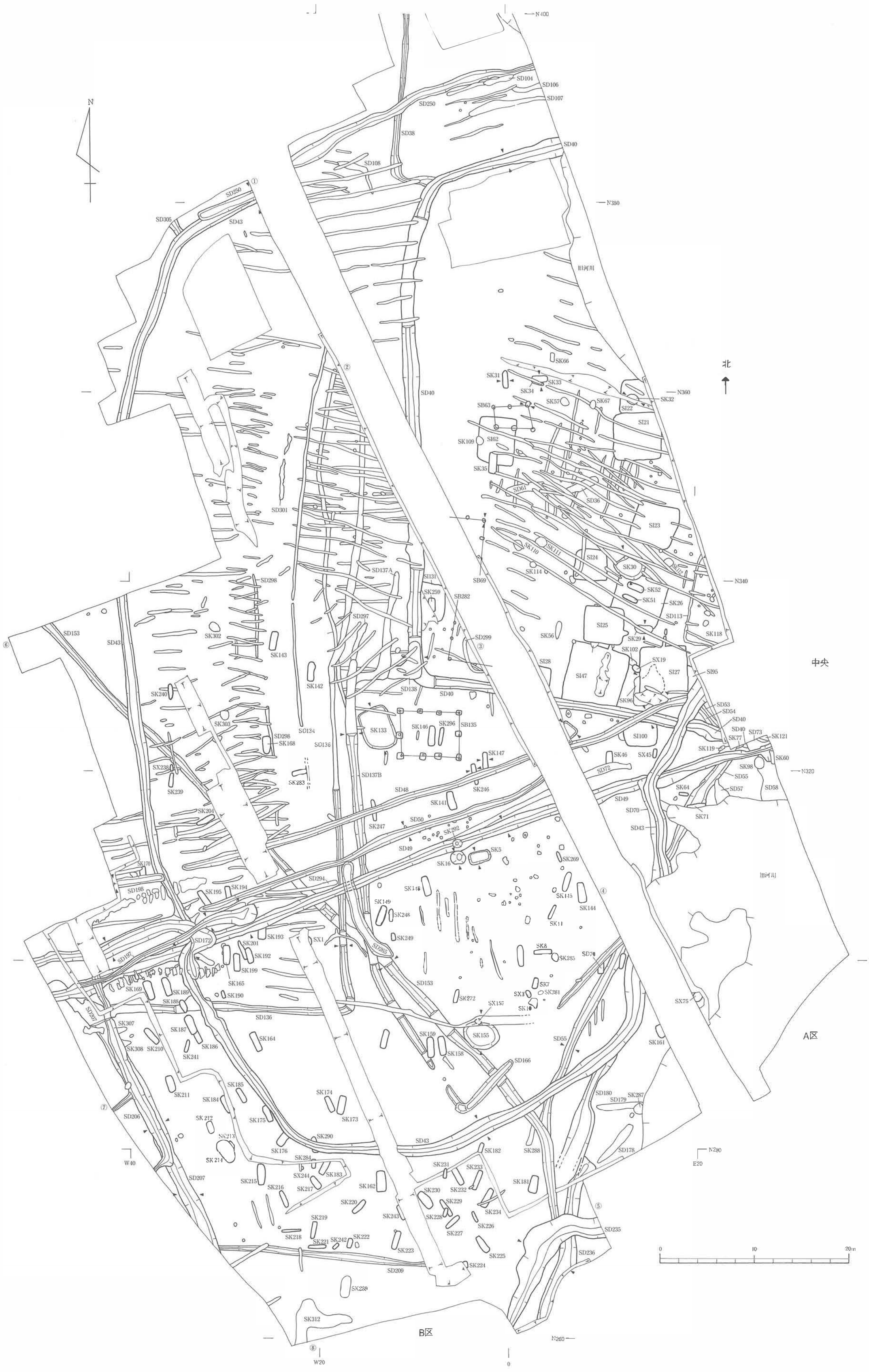
Ａ・Ｂ区中央で4棟検出した。調査区内の微高地上に分布している。

【SB63建物跡】（第４・６図）

桁行２間、梁行１間の東西棟建物跡である。SI62住居跡、Ｃ群小溝より新しい。柱穴は６個すべてを検出しており、３個で径15cm前後の柱材、その他で径15cm前後の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が南側柱列で総長3.9m、柱間寸法は西から2.0m、1.9m、梁行は東妻で総長2.6mである。方向は南側柱列でＥ－３°－Ｓである。柱穴は一辺30～65cmの隅丸長方形で、深さは北東隅柱で26cmある。埋土は地山ブロックを少し含む灰色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

【SB69建物跡】（第４・６図）

南北２間以上、東西１間以上の建物跡である。柱穴は４個検出しており、すべてで径15cm前後の柱痕跡を確認した。平面規模は南北が東側柱列で総長4.0m以上、柱間寸法は北から1.8m、2.2m、東西


N
北
南
中央
A区
B区
N400
N380
N360
N340
N320
N300
N280
N260
W40
W20
E20
0
10
20m
旧河川
SD104
SD106
SD107
SD250
SD38
SD40
SD108
SD305
SD43
SK66
SK31
SK33
SK34
SK32
SK57
SK67
SB63
SI22
SI21
SK109
SI62
SK35
SD61
SD36
SI23
SK110
SK111
SI24
SK30
SK112
SK114
SB69
SK52
SK51
SK26
SD113
SK118
SI25
SK29
SK102
SX19
SI27
SI95
SK56
SI28
SI47
SK96
SD53
SD54
SD73
SK121
SK77
SK119
SK60
SI100
SK46
SX45
SD72
SK98
SD55
SD57
SD58
SK64
SD49
SD70
SK71
SD301
SD298
SD137A
SI131
SK259
SB282
SD297
SD299
SD153
SK302
SK143
SK142
SD138
SK240
SK303
SD134
SK133
SK146
SK296
SB135
SK168
SD136
SK147
SX238
SK239
SK283
SD137B
SK246
SD48
SK141
SK204
SD50
SK292
SK247
SK5
SK16
SK269
SK170
SD198
SK195
SK194
SD294
SK148
SK145
SK144
SK149
SK248
SK11
SK249
SD172
SK201
SK193
SX1
SD265
SK8
SK285
SD70
SK192
SK199
SK165
SK190
SK169
SK189
SK188
SK7
SK281
SX3
SK10
SX157
SK272
SD207
SK307
SK187
SK186
SK308
SK210
SK241
SK164
SK159
SK155
SK158
SD166
SD55
SK161
SX75
SK185
SK184
SK211
SK174
SK173
SD180
SD179
SK287
SD206
SK212
SK175
SK213
SK290
SK176
SK214
SK284
SK182
SK288
SD178
SK231
SK233
SK244
SK183
SK215
SK216
SK217
SK162
SK230
SK232
SK181
SK220
SK229
SK234
SK228
SK226
SK243
SK227
SK219
SD235
SK218
SK221
SK242
SK222
SK223
SK225
SD236
SK224
SD209
SK239
SK312

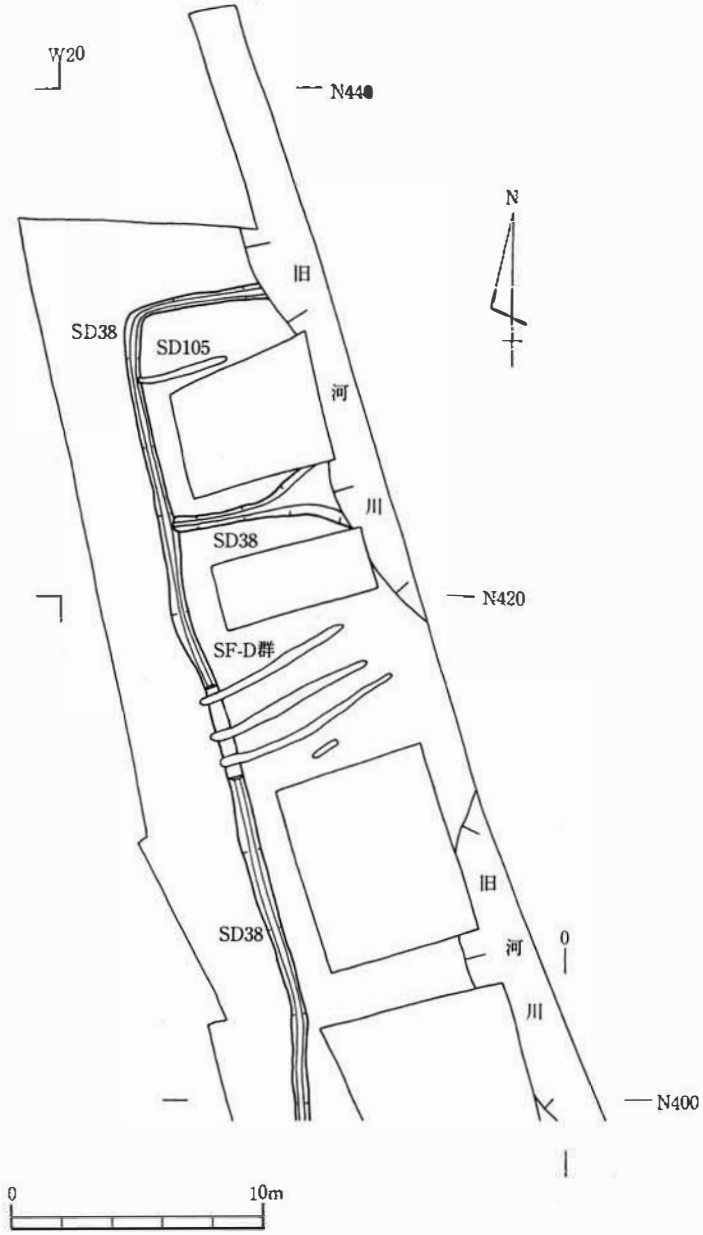
第４図　遺構配置図

は北側柱列で総長1.8m以上である。方向は東側柱列でN－5°－Eである。柱穴は長軸35～45cmの楕円形で、深さは北東隅柱で28cmある。埋土は地山ブロックを多く含む褐灰色シルトである。遺物は出土していない。

【SB135建物跡】（第6図）

桁行3間、梁行2間の東西棟建物跡である。SK133土壙より新しい。柱穴は10個すべてを検出しており、いずれも径20cm前後の柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が北側柱列で総長6.3m、柱間寸法は東から2.2m、2.0m、2.1m、梁行は東妻で総長4.8m、柱間寸法は2.4m等間である。方向は北側柱列でE－2°－Sである。柱穴は一辺50～70cmの隅丸長方形で、深さは南西隅柱で54cmある。埋土は地山ブロックを多く含む褐灰色粘土質シルトである。

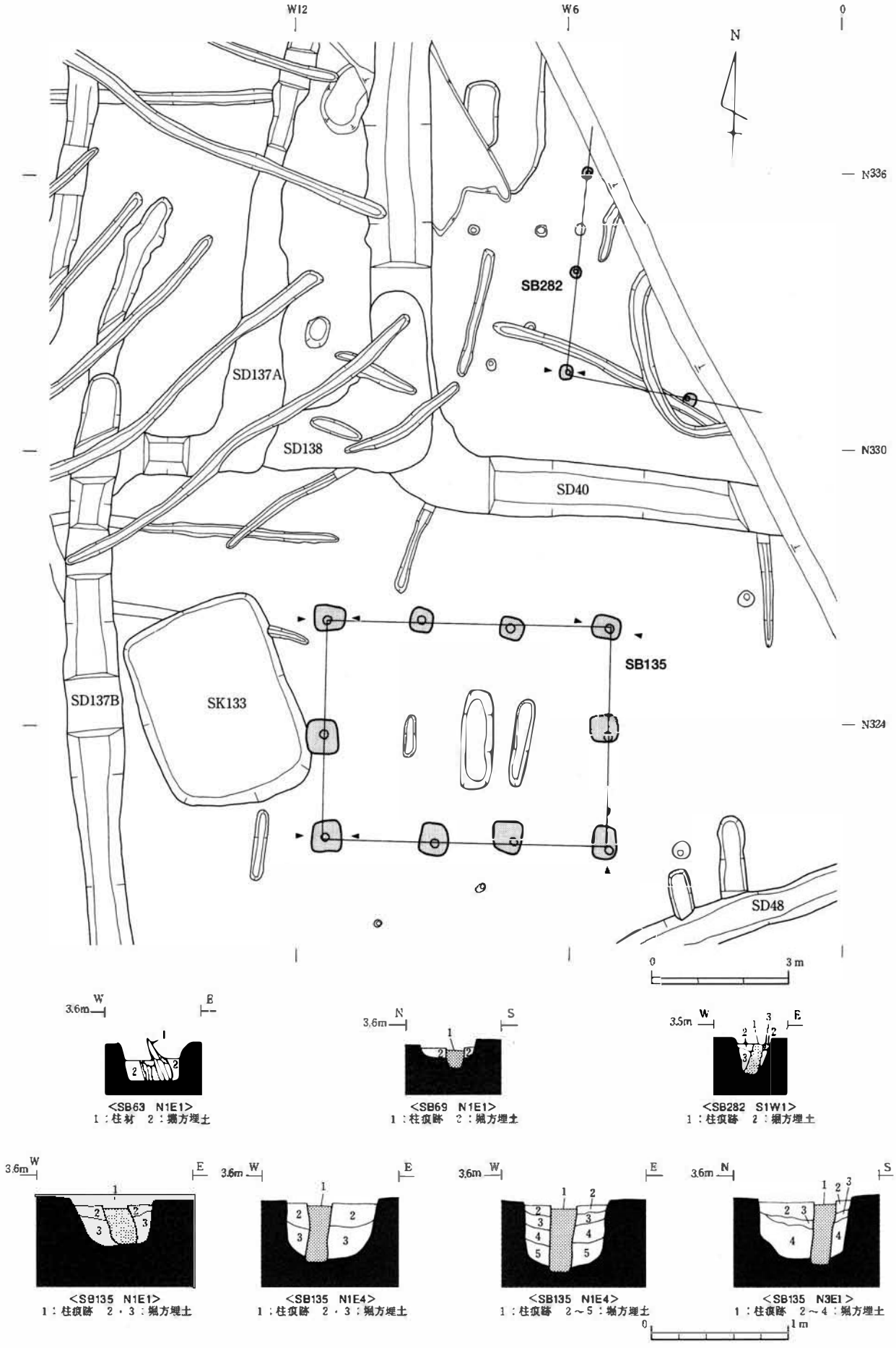
遺物は柱痕跡から土師器片、柱穴埋土から土師器坏・甕が少量出土している。



第5図　遺構配置図（A区北端部）

【SB282建物跡】（第6図）

南北2間以上、東西1間以上の建物跡で、C群小溝より古い。柱穴は4個検出しており、すべてで径10cm前後の柱痕跡を確認した。平面規模は南北が西側柱列で総長4.4m以上、柱間寸法は2.2m等間、東西は南側柱列で総長2.7m以上である。方向は西側柱列でN－7°－Eである。柱穴は長軸25～30cmの楕円形で、深さは南西隅柱で27cmある。埋土は地山砂を多く含む褐灰色粘土質シルトである。遺物は柱穴埋土から土師器片と須恵器坏がごく少量出土している。



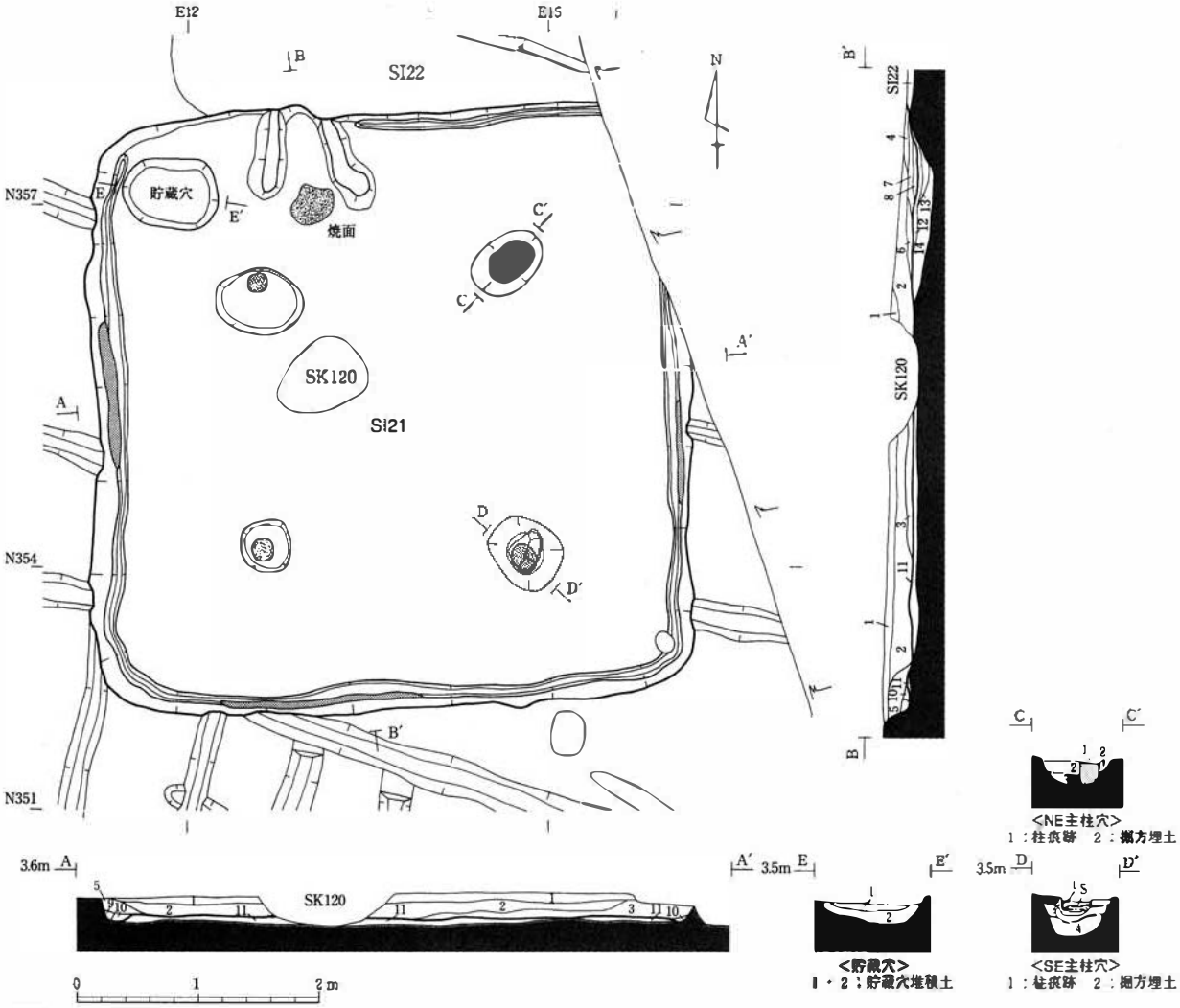
第6図　SB135・282建物跡平面図とSB63・69・135・282建物跡柱穴断面図

B．竪穴住居跡

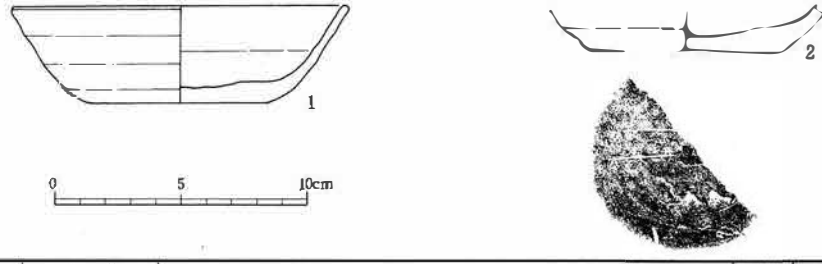
13軒検出した。A区中央を中心とした微高地上に集中する。また、東側ほど濃密に分布する。床面以下まで削平されているものもあり、全体的に残りはよくない。

【SI21住居跡】（第７・８図）

SI22住居跡、A群小溝より新しく、SK120土壙、C群小溝より古い。

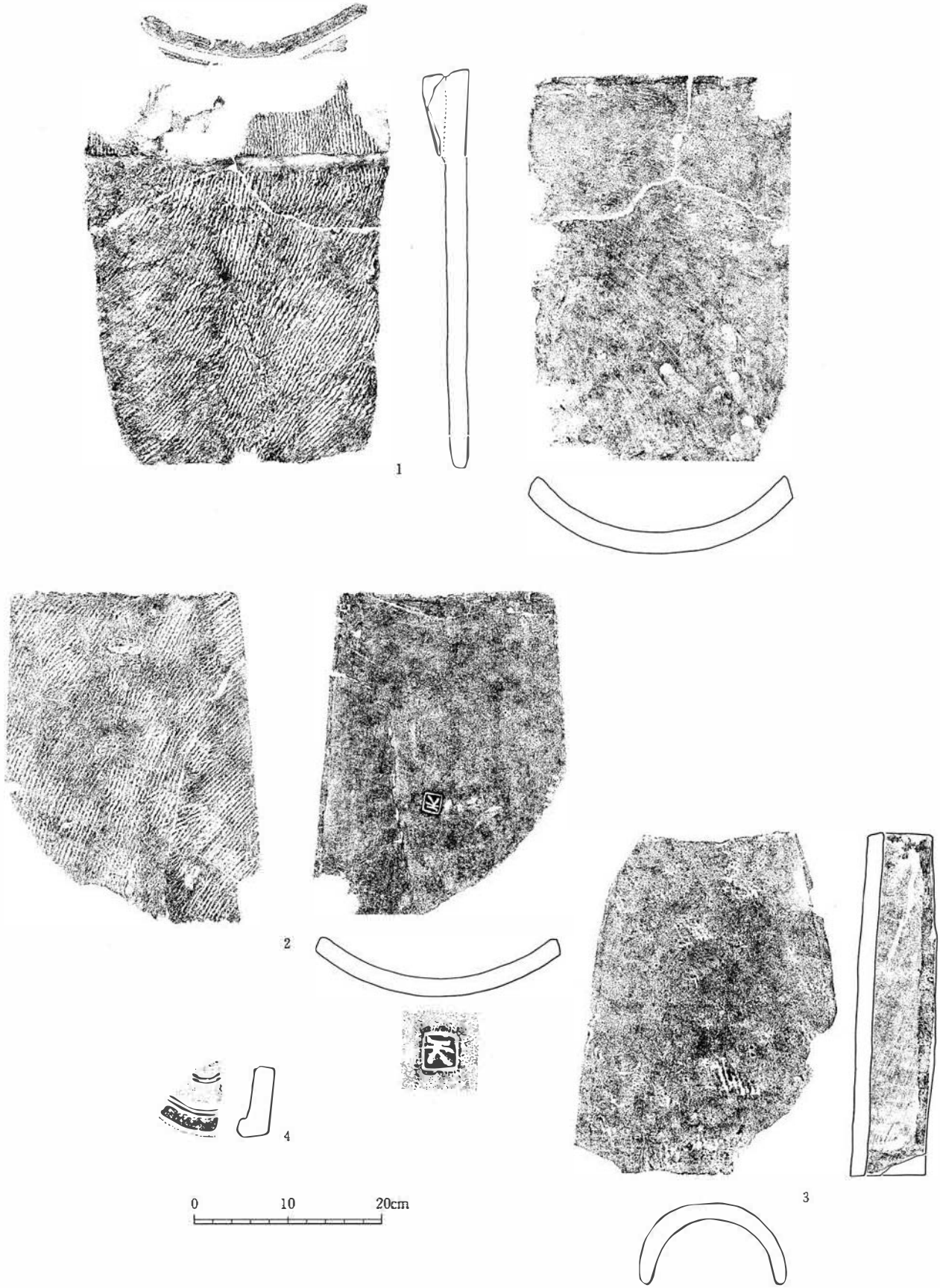


No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考
1	灰黄（2.5Y5/2）	シルト質粘土	地山ブロックを多く含む。〈住居埋土〉	8	灰黄（2.5Y5/2）	シルト	地山ブロックを多く含む。〈カマド崩落土〉
2	灰黄（2.5Y4/2）	シルト	地山ブロックを多く、炭を若干含む。〈住居埋土〉	9	黒褐（10YR2/3）	シルト	地山ブロックを少量含む。〈焼材痕跡〉
3	灰黄（10YR4/2）	シルト	地山ブロックを非常に多く含む。〈住居埋土〉	10	褐灰（10YR4/1）	シルト	地山ブロックを多く含む。〈周溝埋土〉
4	灰黄（10YR4/2）	シルト	地山ブロックを多く含む。〈住居埋土〉	11	黄灰（2.5Y4/1）	シルト	地山ブロックを多く含む。〈周溝埋土〉
5	黒褐（10YR3/2）	シルト	地山ブロック、炭を若干含む。〈住居堆積土〉	12	暗灰黄（2.5Y4/2）	シルト	〈掘方埋土〉
6	黒褐（2.5Y3/2）	シルト	炭を多く、焼土を少量含む。〈カマド崩落土〉	13	暗灰黄（2.5Y4/2）	シルト	地山ブロックを多く、炭・焼土を含む。〈掘方埋土〉
7	灰黄（2.5Y4/2）	シルト	炭・焼土を少量含む。〈カマド崩落土〉	14	黄灰（2.5Y4/1）	シルト	地山ブロックを多く、炭を少量含む。〈掘方埋土〉



No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	須恵器・坏	住居埋土	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ	(13.4)	(7.2)	3.8	12－1	3
2	須恵器・坏	住居埋土	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ、焼成前に二本線状の刻書	－	(7.6)	－	19－9	5

第７図　SI21住居跡と出土遺物１



No.	種別	層位	特徴	長さ	幅	厚さ	写真	登録
1	軒平瓦	住居埋土	唐草文640　長：42.1　幅：26.0～28.2　厚：2.2～5.0	－	－	－	20－1	7
2	平瓦	住居埋土	ⅡB類　凹面に刻印「矢」B	35.0	22.7	2.0	20－3	9
3	丸瓦	住居埋土	ⅡA類	36.5	12.1	1.8	20－2	8
4	軒丸瓦	住居埋土	瓦当文　径：（16.1）　厚：3.4	－	－	－	20－4	4

第8図　SI21住居跡出土遺物

〔平面形・規模・方向〕東西5.0m、南北4.9mの方形で、方向は西辺でN－2°－Wである。

〔堆積土〕地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルトで埋め戻されている。

〔壁〕斜めに立ち上がる。高さは残りのよい南壁で20cmある。

〔床面〕地山ブロックを多く含む黄灰色シルトの掘方埋土を床面とする。ほぼ平坦である。

〔主柱穴〕4個確認した。すべてで径20cm前後の円形または楕円形の柱痕跡が検出された。柱穴は長軸（辺）40～75cm、短軸（辺）35～55cmの楕円形や隅丸長方形で、深さは南東主柱穴で32cmある。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。南東主柱穴では柱の下に石が据えられていた。柱間寸法は東西が北側で2.2m、南北は東側で2.5mである。

〔周溝〕ほぼ四辺を巡っている。幅は5～15cm、深さは西辺の深いところで10cmある。地山ブロックを含む褐灰色シルトで埋め戻されている。東・南・西辺の一部では壁沿いに壁材の痕跡とみられる幅5～10cmの黒褐色シルトの堆積土が認められた。

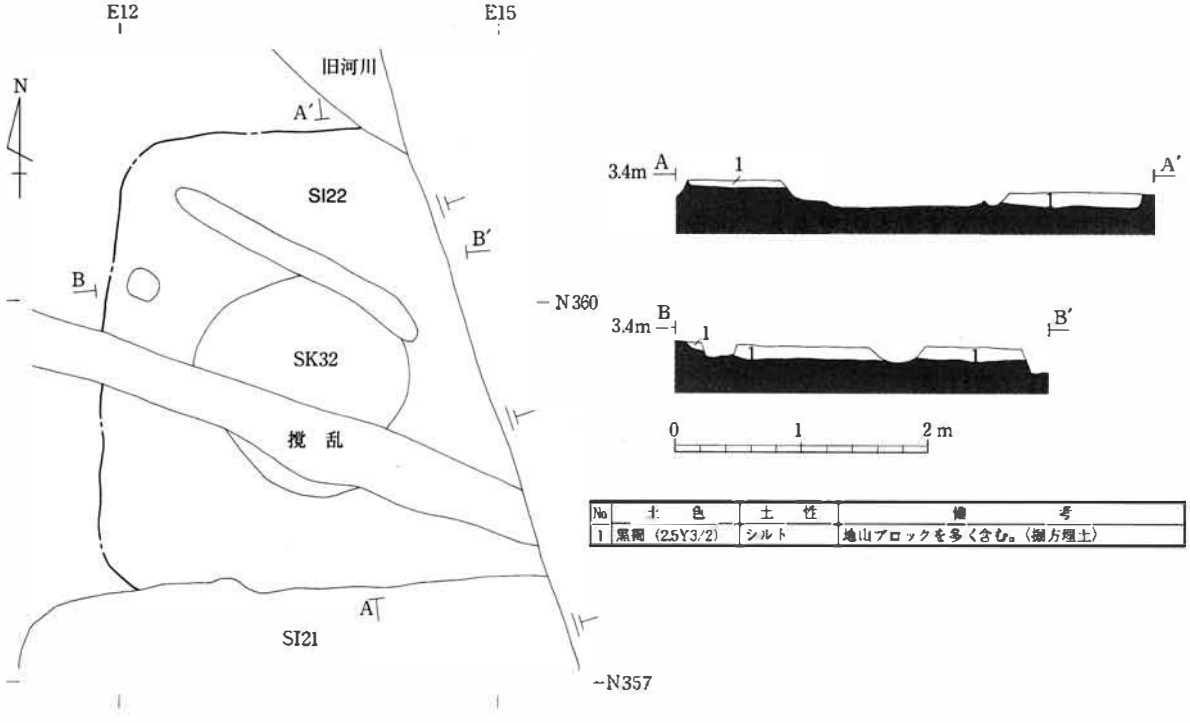
〔カマド〕北辺中央のやや西寄りに付設されており、燃焼部のみが検出された。側壁は砂の混じる黄褐色粘土で構築されている。底面は中央が若干窪み、焚き口側に焼面が認められる。

〔貯蔵穴〕カマドの左側にある。長軸80cm、短軸60cmの楕円形で、深さは20cmである。炭を含むオリーブ黒色シルトが自然堆積しており、炭は下層ほど多く認められる。

〔遺物〕床面で土師器坏・甕、掘方埋土で土師器坏・甕が出土している。また、住居埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、瓦が出土している。須恵器坏にはヘラ切り後にナデ調整をした坏（第7図1）や、底部に焼成前に二本線状の刻書をしたもの（2）がある。瓦には単弧文軒平瓦（第8図1）や重圏文軒丸瓦（4）、凹面に「矢」の刻印をした平瓦（2）がある。

【SI22住居跡】（第9図）

床面以下まで削平されており、検出されたのは住居の掘方のみである。東側は調査区外に延びる。



No	土色	土性	備考
1	黒褐（2.5Y3/2）	シルト	地山ブロックを多く含む。（掘方埋土）

第9図　SI22住居跡

SI21住居跡、SK32土壙より古い。

〔平面形・規模・方向〕南北3.6m以上、東西3.5m以上の長方形とみられ、方向は西辺でN－2°－Eである。

〔床面〕地山ブロックを多く含む黒褐色シルトの掘方埋土を床面としていたと考えられる。

〔遺物〕掘方埋土から土師器甕がごく少量出土している。

【SI23住居跡】（第10図）

残存状況が悪く、床面や壁、堆積土は東側の一部で残るのみである。C群小溝より古い。

〔平面形・規模・方向〕東西4.5m、南北4.3mの方形で、方向は東辺でN－16°－Eである。

〔堆積土〕地山ブロックを含む黒色シルトで埋め戻されている。

〔壁〕斜めに立ち上がる。高さは最も残りのよい北壁で5cmある。

〔床面〕残存するところでは地山ブロックを多く含む黄灰色シルトの掘方埋土を床面とする。ほぼ平坦である。

〔主柱穴〕4個確認した。すべてで径15cm前後の円形または楕円形の柱痕跡が検出された。柱穴は長軸（辺）40～45cm、短軸（辺）25～40cmの楕円形や隅丸長方形で、深さは北東主柱穴で40cmある。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。柱間寸法は東西が南側で2.1m、南北は東側で2.2mである。

〔周溝〕東・西・北辺で検出された。幅は15～25cm、深さは北辺の深いところで8cmある。地山砂粒を含む黒褐色シルトで埋め戻されている。東辺の一部では壁沿いに壁材の痕跡とみられる幅5cmの黒色シルトの堆積土が認められた。

〔カマド〕東辺中央に付設されており、燃焼部のみが検出された。側壁は砂の混じる黄褐色粘土で構築されている。底面は平坦で、中央から焚き口にかけて焼面が認められる。また、中央には土師器高坏の脚部を支脚として据えている。

〔貯蔵穴〕カマドの右側にある。長軸105cm、短軸65cmの楕円形で、深さは35cmである。炭粒と地山小ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

〔遺物〕床面で土師器高坏（第10図2）・甕（3・4）が出土している。高坏は、坏部が内外面とも有段で口縁部が外反するものである。内面は黒色処理されており、脚部は中空である。甕は胴部が球胴形のもの（3）と長胴形のもの（4）とがある。その他、掘方埋土から土師器坏・高坏・甕、住居埋土と貯蔵穴埋土から土師器坏・甕が出土している。

【SI24住居跡】（第11図）

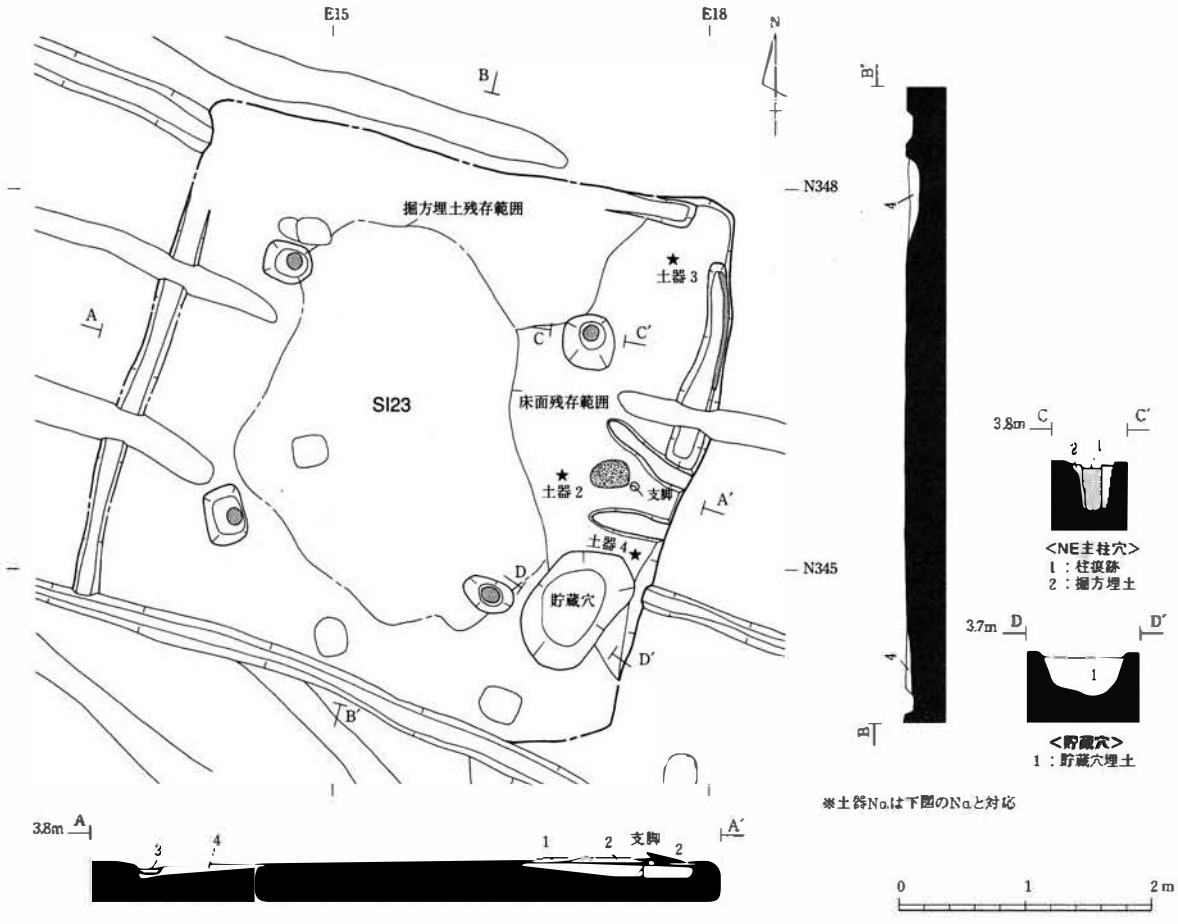
SK115土壙より新しく、SD94溝跡、C群小溝より古い。

〔平面形・規模・方向〕南北3.4m、東西3.5mの方形で、方向は東辺でN－3°－Wである。

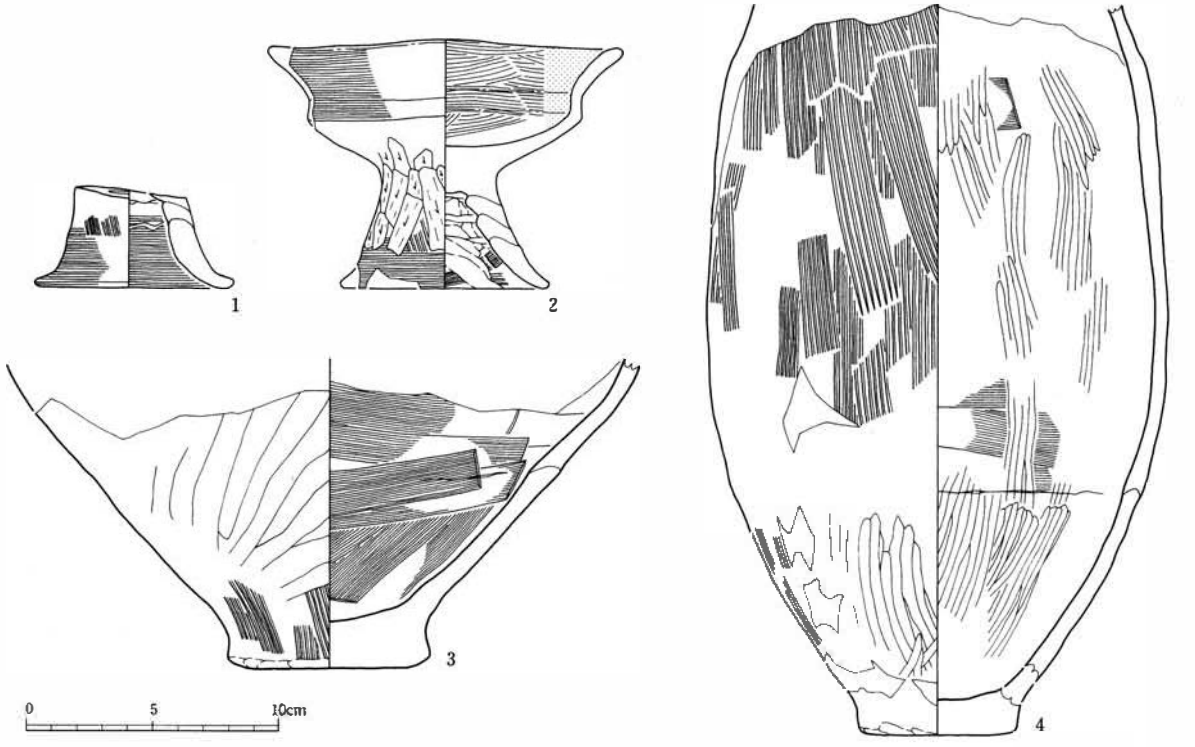
〔堆積土〕自然流入とみられる黒褐色シルトが全域に堆積しており、北辺中央部ではその下に炭と焼土をブロック状に含む灰黄褐色シルト層が認められる。

〔壁〕斜めに立ち上がる。高さは最も残りのよい南壁で10cmある。

〔床面〕地山ブロックを主体とするにぶい黄色砂質シルトの掘方埋土を床面とする。平坦である。



No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	黒（10YR2/1）	シルト	炭粒・地山ブロックを含む。（住居埋土）	3	黒褐（2.5Y3/1）	シルト	地山砂粒を少し含む。（周溝埋土）
2	黒褐（7.5YR3/1）	シルト	炭粒・焼土・地山土を多く含む。（カマド崩落土）	4	黄灰（2.5Y5/1）	シルト	地山ブロックを多く含む。（掘方埋土）

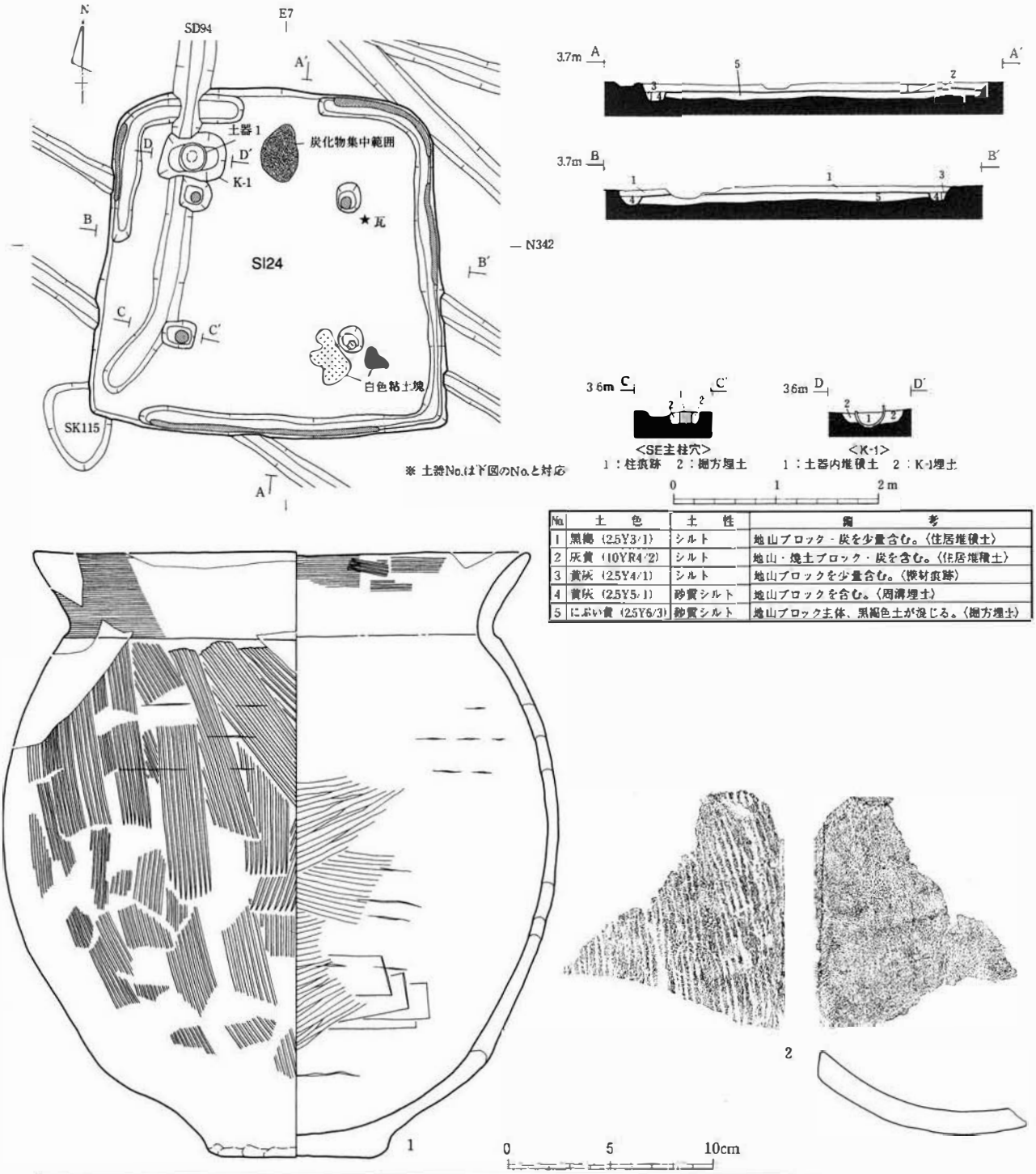


No.	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	土師器・高坏	カマド底面	外：ヨコナデ→ハケメ　内：ヨコナデ　支脚として利用	－	8.0	－	12－2	11
2	土師器・高坏	床	外：ヨコナデ・ケズリ、ヨコナデ→ハケメ→ケズリ　内黒、脚内：ハケメ→ナデ	14.0	8.2	9.8	12－3	10
3	土師器・甕	床	外：ハケメ→ミガキ　底：ナデ　内：ヘラナデ	－	4.0	－		12
4	土師器・甕	床	外：ハケメ・ミガキ　底：ナデ　内：ヘラナデ→ミガキ	－	(6.3)	－	12－6	13

第10図　SI23住居跡と出土遺物

〔主柱穴〕 4個確認した。すべてで径10cm前後の円形の柱痕跡が検出された。柱穴は長辺（軸）25～35cm、短辺（軸）20～30cmの隅丸長方形や楕円形で、深さは南東主柱穴で12cmである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。柱間寸法は東西が南側で1.7m、南北は東側で1.4mである。

〔周溝〕 北辺中央と南西隅を除く、各辺で検出された。幅は10～30cm、深さは南辺の深いところで10cmある。地山ブロックを含む黄灰色シルトで埋め戻されている。各辺の一部で壁沿いに壁材の痕跡とみられる幅5～10cmの黒色シルトの堆積土が認められた。



No.	土色	土性	備考
1	黒褐（2.5Y3/1）	シルト	地山ブロック・炭を少量含む。〈住居堆積土〉
2	灰黄（10YR4/2）	シルト	地山・焼土ブロック・炭を含む。〈住居堆積土〉
3	黄灰（2.5Y4/1）	シルト	地山ブロックを少量含む。〈壁材痕跡〉
4	黄灰（2.5Y5/1）	砂質シルト	地山ブロックを含む。〈周溝埋土〉
5	にぶい黄（2.5Y6/3）	砂質シルト	地山ブロック主体、黒褐色土が混じる。〈掘方埋土〉

No.	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	土師器・甕	貯蔵穴埋土	外：ヨコナデ・ハケメ　内：ハケメ→ヨコナデ、ヘラナデ→ミガキ	24.4	8.9	29.5	12－15	15
2	平瓦	床	凸B類　長：－　幅：－　厚：2.4	－	－	－	20－7	14

第11図　SI24住居跡と出土遺物

〔カマド〕残存していないが、北辺中央の住居堆積土に炭と焼土をブロック状に含む層があること、その下の床面に炭の広がる範囲があること、周溝が北辺中央にはないことから、北辺中央に付設されていたと思われる。

〔貯蔵穴〕北西隅にある。北辺中央にカマドが存在したとすれば、その左側に位置する。長辺60cm、短辺40cmのやや不整な長方形で、深さは14cmである。中央に土師器甕を正位に据えており、周りは炭粒と地山ブロックを含む黒色シルトで埋め戻されている。甕の内部には炭粒を含む住居堆積土と同様の黒褐色シルトが堆積する。この甕（第11図１）は球胴形で、頸部に段が巡るものである。外面の胴部はハケメ、内面はヘラナデ後にヘラミガキが施されている。

〔その他の施設等〕南西主柱穴付近で白色粘土の塊が床面に張り付いた状況で検出された。４cmほどの高さがある。

〔遺物〕床面から瓦（第11図２）、貯蔵穴埋土から土師器の坏と甕（１）が少量出土した。甕は球胴形で、頸部に段が巡るものである。胴部外面はハケメ、内面はヘラナデ後にヘラミガキが施されている。その他、掘方埋土から土師器甕、住居堆積土から土師器坏・甕・甑が出土している。

【SI25住居跡】（第12図）

SI26・47住居跡より新しく、C群小溝より古い。

〔平面形・規模・方向〕東西4.3m、南北4.0mの方形で、方向は西辺でN－３°－Eである。

〔堆積土〕地山ブロックを含む褐灰色シルトで埋め戻されている。

〔壁〕斜めに立ち上がる。高さは最も残りのよい東壁で15cmである。

〔床面〕地山ブロックを多く含む黄灰色砂質シルトの掘方埋土を床面とする。ほぼ平坦である。

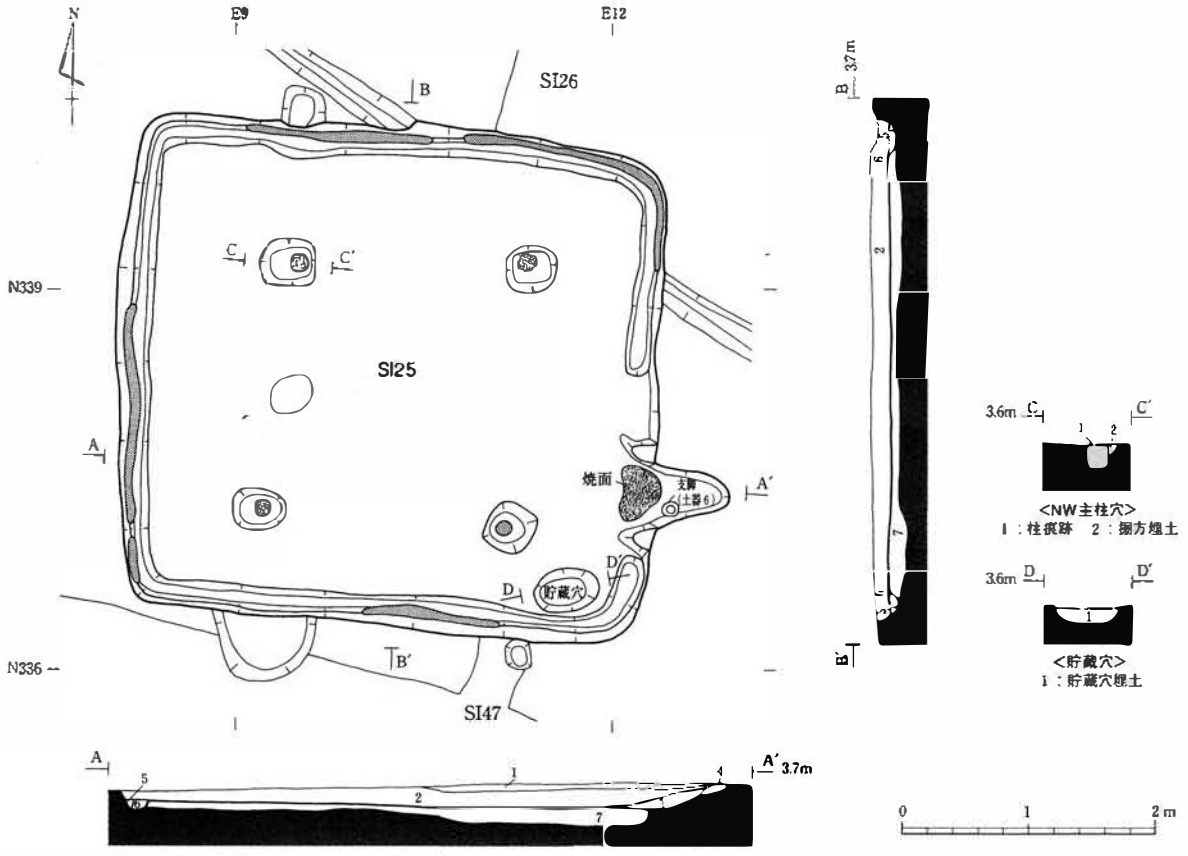
〔主柱穴〕４個確認し、すべてで径15cm前後の円形の柱痕跡を検出した。柱穴は長辺（軸）35～40cm、短辺（軸）30～35cmの隅丸長方形や楕円形で、深さは北西主柱穴で20cmある。埋土は地山ブロックを多く含む暗灰黄色シルトである。柱間寸法は東西が南側で1.9m、南北は東側で2.1mである。

〔周溝〕東辺のカマド部分を除いてほぼ全周する。幅は15～20cm、深さは南辺の深いところで６cmある。地山ブロックを含む暗灰黄色シルトで埋め戻されている。各辺の一部では壁沿いに壁材の痕跡とみられる幅５～10cmの暗灰黄色シルトの堆積土が認められた。

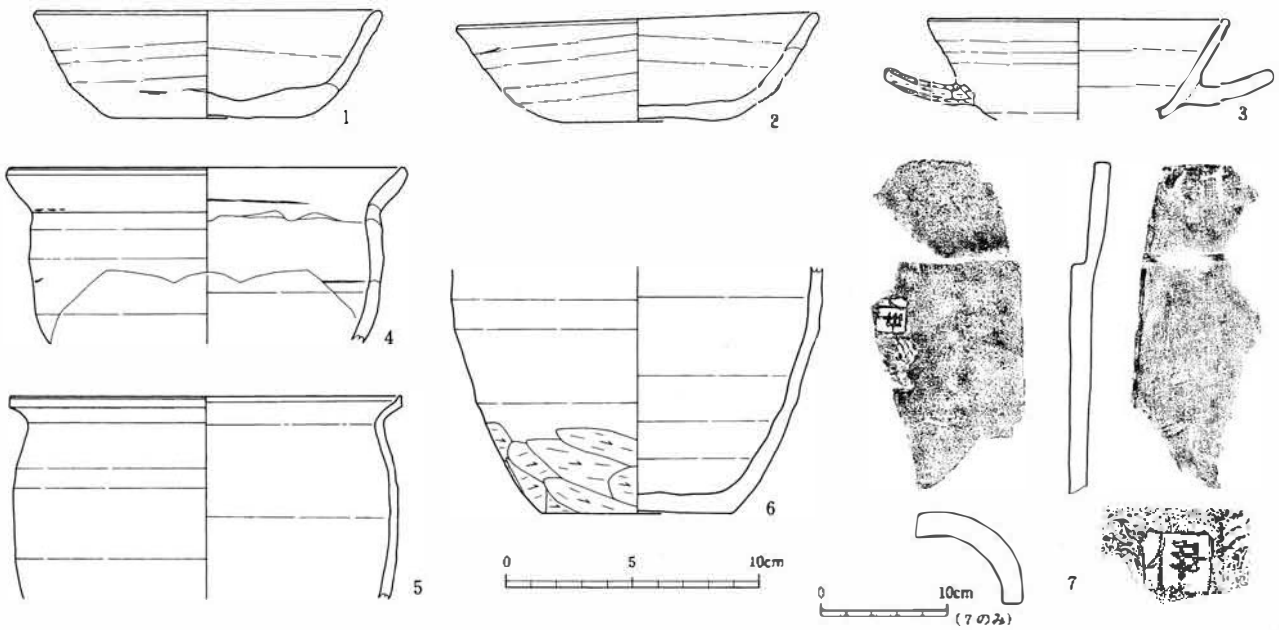
〔カマド〕東辺の南に付設されており、燃焼部と煙道部から成る。燃焼部の側壁は砂の混じるにぶい黄色シルトで構築されている。浅く窪んだ底面には全域に焼面が認められる。煙道との境付近の南側にはロクロ調整の土師器甕を伏せた支脚を据えている。煙道は燃焼部から上向きに緩やかに延びるが、先端部は削平され、失われている。検出された長さは0.6mである。

〔貯蔵穴〕カマドの右側にある。長軸50cm、短軸35cmの楕円形で、深さは13cmである。炭粒と地山小ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

〔遺物〕床面から土師器坏・甕がごく少量出土している。また、床面直上で坏、双耳坏（第12図３）、瓦（７）が出土している。坏にはヘラ切り無調整のものがある。瓦は丸瓦で、凸面には「伊」の刻印がある。また、掘方埋土から土師器坏・甕、カマドの崩落土から土師器甕、須恵器坏が出土している。崩落土出土の甕にはロクロ調整のものがあり（５）、須恵器坏にはヘラ切り無調整の坏（１）



No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考
1	オリーブ褐（2.5Y4/3）	シルト	地山ブロックを少量含む。〈住居埋土〉	5	暗灰黄（2.5Y4/2）	砂質シルト	地山ブロックを微かに含む。〈壁材痕跡〉
2	褐灰（10Y4/1）	シルト	地山ブロックを含む。〈住居堆土〉	6	暗灰黄（2.5Y5/2）	砂質シルト	地山ブロックを含む。〈周溝埋土〉
3	褐灰（7.5Y4/1）	シルト	焼土ブロック・炭を含む。〈カマド崩落土〉	7	黄灰（2.5Y5/1）	砂質シルト	地山ブロックを多量に含む。〈掘方埋土〉
4	暗黄褐（10YR5/2）	砂質シルト	地山ブロック・炭を含む。〈煙道崩落土〉				



No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	須恵器・坏	カマド崩落土	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り	13.8	8.5	4.3	12－4	22
2	須恵器・坏	カマド崩落土	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	14.4	7.4	4.3	12－7	23
3	須恵器・双耳坏	床直	外：ロクロナデ→耳貼付→手持ちケズリ　内：ロクロナデ	(6.0)	－	－	12－8	18
4	土師器・甕	住居埋土	内外：ロクロナデ	(15.8)	－	－	12－9	24
5	土師器・甕	カマド崩落土	内外：ロクロナデ	(15.6)	－	－		20
6	土師器・甕	カマド底面	外：ロクロナデ→手持ちケズリ　底：摩滅　内：ロクロナデ　支脚として利用	－	(7.6)	(9.7)	12－5	17
7	丸瓦	床直	ⅡB類　凸面に刻印「伊」　長：－　幅：－　厚：1.8	－	－	－	20－6	19

第12図　SI25住居跡と出土遺物

と回転糸切り無調整の坏（2）がある。その他、住居埋土から土師器坏・高坏・甕、須恵器坏・甕、瓦が出土している。

【SI26住居跡】（第13～15図）

SK116土壙より新しく、SI25住居跡、SK51・52土葬墓、SK29・30土壙、C群小溝より古い。

〔平面形・規模・方向〕南北5.2m、東西5.3mの方形で、方向は東辺でN－18°－Eである。

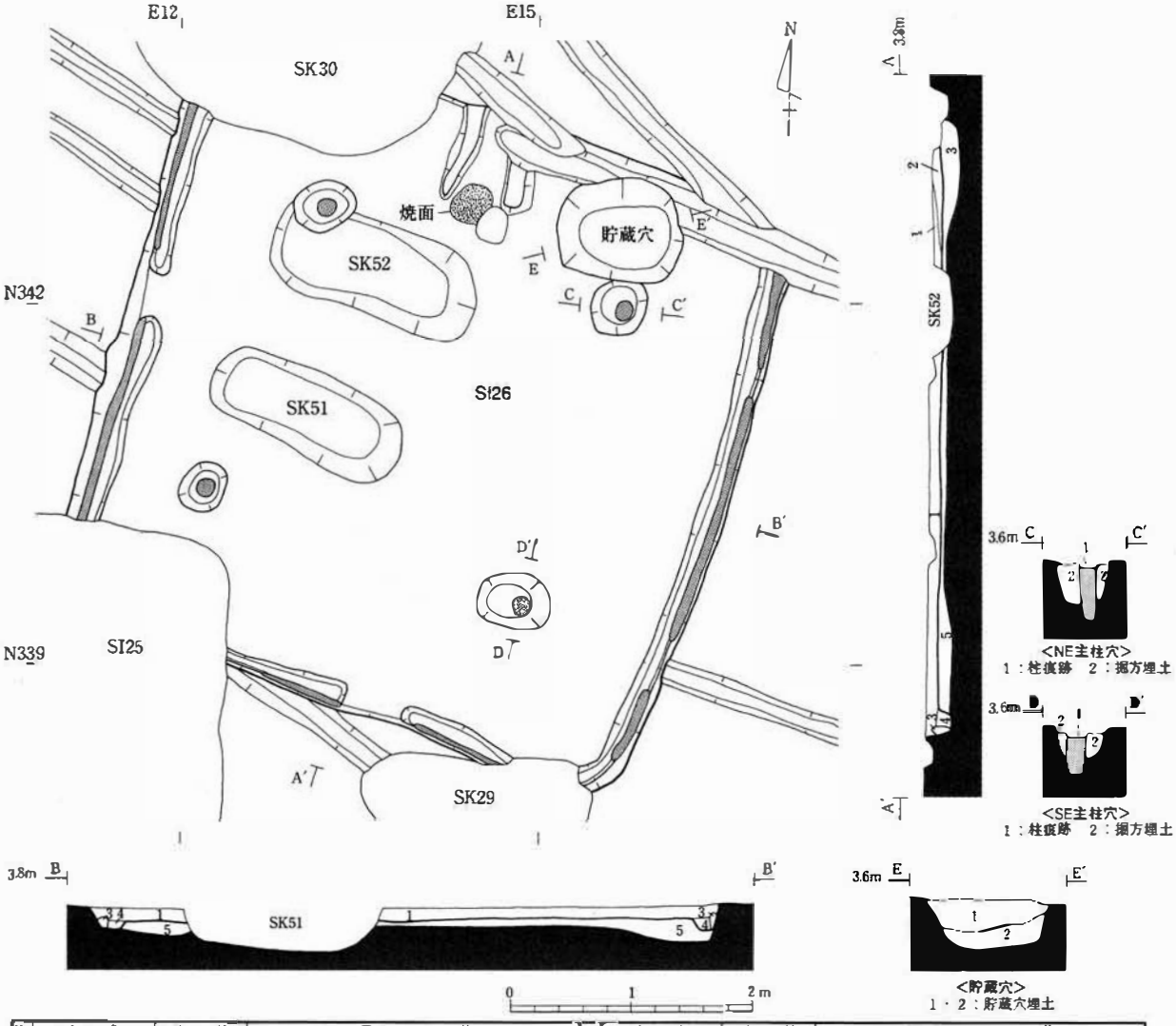
〔堆積土〕炭粒と地山小ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

〔壁〕やや斜めに立ち上がる。高さは最も残りのよい南壁で10cmである。

〔床面〕地山ブロックを多く含む黄灰色シルトの掘方埋土を床面とする。平坦である。

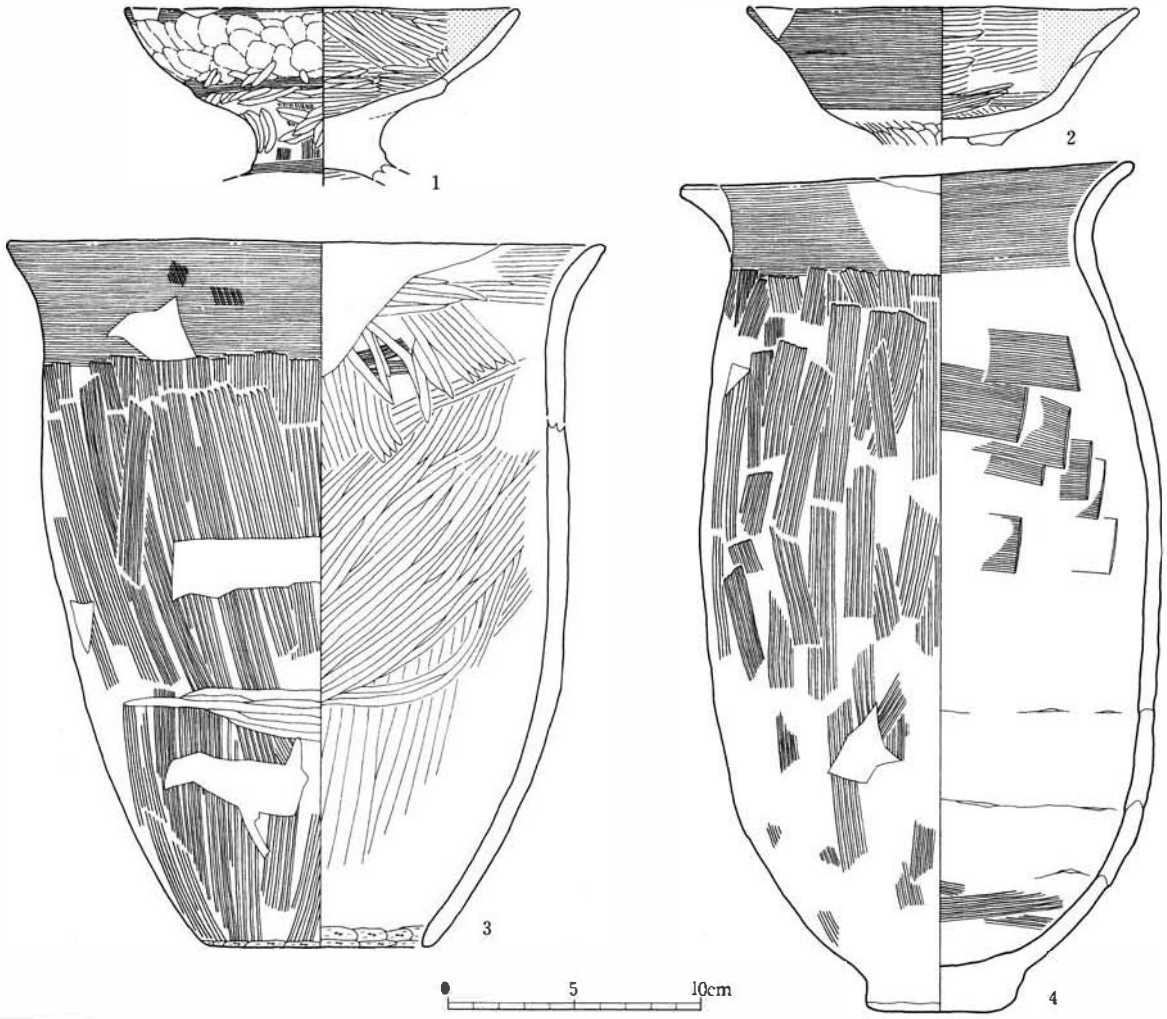
〔主柱穴〕4個確認し、すべてで径15cm前後の円形の柱痕跡を検出した。柱穴は長軸（辺）45～60cm、短軸（辺）35～45cmの楕円形や隅丸長方形で、深さは北東主柱穴で50cmある。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。柱間寸法は東西が南側で2.8m、南北は東側で2.6mである。

〔周溝〕東・西・南辺で検出された。西辺と南辺では一部途切れている。幅は15～25cm、深さは南辺の深いところで14cmある。地山小ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。東・西・南辺ともに壁沿いに壁材の痕跡とみられる幅5～10cmの黒色シルトの堆積土が認められた。



No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考
1	黒褐（2.5Y3/1）	シルト	地山ブロックを含む。炭粒を少し含む。（住居埋土）	4	黒褐（2.5Y3/1）	シルト	地山土ブロックを含む。（掘方埋土）
2	黒褐（10YR3/1）	シルト	炭粒と地山土・焼土を多く含む。（カマド崩落土）	5	黄灰（2.5Y5/1）	シルト	地山土ブロックを多く含む。（掘方埋土）
3	黒（2.5Y2/1）	シルト	炭粒を含む。地山砂を少し含む。（柱材痕跡）				

第13図　SI26住居跡



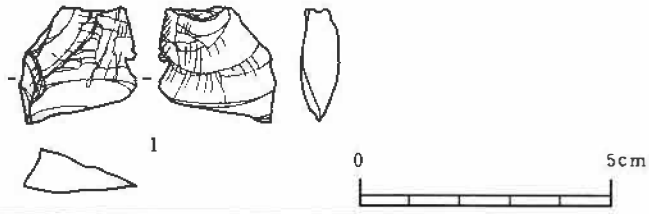
No.	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	土師器・高坏	住居埋土	外：ヨコナデ→ナデ→ミガキ、ハケメ→ミガキ・ヨコナデ　内黒　脚内：ミガキ	15.8	－	－	12－10	97
2	土師器・高坏	カマド崩落土	外：ヨコナデ・ミガキ　内黒	(15.6)	－	－	12－11	29
3	土師器・甑	床	外：ハケメ→ヨコナデ→ハケメ→ミガキ・ケズリ　内：ハケメ→ミガキ、ケズリ	(22.4)	8.6	22.8	12－16	25
4	土師器・甕	貯蔵穴埋土	外：ヨコナデ→ハケメ　内：ヨコナデ・ヘラナデ・ハケメ	17.9	5.8	33.5	13－9	28

第14図　Si26住居跡出土遺物1

〔カマド〕北辺中央に付設されており、燃焼部のみが検出された。右側の側壁と焼面の一部は新しい溝跡やピットに壊されている。左側の側壁は砂の混じる黄褐色粘土質シルトで構築されている。底面は平坦で、中央から焚き口にかけて焼面が認められる。また、中央やや左には長さ10cm、幅・厚さ5cmの砂岩を立てて支脚としている。

〔貯蔵穴〕カマドの右側にある。長軸105cm、短軸85cmの楕円形で、深さは40cmである。炭粒と地山小ブロックを含む黒褐色シルトや黄灰色シルトで埋め戻されている。

〔遺物〕床面で土師器甕・甑が出土している。甑（第14図3）は無底式で、頸部に段がないものである。胴部外面はハケメの後にヘラミガキが施されている。また、掘方埋土や柱穴・周溝埋土、貯蔵穴埋土から土師器甕、カマド崩落土や住居埋土から土師器坏・高坏・甕のほか、黒曜石の剥片（第15図）が出土している。貯蔵穴出土の甕には長胴形で、頸部に段がないもの（4）がある。胴部外面はハケメ、内面はヘラナデで調整されている。また、カマド崩落土と住居埋土出土の高坏（1・2）は坏部外面に段、内面に屈曲があるものである。口縁部は外傾または外反し、内面は黒色処理



No.	種別	層位	特徴	長さ	幅	厚さ	写真	登録
1	剥片	住居埋土	黒曜石	2.3	2.4	0.8	22－7	242

第15図　SI26住居跡出土遺物2

されている。

【SI27住居跡】（第16図）

SD48溝跡や攪乱によって、南辺は壊されている。SI95住居跡、SK96土壙より新しく、SX19土器埋設遺構、SD43・48・99溝跡、SK97土壙より古い。

〔平面形・規模・方向〕南北5.5m以上、東西5.0mの長方形とみられ、方向は東辺で真北である。

〔堆積土〕炭粒と地山小ブロックを含む黒褐色や暗灰黄色のシルトで埋め戻されている。

〔壁〕やや斜めに立ち上がる。高さは最も残りのよい北壁で16cmである。

〔床面〕地山粘土ブロックを多く含む黒褐色シルトの掘方埋土を床面とする。ほぼ平坦である。

〔主柱穴〕4個確認し、すべてで径15～20cmの円形や楕円形の柱痕跡を検出した。柱穴は長辺（軸）55～70cm、短辺（軸）45～60cmの隅丸長方形や楕円形で、深さは南東主柱穴で45cmである。埋土は地山砂ブロックを含む黒褐色シルトや黄褐色砂質シルトである。柱間寸法は東西が南側で2.9m、南北は西側で3.2mである。

〔周溝〕北辺のカマド部分を除いて、検出された各辺すべてにある。幅は15～25cm、深さは西辺の深いところで14cmある。地山小ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。各辺ともに壁沿いに壁材の痕跡とみられる幅5～10cmの暗灰黄色シルトの堆積土が認められた。

〔カマド〕北辺中央に付設されており、燃焼部と煙道部から成る。燃焼部の側壁は砂粒を含む黄褐色粘土で構築されており、その焚き口部には長さ14cm、幅18cm、厚さ8cmの砂岩の切石が左右1個ずつ据えられている。燃焼部の底面は浅く窪み、中央に焼面が認められる。煙道部は燃焼部から右（東）側に傾いて直線的に延びる。一部は削平されているが、長さは1.8mである。燃焼部底面と煙道部との間には10cmの段差がある。煙道の底面はほぼ平坦だが、先端部分は一段深くなっている。

〔遺物〕床面で土師器坏（第16図1）と須恵器坏（3）が出土している。土師器坏は扁平な有段丸底の坏で、外面の段はあまり明瞭ではない。須恵器坏は底径が大きく、底部が回転ヘラケズリ調整されたものである。床面では他に土師器坏・甕、須恵器高坏がごく少量出土している。そのほか掘方埋土や柱穴埋土から土師器坏・甕・鉢・甑、石製模造品（第47図6）が出土している。また、住居埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺が出土しており、須恵器坏には回転糸切り無調整のもの（第16図2）がある。

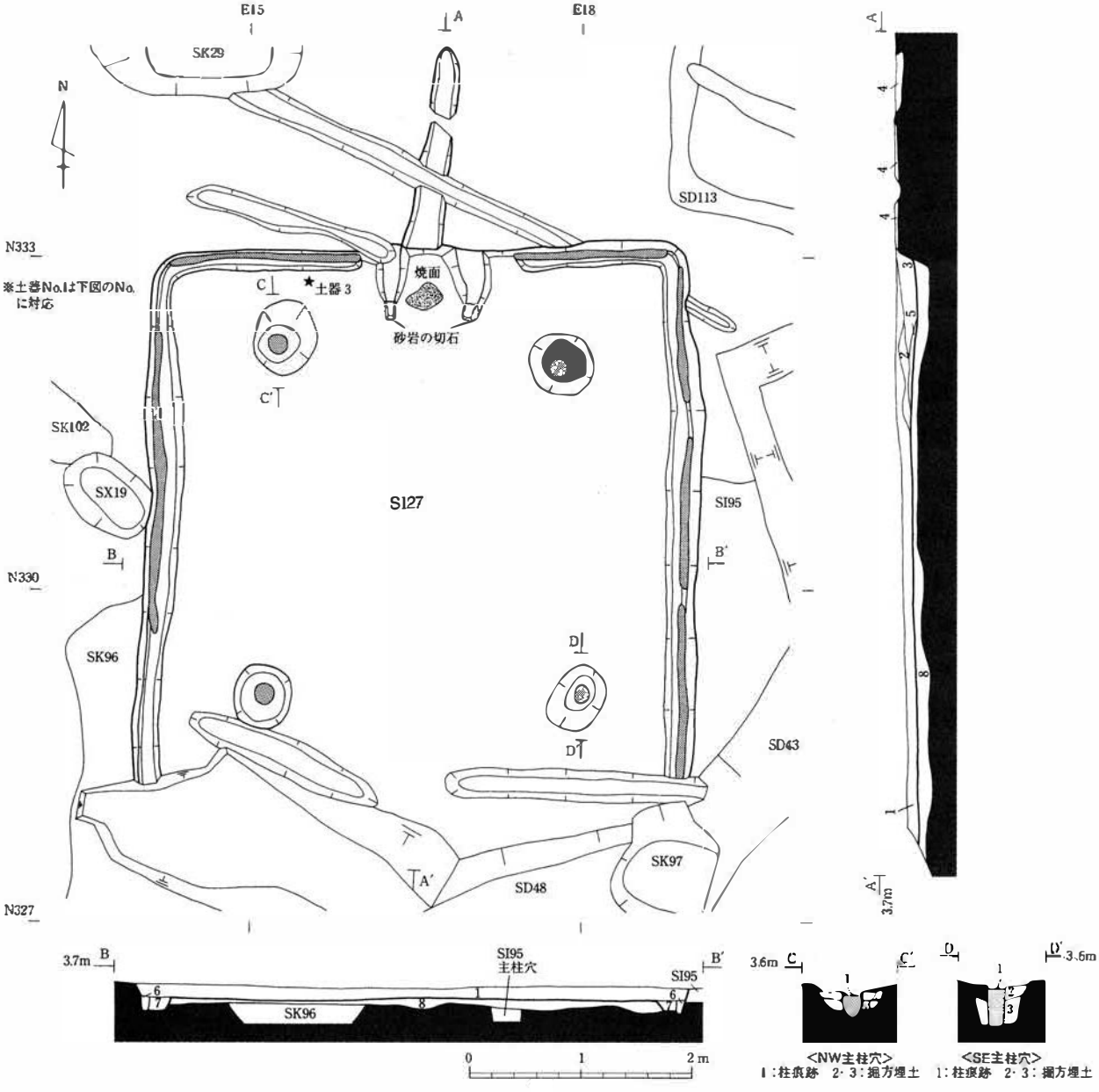
【SI28住居跡】（第17図）

A区中央の西際で北東隅部分を検出した。

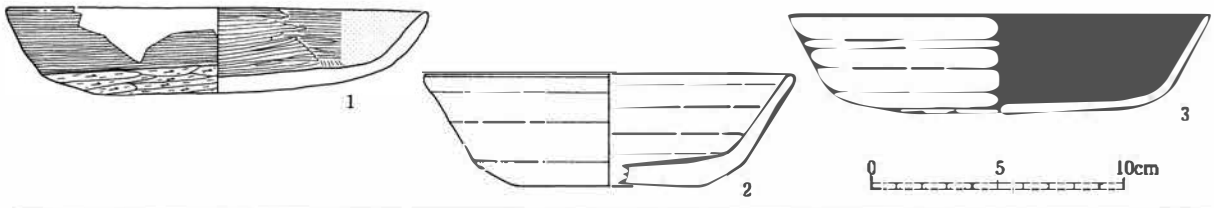
〔平面形・規模・方向〕南北2.5m以上、東西1.9m以上の長方形と思われ、方向は東辺でN－14°－E

である。

〔堆積土〕炭と地山砂の小ブロックを含む暗灰黄色シルトである。



No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	黒褐（10YR3/1）	シルト	地山ブロック・炭粒を少し含む。〈住居埋土〉	5	黒（N2/）	炭層	灰がまじる。〈カマド内堆積土〉
2	暗灰黄（2.5Y4/2）	シルト	地山ブロック・炭粒を少し含む。〈住居埋土〉	6	黒（2.5Y2/1）	シルト	炭粒と地山土粒を少し含む。〈壁材痕跡〉
3	褐灰（7.5YR4/1）	シルト	焼土・炭粒・地山土を含む。〈カマド崩落土〉	7	黒褐（10YR3/1）	シルト	地山土ブロックを含む。〈周溝埋土〉
4	褐灰（7.5YR5/1）	シルト	地山ブロックと炭粒を含む。〈煙道崩落土〉	8	黒褐（10YR3/2）	シルト	地山粘土ブロックを多く含む。〈掘方埋土〉



No.	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	土師器・坏	床	外：ヨコナデ→ケズリ　内黒	16.8	－	3.5	12－12	34
2	須恵器・坏	住居埋土	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	(13.8)	(7.6)	4.4	12－14	38
3	須恵器・坏	床	内外：ロクロナデ　底：回転ケズリ	(16.8)	(10.2)	4.0	12－13	30

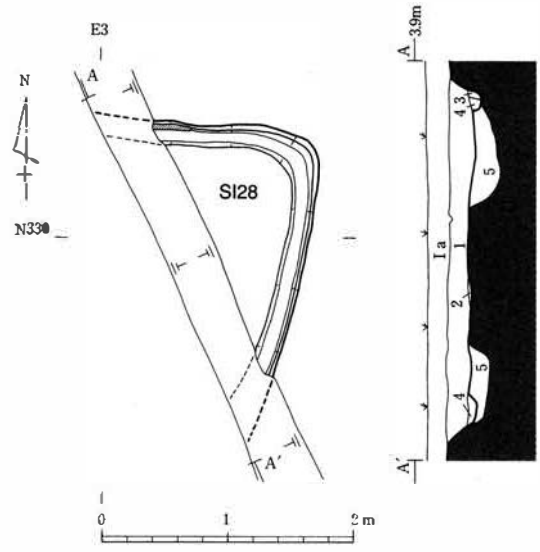
第16図　SI27住居跡と出土遺物

〔壁〕斜めに立ち上がる。高さは最も残りのよい北壁で14cmである。

〔床面〕検出部分では炭の小ブロックと地山砂を多く含む暗オリーブ褐色砂質シルトの掘方埋土を床面とする。緩やかな起伏がある。

〔周溝〕検出された各辺にある。幅は15～25cm、深さは北辺の深いところで12cmある。地山砂を多く含む黒褐色シルトで埋め戻されている。北辺では壁沿いに壁材の痕跡とみられる幅５cmの黒褐色色シルトの堆積土が認められた。

〔遺物〕掘方埋土から土師器甕がごく少量出土している。



層	土色	土性	備考
1	暗灰黄（2.5Y4/2）	シルト	地山砂・炭ブロック若干含む。〈住居堆積土〉
2	暗灰黄（10YR4/2）	シルト	地山砂多く含む。〈住居堆積土〉
3	黒褐（10YR3/2）	シルト	地山砂多く含む。〈壁材痕跡〉
4	黒褐（10YR3/2）	シルト	地山土を多く含む。〈周溝埋土〉
5	暗オリーブ褐（25Y3/3）	砂質シルト	地山砂・炭ブロックを多く含む。〈掘方埋土〉

第17図　SI28住居跡

【SI47住居跡】（第18図）

削平されて残りが悪く、堆積土や床面、壁は北東隅に残るのみである。また、SD40溝跡や攪乱によって、住居中央部と南辺部分は壊されている。SK102土壙より新しく、SI25住居跡、SD40溝跡、SK117土壙より古い。

〔平面形・規模・方向〕南北6.2m以上、東西6.3mの長方形とみられ、方向は西辺でN－13°－Eである。

〔堆積土〕炭粒と地山砂粒を含む黒褐色シルトである。

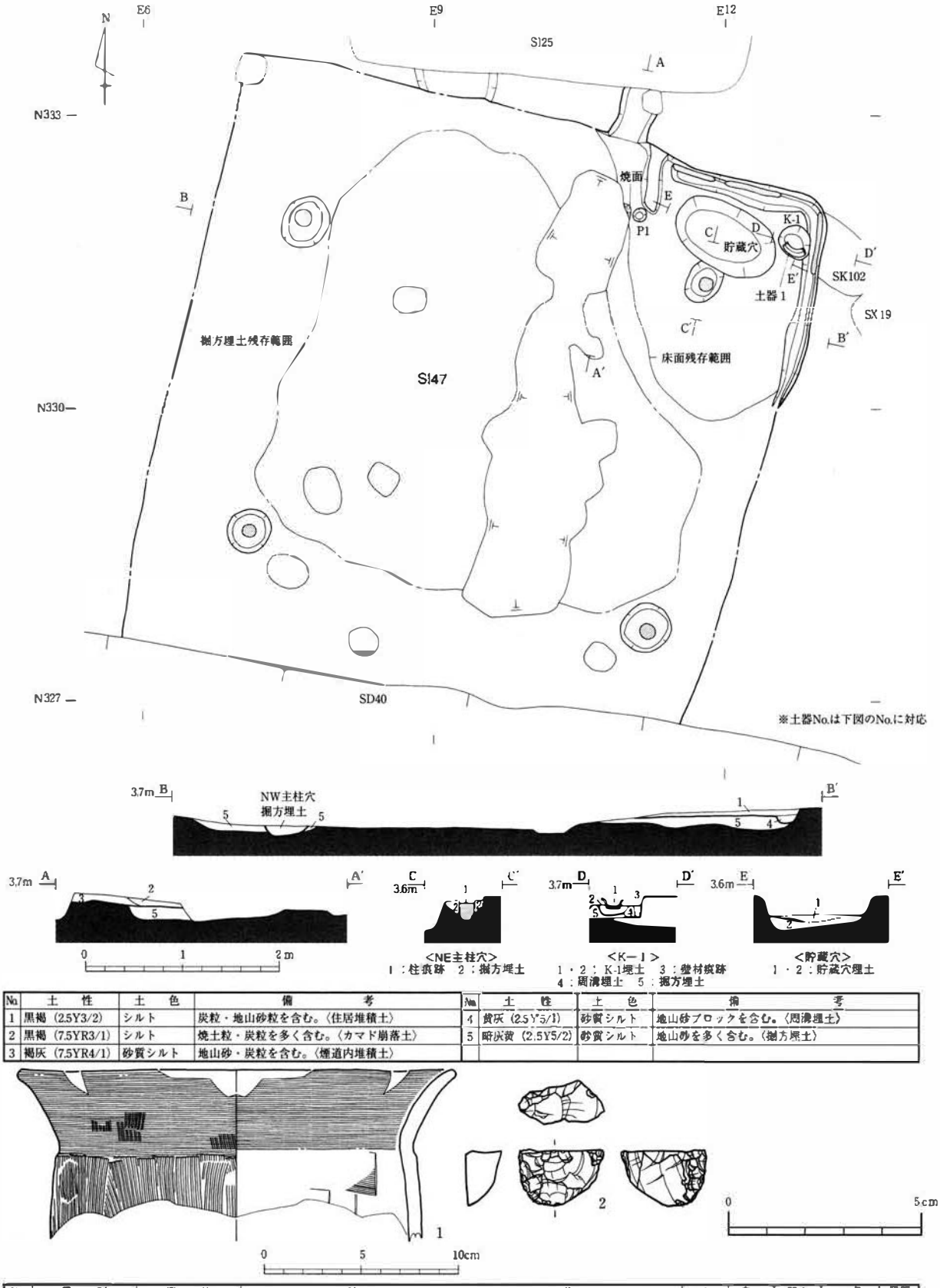
〔壁〕斜めに立ち上がる。高さは最も残りのよい北壁で７cmである。

〔床面〕床面が残っているところでは地山砂を多く含む暗灰黄色砂質シルトの掘方埋土を床面とする。平坦である。

〔主柱穴〕４個確認し、すべてで径15～20cmの円形の柱痕跡を検出した。柱穴は長軸45～60cm、短軸35～50cmの楕円形で、深さは北東主柱穴で25cmある。埋土は地山砂小ブロックを含む黄灰色シルトである。柱間寸法は東西が南側で4.2m、南北は東側で3.6mである。

〔周溝〕北東隅で検出された。幅は15～20cm、深さは北辺の深いところで14cmある。地山砂小ブロックを含む黄灰色砂質シルトで埋め戻されている。一部で壁沿いに壁材の痕跡とみられる幅５cmの黒褐色シルトの堆積土が認められた。

〔カマド〕北辺中央の東寄りに付設されている。燃焼部と煙道部とから成るが、新しい遺構などに壊されており、ともに半分しか残っていない。燃焼部の側壁は黄褐色粘土で構築されており、その焚き口部には構築あるいは補強材の据え方とみられるピット（Ｐ１）が検出されている。燃焼部底面は煙道に向かって上向きにやや傾斜する。また、わずかしか残存しないが、焚き口部に焼面が認められる。煙道部は燃焼部から直線的に延びる。底面は燃焼部底面からそのまま上向きにやや傾斜している。



No	土性	土色	備考
1	黒褐（2.5Y3/2）	シルト	炭粒・地山砂粒を含む。〈住居堆積土〉
2	黒褐（7.5YR3/1）	シルト	焼土粒・炭粒を多く含む。〈カマド崩落土〉
3	褐灰（7.5YR4/1）	砂質シルト	地山砂・炭粒を含む。〈煙道内堆積土〉
4	黄灰（2.5Y5/1）	砂質シルト	地山砂ブロックを含む。〈周溝埋土〉
5	暗灰黄（2.5Y5/2）	砂質シルト	地山砂を多く含む。〈掘方埋土〉

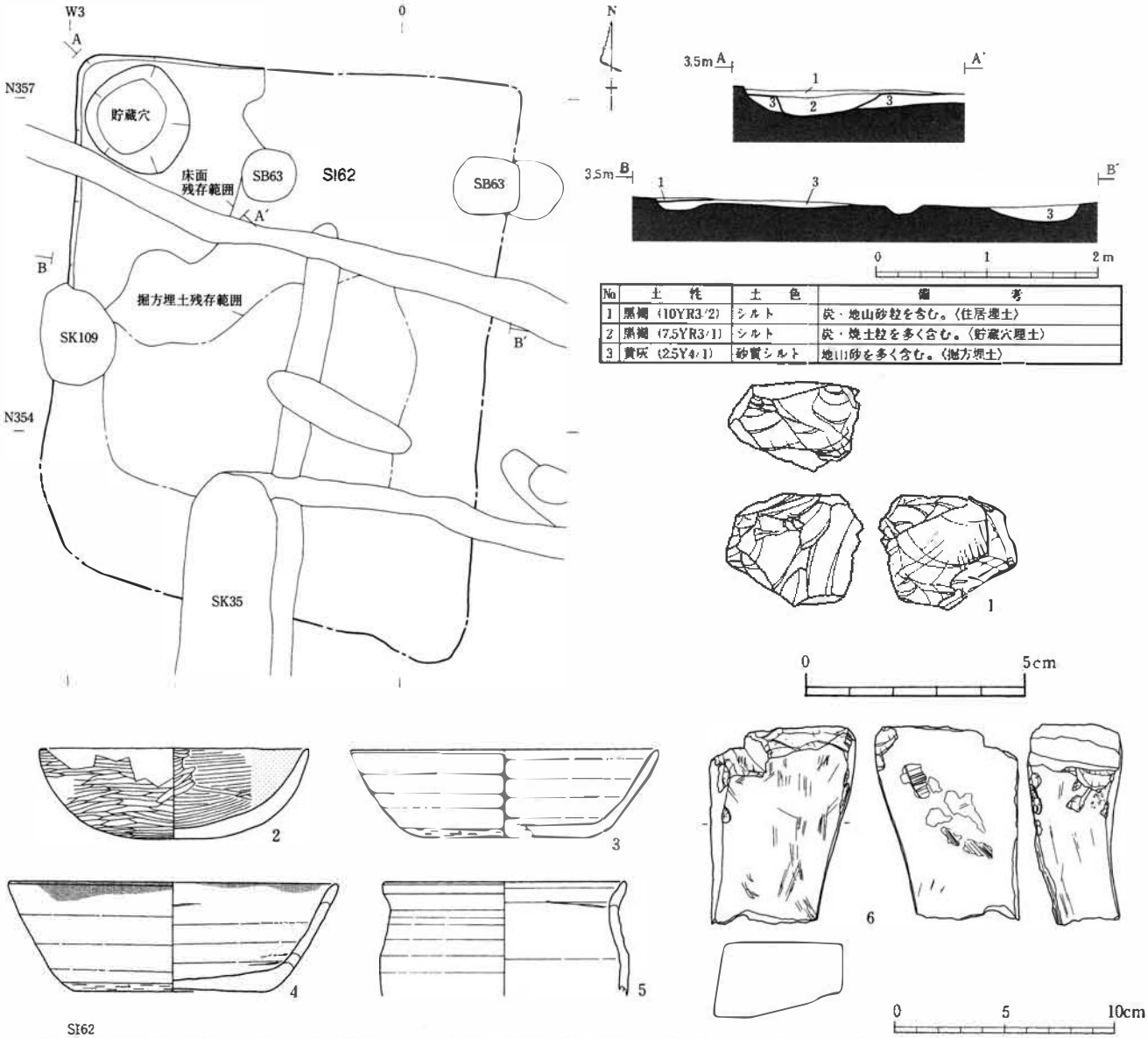
No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	土師器・甕	K1埋土	外：ハケメ→ヨコナデ→ハケメ 内：ヨコナデ・ヘラナデ	(22.6)	－	－		39
2	スクレイパー	住居堆積土	長：2.3 幅：1.5 厚：1.2 凝灰岩	－	－	－	22－6	237

第18図 S147住居跡と出土遺物

〔貯蔵穴〕カマドの右側にある。長軸110cm、短軸65cmの楕円形で、深さは35cmである。炭粒と焼土粒、地山砂ブロックを含む褐灰色シルトなどで埋め戻されている。

〔貯蔵穴状ピット〕貯蔵穴の右側に土師器甕の上部を立てて据えたＫ１がある。掘方は長軸35cm、短軸30cmの楕円形で、深さは12cmである。地山砂ブロックを多く含む黄灰色砂質シルトなどで埋め戻されている。

〔遺物〕掘方埋土から土師器甕、Ｋ１埋土から土師器甕・甑が少量出土している。Ｋ１埋土出土の土師器甕（第18図１）は非ロクロ調整の長胴形で、頸部外面に段をもつものである。胴部外面の調整はハケメである。。甑には口縁端部が四角に仕上げられたものがある。また、住居堆積土から土師器甕のほか、スクレイパー（２）がごく少量出土している。石材は黒曜石である。



No	土性	土色	備考
1	黒褐（10YR3/2）	シルト	炭・地山砂粒を含む。〈住居埋土〉
2	黒褐（7.5YR3/1）	シルト	炭・焼土粒を多く含む。〈貯蔵穴埋土〉
3	黄灰（2.5Y4/1）	砂質シルト	地山砂を多く含む。〈掘方埋土〉

SI62

No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	原石	床直	長：3.1　幅：2.6　厚：2.0　黒曜石	－	－	－	22-8	238
2	土師器・坏	床直	外：ミガキ　内黒	12.2	－	4.0	13-1	41
3	須恵器・坏	床直	外：ロクロナデ→回転ケズリ　底：回転ケズリ　内：ロクロナデ	(14.0)	(7.6)	4.0	13-2	43
4	須恵器・坏	貯蔵穴埋土	外：ロクロナデ→回転ケズリ　底：静止糸切り→回転ケズリ　内：ロクロナデ　口縁部に油煙付着	15.0	9.0	5.0	13-3	45
5	土師器・甕	床直	内外：ロクロナデ	(11.0)	－	－		42
6	礫石	床直	長：9.1　幅：6.7　厚：4.2　凝灰岩	－	－	－	19-18	44

第19図　SI62住居跡と出土遺物

【SI62住居跡】（第19図）

削平されて残存状況が悪く、堆積土や床面、壁は北西隅に残るのみである。SB63建物跡、SK35・109土壙、C群小溝より古い。

〔平面形・規模・方向〕南北5.3m、東西3.8mの長方形とみられ、方向は東辺でN－4°－Eである。

〔堆積土〕炭粒と地山砂粒を含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

〔壁〕斜めに立ち上がる。高さは最も残りのよい北壁で8cmである。

〔床面〕残存するところでは地山砂を多く含む黄灰色砂質シルトの掘方埋土を床面とする。ほぼ平坦である。

〔主柱穴・周溝・カマド〕検出されなかった。

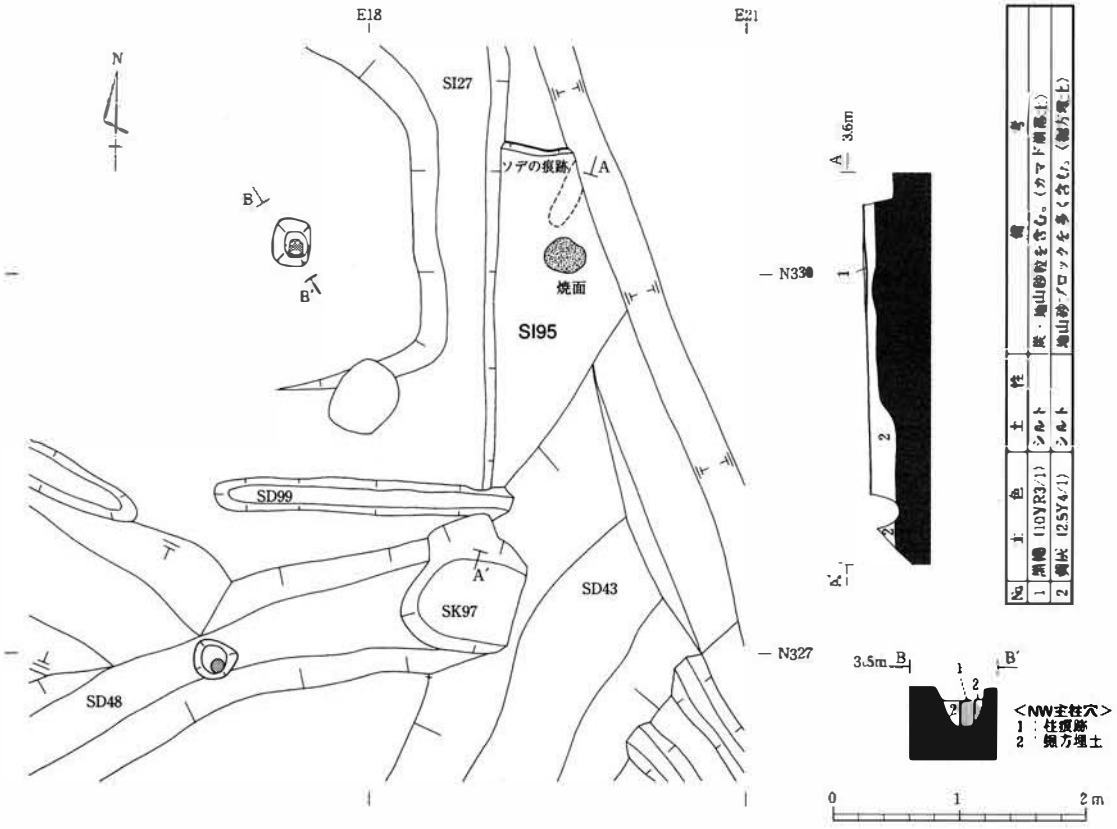
〔貯蔵穴〕北西隅にある。長軸95cm、短軸90cmの楕円形で、深さは20cmである。炭粒と焼土粒を多く含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

〔遺物〕床面直上から土師器坏・甕、須恵器坏のほか、砥石（第19図6）、黒曜石の原石（1）が出土している。土師器には非ロクロ調整の無段丸底の坏（2）やロクロ調整の甕（5）、須恵器坏には底部から体部下端に回転ヘラケズリ調整を施したもの（3）がある。その他、掘方埋土から土師器甕、貯蔵穴埋土から土師器甕、須恵器坏が出土している。貯蔵穴出土の須恵器坏には、口縁部に油煙状の付着物が認められるものがある（4）。

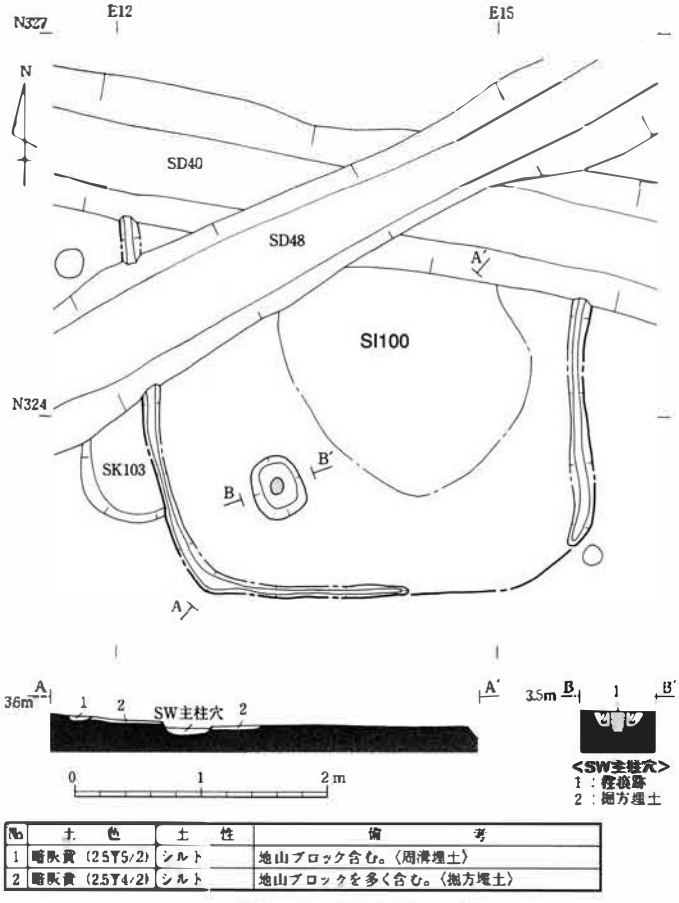
【SI95住居跡】（第20図）

床面近くまで削平されると同時に、SI27住居跡やSD43・48溝跡などの新しい遺構によって大きく壊されている。SI27住居跡、SD43・48・99溝跡、SK97土壙より古い。

〔平面形・規模・方向〕わずかに残る北辺と、カマドや主柱穴の位置関係からみて、長方形と思われ

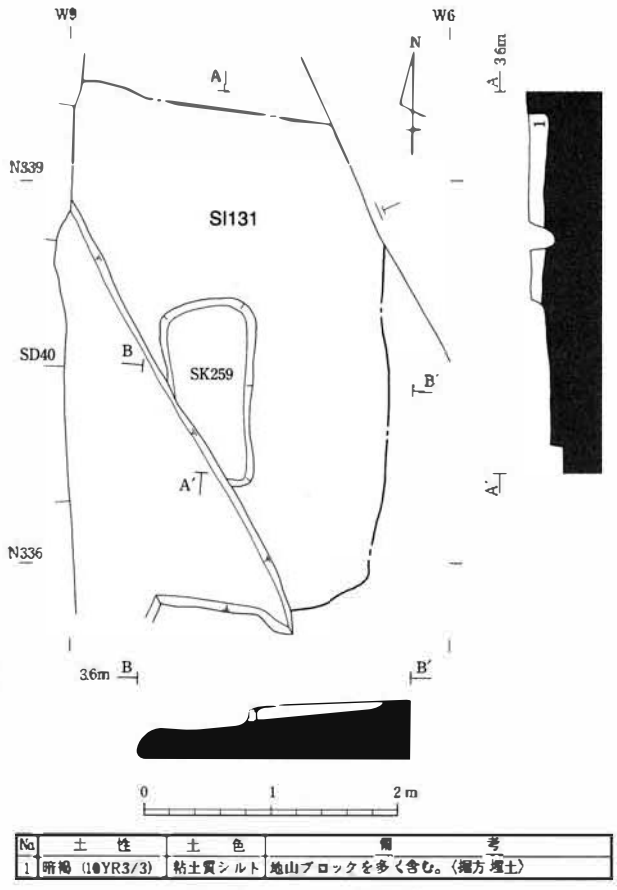


第20図　SI95住居跡



No	土色	土性	備考
1	暗灰黄（2.5Y5/2）	シルト	地山ブロック含む。〈周溝埋土〉
2	暗灰黄（2.5Y4/2）	シルト	地山ブロックを多く含む。〈掘方埋土〉

第21図　SI100住居跡



No	土性	土色	備考
1	暗褐（10YR3/3）	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。〈掘方埋土〉

第22図　SI131住居跡

る。規模は不明である。方向は西側主柱でN－11°－Eである。

〔堆積土〕炭粒と地山砂粒を含む黒褐色シルトである。

〔壁〕最も残りのよい北壁で2cmである。

〔床面〕残存していた部分では、地山砂ブロックを多く含む黄灰色シルトの掘方埋土を床面とする。若干北に向かって上向きに傾斜している。

〔主柱穴〕西側の2個を検出し、ともに径10cm前後の円形の柱痕跡を確認した。カマドとの位置関係などからみて、調査区外の東側にも2個あると思われる。柱穴は長辺（軸）35cm前後、短辺（軸）30～35cmの隅丸長方形や楕円形で、検出面からの深さは北西主柱穴で30cmである。埋土は地山砂ブロックを多く含む黄灰色砂質シルトである。西側主柱の柱間寸法は3.4mである。

〔カマド〕北辺に付設されているが、燃焼部側壁の痕跡と焼面が残るのみである。焼面は長軸30cmほどの楕円形で、平坦である。

〔遺物〕出土していない。

【SI100住居跡】（第21図）

残存状況が悪く、床面以下まで削平されると同時に、SD40・48溝跡で北辺部が壊されている。検出されたのは住居の掘方と主柱穴、周溝のみである。SK103土壙より新しく、SD40・48溝跡より古い。

〔平面形・規模・方向〕東西3.5m、南北3.0m以上の長方形と思われ、方向は東辺でN－2°－Wである。

〔床面〕北辺部と中央部以外は地山ブロックを多く含む暗灰黄色シルトの掘方埋土を床面としていたとみられる。

〔主柱穴〕1個確認し、径15cmの楕円形の柱痕跡が検出された。柱穴は長辺50cm、短辺40cmの楕円形で、深さは20cmである。埋土は地山ブロックを含む灰黄褐色シルトである。

〔周溝〕南辺の東側を除く各辺で検出された。幅は10～20cm、深さは5cm前後である。堆積土は地山小ブロックを含む暗灰黄色シルトである。

〔遺物〕掘方埋土から土師器坏・鉢・甕、須恵器坏・甕が出土している。

【SI131住居跡】（第22図）

B区中央の東際で検出した。残存状況が悪く、床面以下まで削平されると同時に、SD40溝跡と攪乱によって南西部が壊されている。検出されたのは住居の掘り方のみである。SD40溝跡、SK259土葬墓より古い。

〔平面形・規模・方向〕南北3.8m、東西3.5m以上の長方形と思われ、方向は東辺でN－6°－Eである。

〔床面〕北東部は地山ブロックを多く含む暗褐色粘土質シルトの掘方埋土を床面としている。

〔遺物〕掘方埋土から土師器坏・甕が少量出土している。坏には有段丸底のものがみられる。

C．土器埋設遺構（第23～27図）

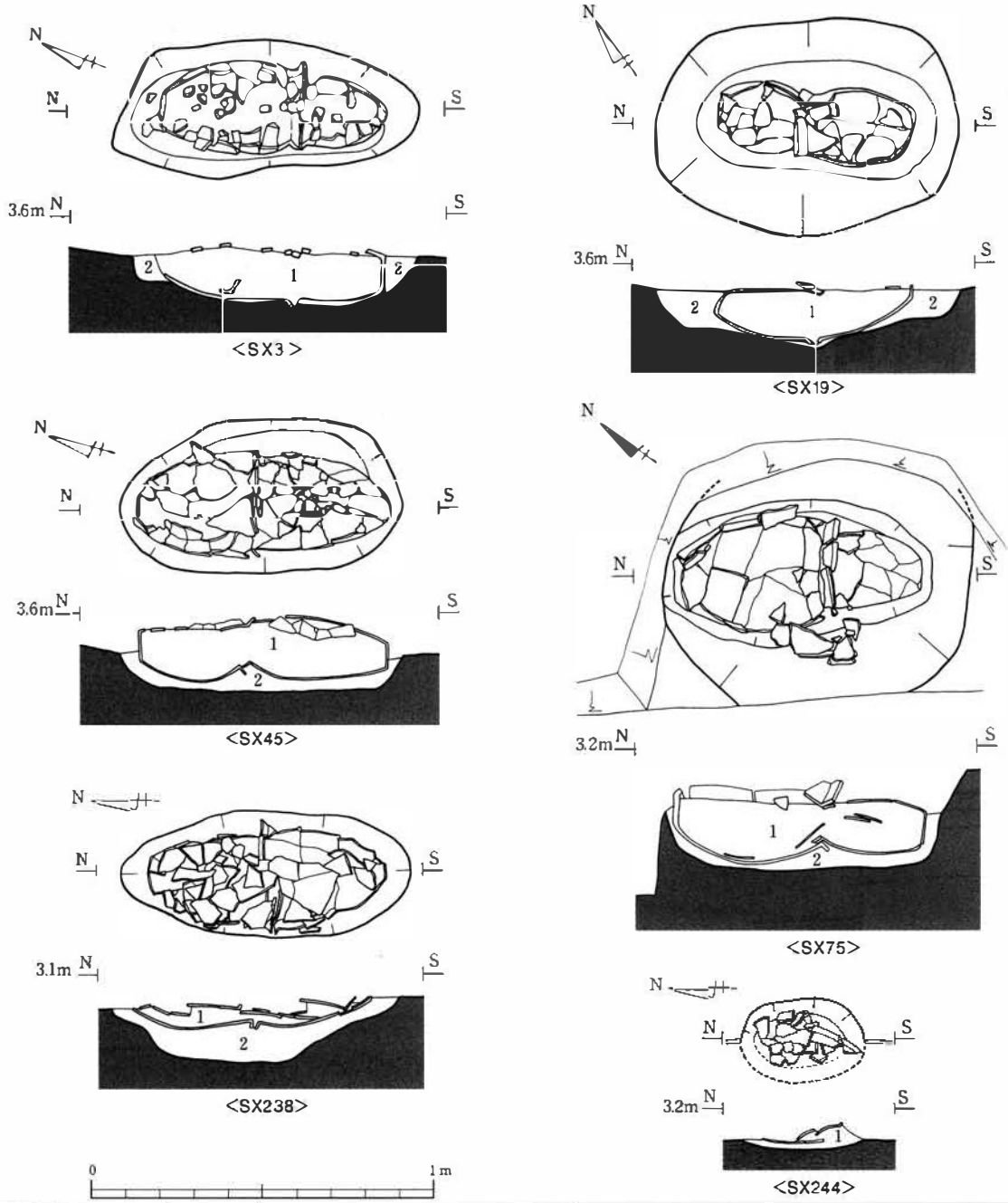
調査区中央から南で8基検出した。3基（SX19・45・75土器埋設遺構）がA区、5基（SX1・3・157・238・244土器埋設遺構）がB区でみつかっており、分布は全体的にまばらである。SX1・157・244は残りがよくないが、他は良好である。以下、これらについてまとめてのべる。なお、各埋設遺構の規模などの属性は巻末の遺構属性表に載せた。

〔重複〕SX19はSI27住居跡、SK102土壙より新しい。SX157はSK155土壙より新しく、SD167溝跡より古い。SX238は重複する東西方向の小溝より新しい。それら以外に重複はない。

〔据え方〕平面形は楕円形である。残りの悪いものを除いて規模をみると、長軸が84～98cm、短軸が40～62cmで、深さは12～28cmである。断面形は、縦断面で逆台形状や皿状である。長軸の方向は、残りの悪いものも含めて南北方向のものが6基、東西方向のものが2基ある（SX19・157）。前者は真北に向かい西に2～36°の範囲でふれるものが主体を占める。後者はSX45のみで、10°東にふれる。東西方向のものは真東に向かいSX19が25°南に、SX157が5°北にふれる。

〔埋設状況〕土師器甕が横位で埋設されている。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色粘土や暗褐色粘土質シルト、暗灰黄色砂質シルトなどである。甕は2つ検出されたものと、1つ検出されたものとがある。主体をしめるのは前者で、合わせ口の状態で埋設されている。1つだけ検出されたものはSX157・244であるが、遺構自体の残りが悪いことから、本来は2つ埋設されていた可能性もある。

〔土器内の堆積土〕しまりのない暗灰黄色砂質シルトや暗褐色粘土質シルト、黒褐色粘土などで、自然堆積である。特に目立つ混入物等は認められなかった。



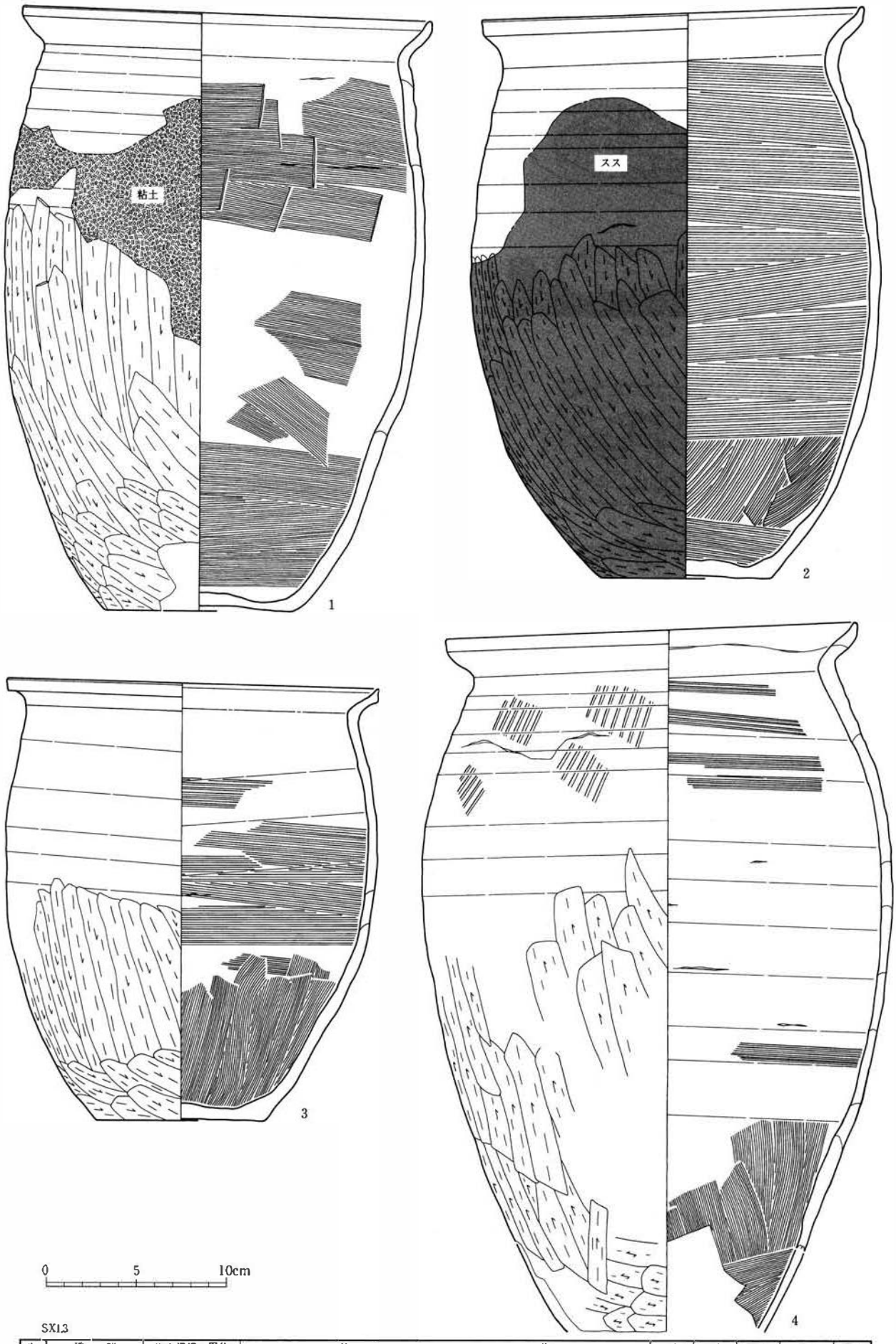
遺構	No.	土色	土性	備考
SX3	1	暗褐（10YR3/3）	粘土質シルト	地山粒を含む。（自然）
	2	暗褐（10YR4/3）	粘土質シルト	地山粒を含む。（掘方埋土）
SX19	1	暗灰黄（2.5Y4/2）	砂質シルト	（自然）
	2	暗灰黄（2.5Y5/2）	砂質シルト	地山砂ブロックを含む。（掘方埋土）
SX45	1	黒褐（2.5Y3/2）	シルト	（自然）
	2	黒褐（2.5Y3/2）	シルト	地山砂を含む。（掘方埋土）

遺構	No.	土色	土性	備考
SX75	1	オリーブ黒（5Y3/2）	砂質シルト	（自然）
	2	オリーブ黒（5Y3/2）	シルト質砂	地山砂多くさむ。（掘方埋土）
SX238	1	黒褐（10YR2/2）	粘土	部分的に酸化鉄沈着。（自然）
	2	黒褐（10YR3/1）	粘土	地山土をブロック状に多く含む。（掘方埋土）
SX244	1	にぶい黄褐（10YR4/3）	粘土質シルト	地山粒・酸化マンガンを含む。（掘方埋土）

第23図　土器埋設遺構

〔埋設土器〕埋設された土師器甕（第24～27図）はロクロ調整の長胴形の甕である。口径20.9～28.2cm、器高24.5～44.1cmの大型品が使われている。外面の胴部下半には縦方向の手持ちヘラケズリが施されている。内面は回転ハケメ、ナデのほか、ヘラナデも認められる。また、焼成後に外面に粘土が貼り付けられたもの（第24図１、第25図１・２）や、ススが付着したもの（第25図２）がある。

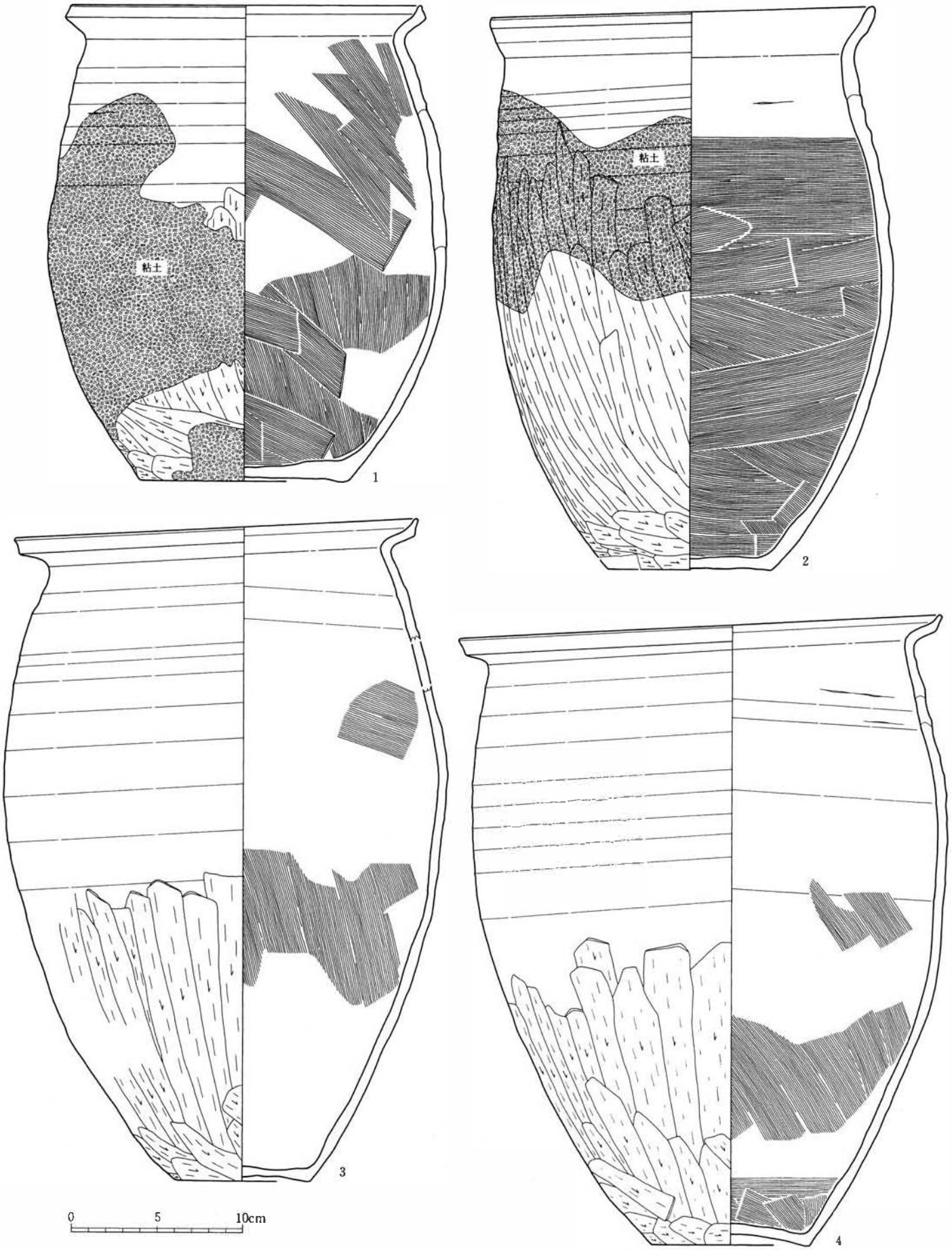
２個体の甕が合わせ口で埋設されている時の組合せは、同程度の大きさの甕の場合（SX１・45・238）と、大きい甕とやや小さい甕を組み合わせた場合（SX３・19・75）とがある。また、口縁部



SX1,3

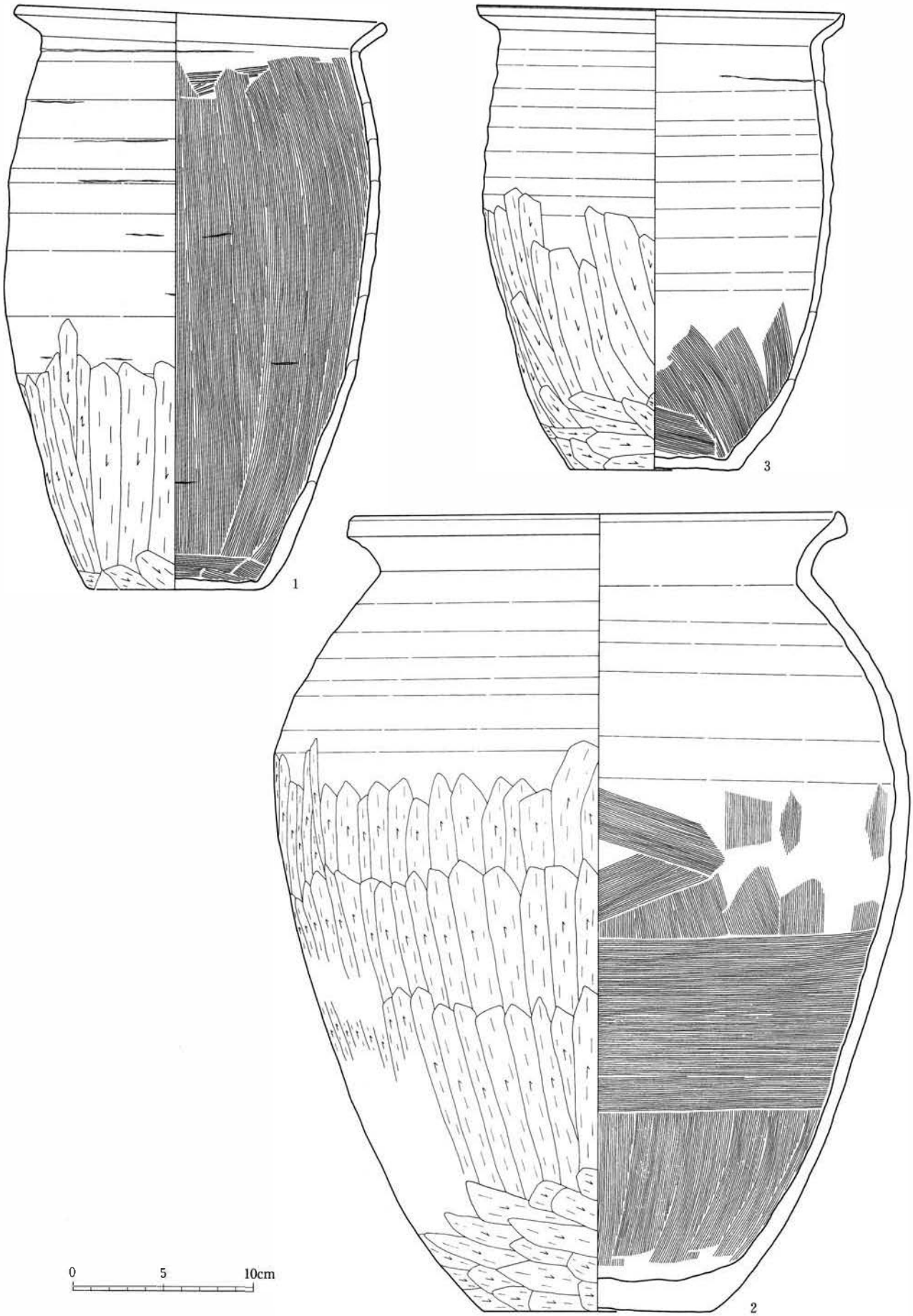
No	種　別	出土遺構・層位	特	徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	土師器・甕	SX1・埋土	外：ロクロナデ→手持ちケズリ　粘土付着　底：ナデ　内：ロクロナデ→ヘラナデ		22.8	10.4	33.5	13－10	132
2	土師器・甕	SX1・埋土	外：ロクロナデ→手持ちケズリ　スス付着　底：ナデ　内：ロクロナデ→ハケメ→回転ハケメ		21.3	9.4	31.7	13－11	133
3	土師器・甕	SX3・埋土	外：ロクロナデ→手持ちケズリ　底：ナデ　内：回転ハケメ→ロクロナデ・ナデ		20.9	9.4	24.5	14－1	135
4	土師器・甕	SX3・埋土	外：タタキ→ロクロナデ→手持ちケズリ　内：ナデ・■転ハケメ→ロクロナデ		22.8	－	－	14－4	134

第24図　SX１・３土器埋設遺構出土遺物



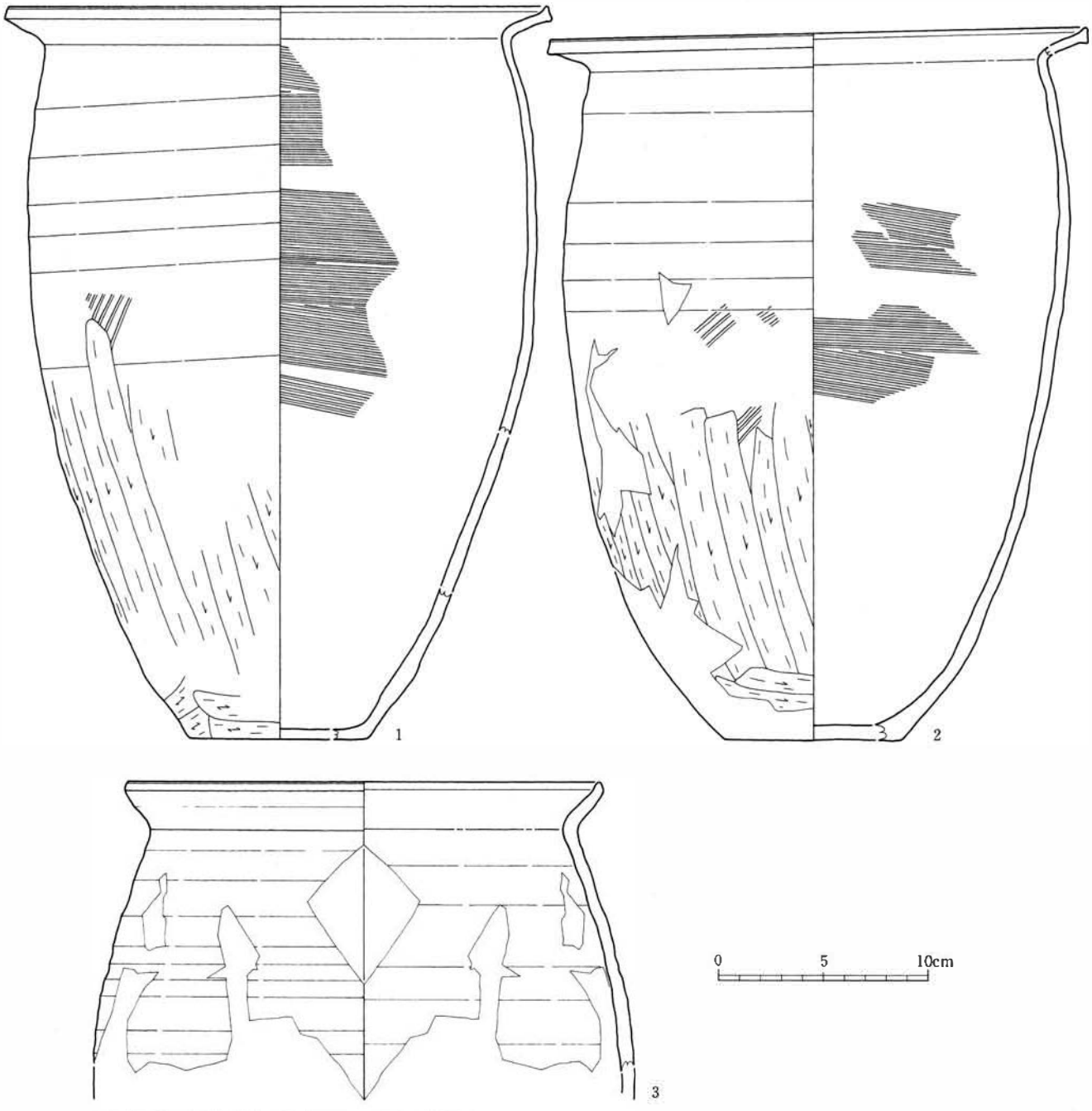
No	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	土師器・甕	SX19・埋土	外：ロクロナデ→手持ちケズリ　粘土付着　底：摩滅　内：ロクロナデ→ヘラナデ	20.4	6.0	27.8	14－2	48
2	土師器・甕	SX19・埋土	外：ロクロナデ→手持ちケズリ　粘土付着　底：摩滅　内：ロクロナデ→ナデ	22.6	9.6	32.9	14－5	47
3	土師器・甕	SX45・埋土	外：ロクロナデ→手持ちケズリ　底：摩滅　内：ロクロナデ・ナデ	28.2	9.2	36.7	カラー図版2	53
4	土師器・甕	SX45・埋土	外：ロクロナデ→手持ちケズリ　底：摩滅　内：ロクロナデ→ナデ	23.6	7.8	38.6	カラー図版2	52

第25図　SX19・45土器埋設遺構出土遺物



No	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	土師器・甕	SX75・埋土	外：ロクロナデ→手持ちケズリ 底：手持ちケズリ 内：ロクロナデ・ハケメ→ナデ	21.7	9.6	32.3	14－8	54
2	土師器・甕	SX75・埋土	外：ロクロナデ→手持ちケズリ 底：手持ちケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	27.7	12.6	44.1	14－7	55
3	土師器・甕	SX157・埋土	外：ロクロナデ→手持ちケズリ 底：ナデ 内：ロクロナデ・ナデ	20.5	9.4	25.6		161

第26図　SX75・157土器埋設遺構出土遺物



No	種　別	出土遺構・層位	特　　徴	口径	底径	器高	写真	量録
1	土師器・甕	SX238・埋土	外：平行タタキ→ロクロナデ→手持ちケズリ　底：ナデ　内：回転ハケメ	25.3	8.4	35.1	14－6	162
2	土師器・甕	SX238・埋土	外：平行タタキ→ロクロナデ→手持ちケズリ　底：ナデ　内：回転ハケメ	26.0	8.4	34.2	14－3	163
3	土師器・甕	SX244・埋土	内外：ロクロナデ	(22.8)	－	－		164

第27図　SX238・244土器埋設遺構出土遺物

の径が1～2㎝ほど異なるものを使用した場合と、小さい甕の口縁部径と大きい甕の内面頸部の径がほぼ同じものを使用した場合（SX75）とがある。

〔他の出土遺物〕SX 3 埋土から土師器と須恵器の坏・甕、SX19埋土から土師器と須恵器の坏、SX45埋土から須恵器坏、SX75埋土から土師器坏・甕、須恵器甕、瓦が各々少量出土している。

D. 土葬墓

本調査ではA・B区中央から南で長さ82～254cm、幅30～164cmの隅丸長方形や長楕円形の土壙を93基検出した（第4・28図）。それらは南西部の低地ほど濃密に分布する。堆積土は地山土・砂ブロックを多く含む人為的な埋土を特徴とし、上部に自然堆積土がみられる場合もある。遺物は少ないが、完形に近い土師器坏・甕や須恵器坏・壺が1・2点出土したものがある。こうした土壙は、仙台市原遺跡や古川市新谷地北遺跡で検出されており、土壙墓と位置づけられている（平間1998、主浜1999、木皿・早川1992）。また、調査の進展に伴って93基中21基では木棺も確認・推定された。したがって、これらの土壙は木棺墓を含む土葬墓と考えられる。以下では、木棺が確認されたA群と確認されなかったB群とに分けて説明する。なお、各土葬墓の属性は巻末の遺構属性表に載せた。

《A群…木棺が確認された土葬墓》（第29・30図）

B区南西部のみで検出した。掘方の平面形は隅丸長方形を基調とする。規模は長さ152～254cm、幅58～164cmで、平均値は長さ205cm、幅87cmである。深さは最も深いもので45cmで、横断面形は箱形や逆台形が主体をしめる。縦断面形は皿状が主体で、他に逆台形や箱形のものがある。底面は比較的平坦だが、凹凸が目立つものもみられる。長軸の方向は南北で、東に振れるものと西に振れるものがあり、その範囲は東に18°から西に42°である（第50図）。

木棺の残存状況は悪く、検出は困難だったが、4基で棺材の一部、9基で棺材の腐食した痕跡（以下、棺材痕跡と呼ぶ）を検出した。また、土層の堆積状況の観察をとおして棺の輪郭（以下、棺痕跡と呼ぶ）がとらえられ、木棺の存在を推定できたものが8基ある。

・棺材の一部を検出したもの……SK170・175・184・211

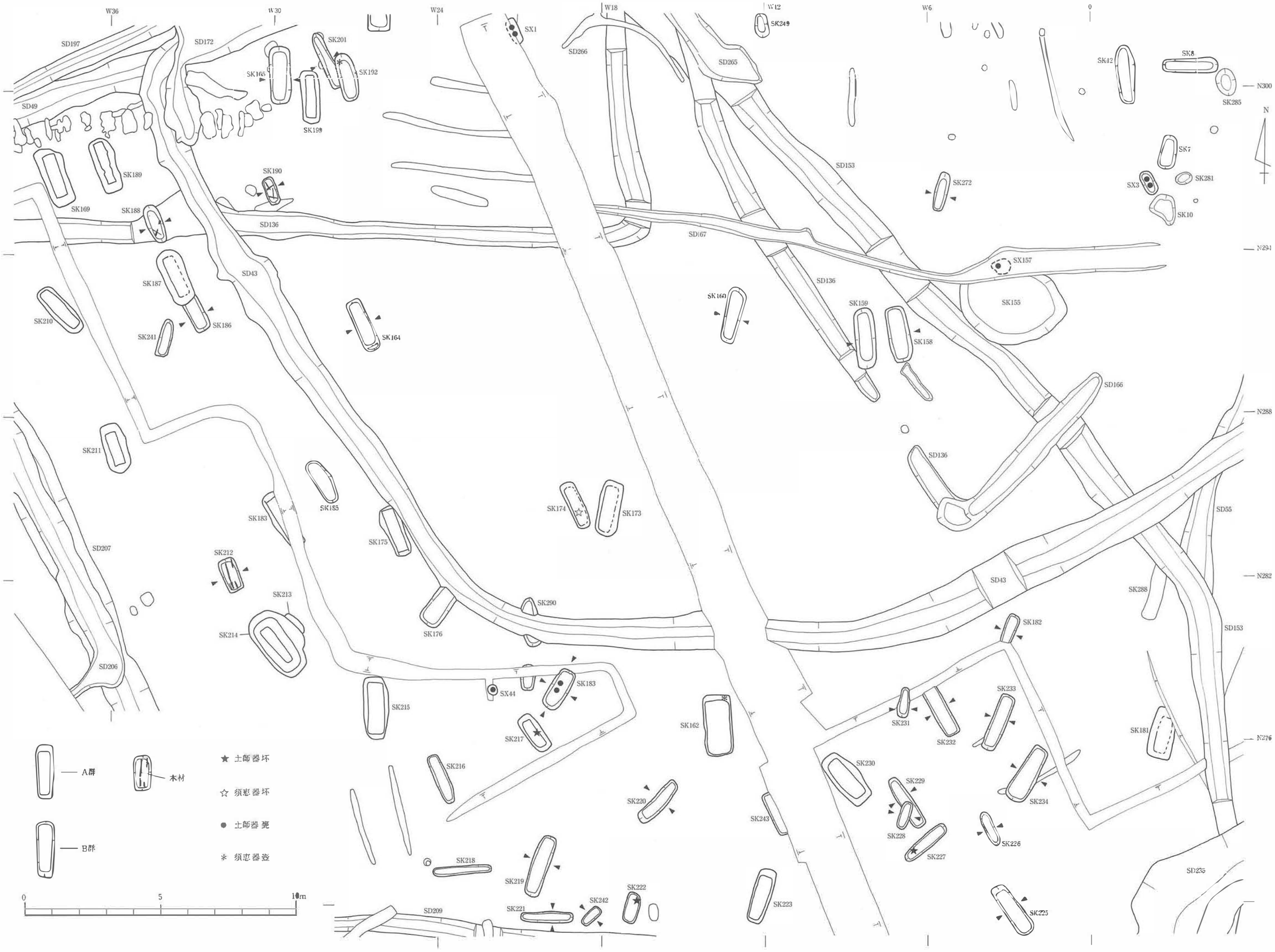
・棺材痕跡を検出したもの……SK162・173・174・185・187・195・199・210・217

・棺痕跡を検出したもの……SK169・181・189・193・214・215・223・230

木棺の平面形はほぼ長方形で、板を組み合わせた箱形の木棺とみられる。長さは124～196cm、幅は40～88cmで、平均値は長さ166cm、幅51cmである。底面はほぼ平坦で、残りのよいもので高さは26cmある。棺材はSK175・184で側板と木口板、SK170・211で底板が残存していた。棺材痕跡は幅5cm弱の暗赤褐（5YR3/3）・暗灰黄（2.5Y4/2）・黒褐（10YR3/1）・褐灰（10YR4/1）色粘土で、側板と木口板の痕跡が多いが、底板や蓋板の痕跡もSK174・184・210で確認した。また、木棺の下では長さ30～100cm、幅5cm前後の木材やその痕跡が検出された。2～4本程度ある場合が多く、短軸方向に置くもの（横木）が主体をしめるが、長軸方向（縦木）や三角形状、井桁状に置くものもある。

堆積土は下から掘方埋土、棺上部崩落以前の棺内流入土、棺上部埋土の崩落土、棺上部崩落後の自然堆積土に大別される。このうち棺内流入土は明瞭に認識できる場合もあるが、埋土の流入や崩落時の混合などにより埋土崩落土との峻別が難しく、とらえきれない場合もあった。また、上部の自然堆積土には灰白色火山灰の再堆積層が認められるものもある。

遺物はSK217で土師器坏（第33図4）、SK174・195で須恵器坏（9・11）、SK162で須恵器広口壺（14）が完形に近い状態で各1点出土した。他には土師器と須恵器の坏・甕、瓦の破片がごく少量出土したのみだが、SK170・195では人の歯牙、SK184では漆の皮膜が検出されている。



第28図　南西部土葬墓群平面図

以下、個別に事例を説明する。

【SK162土葬墓】（第30図）

最も大きい木棺が確認された。

〔掘方〕平面形は隅丸長方形である。規模は長さ228cm、幅98cmで、深さは28cmである。底面は、ほぼ平坦だが、長辺の壁直下には幅20cm、深さ10cmほどの溝状の掘り込みがある。壁は北辺は緩やかに立ち上がり、他はほぼ直立する。方向は長軸でN－3°－Wである。埋土は極暗褐色粘土と地山起源の黄褐色砂質シルトの混合土である。一度、棺底面付近まで埋め戻してから、長辺の壁直下に溝を掘り、それからもう一度埋め戻している。

〔木棺の状況〕平面形がほぼ長方形の棺痕跡が検出された。痕跡は幅２～５cmの黒褐色（7.5YR3/1）粘土で、側板や木口板の痕跡とみられる。底面は平坦で、壁は側板、木口板とも直立する。規模は長さ196cm、幅88cmで、棺底面からの高さは残りのよいところで17cmである。

棺の下では西側中央で長さ40cm、幅５cmほどの横木の痕跡が検出された。腐食して空洞化した内部には灰白色火山灰が流入している。

〔堆積土〕２～４層は極暗褐色粘土と地山起源の黄褐色砂質シルトの混合土で、棺内流入土または埋土崩落土である。１層は極暗褐色粘土で、崩落後の自然堆積土である。

〔遺物〕棺外北東部の掘り方埋土から須恵器広口壺（第33図14）が正位に置かれた状態で出土している。福島県会津大戸窯ＫＡ－107窯式期に属する広口壺である（註１）。そのほか、棺内流入土または埋土崩落土から土師器・須恵器坏、掘方埋土から瓦が少量出土している。

【SK170土葬墓】（第30図）

上部は削平されているが、底板が最もよく検出された。SD198、Ｄ群小溝より古い。

〔掘方〕平面形は隅丸長方形と思われる。規模は長さ172cm以上、幅128cmで、深さは26cmである。横断面形は逆台形で、底面は凸凹している。方向は長軸でN－11°－Wである。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。

〔木棺の状況〕底板を検出した。複数の板材を長軸方向に平らに敷き並べたものである。最も残りのよい板材で長さ64cm、幅22cm、厚さ３mmほどが残存していた。また、北端部の底板の下では、短軸に対し斜めに置いた長さ140cm、幅７cmの横木とその痕跡を検出した。ほぼ水平に置かれている。

〔堆積土〕灰白色火山灰の粒を含む黒褐色シルトで棺内流入土である。

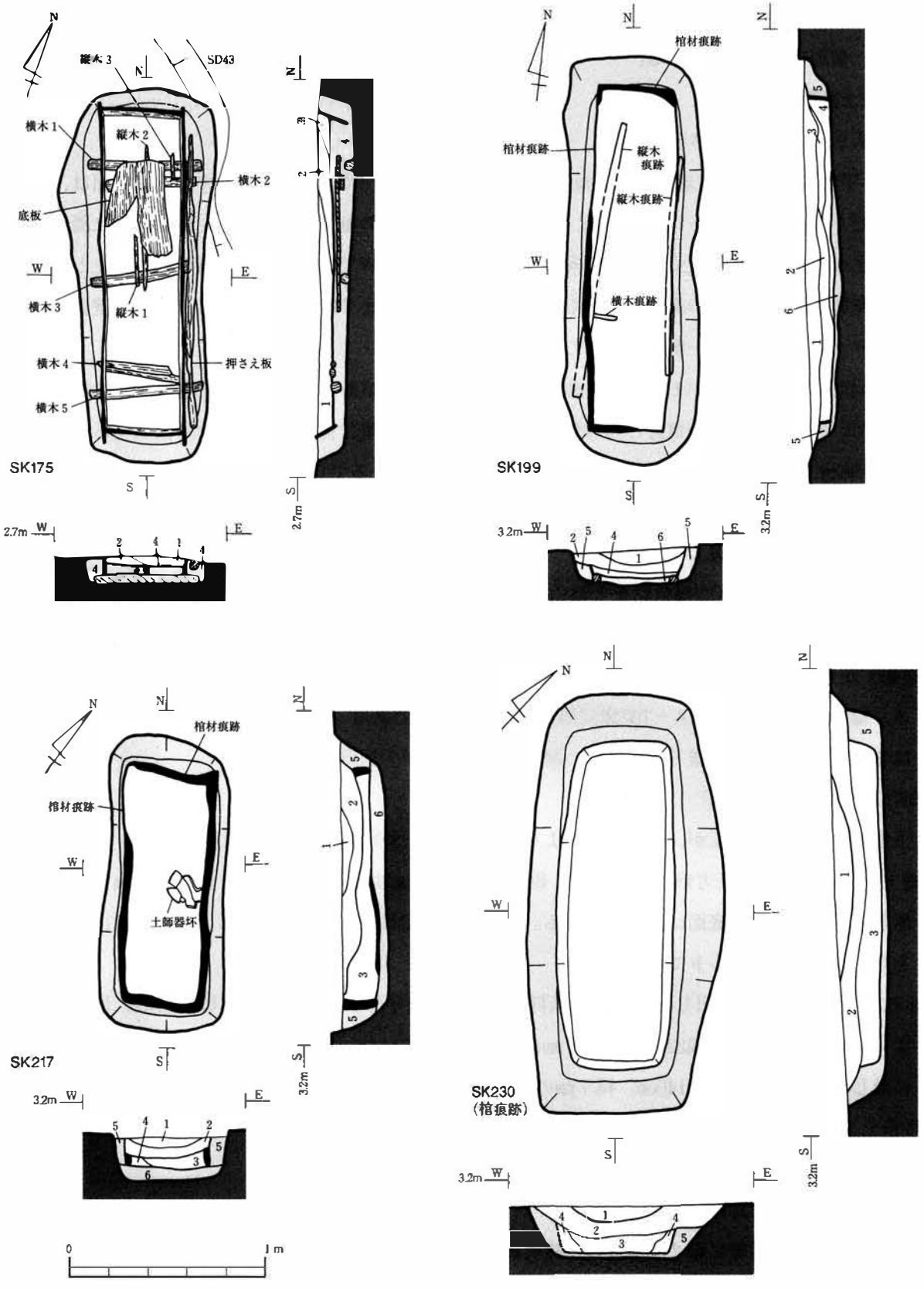
〔遺物〕木棺北半の底面で、人の歯牙が２片検出された。

【SK175土葬墓】（第29図）

遺構検出時に、明瞭に幅２cm前後の棺材痕跡と棺脇の押さえ板が確認された。精査の結果、棺材が最もよく残っていた。SD43溝跡より古い。

〔掘方〕平面形はやや不整な隅丸長方形である。規模は長さ188cm、幅78cmで、深さは18cmある。断面形は横・縦断面とも箱形である。底面は北から南に向かって少し上向きに傾斜するが、ほぼ平坦である。方向は長軸でN－20°－Wである。埋土は灰褐色と褐灰色の粘土質シルトの混合土である。

〔木棺の状況〕側板、木口板、底板とそれらの痕跡が検出された。棺材痕跡は灰褐色（7.5YR4/2）粘



遺構	No	土色	土性	備考
SK175	1	黒褐 (2.5Y3/2)	粘土質シルト	地山ブロックを含む。(流入or崩落)
	2	オリーブ褐 (2.5Y4/3)	砂質シルト	地山土主体。(流入or崩落)
	3	暗灰黄 (2.5Y4/2)	粘土質シルト	地山土が混じる。(流入or崩落)
	4	褐灰 (7.5YR4/1)	粘土質シルト	灰褐色土・火山灰粒が混じる。(掘方埋土)
SK199	1	黒褐 (10YR3/1)	シルト	地山ブロックを多く含む。(埋土崩落土)
	2	黒褐 (10YR3/1)	シルト	地山ブロックを含む。(棺内流入土)
	3	暗灰黄 (2.5Y4/2)	シルト	地山粒を少し含む。(棺内流入土)
	4	灰黄褐 (10YR4/2)	シルト	地山ブロックを含む。(棺内流入土)
	5	暗灰黄 (2.5Y4/2)	シルト	地山土主体。(掘方埋土)
	6	暗灰黄 (2.5Y4/2)	粘土	地山土主体。(掘方埋土)

遺構	No	土色	土性	備考
SK217	1	灰黄褐 (10YR4/2)	粘土	地山砂を多く含む。(自然堆積土)
	2	灰黄褐 (10YR4/2)	粘土	粘性強い。地山砂を少し含む。(自然堆積土)
	3	灰黄褐 (10YR4/2)	粘土	地山の砂と淡色粘土を多く含む。(流入or崩落)
	4	灰黄褐 (10YR4/2)	粘土	(流入or崩落)
	5	灰黄褐 (10YR4/2)	粘土	粘性非常に強い。(掘方埋土)
	6	灰黄褐 (10YR4/2)	粘土	地山砂を多く含む。(掘方埋土)
SK230	1	灰白 (10YR7/1)	火山灰	再堆積層。(自然堆積土)
	2	黒褐 (10YR3/2)	粘土	地山ブロックを含む。(埋土崩落土)
	3	黒褐 (10YR3/1)	粘土	地山粒を含む。(棺内流入土)
	4	黒褐 (10YR3/1)	粘土	地山ブロックを含む。(棺内流入土)
	5	明黄褐 (10YR7/6)	粘土	黒褐色土・褐灰色土が混じる。(掘方埋土)

第29図　土葬墓A群の典型例

土である。側板と木口板は上からみて「凵」状に組まれている。棺の底面はほぼ平坦で、壁は側板、木口板ともに棺底面の下から立ち上がり、側板はほぼ直立、木口板は外側に斜めに立ちあがる。規模は長さ171cm、幅46cmで、内法は長さ159cm、幅39～46cmである。棺底面からの高さは残りのよいところで10cmである。

側板は半分以上が粘土化しているが、東西とも一部で板材が残存していた。また、側板は横木の上に乗っているが、その部分の加工の有無は腐食や湧水で認識できなかった。一方、木口板は腐食が少ない。「凵」状に組まれた側板との接合部には側板・木口板とも加工が認められず、周辺から釘等の接合具も出土していない。木口板による棺の壁が下から斜めに立ちあがることと合わせみて、木口板は側板の間に挟み込まれただけとみられる。底板は、棺の北半で幅15cmほどの板材が長軸方向に２枚並べられているのを確認した。複数の板を長軸方向に並べて棺底としていたとみられる。棺の下では横木と縦木を検出した。横木は長軸に対し直交する向きで北に２つ、中央に１つ、南に２つある。丸材と板材があり、水平に置かれている。縦木は長軸と方向を揃えて北半のほぼ中軸上に２つあり、北と中央の横木の上に乗っている。この他、棺の東脇では側板の押さえ板が検出された。

〔堆積土〕１～３層は地山シルトが混じる黒褐・暗灰黄色粘土質シルトやオリーブ褐色砂質シルトで、棺内流入土または埋土崩落土である。

〔遺物〕出土していない。

【SK184土葬墓】（第30図）

SK175同様、棺材を検出した。また、撹乱に壊されているが、堆積状況が最もよく観察された。

〔掘方〕平面形は隅丸長方形である。規模は長さ220cm、幅66cm以上で、深さは44cmである。断面形は横・縦断面ともにほぼ箱形である。底面は、中央部が浅く窪むがほぼ平坦である。方向は長軸でN－34°－Wである。埋土は地山砂ブロックを多く含む暗灰黄色砂質シルトである。

〔木棺の状況〕南西隅の側板と木口板のほか、側板・木口板・蓋板・底板の痕跡を検出した。棺材痕跡は暗赤褐色（5YR3/3）粘土である。側板と木口板は上からみて「凵」状に組まれている。棺の底面は緩やかな起伏が認められるが、ほぼ平坦である。壁は底面からやや内側に斜めに立ちあがる。規模は長さ194cm、幅42cmで、底面からの高さは残りのよいところで26cmである。

棺材は腐食してほとんどが粘土化していたが、側板と木口板の南西隅の接合部が残存していた。接合部の側板と木口板の状況は先述のSK175と同じで、木口板は側板の間に挟み込まれたものとみられる。その状況は棺材痕跡としてではあるが、北の木口板と側板でも観察された。

棺の下では横木が検出された。棺材同様腐食が激しい。横木は長軸に対し直交する向きで１つ、斜めに３つあり、ほぼ水平に置かれている。側板との関係は先述のSK175と同じである。

〔堆積土〕６～８層は地山ブロックを含む灰黄褐・暗灰黄・オリーブ褐色シルト質粘土で、棺内流入土である。４層は褐灰色粘土ブロックを含む地山土主体のオリーブ褐色シルトで、埋土崩落土である。１～３層は灰白色火山灰の再堆積層を挟む灰黄褐・褐灰色シルト質粘土で、崩落後の自然堆積土である。

〔遺物〕棺底面直上から、土師器坏がごく少量出土しており、底部が回転糸切り無調整のものがある。また、棺底面の南端部では長さ10cm、幅5cmの範囲で漆の皮膜が検出された。

【SK199土葬墓】（第29図）

〔掘方〕平面形は南辺がやや丸い隅丸長方形である。規模は長さ206cm、幅68cmで、深さは20cmである。横断面形は箱形、縦断面形は皿状である。底面は中央部に向かって浅く窪み、ゆるやかな起伏が認められる。方向は長軸でN－13°－Wである。埋土は地山土を主体とする暗灰黄色シルト質粘土である。

〔木棺の状況〕平面形がほぼ長方形の棺痕跡が検出された。痕跡は幅2～5cmの暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土で、側板と木口板の痕跡とみられる。底面はゆるやかな起伏があるが、ほぼ平坦である。壁は側板のほうは底面から外側にやや斜めに立ちあがり、木口板は直立する。棺の規模は長さ176cm、幅44cmで、棺底面からの高さは残りのよいところで20cmである。

棺の下では横木と縦木の痕跡が検出された。腐食して暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土となっている。横木は中央やや南に長さ15cm、幅2cmほどが残存する。縦木は掘方の東辺と西辺に沿って2つ検出された。ほぼ水平に置かれていたとみられ、長さは110～140cm、幅は4cmほどある。

〔堆積土〕2～4層は地山小ブロックを含む黒褐・暗灰黄・灰黄褐色シルトで、棺内流入土である。1層は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで、埋土崩落土である。

〔遺物〕埋土崩落土からロクロ調整の土師器坏がごく少量出土している。

【SK217土葬墓】（第29・33図）

検出された木棺のなかで最も小さいものである。

〔掘方〕平面形は丸みのある隅丸長方形である。規模は長さ152cm、幅62cmで、深さは28cmである。断面形は横断面が箱形、縦断面は逆台形である。底面はほぼ平坦である。方向は長軸でN－34°－Wである。埋土は地山砂を多量に含む灰黄褐色砂質粘土である。

〔木棺の状況〕平面形がほぼ長方形の棺痕跡が検出された。痕跡は幅2～6cmの灰黄褐色（10YR4/2）粘土で、側板や木口板、底板の痕跡とみられる。棺の底面は南側が浅く窪んでおり、壁は底面から直立する。規模は長さ124cm、幅46cmで、底面からの高さは残りのよいところで18cmである。なお、底板の痕跡は残存が悪く、平面的な広がりはとらえきれなかった。

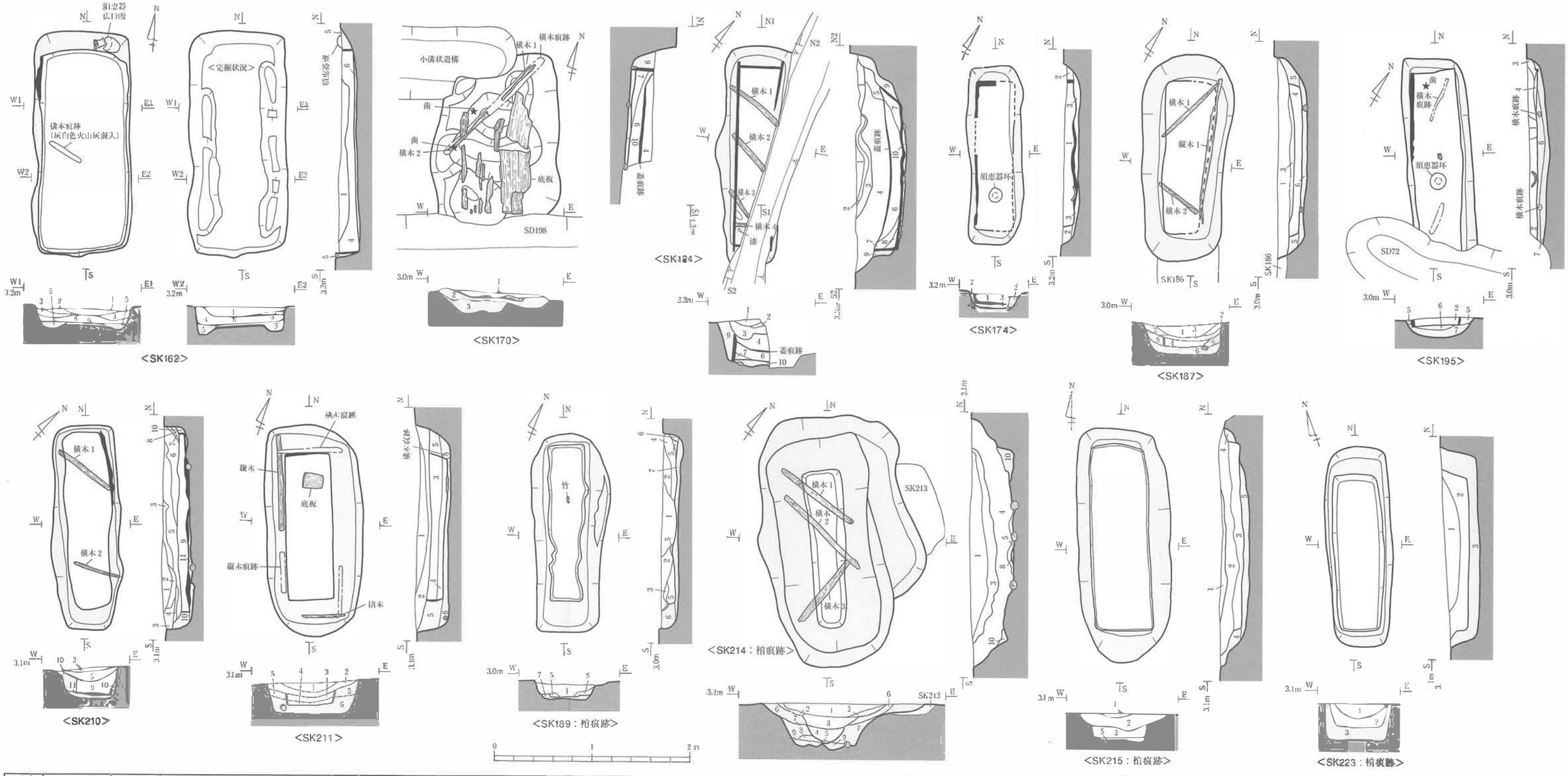
〔堆積土〕3・4層は地山砂やⅦ層起源の黒色土を多く含む灰黄褐色粘土で、棺内流入土または埋土崩落土である。1・2層は地山砂を含む灰黄褐色粘土で、崩落後の自然堆積土である。

〔遺物〕2層からロクロ調整の土師器坏（第33図4）・甕、須恵器甕がごく少量出土している。

【SK230土葬墓】（第29図）

〔掘方〕平面形は長辺がやや膨らんだ隅丸長方形で、規模は長さ214cm、幅100cmである。深さは27cmである。断面形は横・縦断面ともに逆台形で、底面は平坦である。方向は長軸でN－41°－Wである。埋土は黒褐色粘土と褐灰色シルト質粘土を含む明黄褐色粘土で、地山土を主体する。

〔木棺の状況〕棺材や棺材痕跡は認められなかったが、検出及び掘り下げ時における土層の堆積状況の観察によって、木棺の輪郭がとらえられ、木棺が存在したと推定される。平面形は長方形で、



遺構	No	土色	土性	備考
SK162	1	褐暗褐（7.5YR2/3）	粘土	ややしまりあり。（自然堆積土）
	2	にぶい赤褐（10YR5/4）	粘土	地山ブロック主体とする。（流入or崩落）
	3	極暗褐（7.5YR2/3）	粘土	地山土主体。（流入or崩落）
	4	極暗褐（7.5YR2/3）	粘土	地山土が斑状に混じる。（流入or崩落）
	5	褐暗褐（7.5YR2/3）	粘土	地山土が混じる。（埋土崩落）
	6	にぶい黄褐（10YR5/4）	砂質シルト	極暗褐色土が混じる。（掘方埋土）
SK184	1	灰黄褐（10YR5/2）	シルト質粘土	しまりあり。火山灰粒を少し含む。（自然堆積土）
	2	灰白（10YR8/1）	火山灰	再堆積層。（自然堆積土）
	3	褐灰（10YR4/1）	シルト質粘土	しまりあり。炭を若干含む。（自然堆積土）
	4	オリーブ褐（2.5Y4/3）	シルト	地山土主体。褐灰色粘土ブロックを含む。（埋土崩落土）
	5	暗灰黄（2.5Y4/2）	シルト質粘土	地山ブロックを含む。（埋土崩落土）
	6	灰黄褐（10YR4/2）	シルト質粘土	しまりなし。（棺内流入土）
	7	暗灰黄（2.5Y4/2）	シルト質粘土	しまりなし。地山ブロックを多く含む。（棺内流入土）
	8	オリーブ褐（2.5Y4/3）	シルト質粘土	しまりなし。地山ブロックを多く含む。（棺内流入土）
	9	暗灰黄（2.5Y5/2）	砂質シルト	地山砂ブロックを多く含む。（掘方埋土）
	10	暗灰黄（2.5Y5/2）	砂質シルト	地山砂ブロックを多く含む。（掘方埋土）

遺構	No	土色	土性	備考
SK170	1	黒褐（10YR2/3）	シルト	火山灰粒少し含む。（棺内流入土）
	2	黒褐（10YR2/3）	シルト	地山土ブロックを含む。（掘方埋土）
	3	にぶい黄褐（10YR4/3）	シルト	地山土主体。（掘方埋土）
SK174	1	褐灰（10YR6/1）	シルト	地山砂ブロックを多く含む。（埋土崩落土）
	2	暗オリーブ褐（2.5Y3/3）	粘土	地山砂を多く含む。（掘方埋土）
	3	暗灰黄（2.5Y4/2）	シルト質砂	黒褐色土と火山灰粒を多く含む。（掘方埋土）
SK187	1	褐灰（10YR4/1）	粘土	粘性あり。火山灰粒を含む。（自然堆積土）
	2	黄灰（2.5Y4/1）	粘土	しまりあり。地山砂を多く含む。（自然堆積土）
	3	褐灰（10YR5/1）	粘土	地山粒を少し含む。（自然堆積土）
	4	暗灰黄（2.5Y4/2）	粘土質シルト	地山砂ブロック・火山灰粒を含む。（埋土崩落土）
	5	黄灰（2.5Y4/1）	粘土質シルト	地山砂ブロックを含む。（掘方埋土）
	6	黄灰（2.5Y5/1）	粘土質シルト	地山砂ブロックを多く含む。（掘方埋土）
SK195	1	黒褐（10YR3/2）	シルト質粘土	地山砂・火山灰粒を含む。（自然堆積土）
	2	黒褐（10YR3/2）	シルト質粘土	地山ブロックを多く含む。（埋土崩落土）
	3	黒褐（10YR3/2）	粘土	地山砂ブロックを含む。（埋土崩落土）
	4	暗褐（10YR3/3）	粘土	地山粒・地山ブロックを若干含む。（棺内流入土）
	5	黒褐（10YR3/1）	粘土	地山粒土ブロックを多く含む。（掘方埋土）
	6	褐灰（10YR4/1）	シルト質粘土	地山ブロックを含む。（掘方埋土）
	7	にぶい黄褐（10YR5/4）	砂質シルト	地山ブロック主体。（掘方埋土）

第30図　土葬墓A類

遺構	No	土性	土色	備考
SK210	1	黒褐（10YR3/1）	シルト質粘土	地山粒・粗砂を少し含む。（自然堆積土）
	2	黒褐（10YR3/1）	シルト質粘土	細砂を含む。（自然堆積土）
	3	黒褐（10YR3/1）	シルト質粘土	地山ブロックを含む。（自然堆積土）
	4	黒褐（2.5Y3/1）	粘土	しまりなし。粘性強い。（自然堆積土）
	5	黒褐（10YR3/1）	シルト質粘土	地山粒・細砂を含む。（自然堆積土）
	6	黒褐（10YR3/1）	シルト質粘土	地山粒・細砂を多く含む。（自然堆積土）
	7	黒褐（10YR1.7/1）	粘土	地山粒・粗砂を多く含む。（自然堆積土）
	8	暗褐（10YR3/3）	粘土質シルト	地山土主体。（自然堆積土）
	9	黒褐（10YR3/2）	砂質粘土	地山砂ブロック主体。（埋土崩落土）
	10	黒褐（10YR3/2）	砂質粘土	地山砂ブロック主体。（棺方埋土）
	11	黒褐（10YR3/2）	砂質粘土	10層に近似する。（掘方埋土）
SK189	1	黒褐（2.5Y3/1）	粘土質シルト	地山土ブロックを多く含む。（人為）
	2	黒褐（2.5Y3/1）	粘土質シルト	地山ブロックを少し含む。（自然堆積土）
	3	黒褐（10YR1.7/1）	粘土	しまりなし。（自然堆積土）
	4	黒褐（2.5Y3/1）	シルト質粘土	地山ブロックを多く含む。（埋土崩落土）
	5	黒褐（10YR3/1）	粘土	しまりなし。地山ブロックを若干含む。（棺内流入土）
	6	黒褐（10YR3/1）	粘土	地山・黒色粘土ブロックを多く含む。（掘方埋土）
	7	黒褐（10YR3/1）	粘土	地山ブロック主体。（掘方埋土）
SK223	1	黒褐（10YR3/1）	粘土	地山ブロックを含む。（流入or崩落）
	2	黒褐（10YR3/1）	粘土	地山・黒褐色土ブロックを含む。（流入or崩落）
	3	明黄褐（10YR7/6）	粘土	黒褐色土・褐灰色土を含む。（掘方埋土）

遺構	No	土色	土性	備考
SK214	1	灰黄褐（10YR5/2）	シルト質粘土	火山灰ブロックを多く含む。（自然堆積土）
	2	褐灰（10YR6/1）	シルト	火山灰ブロックを含む。（自然堆積土）
	3	灰白（10YR8/1）	火山灰	再堆積層。（自然堆積土）
	4	にぶい黄褐（10Y5/3）	粘土	地山砂を少し含む。（埋土崩落土）
	5	黒褐（10YR3/2）	粘土	（棺内流入土）
	6	褐灰（10YR5/1）	砂質シルト	火山灰粒を含む。（掘方埋土）
	7	灰黄褐（10YR5/2）	シルト質砂	地山砂主体。（掘方埋土）
	8	黒褐（10YR3/1）	粘土	地山砂ブロックを含む。（掘方埋土）
	9	黒褐（10YR2/2）	粘土	地山砂ブロック主体。（掘方埋土）
	10	暗灰黄（2.5Y4/2）	粘土	地山砂を多く含む。（掘方埋土）
SK215	1	灰白（10YR8/1）	火山灰	再堆積層。（自然堆積土）
	2	灰黄褐（10YR4/2）	粘土	地山砂・火山灰粒を含む。（埋土崩落土）
	3	灰黄褐（10YR4/2）	粘土	地山砂・火山灰粒を多く含む。（埋土崩落土）
	4	にぶい黄褐（10YR4/3）	砂質粘土	地山砂を多く含む。（掘方埋土）
	5	にぶい黄褐（10YR4/3）	砂質粘土	地山砂を多く含む。（掘方埋土）
SK211	1	灰白（10YR8/1）	火山灰	再堆積層。（自然堆積土）
	2	褐灰（10YR4/1）	粘土質シルト	地山ブロックを含む。（自然堆積土）
	3	黒褐（10YR3/1）	粘土質シルト	（埋土崩落土）
	4	黒褐（10YR3/1）	粘土質シルト	地山ブロックを含む。（埋土崩落土）
	5	にぶい黄褐（10YR5/3）	シルト	地山土主体。（掘方埋土）
	6	黒（10YR2/1）	粘土質シルト	火山灰粒を含む。（掘方埋土）

断面形は横・縦断面ともに箱形である。底面は平坦で壁はほぼ直立する。規模は長さ168cm、幅65cmで、底面からの残存する高さは残りのよいところで14cmである。

〔堆積土〕3・4層は棺内流入土で、地山ブロックの混じる初期の埋土崩落土を含む黒褐色粘土である。2層は地山ブロックを含む黒褐色粘土で、埋土崩落土である。1層は灰白色火山灰の再堆積層で崩落後の自然堆積層である。

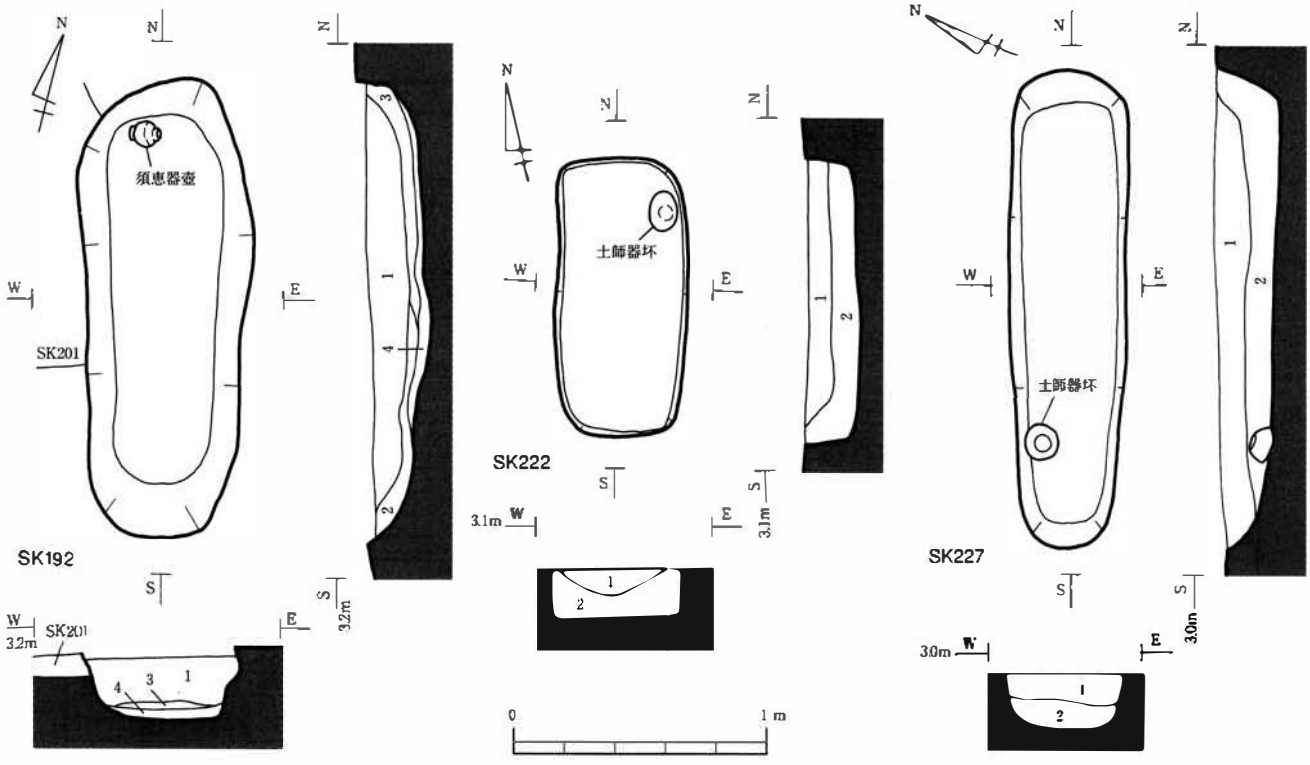
〔遺物〕掘方埋土から須恵器甕がごく少量出土している。

《B群…木棺が確認されなかった土葬墓》

72基検出した（遺構名・番号は遺構属性表参照）。A・B区中央から南に分布し、南西部に集中する傾向がある。平面形は隅丸長方形を基調とするものが多く、他に長楕円形がある。規模は長さ82～244cm、幅30～100cmで、平均値は長さ175cm、幅58cmである。横断面形は逆台形や箱形が主体で、縦断面形はそれに皿状のものが加わる。底面はゆるやかな起伏もみられるが、ほぼ平坦である。長軸の方向は南北が多いが、東西のものもある。その範囲は東に対して南に39°から、真北に対して西に41°で、特に真北に対して東に23°から西に41°の範囲に集中する傾向がある（第50図）。

堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色や褐灰・黄褐・黄灰・灰黄褐色の粘土や粘土・砂質シルト、シルト等の人為的な埋土が主体で、上層に黒褐・褐灰・黄褐色粘土や黒褐色砂質シルトの自然堆積層が認められることがあり、SK141・143・149・168・219では灰白色火山灰の再堆積層もみられる。また、SK188・190・212の底面では、A群の土葬墓の横木や縦木と同様の木材が検出された。

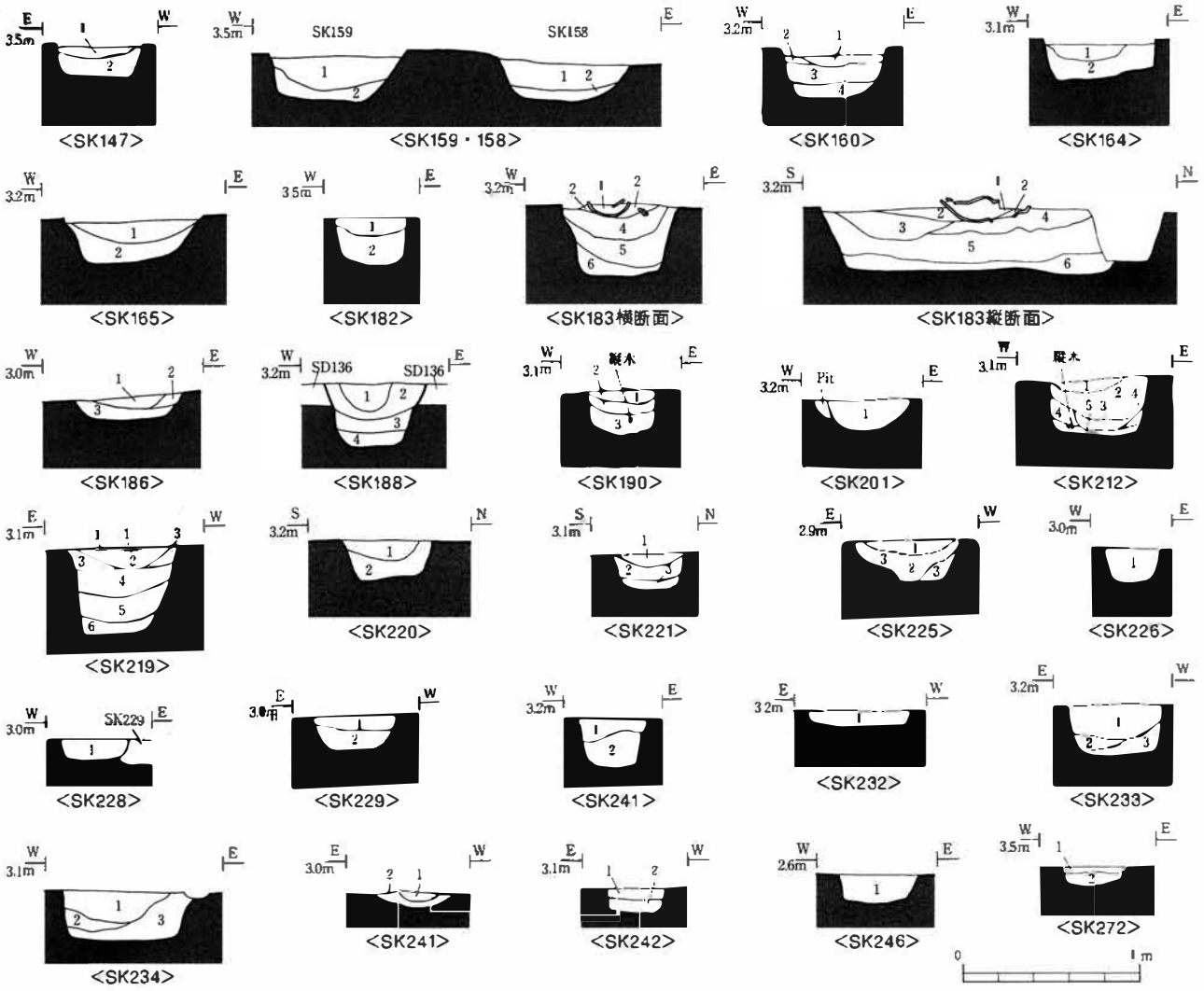
遺物はSK146・148・149・222・227で土師器坏（第33図1～3・5・6）、SK147で須恵器坏（8）、



遺構	No	土色	土性	備考
SK192	1	黒褐（10YR3/1）	粘土	地山ブロックを多く含む。（人為）
	2	黒褐（10YR3/1）	粘土	地山土を少し含む。
	3	暗オリーブ褐（2.5Y3/3）	粘土	粘性あり。しまりなし。地山土を若干含む。
	4	オリーブ褐（2.5Y4/3）	シルト	地山土主体。3層と似た土が混じる。

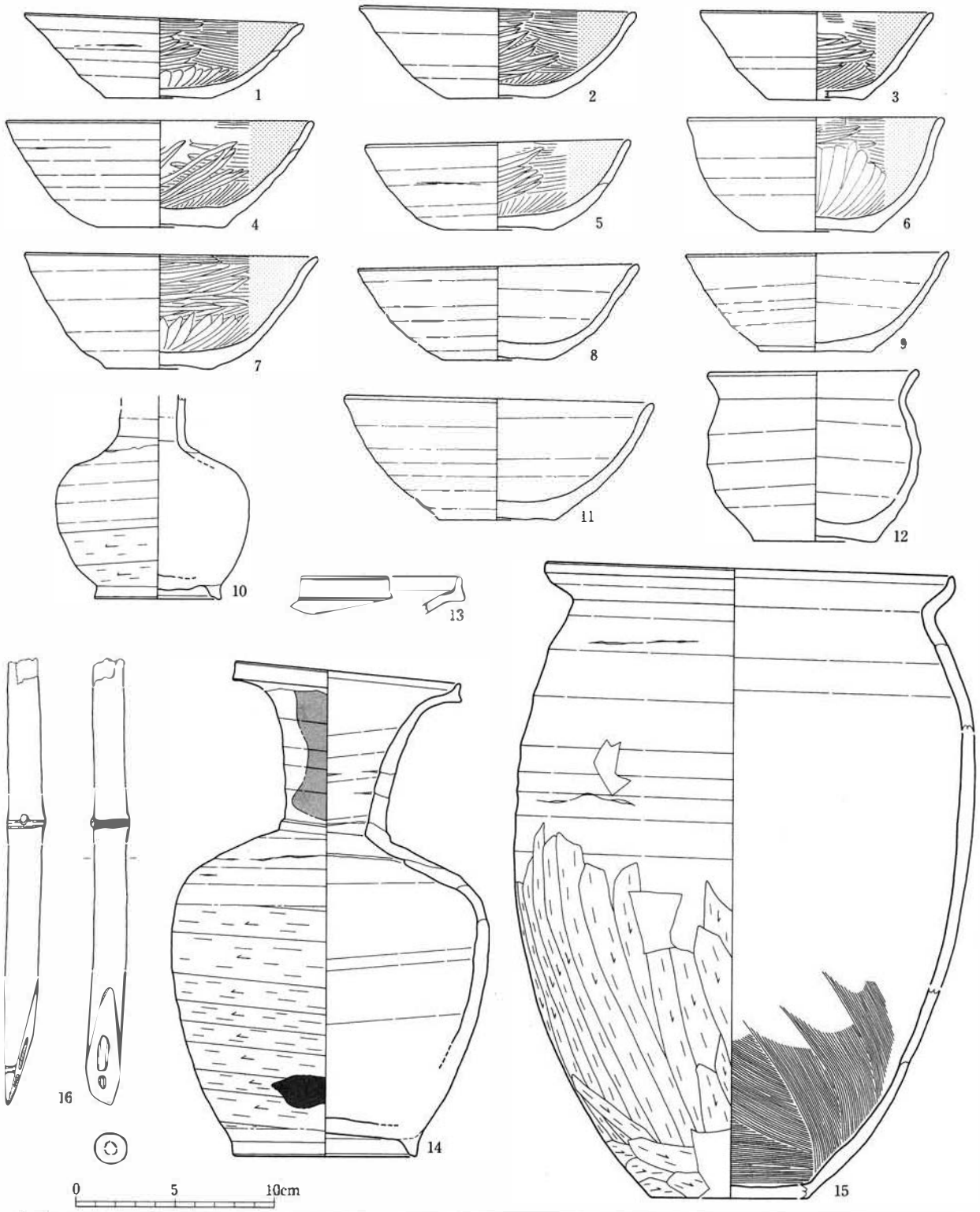
遺構	遺構	No	土色	土性	備考
SK	K222	1	にぶい褐（7.5YR5/4）	粘土質シルト	鉄分沈着の赤褐色土ブロックを多く含む。（人為）
		2	灰褐（7.5YR5/2）	粘土質シルト	にぶい褐色土ブロックを多く含む。（人為）
SK	K227	1	褐灰（10YR4/1）	粘土	地山ブロックを多く含む。（人為）
		2	黒褐（10YR3/1）	粘土	地山土・褐灰色粘土を含む。

第31図　土葬墓B群の典型例



遺構	No	土色	土性	備考
SK147	1	灰黄褐（10YR4/2）	砂質シルト	地山ブロックを少し含む。（人為）
	2	灰黄褐（10YR4/2）	砂質シルト	焼土ブロックを多く含む。（人為）
SK158	1	黒褐（7.5YR3/1）	シルト	地山ブロックを多く含む。（人為）
	2	褐灰（10YR5/1）	シルト	1層より地山ブロックを多く含む。（人為）
SK159	1	黒褐（7.5YR3/1）	シルト	地山ブロックを多く含む。（人為）
	2	褐灰（10YR5/1）	シルト	1層より地山ブロックを多く含む。（人為）
SK160	1	黒褐（7.5YR3/1）	シルト	地山ブロックを含む。（人為）
	2	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	1層より地山ブロックを多く含む。（人為）
	3	明褐（7.5YR5/6）	シルト	焼褐色土と地山ブロックを含む。（人為）
	4	浅黄（2.5Y7/4）	砂質シルト	地山砂ブロック主体。（人為）
SK164	1	黒褐（10YR3/2）	粘土	地山・火山灰粒を少し含む。（自然）
	2	黒褐（10YR3/1）	粘土	地山ブロックを多く含む。（人為）
SK165	1	黒褐（10YR2/3）	シルト質粘土	地山・火山灰粒を少し含む。（自然）
	2	黒褐（10YR3/2）	シルト質粘土	地山土ブロックを多く含む。（人為）
SK182	1	褐灰（10YR4/1）	粘土	地山ブロックを多く含む。（人為）
	2	灰黄褐（10YR4/2）	粘土質シルト	地山ブロックえを多く含む。（人為）
SK183	1	黒褐（10YR3/2）	シルト	粘性・しまりなし。（自然）
	2	褐灰（10Y4/1）	粘土質シルト	地山砂粒を少し含む。（人為）
	3	褐灰（10Y4/1）	シルト	地山砂ブロックを含む。（人為）
	4	黄灰（2.5Y4/1）	シルト	地山砂ブロックを少し含む。（人為）
	5	黄灰（2.5Y4/1）	砂質シルト	地山砂ブロックを多く含む。（人為）
	6	黄灰（2.5Y4/1）	砂質シルト	地山砂ブロックを多く含む。（人為）
SK186	1	褐灰（10YR4/1）	粘土	地山砂を含む。火山灰粒を少し含む。（自然）
	2	褐灰（10YR5/1）	粘土	地山砂ブロックを含む。（自然）
	3	黄灰（2.5Y5/1）	粘土	地山砂を多く含む。（人為）
SK188	1	黄灰（2.5Y6/1）	粘土質シルト	地山砂を多く含む。火山灰粒を含む。（自然）
	2	黄灰（2.5Y4/1）	粘土	地山砂を若干含む。（自然）
	3	褐灰（10YR4/2）	粘土	地山砂を若干含む。（人為）
	4	褐灰（10YR4/1）	粘土	地山砂ブロックを多く含む。（人為）
SK190	1	褐灰（10YR5/1）	粘土	地山砂ブロックを少し含む。（人為）
	2	暗オリーブ褐（2.5Y3/3）	粘土	地山砂ブロックを多く含む。（人為）
	3	黒（2.5Y2/1）	粘土	地山砂を多く含む。（人為）
SK201	1	褐灰（10YR4/1）	粘土	地山砂ブロックを多く含む。火山灰粒を含む。（人為）
SK221	1	灰黄褐（10YR4/2）	粘土	地山砂を少し含む。火山灰粒を含む。（自然）
	2	褐灰（10YR4/1）	粘土質シルト	地山砂ブロックを含む。（人為）
	3	灰黄褐（10YR5/2）	粘土質シルト	地山砂ブロックを多く含む。（人為）
SK212	1	褐灰（10YR5/1）	粘土質シルト	地山砂を多く含む。（人為）
	2	黄灰（2.5Y5/1）	粘土	地山砂を多く含む。（人為）
	3	黄灰（2.5Y4/1）	粘土	しまりなし。粘性強い。（自然）
	4	黄灰（2.5Y6/1）	砂質シルト	地山砂を多く含む。（人為）
	5	褐灰（10YR6/1）	砂質シルト	地山砂ブロックを多く含む。（人為）
SK219	1	灰白（10YR7/1）	火山灰	再堆積層。（自然）
	2	灰黄褐（10YR4/2）	粘土	粘性あり。しまりあり。（自然）
	3	灰黄褐（10YR5/2）	粘土質シルト	地山粘土ブロック・地山砂を多く含む。（人為）
	4	暗灰（2.5Y5/2）	粘土質シルト	地山粘土ブロック・地山砂を多く含む。（人為）
	5	灰黄褐（10YR6/2）	粘土質シルト	地山砂を多く含む。（人為）
	6	灰黄褐（10YR5/2）	粘土質シルト	地山砂を少し含む。（人為）
SK220	1	黒褐（7.5YR3/2）	粘土	粘性あり。しまりあり。（自然）
	2	黒褐（7.5YR3/3）	粘土	褐色粘土質シルトブロックを多く含む。（人為）
SK225	1	灰黄褐（10YR4/2）	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。（人為）
	2	褐灰（10YR4/1）	粘土	地山ブロックを含む。（人為）
	3	黄褐（2.5Y5/4）	粘土	地山土主体。褐灰色粘土を含む。（人為）
SK226	1	黒褐（10YR3/1）	粘土	地山ブロックを多く含む。（人為）
SK228	1	黒褐（10YR3/1）	粘土	地山土主体。（人為）
SK229	1	褐灰（10YR4/1）	粘土	地山ブロックを多く含む。（人為）
	2	黄褐（2.5Y5/4）	粘土	地山土主体。褐灰色粘土を少し含む。（人為）
SK231	1	黒褐（7.5YR3/2）	粘土	地山土主体。褐灰色粘土ブロックを含む。（人為）
	2	褐灰（10YR4/1）	粘土	地山ブロックを多く含む。（人為）
SK232	1	褐灰（10YR4/1）	粘土	地山ブロックを多く含む。（人為）
SK233	1	黄褐（2.5Y5/4）	粘土	地山土主体。褐灰・黒褐色粘土が混じる。（人為）
	2	褐灰（10YR4/1）	粘土	地山小粒を含む。（人為）
	3	黄褐（2.5Y5/4）	粘土	地山土主体。褐灰・黒褐色粘土が混じる。（人為）
SK234	1	褐灰（10YR4/1）	粘土	地山ブロックを含む。（人為）
	2	黒褐（10YR3/2）	粘土質シルト	地山ブロック・炭を含む。（人為）
	3	褐灰（10YR4/1）	粘土	地山ブロックを多く含む。（人為）
SK241	1	黒（10YR2/1）	粘土	地山砂を多く含む。（人為）
	2	オリーブ褐（2.5Y3/3）	砂	地山砂主体。黒褐色粘土が混じる。（人為）
SK242	1	にぶい褐（7.5YR5/4）	粘土質シルト	地山砂を含む。粘性あり。しまりあり。（人為）
	2	にぶい褐（10YR5/3）	粘土質シルト	地山砂・褐灰色粘土が混じる。（人為）
SK246	1	黄灰（2.5Y4/1）	粘土	しまりあり。地山砂ブロックを多く含む。（人為）
SK272	1	褐灰（10YR4/1）	粘土質シルト	地山砂ブロック・火山灰粒を含む。（人為）
	2	褐灰（10YR5/1）	粘土質シルト	地山砂を多く含む。（人為）

第32図　土葬墓B群断面図



No.	種　別	出土遺構・層位	特　　徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	土師器・坏	SK146・底面	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	14.2	5.4	4.2	13－4	165
2	土師器・坏	SK148・1層	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	14.0	5.0	4.7	13－5	167
3	土師器・坏	SK149・底直	外：ロクロナデ　底：摩滅　内黒	(11.8)	(4.8)	4.4	13－6	168
4	土師器・坏	SK217・2層	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	15.6	6.4	5.3	13－7	173
5	土師器・坏	SK222・2層	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	13.4	5.4	4.4	13－8	174
6	土師器・坏	SK227・底面	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	13.0	5.8	5.7	14－9	175
7	土師器・坏	SK246・底直	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	14.8	5.4	5.6	14－10	177
8	須恵器・坏	SK147・2層	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	14.3	5.4	4.8	14－11	166
9	須恵器・坏	SK174・棺底面	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	13.3	5.6	5.0	14－12	170
10	須恵器・瓶	SK192・底直	外：ロクロナデ→回転ケズリ→ロクロナデ　底：ナデ→ロクロナデ　内：ロクロナデ　大戸窯産	－	6.4	－	15－1	171
11	須恵器・坏	SK195・棺底面	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	15.6	5.8	6.2	15－5	172
12	土師器・甕	SK246・底直	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	10.7	6.2	8.6	15－4	178
13	須恵器・広口瓶	SK246・1層	内外：ロクロナデ	－	－	－	19－7	176
14	須恵器・広口壺	SK162・掘方埋土	外：ロクロナデ→回転ケズリ→ロクロナデ　頸部に自然釉、下部に布痕跡 底：ナデ→ロクロナデ　内：ロクロナデ　三段接合　大戸窯産	11.6	9.2	24.9	15－2	169
15	土師器・甕	SK183・1層	外：ロクロナデ→手持ちケズリ　底：不明　内：ロクロナデ・ナデ	20.8	7.8	32.0	15－3	180
16	先端加工のある竹	SK189・棺堆積土	上端：折損　下端：切り　長：(224)　径：1.6　クケ亜科	－	－	－	21－2	木27

第33図　土葬墓出土土器

SK246で土師器坏・甕、須恵器広口壺（7・12・13）、SK192で須恵器壺（10）が、完形に近い状態で各1点出土した。また、SK183では土師器甕が2点、横位の合わせ口に近い状態で出土している（図化できたのは15のみ。なお、土器埋設遺構との重複は認められなかった）。以上の他にも土師器坏・甕、須恵器坏・瓦が出土したが、破片で量も少ない。また、遺物が出土しなかった土葬墓も多い。

以下、典型的な例を説明する。

【SK192土葬墓】（第31・33図）

B区中央西側で検出した。SK201より新しい。平面形はやや不整な隅丸長方形である。規模は長さ178cm、幅67cmで、深さ28cmである。断面形は横断面が箱形、縦断面が皿状である。底面はほぼ平坦だが、ゆるやかな起伏があり、中央部が少し窪む。方向は長軸でN－13°－Wである。堆積土は4層に細分される。4層は地山シルトを多く含むオリーブ褐色シルト、2・3層は地山シルトを少し含む黒褐色や暗オリーブ褐色の粘土である。1層は地山ブロックを多量に含む黒褐色粘土で、人為的な埋土である。

遺物は底面直上から須恵器壺（第33図10）のほか、土師器片が出土している。壺は北端部で正位の状態で出土した。大戸窯MH－19窯式期に属する壺である。

【SK222土葬墓】（第31・33図）

B区南の西側で検出した。平面形は隅丸長方形である。規模は長さ110cm、幅52cmで、深さは24cmである。断面形は横・縦断面ともに箱形で、底面はほぼ平坦である。方向は長軸でN－13°－Eである。堆積土は地山ブロックを多く含むにぶい褐色や灰褐色の粘土質シルトで人為的な埋土である。

遺物は北端部の2層から回転糸切り無調整の土師器坏（第33図5）が出土している。出土状況は正位ではあるが、かなり斜めに傾いていた。

【SK227土葬墓】（第31・33図）

B区南の西側で検出した。平面形は隅丸長方形である。規模は長さ190cm、幅46cmで、深さは22cmである。横断面形は箱形で、底面はほぼ平坦である。方向は長軸でE－34°－Nである。堆積土は2層が黄褐色や褐灰色の粘土ブロックを含む黒褐色粘土である。1層は褐灰色粘土ブロックを含む黄褐色粘土で、地山粘土を主体とする人為的な埋土である。

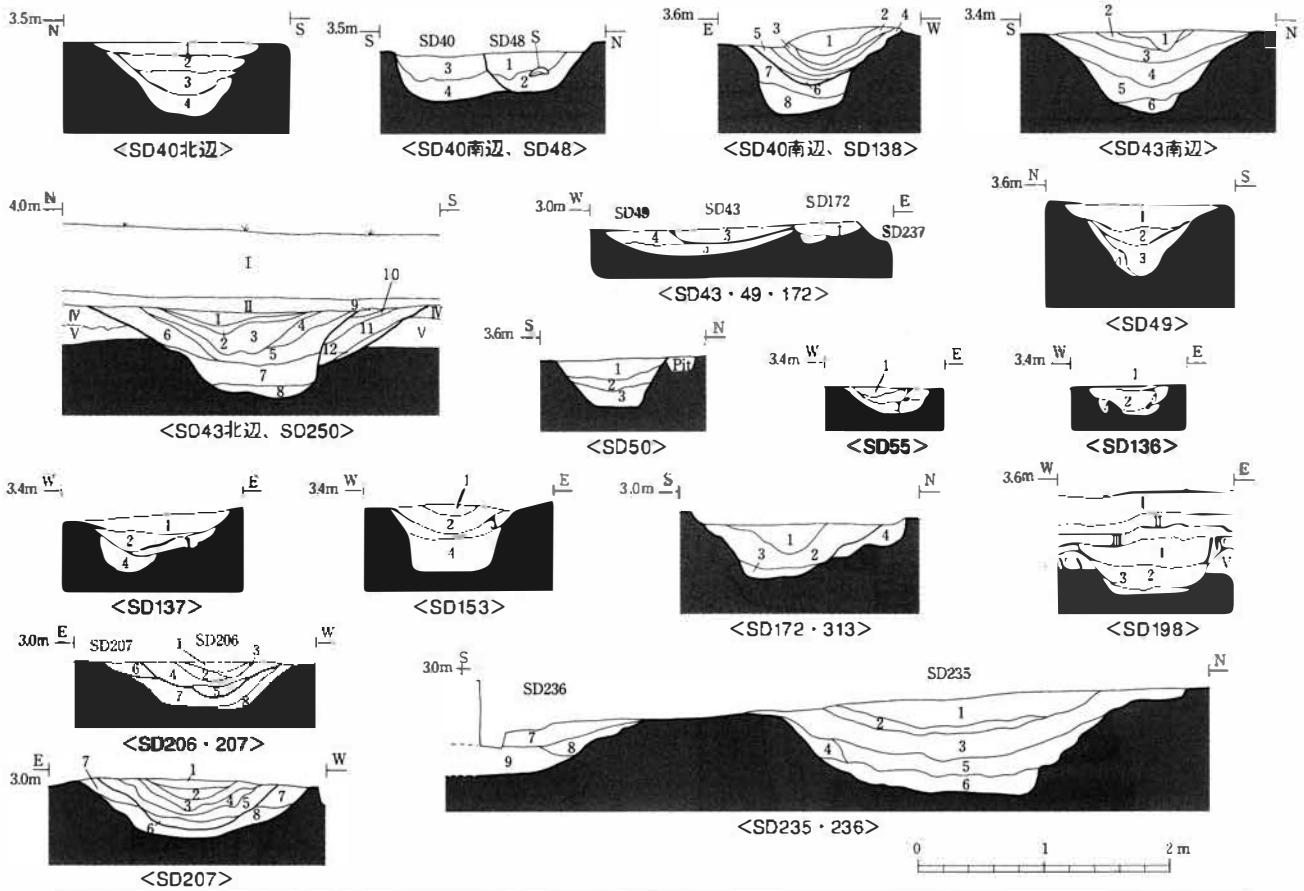
遺物は西半部北側の底面で回転糸切り無調整の土師器坏（第33図6）が倒位の状態で出土した。そのほか、埋土から土師器坏がごく少量出土している。

E．溝跡

62条検出した。東西・南北溝跡、逆「コ」字状に巡る溝跡など、その形態や規模、方向は様々である。以下、主要な溝跡について述べる。他の溝跡の規模等の属性は巻末の遺構属性表に載せた。

【SD40溝跡】（第4・34・35図）

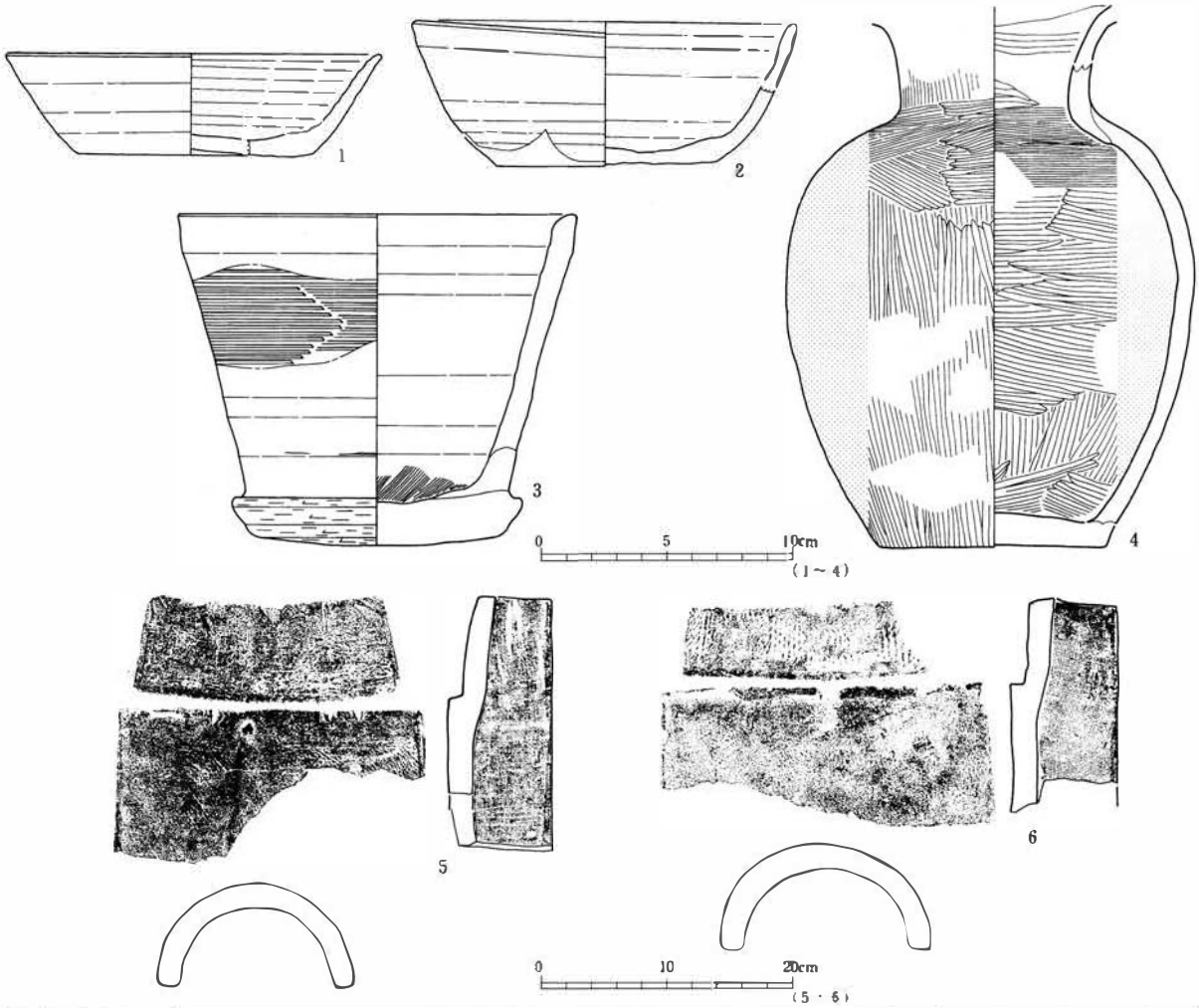
調査区中央東側の微高地上を逆「コ」字状に巡る溝跡で、東側は調査区外に延びる。検出した長さは南辺が26.5m、西辺が45.0m、北辺が14.0mで、総長85.5mである。SI47・100・131住居跡、SD38・53・54溝跡、A群小溝より新しく、SD43・48・138溝跡やC・D群小溝より古い。規模は上幅100～



遺構	No	土色	土性	備考
SD40 北辺	1	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	地山砂ブロックを若干含む。（自然）
	2	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	焼土・地山砂ブロックを含む。（自然）
	3	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	地山砂ブロックを多く含む。（自然）
	4	暗灰黄（2.5YR4/2）	砂質シルト	地山ブロックを多く含む。（自然）
SD48	1	黒褐（2.5Y3/2）	シルト	地山ブロックを少し含む。
	2	黒褐（2.5Y3/2）	シルト	地山ブロックを多く含む。
SD40 南辺	3	暗オリーブ褐（2.5Y3/3）	粘土質シルト	地山砂ブロックを若干含む。（自然）
	4	暗オリーブ褐（2.5Y3/3）	粘土質シルト	地山ブロックを非常に多く含む。（自然）
SD138	1	黒褐（10YR3/2）	粘土	地山ブロックを少し、炭を若干含む。（自然）
	2	黒褐（10YR2/2）	粘土	炭を多く、地山粒を少し含む。（自然）
	3	黒褐（10YR3/1）	粘土	地山粒を含む。炭を少し含む。（自然）
	4	黒褐（10YR3/1）	粘土	地山粒を多く含む。炭を多く含む。（自然）
	5	黒褐（10YR3/1）	粘土	地山ブロック・炭を多く含む。（自然）
	6	黒（10YR2/1）	粘土	（自然）
SD40 西辺	7	黒（10YR2/1）	粘土	地山ブロックを含む。（自然）
	8	黒（10YR2/1）	粘土	地山ブロックを多く含む。（自然）
SD43 南辺	1	灰白（2.5Y7/1）	砂質シルト	（自然）
	2	灰白（2.5Y7/1）	火山灰	再堆積層。（自然）
	3	黄灰（2.5Y6/1）	粘土質シルト	火山灰粒を含む。（自然）
	4	褐灰（10YR6/1）	粘土	地山砂少し含む。火山灰粒含む。（自然）
	5	褐灰（10YR5/1）	粘土	地山砂を含む。火山灰粒含む。（自然）
	6	黄灰（2.5Y6/1）	粘土質シルト	地山砂を多く含む。火山灰粒含む。（自然）
SD250	1	黒褐（10YR2/2）	粘土質シルト	（自然）
	2	黒（10YR17/1）	粘土	（自然）
	3	黒褐（10YR2/3）	粘土質シルト	地山ブロックを若干含む。（自然）
	4	黒褐（10YR3/2）	粘土質シルト	（自然）
	5	暗褐（10YR3/3）	粘土質シルト	火山灰を若干含む。（自然）
	6	暗褐（10YR3/3）	粘土質シルト	地山粒を含む。（自然）
	7	黒褐（10YR3/2）	砂質シルト	地山粒を含む。（自然）
	8	暗オリーブ褐（2.5Y3/3）	砂質シルト	火山灰を互層状に含む。（自然）
SD43 北辺	9	黒（2.5Y2/1）	シルト	（自然）
	10	にぶい黄褐（10YR5/3）	火山灰	（自然）
	11	黒褐（10YR2/3）	粘土	地山ブロック・火山灰を若干含む。（自然）
	12	黒褐（10YR2/2）	粘土質シルト	砂層と互層をなす。（自然）
SD172	1	黒褐（10YR3/2）	シル	地山粒を含む。（自然）
	2	にぶい黄褐（10YR4/3）	シルト	地山ブロック、火山灰を含む。（自然）
SD43	3	灰黄褐（10YR4/2）	砂質シルト	地山粒を含む。（自然）
SD49	4	黄褐（2.5Y5/4）	砂質シルト	地山土を多く、火山灰を少し含む。（自然）
	5	黒褐（10YR3/3）	粘土質シルト	地山土を含む。火山灰を少し含む。（自然）
SD49	1	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	（自然）
	2	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	地山土粒を少し含む。（自然）
	3	褐灰（10YR4/1）	シルト	地山土を巻き込む。（自然）
	4	暗灰黄（2.5YR4/2）	砂	（自然）
	5	褐灰（10YR4/1）	シルト	地山土を多く巻き込む。（自然）
SD50	1	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	地山土粒を含む。（自然）
	2	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	地山土粒を多く含む。（自然）
	3	褐灰（10YR4/1）	シルト	地山土ブロックを多く含む。（自然）

遺構	No	土色	土性	備考
SD55	1	黄灰（2.5Y5/1）	粘土質シルト	地山粒を多く含む。（自然）
	2	黄灰（2.5Y6/1）	粘土質シルト	地山砂主体。（自然）
	3	黄灰（2.5Y6/1）	粘土質シルト	地山砂を多く含む。（自然）
SD136	1	灰黄褐（10YR4/2）	粘土	（自然）
	2	灰黄褐（10YR4/1）	粘土	地山砂少し含む。（自然）
	3	黄灰（2.5Y4/1）	粘土質シルト	地山砂を多く含む。火山灰粒含む。（自然）
	4	黄灰（2.5Y4/1）	粘土質シルト	地山砂を互層状に含む。（自然）
SD137	1	灰黄褐（10YR5/2）	シルト	地山土粒を少し含む。（自然）
	2	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	地山土粒を少し含む。（自然）
	3	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	地山ブロックを含む。（自然）
	4	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	地山土ブロックを巻き込む（自然）
SD153	1	灰黄褐（10YR4/2）	粘土	地山ブロックを少し含む。（自然）
	2	灰黄褐（10YR4/2）	粘土	地山粒若干含む。（自然）
	3	褐灰（10YR4/1）	粘土質シルト	地山砂少し含む。（自然）
	4	黄灰（2.5Y5/1）	粘土質シルト	地山砂ブロック多く含む。（人為）
SD172	1	黒褐（10YR3/2）	粘土質シルト	（自然）
	2	灰黄褐（10YR4/2）	砂質シルト	地山粒を多く含む。（自然）
	3	黒褐（2.5Y3/2）	砂質シルト	地山ブロックを若干含む。（自然）
SD313	4	にぶい黄褐（10YR5/3）	粘土	地山ブロックを多く含む。（自然）
SD198	1	黒褐（10YR3/2）	砂質シルト	
	2	黒褐（10YR3/2）	砂質シルト	地山粒を含む。
	3	灰黄褐（10YR4/2）	砂質シルト	地山ブロックを多く含む。
SD206	1	褐灰（10YR4/1）	粘土	（自然）
	2	灰黄褐（10YR4/2）	粘土	3層の土を少し含む。（自然）
	3	暗灰黄（2.5Y5/2）	粘土	黄色粘土ブロック状を含む。（自然）
	4	褐灰（10YR4/1）	粘土	（自然）
	5	灰黄褐（10YR4/2）	粘土	7層山来の土を互層状に含む。（自然）
SD207	6	褐灰（10YR5/1）	粘土	火山灰を含む。（自然）
	7	褐灰（10YR4/1）	粘土	火山灰・地山土を少し含む。（自然）
	8	暗灰黄（2.5Y5/2）	粘土	地山土を多く含む。（自然）
SD207	1	褐灰（10YR4/1）	粘土	（自然）
	2	灰黄褐（10YR4/2）	粘土	（自然）
	3	黒褐（10YR3/1）	粘土	（自然）
	4	灰黄褐（10YR4/2）	粘土	火山灰をブロック状に多く含む。（自然）
	5	褐灰（10YR4/1）	粘土	地山土・火山灰を少し含む。（自然）
	6	褐灰（10YR4/1）	粘土	火山灰を少し含む。（自然）
	7	暗灰黄（2.5Y5/2）	粘土	地山土を少し含む。（自然）
	8	黄褐（2.5Y5/3）	粘土	地山土を多く含む。（自然）
SD235	1	灰黄褐（10YR4/2）	粘土質シルト	若干火山灰まじる。（自然）
	2	にぶい黄褐（10YR6/3）	火山灰	（自然）
	3	黒褐（10YR3/2）	粘土	若干火山灰まじる。（自然）
	4	黒褐（10YR2/2）	粘土	火山灰粒を含む。炭あり。（自然）
	5	にぶい黄褐（10YR5/3）	粘土	地山ブロックを多く含む。（自然）
	6	黒褐（2.5Y3/1）	粘土	砂層と互層をなす。グライ化。（自然）
SD336	7	黒褐（10YR3/2）	粘土	若干火山灰まじる。（自然）
	8	にぶい黄褐（10YR5/3）	粘土	地山ブロックを多く含む。（自然）
	9	黒褐（2.5Y3/1）	粘土	砂層と互層をなす。グライ化。（自然）

第34図　溝跡断面図



No	種別	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：回転ヘラ切り	15.0	9.3	4.0		190
2	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：回転ヘラ切り→ナデ	(15.4)	8.8	5.7		189
3	須恵器・摺鉢	外：ロクロナデ→カキメ→ロクロナデ、回転ケズリ　底：ヘラ切り→回転ケズリ　内：ロクロナデ→ナデ	(16.0)	(9.4)	13.1	15－6	58
4	土師器・壺	外・底：ミガキ→黒色処理　内：ミガキ→ナデ→ミガキ→黒色処理	－	(9.0)	－	15－9	57
5	丸瓦	ⅡB類　長：－　幅：10.8　厚：1.9	－	－	－		150
6	丸瓦	ⅡB類　長：－　幅：－　厚：2.3	－	－	－	20－9	151

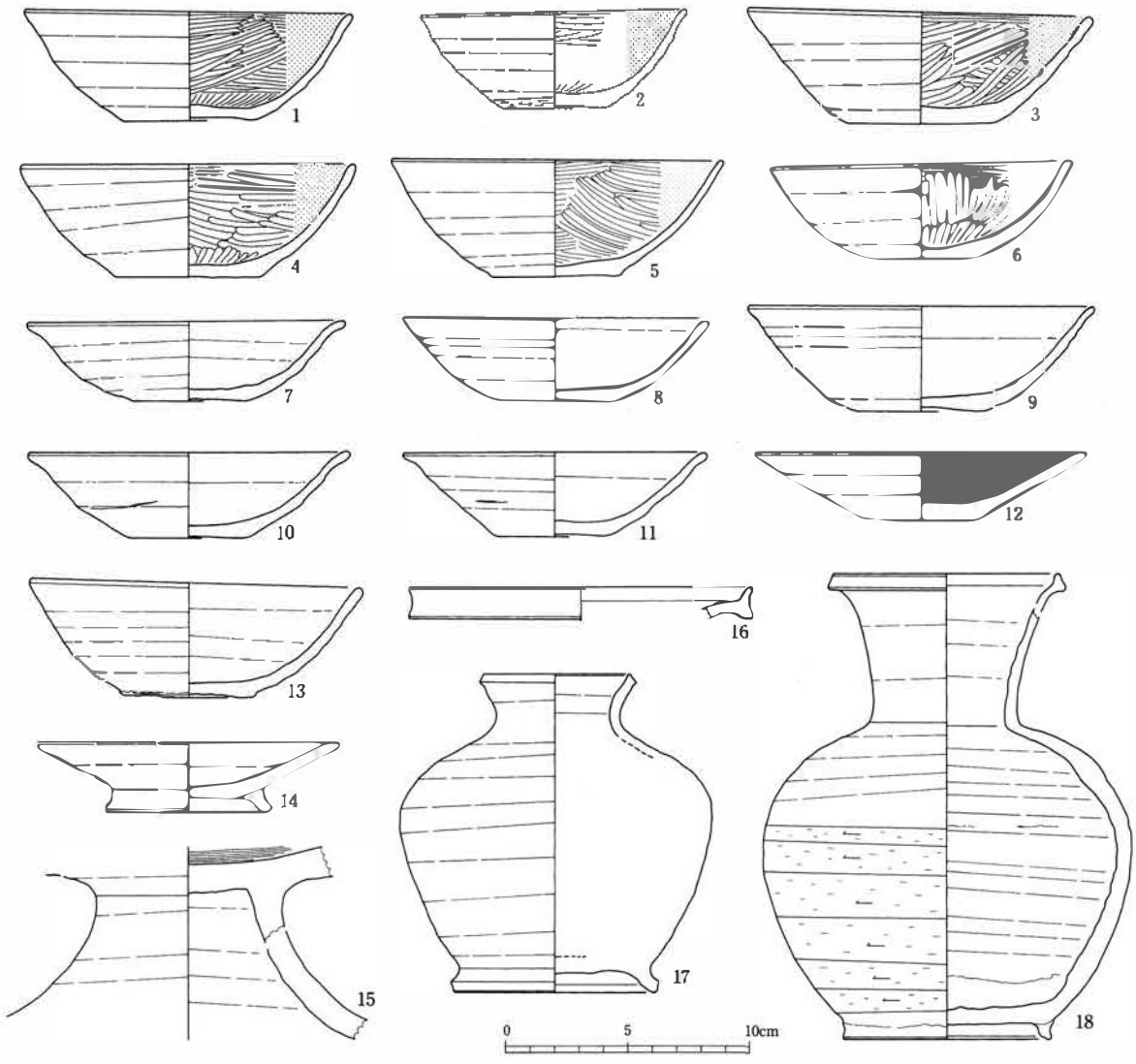
第35図　SD40溝跡出土遺物

230cm、下幅40～70cmで、深さは最も深いところで60cmである。断面形は逆台形を呈する。方向は南辺がE－9°－S、西辺が真北、北辺がE－15°－Sである。堆積土は黒色粘土や灰黄褐色シルト、暗オリーブ褐色粘土質シルト等で自然堆積である。

遺物は、堆積土から土師器坏・甕・壺、須恵器坏・甕・摺鉢（第34図3）、瓦（5・6）が出土している。土師器壺には両面が黒色処理されたもの（4）、須恵器坏にはヘラ切り無調整のもの（1・2）がある。

【SD43溝跡】（第4・35・36図）

A・B区の微高地の周囲を南北に長い楕円形状に巡るとみられる溝跡で、北東部は調査区外に延びる。また、南東部からSD180・286、西部からSD313、北西部からSD305が派生的に分岐する。検出した長さは170.0mである。SI95住居跡、SD40・48・53～55・70・76・136・153溝跡、SK161・175・176・290土葬墓、SK205・291土壙、B群小溝より新しく、SD172・198・250溝跡やD群小溝より古い。規模は上幅100～210cm、下幅70～140cmで、深さは最も深いところで65cmである。断面形はU字

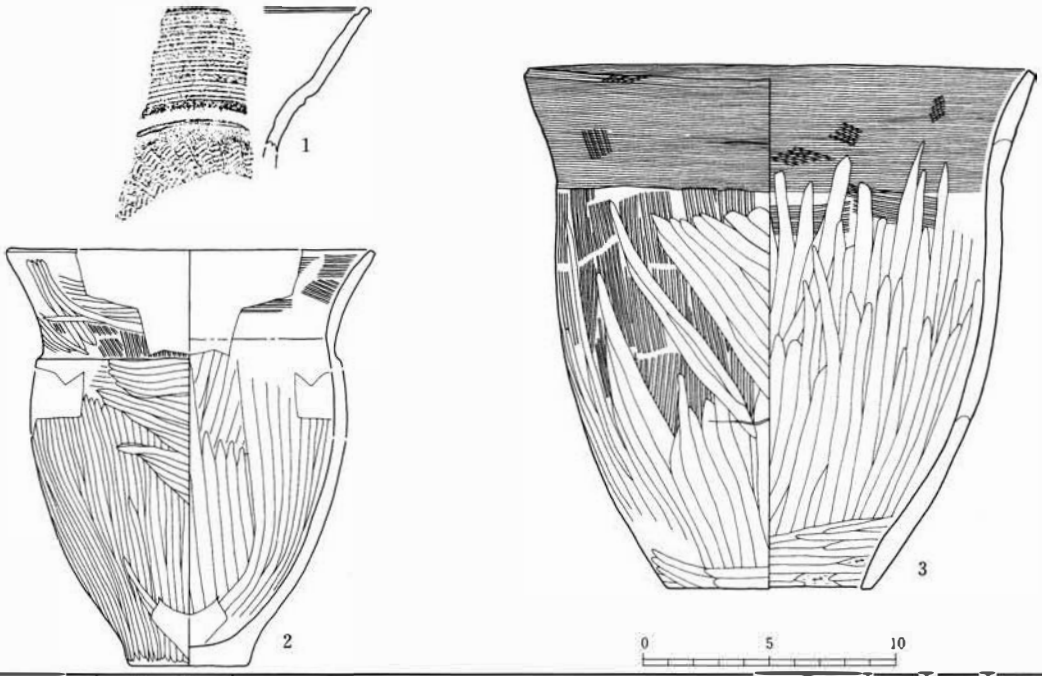


No	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	土師器・坏		外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	13.6	5.6	4.6	15－7	143
2	土師器・坏		外：ロクロナデ→回転ケズリ　底：回転糸切り→回転ケズリ　内黒	11.0	4.2	4.0	15－8	144
3	土師器・坏	3層	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	14.2	5.9	4.5	15－10	182
4	土師器・坏	底面	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	(13.8)	(6.0)	4.6	15－11	181
5	土師器・坏	1層	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	13.6	5.4	4.7	15－12	184
6	土師器・坏		外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	12.3	4.5	3.9	15－13	186
7	赤焼土器・坏		外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ（コテ仕上げ）	13.1	4.6	3.2	15－15	63
8	赤焼土器・坏		外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ（コテ仕上げ）	12.6	5.0	3.3	15－16	64
9	赤焼土器・坏		外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ（コテ仕上げ）	(14.1)	(5.2)	4.3	15－17	65
10	赤焼土器・坏		外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ（コテ仕上げ）	(13.2)	(4.8)	3.5	16－1	66
11	赤焼土器・坏		外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ（コテ仕上げ）	12.4	4.6	3.1	16－2	67
12	赤焼土器・坏		内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	(13.6)	4.8	2.8	16－3	69
13	赤焼土器・坏	1層	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	13.6	5.3	4.7	16－4	185
14	赤焼土器・高台坏		内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	(12.4)	6.8	2.9	16－5	68
15	須恵器・高盤		外：ロクロナデ　内：ナデ、ロクロナデ	－	－	－		188
16	灰釉陶器・広口壺		内外：ロクロナデ	(14.0)	－	－	19－8	70
17	須恵器・壺		内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	6.0	8.2	13.0	16－6	147
18	須恵器・甕	3層	外：ロクロナデ→回転ケズリ　底：ナデ　内：ロクロナデ	(9.7)	8.5	19.9	15－14	183

第36図　SD43溝跡出土遺物

形である。堆積土は黒色シルト、黒褐・褐灰色粘土、黒褐・黄灰色粘土質シルト、灰黄褐色砂質シルト等で自然堆積である。上層に灰白色火山灰の再堆積層があるところもある。

遺物は、底面から回転糸切り無調整の土師器坏（第36図４）、堆積土から土師器坏・高坏・甕・蓋、須恵器坏・蓋・甕・壺（17・18）・高盤（15）、赤焼土器坏（７～13）・高台坏（14）、瓦、灰釉陶器広口壺（16）が出土している。堆積土出土の土師器坏は回転糸切り無調整のもの（３～６）が主体をしめる。



No.	種別	層位	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	須恵器・壺	堆積土	外：回転ハケメ，櫛歯状工具による波状文　内　ロクロナデ	-	-	-	19-4	200
2	土師器・甕	堆積土	外：ハケメ→ミガキ　底：木葉痕　内：ハケメ・ミガキ	(14.6)	(14.6)	16.3	16-10	73
3	土師器・甕	堆積土	外：ハケメ→ヨコナデ→ハケメ→ミガキ　内：ハケメ→ヨコナデ→ミガキ、ケズリ→ミガキ	20.2	8.2	20.5	16-11	74

第37図　SD55溝跡出土遺物1

【SD48溝跡】（第4・35・39図）

A・B区中央を直線的に延びる東西溝跡で、長さ52.0m分を検出した。東はSD43溝跡に壊されている。SI27・100住居跡、SD40・136・137・153溝跡、SK147・246土葬墓、SK78・97・103土壙、D群小溝より新しい。規模は上幅70～110cm、下幅35～70cmで、深さは最も深いところで40cmである。断面形はU字形を呈する。方向はE－18°－Nである。堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。

遺物は、堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕、赤焼土器坏・高台坏、瓦が出土した。赤焼土器坏には内面の口縁部に油煙が付着するもの（第39図1）、瓦には重圏文軒丸瓦（13）がある。

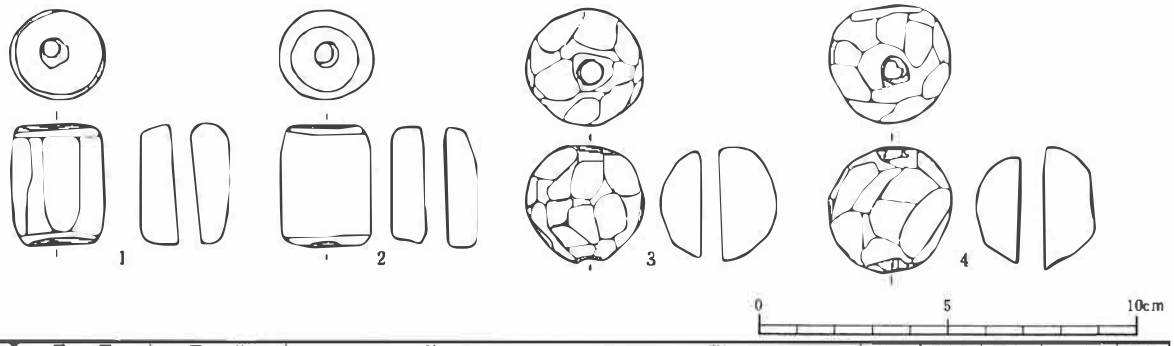
【SD49溝跡】（第4・35・39図）

A・B区中央を直線的に延びる東西溝跡で、東西とも調査区外に延びる。長さ76.2m分を検出した。SD55・58・73・136・137・153溝跡、SK193土葬墓より新しく、SD197・206・207・265溝跡、SK16・196・292土壙より古い。規模は上幅90～170cm、下幅20～80cmで、深さは最も深いところで65cmである。断面形はV字やU字形を呈する。方向はE－20°－Nである。堆積土は地山土や灰白色火山灰、砂などを少し含む黄褐色砂質シルトや黒褐色粘土質シルト、灰黄褐・褐灰色シルト等で自然堆積である。

遺物は、堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺、赤焼土器坏（第39図3）、瓦が出土している。土師器坏には回転糸切り無調整のもの（4・5）がある。

【SD50溝跡】（第4・35図）

B区中央を直線的に延びる東西溝跡で、長さ38.6m分を検出した。東はB区外に延びるが、A区で



No	種別	層位	特徴	長さ	最大径	孔径	写真	登録
1	土錘	底面	外：オサエ→ナデ	3.2	2.5	0.5	19－13	201－5
2	土錘	底面	外：ナデ	3.2	2.5	0.5	19－13	201－6
3	土玉	底面	外：オサエ	－	3.1	0.6	19－13	201－1
4	土玉	底面	外：オサエ	－	3.3	0.6	19－13	201－3

第38図　SD55溝跡出土遺物2

は検出されていない。SD136・137・153溝跡、SK194・195土葬墓より新しく、SD264・265・294溝跡より古い。規模は上幅60～105cm、下幅35～45cmで、深さは最も深いところで40cmである。断面形は逆台形を呈する。方向はE－21°－Nである。堆積土は地山土の粒を含む灰黄褐色や褐灰色のシルトで自然堆積である。

遺物は、堆積土から土師器坏・高台坏・甕、須恵器甕、赤焼土器坏、瓦、陶器片が出土している。

【SD55溝跡】（第4・35・37・38図）

A区中央からB区南を北東から南西に直線的に延びる溝跡で、北は調査区外に延びる。長さ31.8m分を検出した。A群小溝より新しく、SD43・49・57・153・313溝跡、SK71・156・177土葬墓より古い。規模は上幅80～170cm、下幅30～130cmで、深さは最も深いところで25cmである。断面形はU字形を呈する。方向はN－31°－Eである。堆積土は地山砂を多く含む黄灰色粘土質シルトで自然堆積である。

遺物は、底面から土錘（第38図）、堆積土から土師器坏・高坏・甕・甑、須恵器壺（第37図1）が出土している。甕・甑には口縁端部が四角く仕上げられているもの（2・3）がある。ともに頸部には段が巡り、甑は口縁端部に至るまでにもう1つ段が巡る。また、甕・甑ともに内外面は丹念にヘラミガキが施されている。須恵器壺の外面には回転ハケメと櫛歯状工具による波状文が施されている。なお、土錘はB区東際～SD43溝跡間の中央付近の比較的狭い範囲から6点出土した。

【SD134溝跡】（第4図）

B区中央を西側に膨らみながら延びる南北溝跡で、長さ43.0m分を検出した。北はB区外に延びるがA区では検出されてない。C群小溝と重複する。後述するようにC群小溝は2回以上の変遷があり、SD134はその比較的新しいものより古く、古いものより新しい。規模は上幅20～40cm、下幅10～25cmで、深さは最も深いところで5cmである。断面形は皿状である。方向は南半は概ね真北方向、北半はN－5°－Eである。堆積土は黒色粘土で自然堆積である。

遺物は、堆積土から土師器坏、赤焼土器坏がごく少量出土している。

【SD136溝跡】（第4・35・39図）

B区中央で検出した逆「L」字状に折れ曲がる溝跡で、北はB区外に延びるがA区では検出されな

かった。検出した長さは87.6m分である。SD153・251溝跡、B群小溝より新しく、SD43・48～50・167・206・265・266溝跡、SK188土葬墓、SK190土壙より古い。規模は上幅40～110cm、下幅25～60cmで、深さは最も深いところで25cmである。断面形は逆台形を呈する。方向はやや蛇行するが、南北部分がほぼ真北、東西部分はほぼ真東である。堆積土は灰黄褐色粘土や黄灰色粘土質シルトで自然堆積である。

遺物は、堆積土から土師器・須恵器坏がごく少量出土したほか、磨石（第39図15）が出土している。

【SD137溝跡】（第４・35・39図）

B区中央で検出した西側に膨らみながら延びる南北溝跡で、２時期（A→B）ある。B群小溝より新しく、SD48～50・138・167・265溝跡、SK159土葬墓、C・D群小溝より古い。Bは長さ45.0mで、上幅60～135cm、下幅40～60cmである。深さは最も深いところで35cmで、断面形は逆台形を呈する。

AはBの北端部手前でクランク状に折れ曲がって北に延びるが、北端は攪乱に壊されている。また、Bと重なる部分では、Bの下で一部が検出されたにとどまる。Bの北端部から北で検出された長さは12.2mである。上幅は50～140cm、下幅は30～50cmで、深さは最も深いところで45cmである。断面形はU字形である。堆積土は、A・Bともに地山ブロックを含む灰黄褐色シルトで自然堆積である。

遺物は、Aの堆積土から土師器甕、須恵器坏、瓦が少量出土しており、瓦には凹面に「物」の刻印がある平瓦（第39図14）がある。Bの堆積土からは土師器坏・甕、須恵器片、瓦がごく少量出土しており、土師器坏には底部と体部下半が回転ヘラケズリ調整されたもの（９）がある。

【SD138溝跡】（第４・35・39図）

B区中央で検出した逆「L」字状に折れ曲がる溝跡で、西はSD137溝跡に壊されている。検出した長さは6.0m分である。SD40溝跡より新しく、SD137溝跡、C・D群小溝より古い。規模は上幅130～220cm、下幅40～60cmで、深さは最も深いところで45cmである。断面形はU字形を呈する。方向は南北部分が真北で、東西部分はE－12°－Nである。堆積土は地山土の粒や炭化物を含む黒褐色粘土を主体とした自然堆積である。

遺物は、堆積土から土師器坏・高坏・甕・取手付甑（第39図12）、須恵器坏・高台坏（11）・甕、瓦が出土している。須恵器坏にはヘラ切り後ナデ調整をしたもの（10）がある。

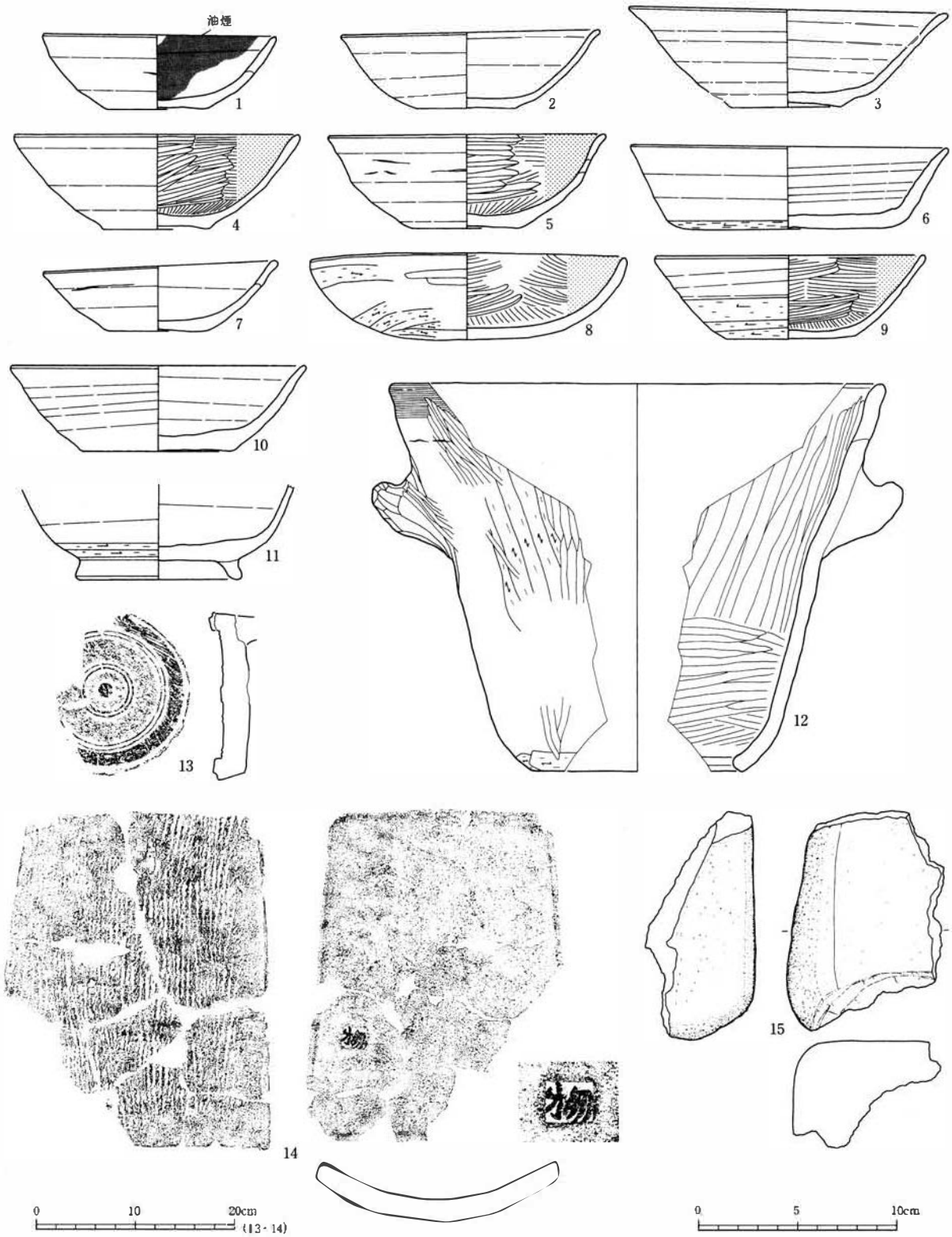
【SD153溝跡】（第４・35図）

B区中央から南を北西から南東に直線的に延びる溝跡である。B区南際では少し西に曲がり、SD235に壊されている。北は調査区外に延びる。検出した長さは79.6m分である。SD55溝跡、SK288土壙より新しく、SD43・48～50・137・166・167・180・235・264～266・294溝跡、SK71・156・177土葬墓より古い。規模は上幅70～140cm、下幅25～70cmで、深さは最も深いところで55cmである。断面形は逆台形を呈する。方向はN－45°－Wで、B区南際ではN－６°－Wである。堆積土は、地山砂を含む灰黄褐色粘土や褐灰・黄灰色粘土質シルトで自然堆積である。

遺物は、堆積土から土師器坏・甕、須恵器甕が少量が出土している。

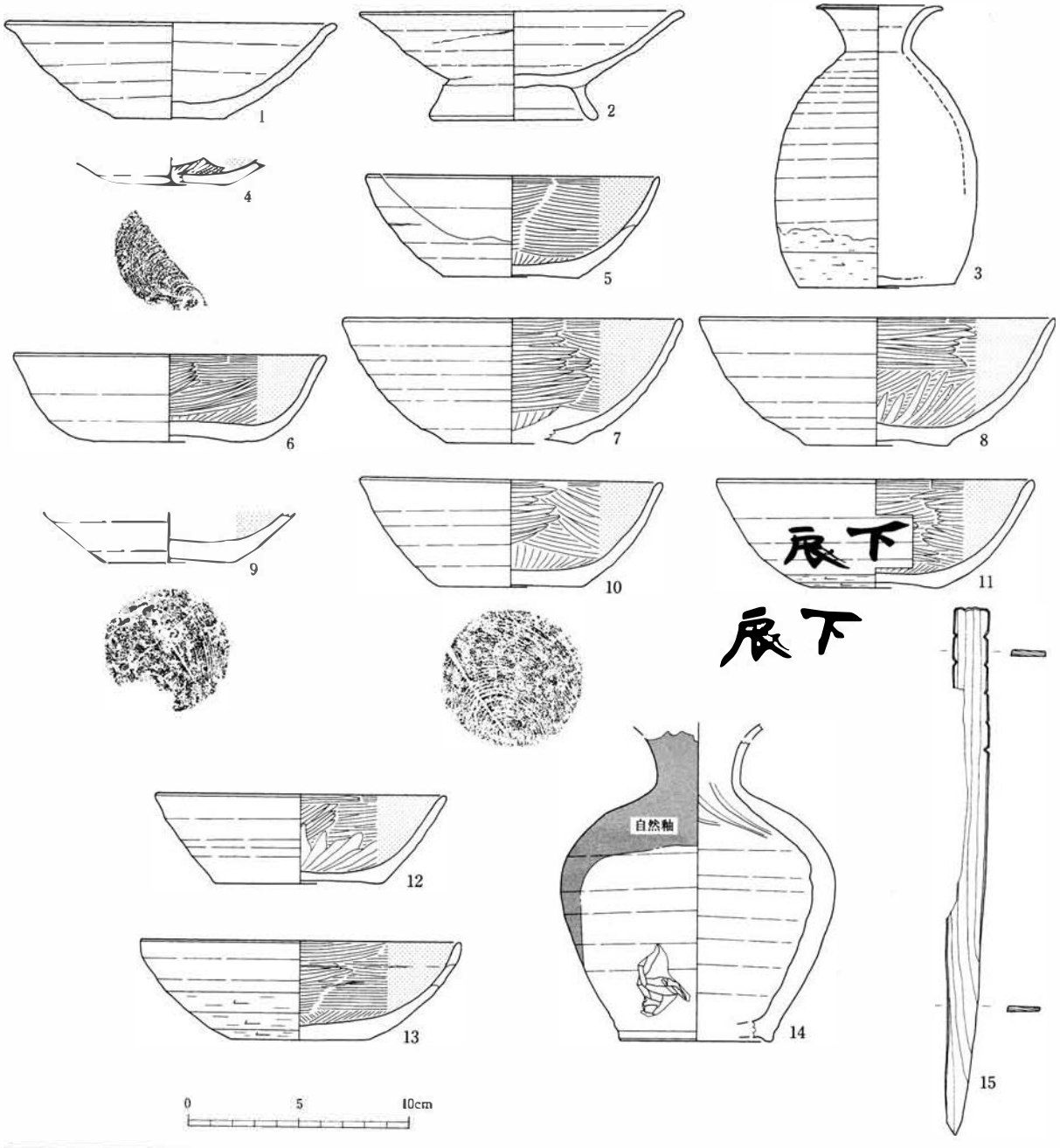
【SD206溝跡】（第４・35・40図）

B区南の西際で検出した南北溝跡で、南は西に曲がって調査区外に延びる。北は攪乱に壊されてい



No.	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	赤焼土器・坏	SD48	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ（コテ仕上げ）　油煙付着	11.8	5.0	3.8	16－9	60
2	赤焼土器・坏	SD48・Ⅰ層	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	13.0	4.9	3.8	16－7	192
3	赤焼土器・坏	SD49	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	16.1	5.5	4.9	16－8	195
4	土師器・坏	SD49	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	(14.4)	5.4	4.7	16－12	74
5	土師器・坏	SD49	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	(14.0)	(5.4)	4.6	16－13	148
6	須恵器・坏	SD58	外：ロクロナデ→回転ケズリ　底：ヘラ切り→回転ケズリ　内：ロクロナデ	16.0	10.1	4.3	16－14	75
7	赤焼土器・坏	SD58	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ（コテ仕上げ）	11.8	5.0	3.5	16－15	76
8	土師器・坏	SD136	外：ケズリ→ミガキ　内黒	16.0	－	4.3	16－16	203
9	土師器・坏	SD137B	外：ロクロナデ→回転ケズリ　底：回転ケズリ　内黒	13.6	6.5	4.1	16－17	206
10	須恵器・坏	SD138	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ	(14.8)	(7.6)	4.2	17－1	209
11	須恵器・高台坏	SD138	外：ロクロナデ→回転ケズリ→ロクロナデ　内：ロクロナデ	－	8.3	－	17－2	210
12	土師器・甕	SD138	外：ヨコナデ・ケズリ→ミガキ　内：ミガキ	(24.8)	(10.4)	19.3	16－18	208
13	軒丸瓦	SD48	重圏文240　径：16.8　厚：2.5～3.3	－	－	－	20－5	193
14	平瓦	SD137A	ⅡB類　長：33.6　幅：21.2　厚：2.1　凹面に刻印「物」C	－	－	－	21－1	205
15	摺石	SD136・Ⅰ層	長：(11.0)　幅：(7.9)　厚：(5.3)	－	－	－	19－21	204

第39図　SD48・49・58・136・137・138出土遺物



No	種　別	出土遺構・層位	特　　徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	赤焼土器・坏	SD206	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	15.1	5.0	4.9		214
2	赤焼土器・高台坏	SD207・1層	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	14.8	7.7	4.9	17－3	216
3	須恵器・壺	SD207・底面	外：ロクロナデ、回転ケズリ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ	(5.8)	7.0	12.7	17－5	218
4	土師器・坏	SD235	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　焼成前に一本線状の刻書　内黒	－	(5.2)	－	19－11	219
5	土師器・坏	SD235	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	(13.4)	(6.2)	4.6	17－6	221
6	土師器・坏	SD235	外：ロクロナデ　底：回転糸切り→ミガキ　内黒	(14.2)	(6.8)	3.9	17－7	220
7	土師器・坏	SD235	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	(15.4)	(5.4)	5.6	17－4	222
8	土師器・坏	SD235	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	(14.2)	(6.4)	5.7	17－8	223
9	土師器・坏	SD235	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　焼成前に×状の刻書　内：摩滅	－	(5.8)	－	19－12	224
10	土師器・坏	SD236	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　焼成前に一本線状の刻書　内黒	13.8	6.4	4.9	17－9	226
11	土師器・坏	SD236	外：ロクロナデ→回転ケズリ　底：回転ケズリ　内黒　体部に墨書「辰下」	14.4	5.6	4.9	17－10	227
12	土師器・坏	SD236	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	13.2	7.6	4.1	17－11	229
13	土師器・坏	SD236	外：ロクロナデ→回転ケズリ　底：回転ケズリ　内黒	(14.6)	(6.4)	4.4	17－13	228
14	須恵器・瓶	SD236	外：ロクロナデ　下部に焼成痕　底：不明　内：ロクロナデ・ナデ	－	(6.8)	－	17－12	230
15	斎串	SD235	上端：折り　下端・左右辺：切り　長：23.9　幅：1.6　厚：0.2　樹種：ヒノキ	－	－	－	21－3	木37

第40図　SD206・207・235・236溝跡出土遺物

る。また、N280付近で小規模な溝が西に分岐する。検出された長さは22.1m分である。SD49・136・207溝跡、SK307・308土壙より新しく、SD197溝跡、SK309土壙より古い。規模は上幅60～200cm、下幅30～50cmで、深さは最も深いところで25cmである。断面形はU字形を呈する。方向はN－22°－Wである。堆積土は、灰黄褐・褐灰・暗灰黄色粘土で自然堆積である。

遺物は、堆積土から土師器・須恵器坏のほか、赤焼土器坏（第40図１）がごく少量が出土している。

【SD207溝跡】（第４・35・40図）

Ｂ区南の西際で検出した南北溝跡で、南はそのまま、北は西に曲がって調査区外に延びる。検出された長さは33.0m分である。SD49・206溝跡、SK309土壙より古い。規模は上幅100～185cm、下幅60～100cmで、深さは最も深いところで40cmである。断面形は逆台形を呈する。方向はN－27°－Wである。堆積土は灰黄褐・褐灰・暗灰黄色粘土で自然堆積である。また、灰白色火山灰ブロックを多く含む層（第35図SD207断面図４層）が認められる。

遺物は、底面から須恵器壺（第40図３）、堆積土から土師器坏、須恵器壺、赤焼土器坏・高台坏（２）、瓦が少量が出土している。

【SD235溝跡】（第４・35・40図）

Ｂ区南端で検出した溝跡で、両端とも調査区外に延びる。検出された長さは16.0m分である。SD153・236溝跡より新しい。規模は上幅100～370cm、下幅40～110cmで、深さは最も深いところで85cmである。断面形は逆台形を呈する。方向はN－29°－Eである。堆積土は２層が灰白色火山灰層、他は灰黄褐色粘土質シルト層や黒褐・にぶい黄褐色粘土層で自然堆積である。

遺物は、底面で須恵器壺（第40図14）、堆積土から土師器坏、須恵器坏・甕、赤焼土器坏、瓦、斎串（15）が少量出土している。土師器の大半はロクロ調整で、坏は底部に再調整が施されたもの（６）もあるが、底径の小さい回転糸切り無調整の坏（４・５・７～９）が主体である。また、４・９の底部には焼成前の刻書がある。

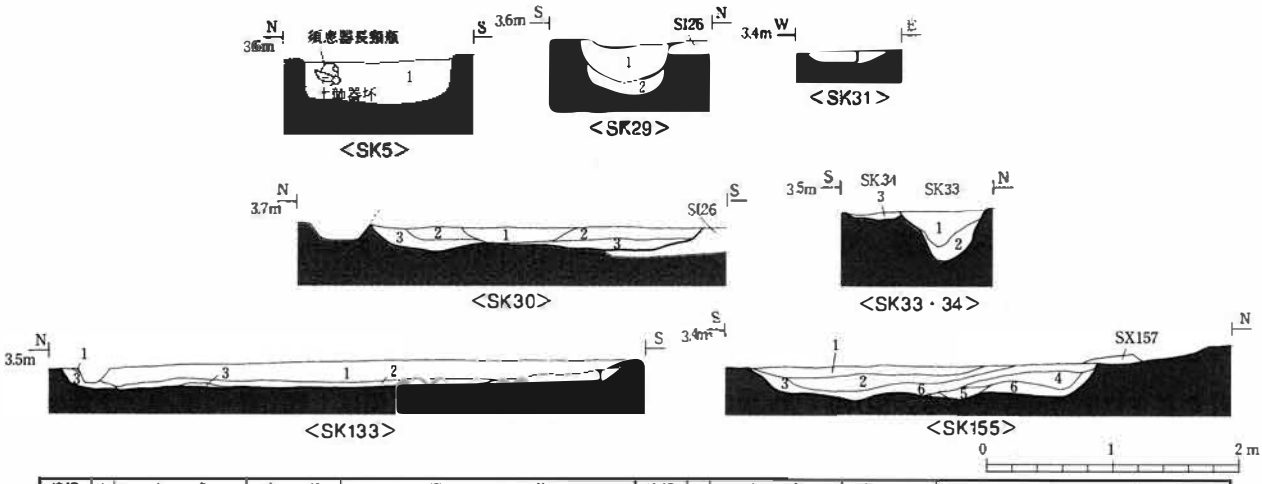
【SD236溝跡】（第４・35・40図）

Ｂ区南端で検出した南北溝跡で、南は調査区外に延びる。検出した長さは18.0m分である。SD180・235溝跡より古い。規模は上幅110～200cm、下幅40～120cmで、深さは最も深いところで50cmである。断面形はU字形を呈する。方向はN－５°－Eである。堆積土は地山ブロックを含むにぶい黄褐色粘土や、砂と互層をなす黒褐色粘土等で自然堆積である。

遺物は、堆積土から土師器坏・高坏・甕、須恵器坏・甕、瓦が出土している。土師器のほとんどはロクロ調整で、坏は底部に再調整が施されたもの（第40図11・13）と、回転糸切り無調整のもの（10・12）とがある。また、10の底部には×状の焼成前の刻書、11の体部には「辰下」の墨書がある。

Ｆ．土壙

57基検出した。平面形が円形や楕円形のものが多く、方形を基調とするものは少ない。規模は、長軸２m未満のものが主体をしめるが、それ以上のものもある。以下、主要なものについて述べる。その他の土壙の規模等の属性は巻末の遺構属性表に収載した。



遺構	No.	土色	土性	備考	遺構	No.	土色	土性	備考
SK5	1	オリーブ褐（2.5Y4/3）	粘土質シルト	火山灰をブロック状に含む。〈人為〉	SK133	1	黒褐（10YR3/1）	シルト	〈自然〉
SK29	1	黒褐（10YR3/2）	シルト	炭を多く、地山砂・焼土を少し含む。〈人為〉		2	黒（10YR2/1）	シルト	地山ブロックを少し含む。〈自然〉
	2	暗灰黄（2.5Y4/2）	シルト	地山砂非常に多く含む。〈人為〉		3	灰黄褐（10YR4/2）	シルト	地山ブロックを少し含む。〈自然〉
SK30	1	黒褐（7.5YR3/1）	シルト	炭・焼土粒・地山ブロックを含む。〈人為〉	SK155	1	黒褐（10YR3/2）	シルト	地山粒を少し含む。〈自然〉
	2	黒褐（10YR3/1）	シルト	炭粒・地山ブロックを含む。〈人為〉		2	黄灰（2.5Y4/1）	粘土質シルト	地山塊と炭粒を少し含む。〈自然〉
	3	黒褐（2.5Y3/1）	シルト	地山ブロックを多く含む。〈人為〉		3	黄褐（2.5Y5/3）	シルト質砂	2・4層の土がまじる。〈自然〉
SK31	1	暗灰黄（2.5Y4/2）	砂質シルト	炭を少し含む。地山砂を含む。〈人為〉		4	黄灰（2.5Y4/1）	粘土質シルト	地山砂ブロックを含む。〈自然〉
SK33	1	黒褐（2.5Y3/2）	粘土質シルト	炭・地山砂を少し含む。〈人為〉		5	褐灰（10YR4/1）	粘土質シルト	地山砂ブロックを含む。〈自然〉
	2	黒褐（2.5Y3/2）	粘土質シルト	地山砂ブロックを多く含む。〈人為〉		6	にぶい黄（2.5Y6/3）	砂	4・5層の土をブロックで少し含む。〈自然〉
SK34	3	暗オリーブ褐（2.5Y3/3）	シルト	地山砂を多く含む。〈人為〉					

第41図　土壙断面図

【SK5土壙】（第4・41・42図）

B区中央で検出した。平面形は短辺がやや膨らみをもった長方形で、規模は長辺230cm、短辺120cmで、深さ38cmである。断面形は箱形を呈する。方向は長軸でE－17°－Nである。堆積土は灰白色火山灰ブロックを含むオリーブ褐色粘土質シルトで、人為的に埋め戻されている。

遺物は、埋土から回転糸切り無調整の土師器坏（第42図2）と須恵器長頸瓶（1）が出土している。長頸瓶は大戸窯のMH－19窯式期に属するものである。

【SK20土壙】（第4・42図）

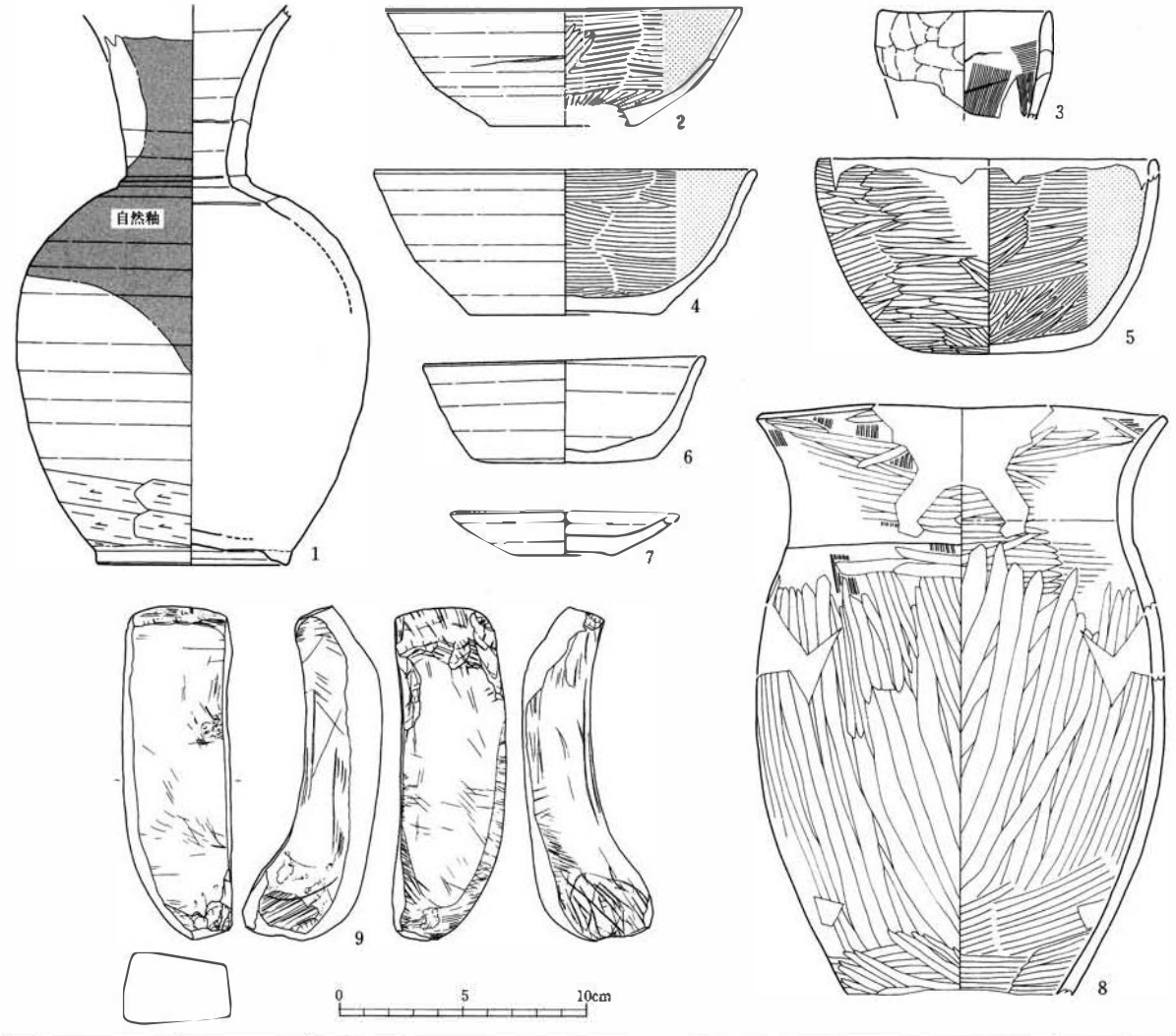
B区中央で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸56cm、短軸40cm、深さ8cmである。断面形は皿状を呈する。方向は長軸でE－35°－Sである。堆積土は地山ブロックを含む暗灰黄色シルトで、人為的に埋め戻されている。

遺物は、埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕、ミニチュア土器（第42図3）、砥石（9）が出土している。

【SK29土壙】（第4・41・42図）

A区中央で検出した。SI26住居跡より新しく、C群小溝より古い。平面形は東西に長い楕円形で、規模は長軸192cm、短軸80cm、深さ46cmである。断面形は箱形を呈する。方向は長軸でE－7°－Sである。堆積土は炭化物や焼土、地山砂を多く含む黒褐・暗灰黄色シルトで、人為的に埋め戻されている。

遺物は、埋土から土師器と須恵器の坏・甕、瓦が出土している。土師器には回転糸切り無調整の坏（第42図4）と非ロクロ調整で無段平底の椀（5）がある。須恵器にはヘラ切り無調整の坏（6）がある。



No.	種別	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	写真	重量
1	須恵器・長頸瓶	SK5	外：ロクロナデ→回転ケズリ→ロクロナデ　上半に自然釉　底・内：ロクロナデ　三段接合　大戸窯産	－	7.7	－	17－18	138
2	土師器・坏	SK5	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	(14.4)	(6.0)	4.7	17－14	137
3	ミニチュア土器	SK20	内外：ナデ	7.2	－	－	17－15	50
4	土師器・坏	SK29	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	(15.6)	(7.8)	5.8	17－16	78
5	土師器・椀	SK29	外：ミガキ　内黒	13.9	7.6	7.8	17－17	79
6	須恵器・坏	SK29	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り	11.4	7.4	4.2	18－1	80
7	赤焼土器・皿	SK60	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	(9.3)	4.0	1.9	18－2	98
8	土師器・把手付甑	SK31	外：ハケメ→ミガキ　内：ハケメ→ミガキ	(16.6)	－	－	17－19	88
9	砥石	SK20	長：13.4　幅：4.5　厚：5.6　凝灰岩	－	－	－	19－19	51

第42図　SK5・20・29・31・60出土遺物

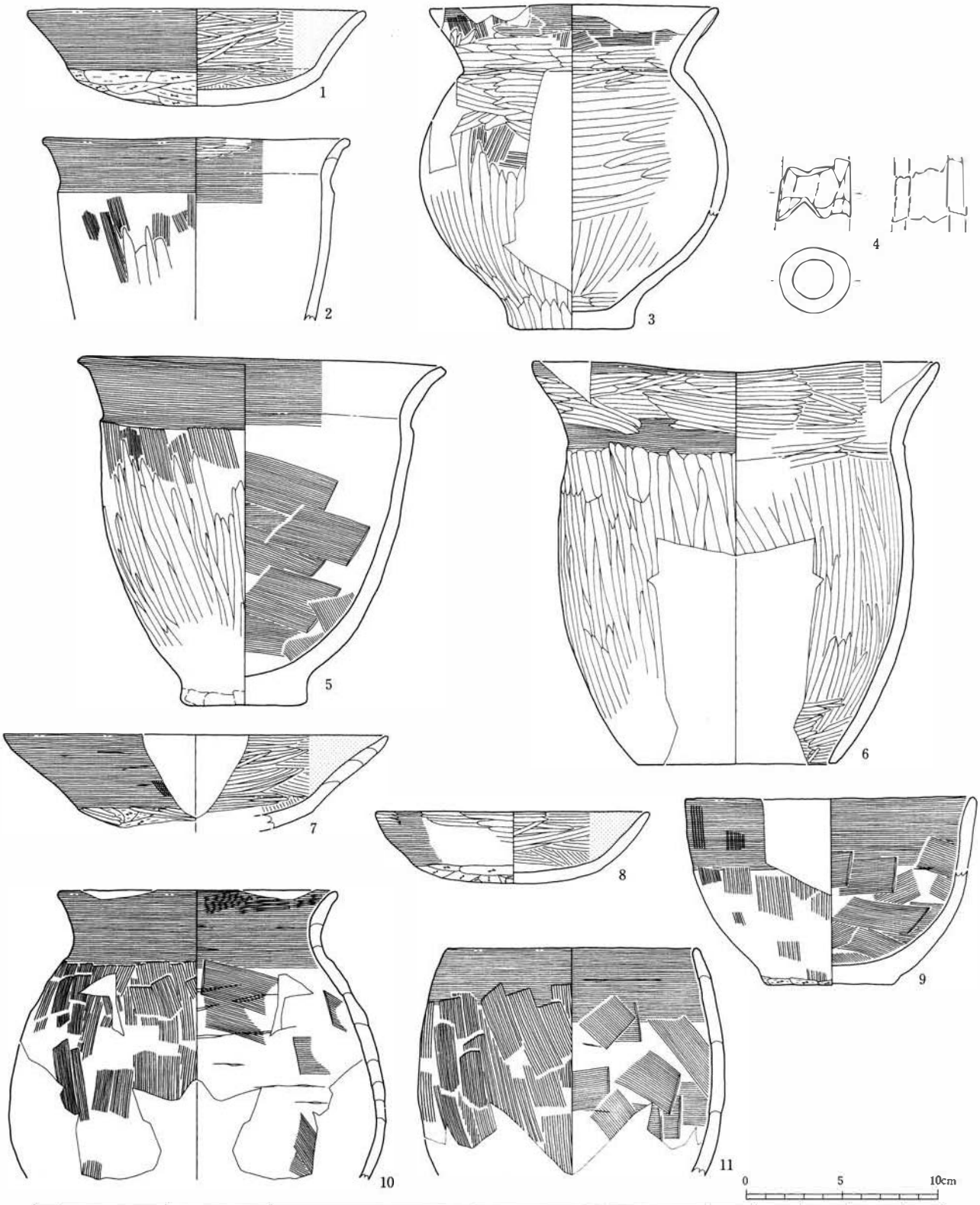
【SK30土壙】（第4・41・43・44図）

A区中央で検出した。SI26住居跡より新しく、C群小溝より古い。平面形は楕円形で、規模は長軸350cm、短軸270cm、深さ20cmである。断面形は皿状を呈する。方向は長軸でE－8°－Sである。堆積土は炭化物・焼土粒と地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。

遺物は、埋土から土師器坏・甕・甑、羽口（第43図4）、黒曜石の剥片が出土している。坏には内外面に段を有する丸底の坏（1）がある。甕には長胴形（2・5）と球胴形（3）のものがあり、ともに外面には段が巡る。また、5の口縁端部は四角く仕上げられている。甑は無底式のもの（6）がある。黒曜石の剥片は3点出土しており（第44図1～3）、1と2は接合資料である。

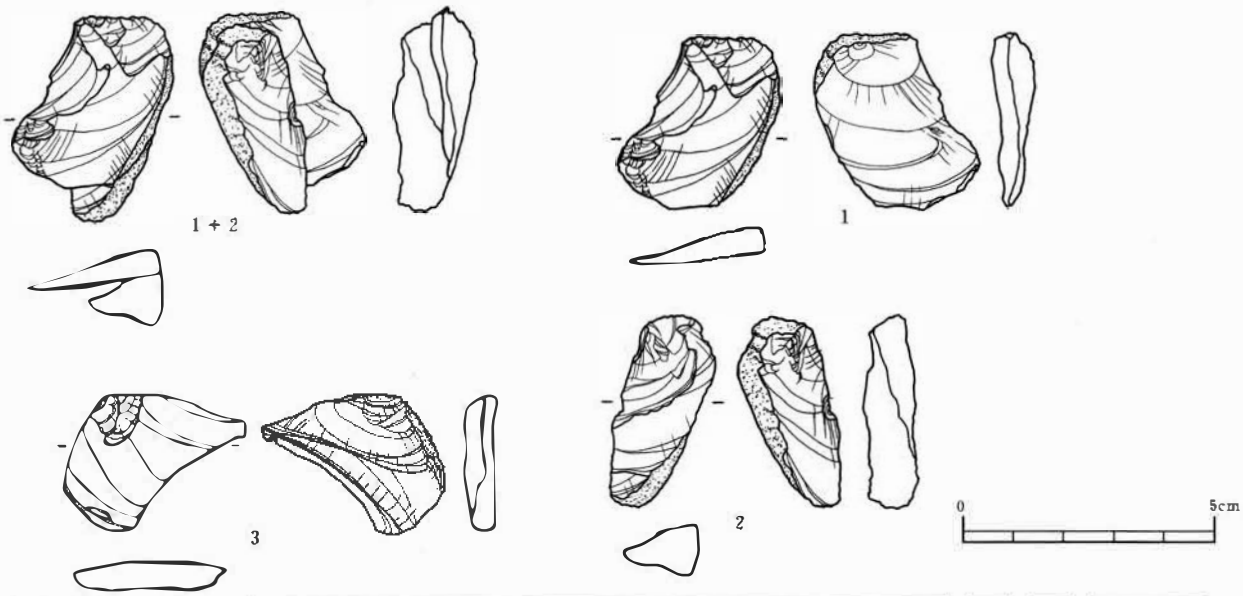
【SK31土壙】（第4・41・42図）

A区北で検出した。平面形は南北に長い楕円形で、規模は長軸190cm、短軸65cm、深さ10cmである。



No.	種　別	出土遺構・層位	特　徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	土師器・坏	SK30	外：ヨコナデ→ケズリ　内黒	17.6	－	5.0	18－3	82
2	土師器・甕	SK30	外：ハケメ→ミガキ・ヨコナデ　内：ヨコナデ→ミガキ	(16.0)	－	－		85
3	土師器・壺	SK30・検出面	外：ハケメ→ヨコナデ→ミガキ→口縁部に粘土貼付→ナデ　底・内：ハケメ→ミガキ	(15.0)	6.2	16.7	18－4	84
4	土製品・羽口	SK30	外：オサエ　内：摩滅　長：－　幅：3.8　内幅：2.2	－	－	－		87
5	土師器・壺	SK30	外：ヨコナデ→ハケメ→ミガキ　底：ナデ　内：ヨコナデ・ヘラナデ	19.1	6.6	17.9	18－5	83
6	土師器・甕	SK30	外：ヨコナデ→ミガキ　内：ミガキ	(21.2)	(10.2)	20.8	18－6	86
7	土師器・坏	SK33	外：ハケメ→ヨコナデ→ケズリ→ミガキ　内黒	(20.0)	－	－	18－7	90
8	土師器・坏	SK33	外：ヨコナデ→ミガキ・ケズリ　内黒	7.3	－	3.7	18－8	91
9	土師器・鉢	SK33	外：ハケメ→ヨコナデ→ハケメ→ケズリ　底：ケズリ　内：ヨコナデ→ヘラナデ	(15.2)	6.5	9.7	18－10	92
10	土師器・壺	SK33	外：ヨコナデ→ハケメ　内：ハケメ→ヨコナデ→ヘラナデ	(14.8)	－	－		94
11	土師器・鉢	SK33・1層	外：ヨコナデ→ハケメ　内：ヨコナデ→ヘラナデ	(13.0)	－	－		93

第43図　SK30土壙出土遺物1とSK33土壙出土遺物



No.	器種		特徴	長さ	幅	厚さ	写真	登録
1	調査	黒曜石	1～3同一母岩	3.5	3.3	0.7	22－3	239－1
2	調査	黒曜石		3.8	2.1	1.1	22－4	239－2
3	調査	黒曜石		2.7	3.7	0.7	22－5	239－3

第44図　SK30土壙出土遺物2

断面形は皿状を呈する。方向は長軸でN－3°－Wである。堆積土は炭化物と地山砂を含む暗灰黄色砂質シルトで、人為的に埋め戻されている。

遺物は、埋土から土師器坏・甕・甑が出土している。坏には有段丸底の坏がある。甑には無底式で頸部に段が巡り、口縁端部が四角く仕上げられたもの（第42図８）がある。

【SK33土壙】（第４・41・43図）

Ａ区北で検出した。SK34土壙より新しく、Ｃ群小溝より古い。平面形は東西に長い楕円形で、規模は長軸182cm、短軸64cm、深さ40cmである。断面形はＵ字形を呈する。方向は長軸でＥ－７°－Ｎである。堆積土は炭化物と地山砂ブロックを多く含む黒褐色粘土質シルトで、人為的に埋め戻されている。

遺物は、埋土から土師器坏・鉢・甕・甑が出土している。坏には有段丸底の坏（第43図７・８）がある。７の口縁部は長く外傾し、端部が直立気味に屈曲している。鉢（９・11）と甕（10）の外面はハケメ、内面はヘラナデによる調整が目立つ。

【SK34土壙】（第４・41図）

Ａ区北で検出した。SK34土壙、Ｃ群小溝より古い。平面形は東西に長い楕円形で、規模は長軸144cm、短軸40cm以上、深さ５cmである。断面形は皿状を呈する。方向は長軸でＥ－22°－Ｓである。堆積土は地山砂を多く含む暗オリーブ褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。

遺物は、埋土から土師器坏・甕・甑が出土している。甕の破片には口縁端部が四角く仕上げられたものがある。

【SK60土壙】（第４・42図）

Ａ区中央で検出した平面形が長方形と思われる土壙で、東は調査区外に延びる。SD49溝跡より新しい。規模は長軸175cm、短軸35cm以上、深さ３cmである。断面形は皿状を呈する。方向は長軸で

N－13°－Sである。堆積土は炭化物・地山砂粒を含む黒褐色シルトで自然堆積である。

遺物は、埋土から赤焼土器坏（第42図７）・皿、瓦が出土している。

【SK133土壙】（第４・41図）

Ｂ区中央で検出した。SB135建物跡、Ｂ群小溝より古い。平面形は南辺が丸みをもった長方形で、規模は長辺458cm、短辺336cm、深さ20cmである。断面形は逆台形を呈する。方向は東辺でN－20°－Wである。堆積土は黒褐色シルトと地山ブロックを少し含む黒・灰黄褐色シルトで自然堆積である。遺物は出土していない。

【SK155土壙】（第４・41図）

Ｂ区南で検出した。SX157土器埋設遺構、SD167溝跡より古い。平面形は楕円形で、規模は長軸400cm、短軸280cm、深さ30cmである。断面形は皿状を呈する。方向は長軸でE－11°－Sである。堆積土は炭粒や地山砂粒・ブロックを含む黒褐色シルトや黄灰・褐灰色粘土質シルト等で自然堆積である。遺物は出土していない。

G．小溝状遺構

Ａ・Ｂ区中央から北を中心に多数の小溝状遺構を検出した。小溝は幅15～40cmほどで、緩やかに蛇行して延びるものが多い。長さは長いもので約20mに及ぶ。断面形はU字形で、深さは深いもので20cm前後である。堆積土は地山砂粒やブロックを含む黒・黒褐色（10YR1/2・1/3）シルトや黄灰色（2.5Y1/4）砂質シルト等である。これらの小溝状遺構は、分布上のまとまりや方向からＡ～Ｄ群に大別される。

【Ａ群】（第45図）

ほぼ南北方向に延びる小溝状遺構で、Ａ区中央とＢ区南で検出された。数は少なく、分布もまばらである。小溝は長さ１～６ｍと短く、小溝同士の間隔は0.5mのものと1.0mのものがある。また、小溝同士のまとまりと位置関係からみて、各場所で最低２回は営まれている。他の小溝状遺構や主要な遺構との重複関係は、SI21住居跡やSD40・55溝跡、Ｃ群小溝より古い。

遺物は土師器坏・甕が少量出土している。

【Ｂ群】（第45図）

ほぼ東西方向に延びる小溝状遺構で、Ｂ区中央から北で検出された。それほど多くはないが、比較的広く分布している。小溝は長さ１～６ｍと短く、小溝同士の間隔は１～２ｍである。また、ごく一部だが、小溝同士に重複があるところがあり、最低２回は営まれている。他の小溝状遺構や主要な遺構との重複関係は、SD43・136・137・251溝跡やＣ・Ｄ群小溝より古い。また、SD40溝跡とは重複しないが、Ｂ群小溝はSD40溝跡西辺に沿って２～３ｍ西側に離れた場所から西に広がり、SD40溝跡の東側にはない。また、Ｂ群小溝とSD40溝跡西辺の方向がほぼ直交することが留意される。

遺物は土師器がごく少量出土している。

【Ｃ群】（第45図）

北西から南東方向に延びる小溝状遺構で、数多く検出された。Ａ・Ｂ区中央から北にかけて広く分

A・B群の小溝状遺構

A群…南北方向
B群…東西方向

C群の小溝状遺構

D群の小溝状遺構

第45図　小溝状遺構

布する。長さ２～６ｍ、間隔１ｍ前後のものと、長さ５～20ｍ、間隔１～２ｍのものがあり、前者は西側、後者は東側に分布する。小溝同士の重複も多く、少なくとも前者は２回、後者は４回は営まれている。他の小溝状遺構や主要な遺構との重複関係は、住居跡やSD40・136・137溝跡、Ａ・Ｂ群小溝より新しく、SD134溝跡、Ｄ群小溝より古い。また、SD43溝跡とは重複しないが、Ｃ類小溝の分布がSD43溝跡で囲まれたなかに収まることは留意される。

遺物は土師器坏・高坏・甕・甑、須恵器坏・甕、赤焼土器坏、土錘、瓦が出土している。

【Ｄ群】（第45図）

北東から南西方向に延びる小溝状遺構で、Ａ区北とＢ区中央で検出された。それほど密集はしていない。Ｂ区中央のものは西側の１群と東側の１群がある。前者は長さ２～６ｍ、後者は長さ２～９ｍで、間隔はともに２ｍ前後である。Ａ区北のものは長さ３～12ｍ、間隔1.5～２ｍである。各場所とも小溝同士のまとまりや位置関係、重複からみて、最低２回は営まれている。他の小溝状遺構や主要な遺構との重複関係は、SD40・43・250溝跡、Ｂ・Ｃ群小溝より新しく、SD48溝跡より古い。

遺物は土師器片と須恵器坏、瓦がごく少量出土している。

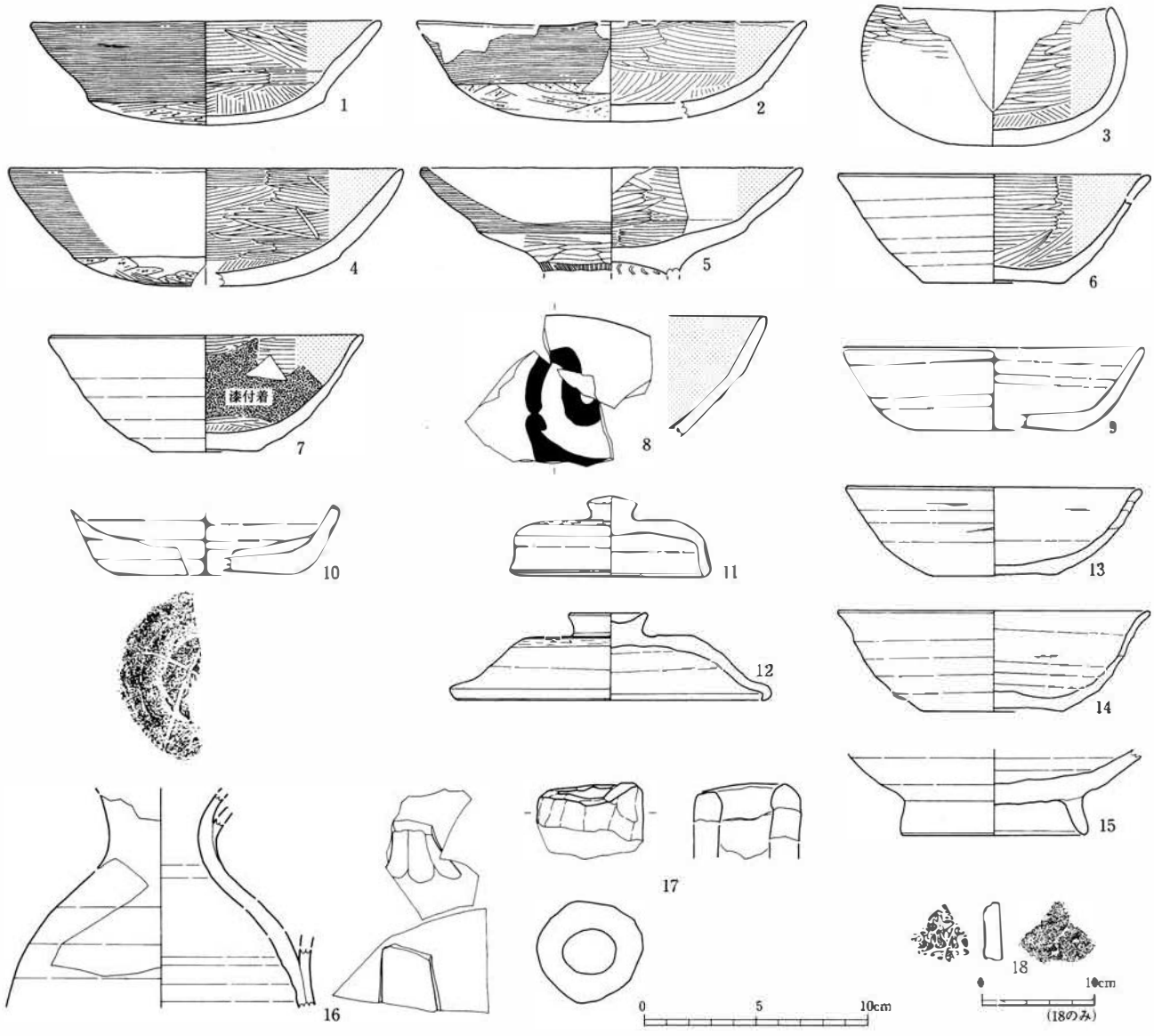
G. 堆積土ほかの出土遺物

弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器、瓦、土製品、鉄製品、石製品が出土している（第46～48図）。その大部分は土師器、須恵器、赤焼土器である。

弥生土器は鉢とみられる破片が少量出土している（第47図１～３）。磨消縄文手法による平行沈線文や山形の沈線文が認められ、枡形囲式のものと思われる。

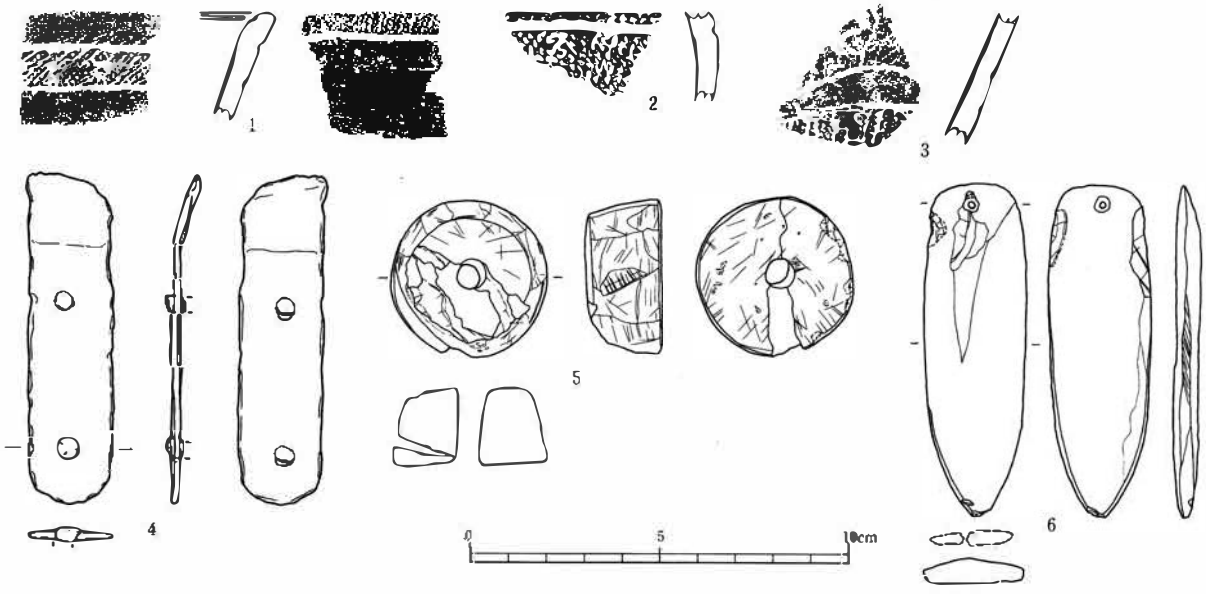
土師器は坏、高坏、甕、甑などが出土している。坏には非ロクロ調整の有段丸底の坏（第46図１・２・４）や無段丸底の坏（３）、ロクロ調整の坏（６）がある。ロクロ調整の坏には内面に漆が付着するもの（７）や外面の体部に墨書をしたもの（８）もある。須恵器は坏・高台坏・蓋・甕などが出土している。坏には回転糸切り無調整の坏（９）や、ヘラ切り後、焼成前に×状の記号を刻書したもの（10）がある。また、蓋には大戸窯のＭＨ－33窯式期に属するもの（11）がある。赤焼土器は坏・高台坏が出土しており、坏には内面がコテ状の工具で平滑に仕上げられたもの（13）がみられる。

灰釉陶器には猿投窯の黒笹14号窯式期に属する手付小瓶（16）がある。瓦にはヘラ書き瓦（第46図18）があるが、破片のため判読できない。土製品には羽口（17）がある。鉄製品は１点出土したのみである（第47図４）。形状からみて、穂積み金具の可能性がある。石製品は紡錘車（５）、剣形の石製模造品（６）、砥石（第48図１）のほか、篦状石器（２）が出土している。



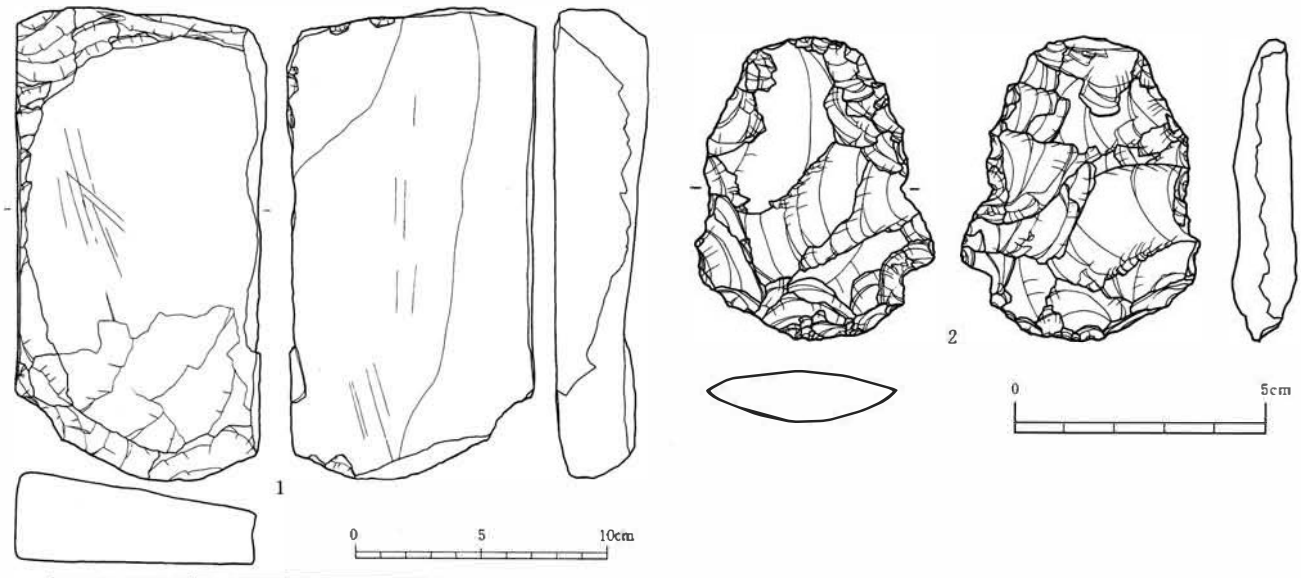
No	種　別	出土遺構・層位	特　　徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	土師器・坏	遺構確認	外：ヨコナデ・ケズリ→ミガキ　内黒	15.6	－	4.5		136
2	土師器・坏	表土	外：ヨコナデ→ケズリ　内黒	(17.2)	－	4.4	18－9	233
3	土師器・坏	遺構確認	外：ミガキ　内黒	(10.4)	－	6.1	18－11	101
4	土師器・坏	SD42	外：ヨコナデ→ケズリ→ミガキ　内黒	(17.6)	－	5.2	18－12	59
5	土師器・高坏	遺構確認	外：ヨコナデ、ハケメ→ミガキ　内黒　脚内：ナデ	(17.0)	－	－		1
6	土師器・坏	撹乱	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	14.0	6.2	4.8		116
7	土師器・坏	遺構確認	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒、漆付着	(14.0)	(4.8)	5.1	18－13	124
8	土師器・坏	遺構確認	外：ロクロナデ　内黒　体部に墨書「口」	－	－	－	19－5	102
9	須恵器・坏	遺構確認	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	(13.4)	(7.2)	3.7	18－14	115
10	須恵器・坏	遺構確認	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り、焼成前に十字状の刻書	－	(7.8)	－	19－10	106
11	須恵器・蓋	遺構確認	外：ロクロナデ→回転ケズリ→ロクロナデ　内：ロクロナデ　つまみ径：2.2　大戸窯産	9.0	－	3.5	18－15	107
12	須恵器・蓋	遺構確認	外：ロクロナデ→回転ケズリ→ロクロナデ　内：ロクロナデ　つまみ径：3.6	14.4	－	3.9	18－16	105
13	赤焼土器・坏	遺構確認	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ（コテ仕上げ）	13.2	5.6	4.0	18－19	128
14	赤焼土器・坏	遺構確認	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り	13.9	6.2	4.5	18－17	121
15	赤焼土器・高台坏	遺構確認	内外：ロクロナデ　底：ロクロナデ	－	8.2	－	18－18	130
16	灰釉陶器・手付小瓶	遺構確認	内外：ロクロナデ　猿投窯産	－	－	－	19－6	109
17	土製品・羽口？	遺構確認	内外：ナデ　長：－　幅：4.7　内幅：2.1～2.3	－	－	－	19－14	110
18	丸瓦	撹乱	凹面にヘラ書「だ」	－	－	－	20－8	232

第46図　その他の出土遺物1



No	種　別	出土遺構・層位	特　　徴	長さ	幅	厚さ	写真	登録
1	弥生土器・鉢	SD235	平行沈線文　すり消縄文	－	－	－	19－1	234
2	弥生土器・鉢	SD235	沈線文	－	－	－	19－2	235
3	弥生土器・鉢	SD235	山形沈線文　すり消縄文	－	－	－	19－3	236
4	不明鉄製品	遺構確認		8.7	2.4	0.2	19－15	241
5	紡錘車	遺構確認	径：4.1　厚：2.0　滑石	－	－	－	19－17	129
6	石製模造品（剣形）	SI27側方埋土	雲母片岩？	8.7	2.8	0.7	19－16	33

第47図　その他の出土遺物2



No	種　別	出土遺構・層位	特　　徴	長さ	幅	厚さ	写真	登録
1	砥石	遺構確認		18.7	10.0	3.8	19－20	142
2	剥片石器	遺構確認	珪質頁岩	6.0	4.8	1.2	22－9	240

第48図　その他の出土遺物3

第Ⅳ章 考　　察

1．遺物について

土師器、須恵器、赤焼土器が遺物の大部分であるが、出土量は必ずしも多くなく、一括性にも乏しい。以下では、これらの土器のうち比較的出土量のある坏や甕を中心に特徴を記述し、次にある程度の出土量がある遺構の土器から年代的な様相をみることにする。

①土器の特徴

《土師器》　坏、高坏、椀、鉢、甕、甑、壺があり、坏と甕が多い。

坏：非ロクロ調整とロクロ調整のものがある。内面はすべてヘラミガキ調整の後、黒色処理されている。ロクロ使用の有無や、器形からA～D類に大別される。なお、B・C類の出土数は少ない。

A類：非ロクロ調整の有段丸底で、外面の段や内面の段・屈曲が明瞭な坏である。口縁部は外傾または外反するものが主体をしめ、外傾するものには口縁部が長く、端部が直立するものもある。

B類：非ロクロ調整の有段丸底で、外面の段が明瞭ではなく、器高が低い平底風の坏である。口縁部は外傾する

C類：非ロクロ調整の無段丸底の坏である。外面はヘラミガキ調整されている。

D類：ロクロ調整で、口径に対する底径の比が小さいものである。底部の特徴は、回転糸切り無調整のものがほとんどであるが、切り離し後に回転ヘラケズリ調整されたものも少しある。

甕：ロクロ使用の有無でA・B類に大別される。

A類：非ロクロ調整である。頸部外面に段が巡る甕が多い。長胴形(Ⅰ類)と球胴形(Ⅱ類)のものとがあり、それぞれ大型品(器高25cm以上)と小型品(20cm以下)がある。胴部外面の調整はハケメ、ヘラミガキが目立つ。なお、Ⅰ類の小型品には内面底部の断面形が丸く、口縁部の端部が四角く仕上げられたものがある。

B類：ロクロ調整の長胴形の甕である。口縁部が屈曲して外傾し、端部が上方に軽くつまみだされたものが主体をしめる。大型品(口径20cm以上)と小型品(16cm以下)とがあり、大型品の胴部下半は縦方向の手持ちヘラケズリ調整が施されている。また、上半にタタキ調整が認められるものが少しある。

その他の土師器：高坏、椀、鉢、甑、壺があり、すべて非ロクロ調整である。高坏は脚部が短く、坏部の特徴は坏A類と同様である。椀は平底のものが1点あり、内外面の調整の特徴は坏C類と同様である。2点図化できた鉢の外面はハケメ調整されている。甑はすべて無底で、頸部外面に段が巡るものが多く、口縁部の端部に至る間に段がもうひとつ巡るものや、端部が四角く仕上げられたものもある。胴部外面はハケメ・ヘラミガキ調整、内面はヘラミガキ調整が目立つ。壺は内外面ともヘラミガキ調整ののち黒色処理されたものが1点ある。

《須恵器》　坏、高台坏、双耳坏、蓋、高盤、摺鉢、甕、壺、瓶がある。

坏：平底で、器形からⅠ～Ⅲ類に大別される。

Ⅰ類：口径に対する底径の比が大きく(0.61前後)、体部が底部から直線的に外傾するものである。底部は回転ヘラケズリ調整されている。底部の切り離し技法には静止糸切りがある。

Ⅱ類：口径に対する底径の比がⅠ類よりやや小さい(0.56前後)坏である。底部の特徴はヘラ切り、と回転糸切りで、前者が主体である。切り離し後に回転ヘラケズリ調整されるものがある。

Ⅲ類：口径に対する底径の比が小さく(0.38前後)、体部が底部から内湾気味に立ち上がるものである。底部の特徴は回転糸切り無調整である。

その他の須恵器：数が少なく破片資料が多いが、なかには福島県会津大戸窯の製品で比較的残りのよいものもある。蓋、壺、広口壺、長頸瓶が各1点あり、蓋はMH-33窯式期、壺と長頸瓶はMH-19窯式期、広口壺はKA-107窯式期に属するものである(註２)。

《赤焼土器》 坏、高台坏、皿がある。

坏：法量から大小に分けられるが、小型品は少ない。底部の特徴はすべて回転糸切り無調整である。

Ⅰ類：口径12～17cmの大型品で、体部が底部から直線的に外傾するものと内湾気味に立ち上がるものとがある。口縁部は軽く外反するものが主体をしめる。

Ⅱ類：口径12cm未満の小型品である。体部は底部から内湾気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至るものと、口縁部が軽く外反するものとがある。

②年代的な様相

土師器はその特徴から東北地方南部の土師器編年(氏家1957) における栗囲式、国分寺下層式、表杉ノ入式に属すものとみられる。それをふまえて比較的出土量のあるＳＩ21・23・25～27・62、ＳＤ43・235・236、ＳＫ30・33出土土器から、年代的な様相をみることにする。各遺構の出土土器は特徴から大きく3つに分けられる。

１群：土師器が非ロクロ調整のもの（ＳＩ23・26、ＳＫ30・33）

２群：土師器にロクロ調整のものを含む場合があり、また須恵器坏が多く認められるもの（ＳＩ21・25・27・62）

３群：土師器がロクロ調整のもの（ＳＤ43・235・236）

１群：ＳＩ23・26出土土器には高坏・甕・甑がある。高坏は脚部が短く、坏部は坏A類と同じく、外面の段や内面の段・屈曲が明瞭なものである。口縁部は外反または外傾し、内面はヘラミガキ調整ののち黒色処理されている。甕・甑の頸部外面は無段だが、胴部外面の調整はハケメが目立つ。ＳＫ30・33には坏・甕・甑・鉢がある。坏はＡ類で、甕・甑は頸部外面に段が巡るものである。甕・甑・鉢の外面の調整はハケメ、ハケメ→ヘラミガキ、ヘラミガキで、比較的丹念に施されている。

1群の土器は特徴から前述編年の栗囲式期に比定される。本遺跡周辺では山王遺跡八幡地区ＳＩ491住居跡や本遺跡ＳＩ5024・5045住居跡に類例があり、八幡地区ＳＤ2050河川跡でも同期の土器が大量に出土している(佐藤・佐藤ほか1997、古川・佐久間ほか2001、後藤・村田ほか2001)。また、それらは栗囲式期でも7世紀前半を中心する頃のものとみられているが、本調査の１群については数の少なさから詳細な検討は難しい。年代は古墳時代後期の7世紀頃とみるに留めておきたい。

2群：SI27出土土器には土師器坏と須恵器坏がある。土師器坏はB類、須恵器坏はⅠ・Ⅱ類で、土師器坏B類と須恵器坏Ⅰ類は床面で共伴し、須恵器坏Ⅱ類は住居埋土から出土している。土師器坏B類は国分寺下層式期のなかでも古い様相をもつものである。しかし、共伴した須恵器坏Ⅰ類は硯沢窯跡B2窯跡や郷楽遺跡第107号住居跡に類例があり、8世紀中頃の年代とみられる（宮城県教育委員会1987、庄司ほか1990）ので、それ以前には遡らないものと考えられる。

SI21・25・62には土師器坏・甕、須恵器坏・双耳坏がある。須恵器坏が多く、Ⅰ類もあるが、主体をしめるのはⅡ類である。土師器にはロクロ調整のものがある。SI25・62の土師器甕はB類であり、SⅠ21には図化できなかったが、ロクロ調整の土師器が含まれている。一方、土師器坏の出土は少なく、SI62にC類が1点あるのみである。

SI21・25・62出土土器の特徴は、須恵器坏Ⅱ類を主体とし、ロクロ調整の土師器を含むものといえる。須恵器坏Ⅱ類は、多賀城跡SX2631整地層出土須恵器坏の例から8世紀後葉頃とみられる。一方、多賀城周辺の土師器は、坏が8世紀末にはロクロ調整が主体となり、甕は9世紀初頭頃に非ロクロ調整とロクロ調整が混在するとみられている（吾妻2000）。よって、須恵器坏Ⅱ類とともに出土したSI21・25・62のロクロ調整の土師器も、8世紀後葉をそれほど下るものとは思われない。

以上のことから、SI27出土土器は8世紀中葉、SI21・25・62出土土器は8世紀後葉頃のものとみられ、2群全体としては奈良時代から平安時代初頭の8世紀中～後葉頃の年代が考えられる。

3群：SD43出土土器には土師器坏、須恵器壺・高盤、赤焼土器坏・高台坏がある。土師器坏はロクロ調整のD類で、回転糸切り無調整の坏がほとんどである。赤焼土器はすべてⅠ類である。SD235には土師器坏が多くみられ、その様相はSD43と同じである。一方、赤焼土器は少なく、破片資料を含めても若干みられる程度にすぎない。SD236には土師器坏、須恵器壺がある。土師器坏はSD43・235同様にD類だが、底部の特徴をみると、切り離し後に回転ヘラケズリ調整されたものもみられる。また、赤焼土器は出土していない。

土師器坏や赤焼土器を中心にSD43・235・236出土土器を、近くの例と比較すると、SD236は山王遺跡多賀前地区の3群土器（菅原・佐藤ほか1996）、SD43は同地区の4群土器と様相が類似しており、SD235の様相はそれらの中間にあたる。多賀前地区の3群土器は9世紀後半頃、4群土器は10世紀前葉頃の年代とみられている。したがって、本調査の3群については平安時代の9世紀後半～10世紀前葉頃の年代が考えられる。

以上のように、比較的出土量のある遺構の土器は1群が7世紀頃、2群が8世紀中～後葉頃、3群が9世紀後半～10世紀前葉頃の土器とみられる。1～3群のまとまりは年代的に独立的である。1群と2群、2群と3群の間に位置する土器のまとまった出土はなく、連続性が薄い。そのことは古墳時代後期から平安時代における本調査区の使われ方と密接に関わると思われる。

2．遺構について

検出した遺構は掘立柱建物跡4棟、竪穴住居跡13軒、土器埋設遺構8基、土葬墓93基、溝跡62条、土壙57基、小溝状遺構である。種別ごとに特徴や年代などを検討する。

A．掘立柱建物跡

A区と、B区中央東側に位置し、調査区内の微高地に立地する。年代を示す遺物は出土していない。重複関係等をみると、ＳＢ63は10世紀前葉を中心とした頃のＣ群小溝より新しい。また、ＳＢ135は近くにある9世紀頃のＳＤ137・138と方向が揃うことから、同じ頃の年代の可能性がある。

特徴：すべて梁行・桁行3間以下の小規模な建物である。全体がわかるのはＳＢ63・135で、東西棟建物である。柱穴や、建物の方向をみると、ＳＢ135の柱穴は一辺50～70cmの整った隅丸長方形で、並び方や間尺も斉一性がある。建物方向も真北に近く、小規模ながら計画性のある構築方法がとられている。一方、ＳＢ63・69・282の柱穴は形状が不揃いで、ＳＢ69・282のものは規模も長軸25～45cmと小さい。またＳＢ63の柱穴は並び方や間尺が乱れている。建物方向は真北からの振れが大きく、これらの建物には斉一的な特徴は認められない。

B．竪穴住居跡

12軒がA区中央、他の1軒もB区のA区寄りにある。また、A区でも東側ほど多く分布する傾向があり、標高のより高い場所に営まれている。

年代：前項「遺物について」で述べたことから、ＳＩ23・26が古墳時代時代後期、ＳＩ21・25・27・62が奈良～平安時代初頭頃の住居とみられる。その他、ＳＩ24では貯蔵穴から頸部外面に段が巡る甕Ａ類、床面から多賀城政庁跡第Ⅱ期の平瓦が出土しており、奈良時代半ば頃の住居と考えられる。また、ＳＩ47は、出土土器がすべて非ロクロ調整の土師器で、貯蔵穴状ピットから頸部外面に段が巡る甕Ａ類が出土したことから、古墳時代後期の住居とみられる。遺物から年代がわかるのは以上の8軒で、古墳時代後期の住居と奈良～平安時代初頭頃の住居がある。

古墳時代後期の住居：平面形は方形を基調とする。規模は一辺約4～6mで、床面積は20～40㎡ほどである。方向は真北に対して16°前後東に振れる。3軒とも掘方埋土を床面とし、主柱は4本である。各住居とも周溝があり、壁材痕跡も認められた。カマドは北辺または東辺にあり、少しずれるものもあるが、概ね中央に付設されている。燃焼部側壁は黄褐色粘土で構築され、ＳＩ47では補強材の据え方とみられるピットも検出された。支脚はＳＩ23で高坏の脚部、ＳＩ26で砂岩の切石が利用されている。貯蔵穴は各住居ともカマドの右側にある。長軸105～110cm、短軸65～85cmの楕円形で、深さも35～40cmのものであり、後述の奈良～平安時代初頭頃の住居のものに比べて大きい。以上のことから、この時代の住居は細部では違いもあるが、方向や床・主柱・周溝等の構造、カマドや貯蔵穴のあり方等の特徴は同じであり、共通性が認められる。

奈良～平安時代初頭頃の住居：平面形が方形を基調とする住居（ＳＩ21・24・25・27）と長方形の住居（ＳＩ62）がある。方形基調の住居の規模は一辺が5m前後の大きいものと、4m前後の小さいものがある。床面積は前者が25～30㎡、後者が15㎡前後で、前代の住居より小さく、方向はほぼ真北をとる。4軒とも掘方埋土を床面とし、主柱は4本である。各住居とも周溝がほぼ全周し、壁材痕跡も認められた。カマドは北辺中央にあるものが多いが、位置が少しずれるものもある。また、ＳＩ25では東辺の南側に設けられている。燃焼部側壁は黄褐色粘土やにぶい黄色シルトで構築され、ＳＩ27では砂岩の切石が補強材として据えられていた。支脚はＳＩ25で土師器甕を倒位に置いている。貯蔵穴

はない住居もあり、検出した住居でもカマド右側に位置する場合と左側の場合とがある。また、左側にあるＳＩ24では甕を据えており、貯蔵穴のあり方は一様ではない。規模は長軸50～80cmである。

長方形の住居ＳＩ62は南北5.3m、東西3.8mの南北に長い住居で、方向はほぼ真北である。床面積は20㎡で、掘方埋土を床面とするが、主柱や周溝はない。北西隅には他の住居のものより大きい長軸95cmの貯蔵穴がある。炭・焼土粒を多く含むシルトで埋め戻されており、埋土から油煙状の付着物のある須恵器坏が出土している。

この時代の住居は、ＳＩ62と他の住居で形状や構造に違いがある。また、ＳＩ62以外の住居は共通性もあるが、規模の大小、カマドの位置や貯蔵穴のあり方は一様ではない。共通点は方向がほぼ真北ということで、他は多様性を含んでいる。なお、ＳＩ62は工房の可能性もある。多賀城跡大畑地区の鍛冶工房跡には平面形が長方形で、主柱穴を持たないものもある（宮城県多賀城跡調査研究所1996)。そうした工房とＳＩ62は形状等が類似しており、また、貯蔵穴埋土に含まれる多量の炭・焼土粒や、油煙状の付着物のある坏の出土からも、工房が想定される。しかし、ＳＩ62の残存状況は悪く、遺物も少ないことから、ここでは可能性をあげるに留めることにする。

時期不明の住居：上記の各時代の住居は、時代ごとに同じ方向をとる傾向がある。その点から所属不明の住居のうちＳＩ22・28・95の時代も推測される。ＳＩ28・95の方向は真北に対して11～14°東に振れるので古墳時代後期、ＳＩ22はほぼ真北なので奈良～平安時代の住居と考えられる。

Ｃ．土器埋設遺構

調査区中央から南に分布する。長軸90cm前後、短軸50cm前後の楕円形の据え方に、土師器甕を横に寝かせて埋めている。甕は１つ、または合わせ口にした2つの甕を検出したが、前者の場合は遺構自体の残りが悪いことが多く、もとは2つ埋設されていた可能性がある。方向は長軸が南北方向のものが6基、東西のものが2基ある。その範囲は真北に対して西に36°から、真東に対して南に25°であり、真北に対して西に36°から東に10°の範囲に集中する傾向がある（第50図)。

年代：埋設された土師器甕はロクロ調整の長胴形のもので、口径20～29cm、器高24～45cmの大型品である。口縁部が屈曲して外傾し、端部が上方につまみだされた９世紀頃の特徴を持つものが主体をしめる。また、８世紀後半～９世紀前半の特徴とされるタタキ調整はあまり認められない。したがって、土器埋設遺構は９世紀後半を中心とした頃に営まれていたと考えられる。

甕の様相（第24～27図）：外面に粘土が貼り付けられたものやススが付着したものなど、煮炊きに使用した甕を転用したものがある。一方、ＳＸ75の甕（第26図２）のように使用痕跡がみられず、器形も通常の煮炊き具とは異なるものもある。また、組合せは同程度の大きさの甕を使う場合と、大小の甕を組み合わせる場合があるほか、口径が１～２cm異なる甕を使う場合と、小さい甕の口径と大きい甕の頸部内径が同じ程度の甕を使う場合がある。このように使われた甕は一律ではなく、組合せ方にも多様性がある。口縁部を合わせ閉じることのできる甕を適宜、利用したとみられるが、ＳＸ75のように煮炊き具とは異なる形態のものは、埋設用の特別な甕である可能性もある。

機能：合わせ口にした甕などの土器を横にして埋めた遺構は、東北地方をはじめ、東日本一帯に散在しており、甕棺墓とみられている（東日本埋蔵文化財研究会1995、海邊1999)。その場合、土葬と

みる報告例が多い。また、被葬者を乳幼児とする見方があり（沼山1981）、乳幼期または少年期の歯牙を検出した例もある（群馬県埋蔵文化財事業団1988）。県内では築館町佐内屋敷遺跡、高清水町手取遺跡、古川市名生館遺跡、河南町須江関ノ入遺跡、仙台市安久東遺跡のほか、多賀城周辺の山王・高崎遺跡でも検出されている（森1983、早坂・阿部1980、天野1999、中野・佐藤1990、岩淵・田中1976、菅原・佐藤ほか1996、多賀城市史編纂委員会1991）。いずれも9・10世紀のもので、山王遺跡以外では甕棺墓と位置づけている。山王遺跡の例については後述するが、広範な類例からみて、本調査例も甕棺墓と考えられる。また、遺構自体や周囲に火葬が想定される状況は認められなかった。よって、土葬とみておきたい。なお、この遺構の分布や方向、年代は、後述の土葬墓とほぼ共通する。また、この遺構と土葬墓の規模を長さと幅に基づいてグラフ化した第49図によると、土器埋設遺構は土葬墓の末端に位置づけられる。それらのことは、この遺構が乳幼児の墓であることを示唆すると思われる。

ところで、佐内屋敷・手取・名生館遺跡では、甕棺墓が居住域から離れた地点で検出されることが指摘されている（森1983、早坂・阿部1980、天野1999）。その点は須江関ノ入・安久東遺跡も同じであり、居住域から離れた場所でみつかっている。多賀城下の本調査例や山王・高崎遺跡の例を検討してみると、後述のように甕棺墓が営まれた9世紀頃、城下の方格地割は広範囲に及ぶようになるが、本調査区と高崎遺跡は地割外にある。地割外とは居住域外にあたるから、本調査例と高崎遺跡の例は県内の諸例と同じである。一方、多数の例が確認された山王遺跡多賀前・八幡地区は地割内に属している。しかし、すべて道路遺構、特に道路交差点付近での検出であり、道路で仕切られた敷地内すなわち居住域からの出土はない。したがって、多賀城下でも居住域外に営まれる特徴があるといえる。それはこの遺構が墓であることにやはり由来すると思われる。

なお、山王遺跡多賀前地区では土器を横にして埋めた遺構（以下、横形態と称す）と正位など他の埋め方をした遺構を土器埋設遺構として一括し、多賀城下の例を集成して詳細に検討している。検討は方格地割に着目して、横形態を含む道路検出の土器埋設遺構と、区画内検出のものとを分けて行い、前者については結論を保留しつつも、道路建設時の盛土整地中からの検出例があることから、道路建設時の祭祀という位置づけも想定する。

しかし、この見方は横形態と他の形態という異なるものを一括して論じる点、各地で甕棺墓とされる横形態の類例との機能上の検討を経ずに想定をする点などに問題がある。また、建設時の祭祀なら東西大路など大路でこそ最も重要と思われるが、実際は小路での検出が多く、大路のものが少ないのも疑問である。大路の例も方格地割の西端での検出であり、それはむしろこの遺構が居住域外に営まれる属性に帰結する可能性がある。建設時の整地との関係は傾聴されるが、とらえられたのは3例にすぎない。横形態のものを甕棺墓とする例は広範に存在する。平城京の道路や側溝の例では人に由来する脂肪酸を検出したとする報告もある（臼杵1998）。建設時の祭祀を想定する場合、そうした類例との比較検討は必須と思われる。現段階では、他の例との形態的な類似や居住域との関係における共通性から、山王遺跡の横形態の土器埋設遺構も甕棺墓とみるのが妥当と思われる。道路での埋葬行為自体は文献上でも『日本霊異記』上巻に“寺の悪しき奴を埋め立てし衢（ちまた）”が確認でき、平

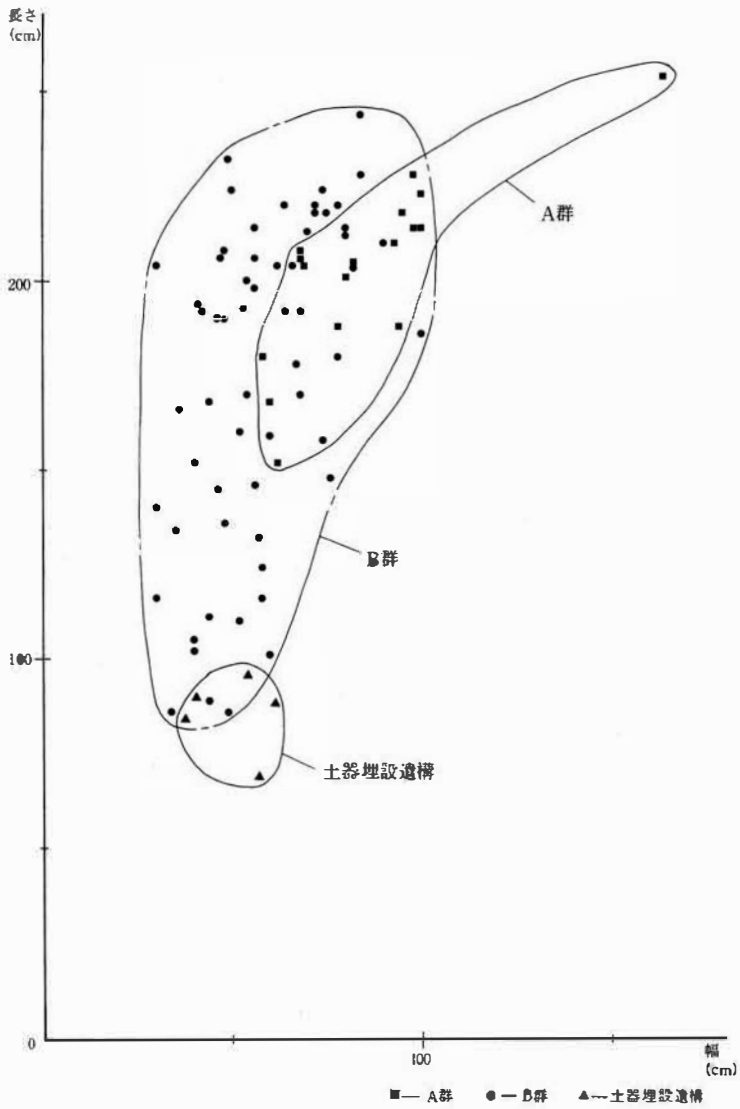
城京の例や山王遺跡八幡地区の平安時代の墓跡（佐藤・佐藤1997）など実例もある。横形態の土器埋設遺構と道路の関係は、今後、道路上での埋葬行為という点からの検討を要すと思われる。

D．土葬墓

A・B区中央から南で93基検出した。木棺の存在を確認したA群が21基、確認しなかったB群が72基ある。ただし、木棺の残存状況の悪さや確認の困難さをふまえると、B群が木棺墓ではないとは断言できない。その意味で、B群の埋葬方法は不明確であり、ア）木棺墓、イ）一部に木棺墓を含む土葬墓、ウ）木棺墓以外の土葬墓、の3通りの見方ができる。その点については土葬墓の特徴を検討しながらA・B群の比較も行い、最終的に考えることにする。

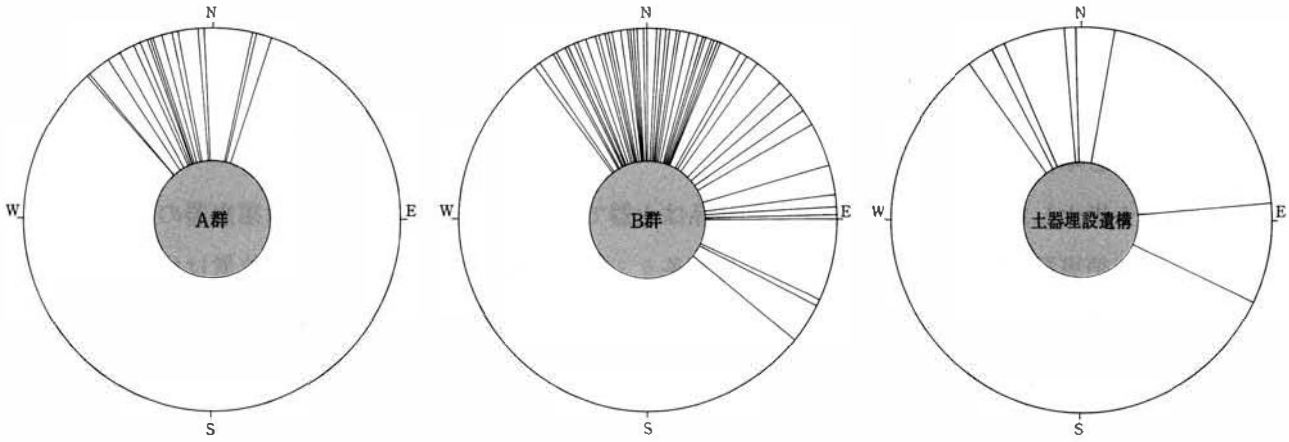
①形状・分布等の特徴

平面形と規模：第29・30図(38·41·42頁)ではA群のうち16基を図示した。掘方の平面形は隅丸長方形が主体で、他に長楕円形があるが、中間的な形もみられる。B群については第31図(43頁)で隅丸長方形（大・小)、長楕円形といった平面形が典型的に異なる3基を図示したが、他も（第28図：35·36頁）含めてみると中間的な形がやはり存在する。A・B群ともに土葬墓は主体をしめる隅丸長方形を基調とした形状と大きくみるのが無難と思われる。よって、形状の細分はしないことにする。



第49図　土葬墓・土器埋設遺構の規模

規模は長さ82～254cm、幅30～164cmであり、A・B群別ではA群が長さ152～254cm、幅58～164cm、B群が長さ82～244cm、幅30～100cmである。土葬墓と土器埋設遺構の規模を長さと幅に基づいてグラフ化すると第49図のようになる。全体的に切れ目なく度数が広がり、集中性は見出しがたいが、A・B群、土器埋設遺構別では多少の特徴がある。まず、B群が広範囲に分布するのに対し、A群の範囲は比較的狭い。A群は長さ・幅ともに大きい土葬墓にみられる傾向がある。次に、広がる度数のなかで土器埋設遺構は末端に位置している。それはその遺構を乳幼児の甕棺墓とみるうえで示唆的である。また、それをふまえて切れ目ない度数の広がりをみると、土葬墓が年齢



第50図　土葬墓・土器埋設遺構の方向

差や身体の大きさに基づいて造られたことも想定される。

ところで、以上のような形状・規模の土葬墓は古川市新谷地北遺跡や仙台市原遺跡、福島県兎喰遺跡、秋田県湯ノ沢F遺跡、青森県殿見遺跡などに類例がある（木皿・早川1992、平間1998、主浜1999、紺野・山内1986、石郷岡1984、石郷岡・西谷ほか1986、宇部1993…以下、これらの文献の編著者名は省略する)。このうち新谷地北・兎喰遺跡では規模の平均値が求められており、新谷地北遺跡が長さ170cm、幅63cm、兎喰遺跡が長さ198cm、幅87cmと算出されている。本遺跡の平均値は長さ183cm、幅65cmであり、同じ程度の規模といえる。

分布と方向：土葬墓はA・B区中央から南に分布する。そのうちA群はB区南西部のみに分布し、B群もB区南西部に集中する傾向がある。A・B群とで分布に違いはあるが、B区南西部への集中は同じである。したがって、むしろ土葬墓全体がB区南西部に集中するのであり、特にA群はそこに限られるという見方が妥当と思われる。B区南西部は調査区内で標高が最も低い場所であり、土葬墓は低地に向かうほど濃密に分布する傾向がある。A群をそこで検出したのも、低地で水位が高いために棺材が残りやすいことによる可能性がある。

第50図は土葬墓と土器埋設遺構の方向をグラフ化したものである。土葬墓はA・B群別にグラフ化した。A群はすべて南北方向で、その範囲はN－42°－WからN－18°－Eである。B群には東西方向もあるが、主体は南北方向がしめる。範囲はN－41°－WからE－39°－Sに広がるが、N－41°－WからN－23°－Eに集中しており、それはA群の範囲とほぼ重なる。したがって、分布と同様にA・B群の違いを強調するよりは、土葬墓全体が南北を基調として営まれているのであり、A群でそれが固定的という見方が妥当と考えられる。土葬墓の営造には南北方向が意識されていた可能性が強い。ただ、B区南西部の分布をみると（第28図：35·36頁)、真北に対して西に振れるものは西側に、東に振れるものは東側に多い傾向があり、それは地形が南西に張り出す微高地であることと付合する。よって、南北方向を意識しつつ、同時に地形的な規制も多少は受けていたと考えられる。

堆積土：A群は下から掘方埋土、棺上部崩落以前の棺内流入土、棺上部埋土の崩落土、棺上部崩落後の自然堆積土に、B群は下から人為的な埋土、自然堆積土に大別される。A・B群の違いは、木棺を認識したか否かによるものである。埋葬時における埋土自体はどちらも墓周辺の地山ブロックを多

く含む土であり、上部の自然堆積層の特徴もA・B群とに差異はない。なお、A・B群ともに認められることがある灰白色火山灰の再堆積は比較的多量であり、火山灰が降下した10世紀前葉に近い頃に堆積したと考えられる。

②副葬品と年代

副葬品：出土したのは12基と少ない。副葬品は土器であり、9基で土師器または須恵器の坏が各1点、3基で須恵器壺・広口壺、土師器坏・甕が各々1・2点副葬されていた。出土位置は中央部の少し南側が多いが、北側や北端部のものもある。A群について木棺との位置関係をみると、棺内中央やや南側の底面のものが2基、棺外北端の埋土と棺外（上部）中央の埋土直上のものが各1基ある。また、土器の置き方は正位のものが多いが、倒位のものもある。したがって、土器の副葬の仕方は中央付近に正位で置く傾向はあるが、必ずしも一律とはいえない。

ところで、12基のうち4基はA群、8基はB群の土葬墓である。総数ではB群が多いが、副葬品のある割合を群別に求めると、A群が21基中4基で19%、B群が72基中8基で11%であり、A群の出土率が高く、B群はその半分程度でしかない。副葬品の種類もA群が須恵器3点、土師器1点、B群が須恵器2点、土師器9点で、A群の須恵器主体に対してB群は土師器を主体とする。このようにA・B群には違いがあり、木棺墓であるA群の副葬品は量・質の点でB群を上回る。

年代：副葬品や重複関係が乏しく、土葬墓個別の年代特定は難しい。副葬品や特徴的な堆積土、重複関係の整理を通し、総体的に把握することにする。副葬品のうち土師器坏は前項「遺物について」でみたD類で、9世紀後半～10世紀前葉頃の3群土器にみられるものである。須恵器坏はⅢ類であり、3群土器の類例としてあげた山王遺跡多賀前地区3・4群土器に多く認められることから同じ頃のものと考えられる。須恵器壺・広口壺は福島県会津大戸窯産で、生産年代は壺が9世紀中葉頃、広口壺が9世紀後葉頃である。なお、A・B群の副葬品に年代的な差は特に見出せない。

堆積土については上層に灰白色火山灰が再堆積するものが10基ある。比較的多量な堆積で、10世紀前葉に近い頃に堆積したとみられることから、この10基はそれ以前のものといえる。重複関係については、土葬墓同士で4例（SK186→SK187、SK201→SK192、SK213→SK214、SK229→SK228）の重複があり、土葬墓の営造には多少の時間差が考えられる。一方、年代のわかる他の遺構との重複をみると、7・8世紀の竪穴住居跡と4基、8世紀頃のB群小溝と2基、9世紀頃のSD136・137と2基が重複しており、いずれも重複遺構より新しい。また、10世紀前葉頃のSD43・49、C群小溝とは9基が重複しており、すべて古いといった関係がある。

以上の整理をふまえて検討する。副葬品の土器の上限年代は9世紀中葉頃である。直前の9世紀前葉頃のものはなく、出土した破片資料にもほとんどみられない。9世紀以前の遺構との重複関係もふまえると、土葬墓の年代が9世紀前葉まで遡る可能性は薄い。一方、副葬品の下限年代は10世紀前葉頃である。その頃の灰白色火山灰との関係や、他の遺構との重複関係もふまえると、土葬墓の年代は10世紀中葉までは下らないとみられる。

さらに検討を進めると、副葬品の主体をしめる土師器・須恵器坏は9世紀後半から10世紀前葉頃の年代幅をもつものであり、その類例は山王遺跡多賀前地区3・4群土器に求められる。そこで注意さ

れるのは多賀前地区４群土器には赤焼土器坏も多く存在するのに対し、副葬品にはそれがないことである。赤焼土器坏が副葬に使われなかった可能性もあるが、破片資料にもほとんどみられない。土葬墓周辺には10世紀前葉頃のＳＤ49・235など赤焼土器を含む遺構があり、同じ頃に土葬墓も営まれていれば、遺物には赤焼土器も混入すると考えられる。よって、副葬に使われなかった可能性よりは、赤焼土器が増加する10世紀前葉頃より前に土葬墓は多く営まれており、副葬品の土師器・須恵器坏も９世紀後半を中心とする頃のものとみておきたい。こうした見方は、他の副葬品の年代や、灰白色火山灰との関係、10世紀前葉頃の遺構との重複とも付合する。したがって、土葬墓は９世紀中葉頃～10世紀前葉頃でも、９世紀後半を中心とする頃に営まれたと考えられる。

③木棺墓の構造とＢ群の埋葬方法

木棺墓の構造：残存が悪いが、木棺はすべて平面形が長方形を基調としており、厚さ2～5cmの板を組み合わせた箱形の木棺とみられる。規模は長さ124～196cm、幅40～88cmで、平均値は長さ166cm、幅51cmである。比較的残りのよいＳＫ175木棺（第29図：38頁）を中心に構造をみることにする。

ＳＫ175木棺は側板と木口板、底板からなる。蓋板の存否は不明である。また、棺下には横木と縦木、棺東脇には側板の押さえ板がある。側板と木口板は平面的に「日」状に組まれ、接合部に加工は特に認められない。釘等の接合具も出土していないので、木口板は側板の間に挟み込まれただけとみられる。底板は幅15cm程の板が長軸方向に2枚並んでいるのを一部確認しており、複数の板を長軸方向に並べて棺底としたとみられる。木口板と側板の関係、底板の状況、接合具の出土がないことは、この木棺の大きな特徴である。

こうした木棺は山形県南方遺跡（東根市史編纂委員会1989）、青森県殿見遺跡に類例がある。南方遺跡の木棺は保存がよく、「日」状に組まれた側板と木口板が明瞭に確認できる。底板は側板下端に通した桟木の上に、複数の板を長軸方向に敷き並べている。こうした構造からこの木棺は組合式箱形木棺と称されている。殿見遺跡の木棺も木口板が側板の間に挟まれており、釘は使われていない。底板は一枚板だが、側板は掘方底面の長辺部分を溝状にさらに掘込み、そこに複数の板を立て並べている。側板と木口板の関係や側板の状況から、殿見遺跡の木棺は埋葬地で組み立てられたとみられる。

釘等を用いずに「日」状に側板と木口板を組んだ木棺という点で、ＳＫ175木棺は南方・殿見遺跡の木棺と類似する。なかでも殿見遺跡の木棺が埋葬地での組立式であることは注意される。ＳＫ175木棺の側板は腐食のため枚数は不明であり、掘方底面の溝状の掘り込みもない。しかし、側板も木口板も棺底面より下から立ち上がっており、掘方埋土中につき立てられていた可能性が高い。また、ＳＫ175ではないが、ＳＫ162木棺には掘方底面に溝状の掘込みがある。よって、ＳＫ175木棺及びＳＫ162木棺は、殿見遺跡の木棺と同じく埋葬地で組み立てられたと考えられる。

ところで、木棺下の木材についてみると、ＳＫ175木棺の横木は棺底面に必ずしも接していない。縦木も細いものが3本あるにすぎない。よって、それらは底板を乗せる桟木ではない。横木は棺の外側に延びており、縦木は掘方底面の深い北半にある。埋葬地での組立式の木棺とみられることや、他の木棺墓の棺下材には井桁状や三角形状に置いたものがあることから推して、棺下材は組立式の木棺全体の平衡をとるためのものと考えられる。底板はこうした支持材を入れながら一度平らに埋め戻し

No.	遺構	種類	残存	法量(長×幅×厚：mm)	樹種	登録	写真図版	備考
1	SK170	底板	一部	600×340×1	モミ属	木1		
2	SK175	南木口板	一部	230×40×12	コナラ節	木2	21－5	
3	SK175	東側板	一部	414×54×10	クリ	木3	21－5	
4	SK175	西側板	一部	365×70×8	クリ	木4	21－5	
5	SK175	北木口板	一部	407×70×15	コナラ節	木5	21－5	
6	SK175	底板1	一部	(500×140×1)	－	木6		小片化
7	SK175	底板2	一部	(340×140×1)	モミ属	木7		小片化
8	SK175	東脇押え板	一部	1080×60×35	モミ属	木8	21－4	
9	SK175	棺下横木1	完存	550×径62	モミ属	木9	21－4	
10	SK175	棺下横木2	一部	370×68×15	モミ属	木10	21－4	
11	SK175	棺下横木3	完存	545×径57	モミ属	木11	21－4	
12	SK175	棺下横木4	一部	(370×45×15)	モミ属	木12		小片化
13	SK175	棺下横木5	完存	585×径54	モミ属	木13	21－4	
14	SK175	棺下縦木1	一部	150×18×5	モミ属	木14		
15	SK175	棺下縦木2	一部	(730×18×18)	モミ属	木15		小片化
16	SK175	棺下縦木3	一部	(120×18×3)	モミ属	木16		小片化
17	SK184	西側板	一部	178×61×12	モミ属	木17	21－6	
18	SK184	南木口板	一部	70×30×11	モミ属	木18	21－6	
19	SK184	棺下横木1	一部	455×径28～42	ブナ	木19	21－6	
20	SK184	棺下横木4	一部	150×25×12	モミ属	木20	21－6	
21	SK185	棺下材1	一部	(280×130×3)	－	木21		小片化
22	SK185	棺下材2	一部	97×35×6	モミ属	木22		
23	SK187	棺下縦木	ほぼ完存	1330×60×25	スギ	木23	22－1	
24	SK187	棺下横木1	ほぼ完存	770×径25～34	クリ	木24	22－1	
25	SK187	棺下横木2	ほぼ完存	580×径25～30	クリ	木25	22－1	
26	SK188	棺下材	ほぼ完存	430×径11～15	クリ	木26		
27	SK190	材1	完存	450×径40	モミ属	木28	21－7	
28	SK190	材2	完存	465×径45	モミ属	木29	21－7	
29	SK190	材3	完存	390×径28	モミ属	木30	21－7	
30	SK190	材4	完存	312×径40	モミ属	木31	21－7	
31	SK210	棺下横木1	一部	156×22×12	クリ	木32		
32	SK210	棺下横木2	ほぼ完存	452×径30	クリ	木33		
33	SK214	棺下横木1	完存	900×径60	クリ	木34	22－2	33～35
34	SK214	棺下横木2	完存	1050×径55		木35	22－2	は一木
35	SK214	棺下横木3	完存	905×径68		木36	22－2	

表1　棺材等一覧表

た土の上に並べられたと考えられる。

以上のような構造からＳＫ175は、①隅丸長方形の墓壙を掘り、②棺の平衡を保つための横木や縦木を入れながら棺の底面近くまで平らに埋め戻し、③複数の板を長軸方向に並べて底板とし、●側板と木口板を、側板の間に木口板を挟んで立てて周囲を埋め戻し、⑤遺体を納め、⑥（蓋を被せて）土をかける、といった行程で造られたと推定される。同じ構造とみられるものには、棺材の南西隅部と棺下の横木を検出したＳＫ184、長軸方向に底板が並ぶＳＫ170、掘方底面に溝状の掘込みをもつＳＫ162がある。ＳＫ184では蓋板の痕跡も検出した。その他の木棺墓の構造は不明だが、釘等の出土がないことや、棺下材やその痕跡を多く検出したことから、同じ構造の可能性が高いと思われる。

なお、木棺の樹種については表1に示した結果を得ている（註3）。ＳＫ175の側板はクリ、木口板はコナラ節、ＳＫ184は側板、木口板ともモミ属が使われており、棺下材にはモミ属とクリが多用されている。モミ属とクリが多い点については、木棺には針葉樹を使うことが多く、モミ属とクリが遺跡周辺に多く生育していたことに起因するという教示を得た。特別な材は使われず、周辺に多く生育する木が適宜、利用されている。

ＳＫ175木棺を中心に木棺墓の構造等をみてきた。木棺は釘等の接合具を用いずに板を組み合わせたもので、埋葬地での組立式とみられる。また、棺材に特別な材は使われず、周辺に多く生育する木が利用されていることから、検出した木棺は簡便な構造・材質の木棺といえる。

Ｂ群の埋葬方法：土葬墓の項の冒頭で述べたように、Ｂ群にはア）木棺墓、イ）一部に木棺墓を含む土葬墓、ウ）木棺墓以外の土葬墓、の3通りの見方がある。まず、この点を検討する。表2はこれまで見てきた土葬墓の特徴をＡ・Ｂ群別にまとめたものである。平面形や堆積土、年代に差異はない。分布と方向は異なるようにみえるが、各項目で既述したようにＡ・Ｂ群の本質的な違いではない。違いがあるのは規模と副葬品である。規模については第49図に示したように、Ａ群の範囲が比較的狭く、Ａ群は土葬墓のなかでも大きいものに認められる。一方、Ｂ群の範囲は広く、また分布や方向のようにＡ群の範囲に集中することがない。副葬品についてはＡ群が出土率が高く、須恵器を主体とするのに対し、Ｂ群の出土率はその半分程度で土師器が主体である。

このようにＡ・Ｂ群とには種々の特徴において共通性があるものの、規模と副葬品の点では明らか

	平面形	規模（cm）	分　布	方　向	堆積土	副葬品	年代
A群	隅丸長方形を基調とする	長さ：152～254 幅　：58～164	B区南西部	N－42°－W～N－18°－E	地山ブロックを含む埋土とその崩落土。及び上部に自然堆積土	出土率：19% 須恵器主体	9世紀後半を中心とする頃
B群	隅丸長方形を基調とする	長さ：82～244 幅　：30～100	A・B区中央～南 B区南西部に集中	N－41°－W～E－39°－S N－41°－W～N－23°－Eに集中	地山ブロックを含む埋土 及び上部に自然堆積土	出土率：11% 土師器主体	9世紀後半を中心とする頃

表2　土葬墓の特徴

な違いがある。したがって、先に示した見方のうちB群も木棺墓というア）の見方はできない。一方、B群が木棺墓以外の土葬墓というウ）も、種々の共通性の存在や木棺確認の困難さなどから選択できない。確認の困難さという意味では、例えば土師器を副葬品の主体とするB群においてＳＫ192のように大戸窯産の須恵器壺が副葬されていたものがあり、また、B群のＳK188・190・212ではA群の棺下材と同様の木材が検出されている。これらのB群では木棺は確認していないが、副葬品や検出した木材の特徴はA群に通じるものであり、それらが木棺墓であった可能性は否定できない。以上のことから、B群はイ）の一部に木棺墓を含む土葬墓とみておきたい。

なお、B群中の木棺墓の可能性を追求すると、上記のＳＫ188・190・192・212が可能性が高い。他のB群についての追求は難しいが、あえて追求すれば、木棺墓（A群）には規模が大きい、方向が南北方向という特徴があることから、その要件を満たす、または要件に近いものほど木棺墓の可能性が高いと思われる。逆に要件からはずれるものほど可能性は低くなるといえよう。

次に、9世紀頃における木棺以外の土葬の方法を、他の遺跡の例から検討することにする。まず、古川市新谷地北遺跡や福島県兎喰遺跡のように単に土をかけた土壙墓がある。両遺跡の土壙墓の平面形は隅丸長方形や長楕円形で、規模の平均値は新谷地北遺跡が長さ170cm、幅63cm、兎喰遺跡が長さ198cm、幅87cmである。一方、本調査区に隣接する山王遺跡八幡地区では、編物にくるんで埋葬した平安時代の墓跡2基が検出されている（佐藤・佐藤ほか1997）。長さ200cm、幅40～90cmの長方形の墓跡で、そのうちの1基では赤焼土器坏のほか、B群と同様の土師器坏が副葬されている。これらの例とB群とでは、平面形や規模が類似している。したがって、木棺以外のB群にはこうした方法がとられていたと思われる。B群で編物は検出していないが、木棺の残存の悪さや八幡地区が隣接地であることを考慮すると、その可能性も十分考えられる。

埋葬姿勢：具体的に検討可能なのは、人の歯牙を検出したA群のＳＫ170・195程度である。ＳＫ195では木棺内の北端部で1人分の上下の歯牙を正位の状態で検出した。木棺の規模（長さ176cm以上、幅52cm）と合わせみて、北を頭位とした仰向伸展葬と考えられる。ＳＫ170では北半部で2片の歯牙を検出しており、北を頭位としたと推定される。その他については、隅丸長方形を基調とした平面形から伸展葬が主体と思われるが、検討材料が少なく、詳細は不明である。

E．溝跡

62条あるが、規模や方向は様々で、遺物も一部を除いて少ない。遺物や重複関係から年代がある程度判明するのは以下のものである。

【ＳＤ40】2群の土器の主体をしめる須恵器坏Ⅱ類が出土したが、3群以降の土器は出土していない。よって、8世紀後葉から9世紀前半に埋没したとみられ、主に8世紀代に機能していたと考えられる。

【ＳＤ43】3群の土器のうち10世紀前葉頃の土器が出土したことから、その頃に機能していたと考えら

れる。

【ＳＤ49】前述のＳＤ43より古いが、堆積土上層に灰白色火山灰を含み、赤焼土器も出土している。したがって、10世紀前葉頃に埋没したと思われる。

【ＳＤ55】頸部外面に段の巡る土師器甕・甑、口縁部外面に回転ハケメと櫛歯状波状文が施された須恵器が出土している。また、重複するすべての溝跡や土葬墓より古く、2群以降の土器も出土していないことから古墳時代後期の溝と考えられる。

【ＳＤ134】赤焼土器が出土している。また、前述のＳＤ43に沿って、その9～10m東側を延びることから、ＳＤ43と同じ10世紀前葉頃のものと思われる。

【ＳＤ136・137・138】ＳＤ136は10世紀前葉頃に埋没したＳＤ49より古く、８世紀後葉から９世紀前半に埋没したＳＤ40と同じ頃のＢ群小溝状遺構より新しい。また、ＳＤ137・138はＳＤ40・49を含めて、ＳＤ40→138→137→49の重複関係がある。よって、ＳＤ136・137・138は９世紀頃のものと思われる。

【ＳＤ235】前項「遺物について」でみたように、出土遺物は後述のＳＤ236出土土器（９世紀後半頃）と前述のＳＤ43出土土器（10世紀前葉頃）との間の様相を呈している。また、堆積土上層には灰白色火山灰層が認められる。したがって、10世紀前葉頃に埋没した溝と考えられる。

【ＳＤ236】3群の土器のうち９世紀後半頃の土器が出土したことから、その頃と考えられる。

機能：ＳＤ40は東側の微高地上を逆「コ」字状に巡る溝で、東西33m以上、南北55m以上の範囲を囲んでいる。溝幅も1.0～2.3mと広い。堆積土は自然流入土で、3群の土器が含まれないことから、遅くとも９世紀前半には埋没しきっており、主に８世紀に機能していたとみられる。その頃の「コ」字の内側には住居群が営まれていることから、ＳＤ40はそれを囲む溝と考えられる。

ＳＤ43は、ＳＤ40より広い東西65m以上、南北115m以上の範囲を巡る10世紀前葉頃の溝である。ＳＤ40と異なり、微高地外側の低い場所を地形に沿って楕円形状に巡っている。また、この溝からＳＤ180・286・305・313が外側に分岐し、ＳＤ180は分岐後まもなく幅が広がり、底も浅くなって消滅する。よって、ＳＤ43は微高地周囲に掘られた排水路と考えられる。なお、ＳＤ43西辺の9～10m東側では、ＳＤ134が同じ方向に沿って延びており、微高地内を細分する溝とみられる。

Ｆ．土壙

57基あるが、形状や規模は様々で遺物も少ない。遺物から年代が判明するのは以下の土壙である。

【ＳＫ5】埋土から土師器坏Ｄ類と大戸窯のＭＨ－19窯式期の長頸瓶が出土している。赤焼土器はないことから、９世紀中葉～後葉頃と思われる。

【ＳＫ30・33】前項「遺物について」で述べた1群の土器が出土しており、古墳時代後期と考えられる。

【ＳＫ31】破片資料が多いが、土師器のみが出土した。坏・甕・甑があり、坏はＡ類、甕・甑は頸部外面に段が巡るものである。その様相は1群の土器と同じであることから古墳時代後期とみられる。

【ＳＫ34】前述のＳＫ33より古いことから古墳時代後期と考えられる。

Ｇ．小溝状遺構

通常、畑の痕跡とされるものである。検出した多数の小溝は、南北に延びるＡ群、東西に延びるＢ

群、北西から南東に延びるC群、北東から南西に延びるD群に大別される（第43図：61·62頁）。各群とも同じ群の小溝同士で２～４回の重複があることから、それぞれにある程度の期間、継続的に畑が営まれていたとみられる。年代は次のように考えられる。

【Ａ群】古墳時代後期のＳＤ55より古いものもあるが、本調査では古墳時代後期以前の遺構はみつかっていない。また、古墳時代後期のＳＩ23・26・47と方向が揃うものもある。最低2回は営まれたことを考慮すれば、年代は古墳時代後期と思われる。

【Ｂ群】８世紀代のＳＤ40の西辺から西に広がっている。方向もＳＤ40の西辺とほぼ直交しており、ＳＤ40と強い関係が認められる。したがって、年代も同じ８世紀頃と考えられる。

【Ｃ群】重複するすべての住居跡、及び８世紀代のＳＤ40より新しい。一方、10世紀前葉頃のＳＤ43とは重複せず、Ｃ群の分布はむしろＳＤ43に囲まれた範囲内に収まる。よって、年代はＳＤ43と同じ頃であるが、2～4回の重複を考慮して10世紀前葉を中心とした頃とみておきたい。

【Ｄ群】Ｃ群、及び10世紀前葉頃のＳＤ43より新しく、それ以降とみられる。

３．各時代の様相と特徴

●古墳時代後期（７世紀）

竪穴住居跡が５軒（ＳＩ23・26・28・47・95）、溝跡1条（ＳＤ55）、土壙4基（ＳＫ30・31・33・34）のほか、畑跡（Ａ群小溝）があり、調査区東側の微高地に集落が営まれている。この時代、砂押川南側の自然堤防上（山王遺跡八幡地区）には一定地域の基幹となる大規模な集落が営まれていた（後藤・村田ほか2001）が、北側の丘陵麓にも集落があることが判明した。

遺構の配置や方向をみると、南西に張り出した微高地の最も高い部分に住居群があり、その南東の低い場所を溝が北東から南西に延びる。住居と溝の方向は真北に対して13～31°東に振れる。畑は住居群の西～南側に地形に沿って回り込むように存在する。土壙は住居群の側にあるのはＳＫ30のみで、他は北西の最も離れた場所にある。こうした配置・方向は、南西に張り出した自然地形に沿うものである。また、遺構の東西の範囲は約30ｍと狭く、ＳＩ47・28より南側は畑となっていることからみると、検出したのは集落の末端部分と思われる。

本集落の遺構にはＳＩ26→ＳＫ30、ＳＫ34→ＳＫ33という重複があり、畑も2回以上営まれていることから、本集落はある程度の期間存続しており、その中で畑の作り替えなどの変遷があったとみられる。また、住居は形状や構造等の点で同じ特徴をもち、統一性がある。したがって、変遷過程で集落の居住者や性格にはあまり変化がなかったと思われる。

ところで、大集落がある山王遺跡八幡地区の遺物には、東北北部系統の土師器が含まれており、同地域との人的交流を含む関わりを示す遺物として注目されている（後藤・村田ほか2001）。そうした土師器には口縁端部が屈曲して直立気味となる坏、底部内面が丸い甕、口縁端部を四角に仕上げた甕・甑などがあるが、本集落でもＳＩ47、ＳＤ55、ＳＫ30・31・33・34で在地の土師器とともに出土している。また、ＳＩ26・47、ＳＫ30では黒曜石製石器も出土しており、これらの遺物は直接か、間接かは不明であるが、本集落が東北北部地域と関わりを持っていたことを示すと考えられる。

②奈良時代中葉～平安時代初頭頃（８世紀中・後葉）

竪穴住居跡が６軒（ＳＩ21・22・24・25・27・62)、溝跡１条（ＳＤ40）のほか、畑跡（Ｂ群小溝）があり、前代同様、微高地に集落が営まれている。

遺構の配置は微高地上に住居群があり、それを逆「コ」字状にＳＤ40が囲む。ＳＤ40西辺の外側には畑が広がる。方向は、住居とＳＤ40西辺がほぼ真北、畑がほぼ真東、ＳＤ40南・北辺は東に対してそれぞれ南・北に振れる。重複についてはＳＩ22→ＳＩ21の新旧がある。また、遺物からＳＩ24・27が８世紀中葉頃、ＳＩ21・25・62が８世紀後葉頃とみられる。畑も2回以上営まれており、この時代の集落でも住居や畑の作り替えといった変遷がある。一方、住居の形状や構造、規模は一様ではなく、ＳＩ62のように工房の可能性が推測されるものもある。

逆「コ」字状の溝を区画として内側に居住域、外側に耕作域という配置は、前代の集落とは異なる特徴である。また、微高地上が居住域、低地が耕作域という使い分けは地形をある程度反映しているが、各遺構の方向は南西に張り出す地形とは合わず、他の規制があると考えられる。その点については神亀元年（724）頃に本調査区の東側の丘陵に多賀城が造営されたことと関係すると思われる。本調査区は多賀城跡外郭西門の約150ｍ南西にあり、西門近くに位置する。また、多賀城の政庁中軸線及び外郭西辺の方向は概ね真北であり、この時代の集落の遺構の方向と同じか、直交している。ＳＤ40南辺の方向（Ｅ－9°－Ｓ）も、多賀城外郭南辺の方向（Ｅ－7.5°－Ｓ）に近いことから、その規制を強く受けているとみられる。以上のことから、この時代の集落は前代の集落の延長とはみなしがたい。前項の「遺物について」でもふれたが、出土土器も1群：7世紀、2群：８世紀中・後葉でまとまりがあり、1群～2群の連続性は薄い。本集落は、前代の集落の廃絶後に多賀城が造営され、その影響下で奈良時代中葉頃に成立した集落と考えられる。

なお、この時代における多賀城の城下では南北・東西大路は構築されているが、方格地割は形成されていない。城下の様子もあまり明らかではないが、自然堤防上の山王遺跡八幡地区やそれに連なる本遺跡市川館前地区で集落が検出されている。集落のある場所は古墳時代にも集落が営まれた微高地上であり、本調査区の場合も同じである。また、本調査区は外郭西門の近くにあり、多賀城との利便性もよい。そうした立地上に集落が営まれたことは、方格地割施行前の城下の様子や、地割施行後も含めた城下の発展過程を検討するうえで注意を要すると思われる。

③平安時代（9～10世紀前半）

９世紀代に掘立柱建物跡1棟（ＳＢ135)、溝跡3条（ＳＤ136・137・138)、９世紀後半を中心とした頃に土器埋設遺構8基、土葬墓93基、溝跡1条（ＳＤ236)、土壙1基（ＳＫ5)、10世紀前葉を中心とした頃に溝跡4条（ＳＤ43・49・134・235）と畑跡（Ｃ群小溝）がある。ＳＢ135以外は、居住に利用されるような施設がない。９世紀後半を中心とした頃には調査区中央から南に土器埋設遺構と土葬墓が造られ、10世紀前葉頃には中央部に畑が営まれている。土器埋設遺構と土葬墓は合わせて100基を越えるまとまったもので、同じ頃の可能性がある遺構には溝と土壙、畑などがある程度にすぎない。また、土葬墓には重複があることから、それぞれ時間差をおいて造られており、９世紀後半頃のこの場所は継続的に墓が営まれる墓域となっていた。

このように平安時代は居住域を中心とした前代までとは異なり、墓域や生産域となっている。その変化は9世紀以降、多賀城の城下に方格地割が形成され、その内部が人々の生活等の中心となったことが背景に考えられる。地割内では、東西大路沿いの区画に上級役人の邸宅があり、それより離れた区画に中・下級役人や庶民の住まいなどがあったとみられている（菅原・佐藤ほか1996)。それに対して、後述するように本調査区には方格地割が施行されず、この場所は地割外に位置するようになった。本来、外郭西門に近い微高地のこの場所は、前代に居住域であったように城下でも好適な立地にあったとみられる。しかし、方格地割の外側に位置するようになり、人々の生活等の中心も地割内となるにしたがい、その価値は相対的に低下したと考えられるのである。

ただし、そうした価値の低下を考慮しても、墓域や生産域が外郭西門の近くに存在したことは不可解である。また、西門はこの頃に掘立式から礎石式に建て替えられている（Ⅲ期→Ⅳ期)。現時点でこれらの疑問に解釈はえていない。方格地割施行後の西門や、墓域や生産域が目前に広がりながら礎石式に建て替えられた西門の位置づけは今後の検討課題と思われる。

4．多賀城下の墓域

100基を越える古代の墓跡は、県内では古川市新谷地北遺跡に例があるのみで珍しい。しかも、それは木棺墓を含むものであり、また、場所が国府多賀城下であることから国府の様相を伺ううえでも興味深い。この墓域についてはさらに検討することにする。

城下における立地：墓域が形成された9世紀後半頃、多賀城下の方格地割は東西方向にかなりの範囲に及ぶようになるが、南北の範囲は東西大路からそれぞれ2～3区分にすぎない。本調査区との関連では（第2図：3頁)、南側の砂押川を隔てた山王遺跡八幡地区には北3道路があり、地割が存在する。一方、本調査区では道路遺構は検出していない。両地区の間にある砂押川部分の状況は不明だが、八幡地区でも本調査区でも平安時代の砂押川は検出しておらず、本調査区南半の地形が南と西に低いこともふまえると平安時代の砂押川は現在とほぼ同じ位置を流れていたと考えられる。

こうした状況から、道路による方格地割は砂押川の手前まで施行され、川を隔てた本調査区には及ぼされなかったとみられる。そして、この場所には多くの墓壙が営まれた。墓壙は川に近い調査区南西部ほど濃密に分布する。この墓域は方格地割外の河原に形成された墓域といえる。

被葬者の性格：構造や副葬品を中心に、類例との比較も通じて検討する。構造と副葬品についてまとめると、墓はすべて土葬墓であり、木棺墓と土壙墓がある。木棺墓は付近の木材を用い、釘等の接合具を使わずに現地で組み立てた簡便なものである。土壙墓には単に土をかけたものの他に、遺体を編物等でくるむものがある可能性がある。副葬品がある墓は少なく、また、1基につき1・2点の土器がある程度である。在地の土師器・須恵器坏が主体だが、福島県会津大戸窯産の須恵器の壺類も2点ある。副葬品は木棺墓にある割合が比較的高く、土壙墓では低い。また、木棺墓では須恵器、土壙墓は土師器が主体で、年代はともに9世紀後半頃のものである。

木棺墓と土壙墓には構造と副葬品に量・質の違いがあり、木棺墓が土壙墓を上回っている。土葬墓全体が9世紀後半を中心とする頃という比較的狭い年代に営まれたことからすると、その違いは階層

差の反映と考えておきたい。その場合、副葬品の有無を含めて土葬墓には、a）副葬品のある木棺墓、b）副葬品のない木棺墓、c）副葬品のある土壙墓、d）副葬品のない土壙墓があり、a）が最も高く、d）が最も低い階層ということになろう。

次に、同じ年代頃の類例をみてみる。木棺墓については、県内では仙台市原遺跡に釘状鉄製品の出土から、その可能性が指摘されるものが2基あるのみである（田中2002）。そのうち1基では土師器坏と刀子が少量副葬されている。県外では秋田県湯ノ沢F遺跡の40基の土壙墓が、基本的に木棺を使用したとみられている。しかし、その構造は残存状況が悪いため、あまり明らかではない。副葬品は土器、鉄刀、鉄鏃、刀子、馬具、帯金具、漆皮箱など豊富である。一方、畿内には木棺墓の類例が多くみられる（黒崎1980、海邊1999）。それらをみると、木棺墓は木炭・粘土・木枠組・石組で棺を覆う重厚な構造をもつものが比較的多く、多数の釘の出土から木棺自体もしっかりしたものとみられる。副葬品も質・量ともに豊富である。そうした木棺墓は島根県馬場遺跡、同県長峯遺跡、山口県岩淵遺跡、新潟県柿崎古墓（中川・仁木2001、岡崎1986、大村ほか2001、石川ほか2001）など、少数ではあるが地方にも散見し、馬場遺跡では社会・経済的に地位の高い人物を被葬者に想定している。

一方、土壙墓は質・量ともに副葬品が貧弱とされている（海邊1999）。県内や近県の例である古川市新谷地北遺跡、福島県兎喰遺跡をみると、副葬品は少なく、一般的な竪穴住居跡で出土する坏や僅かな鉄製品がある程度である。副葬品がないものも多い。兎喰遺跡ではこうした副葬品のあり方や近辺に官衙遺跡もないことから、被葬者を一般集落民とみている。

類例と比較すると、本遺跡の木棺墓は構造的に簡便なものであり、副葬品も貧弱である。副葬品のある木棺墓でも、その被葬者を馬場遺跡のような階層の高い人物とみるのは無理がある。また、先述のように本遺跡と同じ構造の木棺墓は青森県殿見遺跡にあり、そこでは木棺墓を含む土壙墓9基の副葬品の少なさから、木棺墓と副葬品の豊富な湯ノ沢F遺跡との比較を通じて、両遺跡の被葬者に階層の差を考えている。

殿見遺跡、湯ノ沢F遺跡ともに被葬者の具体的な階層は明示されていないが、本遺跡の土葬墓のあり方や副葬品の様相は殿見遺跡に類似しており、被葬者も同じ程度の階層と考えられる。そして、本遺跡や殿見遺跡の副葬品の様相は、被葬者を一般集落民とする兎喰遺跡の様相に最も近いと思われる。

以上のことから、本遺跡の場合、木棺墓と土葬墓、副葬品の有無や質によって被葬者間に多少の階層差は認められるが、全体的にはあまり高い階層は想定できない。本遺跡が国府多賀城下に立地する点を考慮すれば、被葬者は城下で都市生活を営むごく一般的な庶民が主体と考えられる。比較的階層が高いと思われる木棺墓や副葬品のあるものでも、国衙の雑任層やその係累程度の階層とみておきたい。

なお、平安時代、庶民にとって墓は必要不可欠ではなく、遺骸は放置・遺棄に近い状態だったとする見方もある。（田中1975・1978）。実際、平城京の東堀河や平城京の南に位置する稗田遺跡の河川跡では人骨が検出されており（奈良県教育委員会1977）、多賀城下でも道路側溝や河川跡で遺棄された可能性のある人骨が出土している（菅原・佐藤ほか1996）。しかし、京中の遺棄は身寄りのない病者や孤児、捨子など、容易に死滅する人々で、都市の下層住民から多く発生したとする指摘（西山1991）

があり、遺棄人骨はそうした人々のものと考えられる。庶民でも簡便な墓壙に副葬品もなく埋葬されたとする見方もあり（五十川1996）、東日本一帯に多く分布する火葬墓や土壙墓等（東日本埋蔵文化財研究会 1995）の存在からも、通常の家族・集団生活をする庶民は墓を営んでいたと思われる。

多賀城下の墓域：墓域は方格地割外の河原に形成されたものであり、被葬者は城下で都市生活を営む庶民が主体とみられる。こうした墓域は、平城京や平安京など都城における庶民の墓域と類似する。都城の葬地の原則は京外であり（註４）、天皇以下貴族官人の葬地は丘陵地に、庶民の葬地は河原に営まれていた（五十川1996、金子1997、山田1994）。平安京では鴨川等の河原が庶民の葬地で、承和9年（892）に鴨河原が腐乱死体で溢れていた様子や貞観年中（859～877）に箸売りの老父を鴨川の東に埋葬した事例が確認できる（註５）。貞観13年（871）には桂川の河原周辺での無作為な耕作を禁止し、旧来通り庶民の葬送地とする太政官符が出されており、国家的な規制も行われていた（註６）。

平安時代の多賀城下については、都市計画の根本をなす方格地割が検出されたことから都城との類似性が認められ、近年では方格地割地域における地区構成や交通体系、都市祭祀空間の設定など都市の諸条件の検討によって、多賀城を古代地方都市と位置づける見方も示されている（平川1999）。本調査で検出した城下の墓域は、立地や被葬者の点で都城の墓域とよく似ており、都城と同じ構造をとるものの1つと考えられる。なお、城下では方格地割内でも墓跡を検出している（佐藤・佐藤ほか1997）。しかし、その数は少なく、また本調査によって墓域の存在も明らかになった。それらのことからみると、多賀城下でも都城と同じような墓域に関する規制が行われていた可能性もある。

５．まとめ

1．本調査では掘立柱建物跡4棟、竪穴住居跡13軒、土器埋設遺構8基、土葬墓93基、溝跡62条、土壙57基のほか、多数の小溝状遺構を検出した。それらには古墳時代後期（7世紀）、奈良時代中葉～平安時代初頭（8 世紀中・後葉）、平安時代（9・10世紀前半）のものがある。遺物は土師器・須恵器・赤焼土器を中心に、弥生土器、灰釉陶器、瓦、土・鉄・石・木製品が出土した。

2．古墳時代後期には調査区東側の微高地に集落が営まれている。集落は竪穴住居、溝、土壙、畑（小溝状遺構）で構成されており、その配置や方向から自然地形に沿って営まれた集落とみられる。この時代、砂押川南側の自然堤防上には大規模な集落が営まれていたが、北側の丘陵麓にも集落があることが判明した。なお、遺物には東北北部系統の土師器や黒曜石製石器も含まれている。

3．奈良時代中葉～平安時代初頭にも竪穴住居、溝、畑が営まれている。住居は、微高地上を逆「コ」字状に巡る溝で囲まれ、その外側には畑が広がる。遺構の方向は東側の丘陵上に造営された多賀城の規制を強く受けており、遺物も前代との連続性が薄いことから、古墳時代後期の集落廃絶後に多賀城の影響下で新たに成立した集落とみられる。

4．9～10世紀前半頃の平安時代には土器埋設遺構や土葬墓、溝、畑が営まれており、墓域や生産域となっている。墓域は土器埋設遺構と木棺墓を含む100基を越える墓からなり、9 世紀後半を中心とする頃に営まれている。多賀城下の方格地割外の河原に形成された墓域であり、平城京や平安京といった都城の京外の河原に営まれた庶民の墓域と類似している。

【註】

註１　福島県会津大戸窯産の須恵器の同定・年代については、会津若松市教育委員会の石田明夫氏にご教示をいただいた。

註２　註１と同じ。

註３　樹種同定は㈱古代の森研究舎に業務委託して行った。その際、本文に記したようなご教示をいただいた。

註４　日本思想大系３『律令』喪葬令第廿六　皇都条　（岩波書店）

註５　新訂増補国史大系『続日本後紀』承和九年十月甲戌(14)条　（吉川弘文館）
　　日本古典文学大系69『本朝文粋』九　紀納言白箸翁詩序一首　（岩波書店）

註６　新訂増補国史大系『類聚三代格』巻十六　貞観十三年閏八月廿八日太政官符　（吉川弘文館）

【引用・参考文献】

吾妻俊典（2000）：「古代陸奥国におけるロクロ土師器の普及　多賀城跡・桃生城跡・伊治城跡出土土器の検討」『2000年度東北史学会・秋田大学史学会合同大会〈考古学部会〉資料』

安倍辰夫・平川　南編（1989）：『多賀城碑　その謎を解く』雄山閣出版

天野順陽（1999）：「名生館遺跡」『名生館遺跡　下草古城本丸跡ほか』宮城県文化財調査報告書第181集

五十川伸也（1996）：「古代・中世の京都の墓」『国立歴史民俗博物館研究報告』第68集

石川智紀ほか（2001）：『新保遺跡』新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第103集

石郷岡誠一（1984）：「湯ノ沢Ｆ遺跡」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』

石郷岡誠一・西谷　隆（1986）：「湯ノ沢Ｆ遺跡」『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』

井上克弘・山田一郎（1990）：「東北地方を覆う古代の珪長質手テフラ“十和田－大湯浮石”の同定」『第四紀研究』29－2

岩淵康治・田中則和（1976）：『安久東遺跡発掘調査概報』仙台市文化財調査報告書第10集

臼杵　勲（1998）：「平城京左京七条一坊」金子裕之編『日本の信仰遺跡』雄山閣出版

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14号

宇部則保（1993）：『殿見遺跡発掘調査報告書Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第57集

大村秀則ほか（2001）：『岩淵遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第24集

岡崎雄二朗（1986）：『中竹矢後１号墳　長峰遺跡』

海邉博史（1999）：「畿内における古代墳墓の諸相」『古代文化』第51巻　第11号

金子裕之（1997）：『平城京の精神生活』角川書店

菊地逸夫・庄司　敦ほか（1990）：『利府町郷楽遺跡Ⅱ　－仙塩道路関連遺跡発掘調査報告書－』宮城県文化財調査報告書第134集・利府町文化財調査報告書第5集

木皿直幸・早川英紀（1992）：「新谷地北遺跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第146集

黒崎　直（1980）：「近畿における８・９世紀の墳墓」『研究論集Ⅵ』奈良国立文化財研究所学報第38冊

（財）群馬県埋蔵文化財事業団（1988）：『田端遺跡』上越新幹線関係埋蔵文化財調査報告第９集

紺野光夫・山内幹夫（1986）：「兎喰遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告21』福島県文化財調査報告書第163集

後藤秀一ほか（1994）：『山王遺跡八幡地区の調査　－県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅰ－』宮城県文化財調査報告書第162集

後藤秀一・村田晃一ほか（2001）：『山王遺跡八幡地区の調査２　－県道「泉－塩釜線」関連調査報告書Ⅳ－　古墳時代後期ＳＤ2050Ｂ河川跡編』宮城県文化財調査報告書第186集

後藤秀一・柳澤和明（1991）：「古代東北の官衙多賀城」『月刊文化財』第335号

佐藤則之・佐藤憲幸ほか（1997）：『山王遺跡Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第174集

主浜光朗（1999）：『原遺跡　－第3次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第240集

白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所

菅原弘樹・佐藤憲幸ほか（1996）：『山王遺跡Ⅳ　－多賀前地区考察編－』宮城県文化財調査報告書第171集

高倉敏明（1980）：『館前遺跡　－昭和54年度発掘調査報告－』多賀城市文化財調査報告書第１集

多賀城市史編纂委員会（1991）：『多賀城市史』第４巻　考古資料
田中久夫（1975）：「文献にあらわれた墓地」『日本古代文化の探求　墓地』社会思想社
田中久夫（1978）：『祖先祭祀の研究』弘文堂
田中則和（2002）：「陸奥国府とその周辺における霊場と墓所」五味文彦・齋木秀雄編『中世都市　鎌倉と死の世界』高志書院
千葉孝弥（1994）：「多賀城周辺の道路遺構」『季刊考古学』第46号
千葉孝弥ほか（2001）：『市川橋遺跡　－城南土地区画整理事業に係わる発掘調査報告書Ⅰ－』多賀城市文化財調査報告書第60集
千葉孝弥・鈴木孝行（2002）：『市川橋遺跡　－城南土地区画整理事業に伴う発掘調査略報４－』多賀城市文化財調査報告書第67集
千葉孝弥・鈴木孝行ほか（1997）：『山王遺跡Ⅰ』多賀城市文化財調査報告書第45集
中井一夫（1977）：「稗田遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1976年度』
中川　寧・仁木　聡（2001）：『馬場遺跡発掘調査報告書』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14
中野裕平・佐藤敏幸（1990）：『須江関ノ入遺跡　－工業団地造成に伴う発掘調査概報－』河南町文化財調査報告書第４集
西山良平（1991）：「〈王朝都市〉の病者と孤児」上田正昭編『古代の日本と東アジア』
沼山源喜治（1981）：「土師器合口甕棺葬について」『考古学雑誌』第66巻　第4号
早坂春一・阿部　恵（1980）：「手取遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第63集
東日本埋蔵文化財研究会（1995）：『東日本における奈良・平安時代の墓制　－墓制をめぐる諸問題－』
東根市史編纂委員会（1989）：『東根市史』別巻上　考古・民俗篇
平川　南（1999）：「古代地方都市論　－多賀城とその周辺－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第78集
平間亮輔（1998）：『原遺跡　－第１・２次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第229集
古川一明・佐久間光平ほか（2001）：『市川橋遺跡の調査　－県道『泉－塩釜線』関連調査報告書Ⅲ－』宮城県文化財調査報告書第184集
宮城県教育委員会（1987）：『硯沢・大沢窯跡　－仙台－松島道路建設関係遺跡調査報告書－』宮城県文化財調査報告書第116集
宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所（1982）：『多賀城跡　政庁跡　本文編』
宮城県多賀城跡調査研究所（1986）：「第48次調査」『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1985
宮城県多賀城跡調査研究所（1996）：「第66次調査」『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1995
宮城県多賀城跡調査研究所（2001）：「第72次調査」『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報2000
村田晃一ほか（1998）：『山王遺跡町地区の調査　－県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅱ－』宮城県文化財調査報告書第175集
森　貢喜（1983）：「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ』宮城県文化財調査報告書第93集
山田一郎・庄司貞雄（1980）：「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1979
山田邦和（1994）：「墓地と葬送」角田文衛総監修『平安京提要』角川書店

遺構属性表

遺構名	構造	規模（間）	総長（m）	柱間寸法（m）		柱穴平面形と規模（cm）				柱痕跡（cm）	方向（°）	重複関係
						平面形	長軸	短軸	深さ			
SB63	東西棟	2×1	3.9×2.6	西から2.0・1.9	2.6	隅丸長方形	35～65	30～55	26	径20	E－3°－S	SI62→C群小溝→SB63
SB69		2以上×1以上	(4.0)×(1.8)	北から1.8・2.2	北1.8	楕円形	35～45	22～35	28	径15	N－5°－E	
SB135	東西棟	3×2	6.3×4.8	東から2.2・2.0・2.1	2.4m等間	隅丸長方形	54～75	50～70	54	径20	E－2°－S	SK133→SB135
SB282		1以上×1以上	(2.7)×(2.2)	南2.7	西2.2	楕円形	25～30	24～28	27	径10	N－7°－E	

掘立柱建物跡属性表

遺構名	平面形	規模（南北×東西：m）	壁(cm)	主柱穴	周溝	カマド	方向（°）	重複
SI21	方形	4.9×5.0	20	4	ほぼ全周、壁材痕跡あり	北辺中央西寄り	N－2°－W	SI22・A群小溝→SI21→SK120・C群小溝
SI22	長方形	(3.6)×(3.5)	－	－			N－2°－E	SI22→SI21・SK32
SI23	方形	4.3×4.5	5	4	東・西・北辺に存在、壁材痕跡あり	東辺中央	N－16°－E	SI23→C群小溝
SI24	方形	3.4×3.5	10	4	四辺に存在、壁材痕跡あり	(北辺中央)	N－3°－W	SK115→SI24→SD94・C群小溝
SI25	方形	4.0×4.3	15	4	ほぼ全周、壁材痕跡あり	東辺の南	N－3°－E	SI26・47→SI25→C群小溝
SI26	方形	5.2×5.3	10	4	東・西・南辺に存在、壁材痕跡あり	北辺中央	N－18°－E	SK116→SI26→SI25・SK29・30・51・52・C群小溝
SI27	長方形	(5.5)×5.0	16	4	東西・北辺に存在、壁材痕跡あり	北辺中央	真北	SI95・SK96→SI27→SX19・SD43・48・99・SK97
SI28	長方形	(2.5)×(1.9)	14	－	東西・北辺に存在		N－14°－E	
SI47	長方形	(6.2)×6.3	7	4	東・北辺に存在、壁材痕跡あり	北辺中央東寄り	N－13°－E	SK102→SI47→SI25・SD40・SK117
SI62	長方形	5.3×3.8	8	－			N－4°－E	SI62→SB63・SK35・109・C群小溝
SI95	(長方形)	－	2	(4)		北辺	N－11°－E	SI95→SI27・SD43・48・99・SK97
SI100	(長方形)	(3.0)×3.5	－	1	東・西・北辺に存在		N－2°－W	SK103→SI100→SD40・48
SI131	(長方形)	3.8×(3.5)	－	不明			N－6°－E	SI131→SD40・SK259

竪穴住居跡属性表

遺構名	長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)	断面形	方向（°）	重複関係	堆積土などの特徴
SD36	3.5	90	40	45	U字形	E－23°－N	SD36→A・C群小溝	地山ブロックを含む黒褐色シルト（人為）
SD38	(57.5)	30～110	15～40	25	U字形	N－0～14°－W	SD38→SD40・105・250、D群小溝	黒褐色シルト主体（自然）
SD40	(85.5)	100～230	40～70	60	逆台形	本文参照（46頁）	本文参照（46頁）	本文参照（46頁）
SD43	(170.0)	100～210	70～140	65	U字形	本文参照（48頁）	本文参照（48頁）	本文参照（48頁）
SD48	(52.0)	70～110	35～70	40	U字形	E－18°－N	本文参照（50頁）	地山ブロックを多く含む黒褐色シルト（人為）
SD49	(76.2)	90～170	20～80	65	U・V字形	E－20°－N	本文参照（50頁）	本文参照（50頁）
SD50	(38.6)	60～105	35～45	40	逆台形	E－21°－N	本文参照（50頁）	本文参照（50頁）
SD53	(2.6)	30～40	10～20	10	逆台形	N－35°－W	SD53→SD43	地山ブロックを多く含む暗灰黄色シルト（自然）
SD54	(2.5)	30	10～15	20	U字形	N－35°－W	SD53→SD40・43	地山ブロックを多く含む暗灰黄色シルト（自然）
SD55	(31.8)	80～170	30～130	25	U字形	N－31°－E	本文参照（51頁）	地山砂を多く含む黄灰色粘土質シルト（自然）
SD57	(2.4)	160	70	45	U字形	N－19°－W	SD55→SD57	灰黄褐色粘土質シルト（自然）
SD58	(4.3)	220	－	45	－	N－8°－W	SD58→SK96	
SD61	4.3	80～95	50～70	25	逆台形	E－11°－N	SD61→A・C群小溝	黒色粘土質シルト（自然）
SD70	(23.8)	60～120	45	40	U字形	N－6°－W、N－37°－E	SD49、SK156→SD70→SD43	火山灰ブロックが混じる灰オリーブ色砂質シルト（自然）
SD72	(4.8)	50～100	30～40	35	逆台形	E－0～20°－N	SK46→SD72	地山ブロックを多く含む黒褐色シルト
SD73	(2.4)	130～140	35～60	40	U字形	－	SD40、SK77・121→SD73→SD49	黒褐色砂質シルト（自然）
SD76	(1.2)	110	50	40	U字形	N－32°－E	SK77→SD76→SD49、SK119	暗灰黄色砂質シルト（自然）
SD94	5.4	40	10～20	20	U字形	N－6°－E	SI24→SD94→C群小溝	黒褐色シルト（自然）
SD99	(2.4)	25～30	10～15	20	U字形	E－3°－S	SI27・95、SK97→SD99→SD43	黒色シルト（自然）
SD104	3.4	35～60	20～30	20	U字形	E－16°－N	SD250、D群小溝→SD104	暗灰黄色シルト（自然）
SD105	(3.6)	30	10	5	U字形	E－13°－N	SD38→SD104	黒褐色粘土質シルト（自然）
SD106	(2.9)	45～50	20～25	10	U字形	E－19°－N	SD106→D群小溝	
SD107	(8.4)	35～50	20～40	20	U字形	E－12°－N	D群小溝→SD107	火山灰と地山ブロックを含む暗灰黄色シルト
SD108	60	25～60	10～50	10	U字形	E－15°－S、N－18°－W	SD108→C・D群小溝	地山ブロックを含む黒色粘土質シルト
SD113	(12.4)	15～30	5～10	10	U字形	N－11°－E、E－10°－S	SK74→SD113→C群小溝	地山ブロックを含む黒色シルト（人為）
SD134	(43.0)	20～40	10～25	5	U字形	真北、N－5°－E	本文参照（51頁）	黒色粘土（自然）
SD136	(87.6)	40～110	25～60	25	逆台形	真北、真東	本文参照（51頁）	灰黄褐色粘土や黄灰色粘土質シルト（自然）
SD137	45.0	60～135	40～60	50	本文参照	N－6～32°－W	本文参照（52頁）	地山ブロックを含む灰黄褐色シルト（自然）
SD138	(3.7)	130～220	40～60	45	U字形	真北、E－12°－N	SD40→SD138→SD137、C・D群小溝	地山土粒や炭化物を含む黒褐色粘土（自然）
SD153	(79.6)	70～140	25～70	55	逆台形	本文参照（52頁）	本文参照（52頁）	本文参照（52頁）
SD166	10.5	70～100	40～60	25	U字形	E－44°－N、N－39°－W	SD153→SD166	地山砂を含む褐灰色シルト（自然）
SD167	(21.2)	30～90	20～80	10	U字形	E－0～15°－S	SD136・137・153、SX157、SK155→SD167	黒色粘土（自然）
SD172	(13.6)	90～150	35～50	50	逆台形	E－22°－N	SD43・49→SD172	地山砂粒を含む黒褐色粘土質シルト（自然）
SD178	5.4	80～100	45～60	10	U字形	N－40°－E		
SD179	(5.0)	65～80	40	15	U字形	E－6°－N	SD179→SK287	
SD180	(12.5)	80～240	40～170	20	逆台形	N－17°－E	SD153・236→SD43・180	火山灰を含む褐灰色シルト（自然）
SD197	(15.7)	50～140	20～30	40	逆台形	E－28°－N	SD49・206・207・295・306→SK196、SD197	スクモ層を互層に挟む黒褐色粘土（自然）
SD198	(5.2)	100	40～50	45	逆台形	E－9°－N	SD43、SK170→SD198	地山ブロックを含む黒褐色シルト（自然）
SD205	(1.3)	30～50	20	5	U字形	E－42°－N	SD205→SD43・172	
SD206	(22.1)	60～200	30～50	25	U字形	N－22°－W	本文参照（55頁）	灰黄褐・褐灰・暗灰黄色粘土（自然）
SD207	(33.0)	100～185	60～100	40	逆台形	N－27°－W	SD207→SD49・206、SK309	灰黄褐・褐灰・暗灰黄色粘土（自然）
SD209	(21.8)	50～90	15～35	15	U字形	E－5°－S	SD209→SD311	地山粒を含む黄灰色粘土（自然）
SD235	(16.0)	100～370	40～110	85	逆台形	N－29°－E	SD135・236→SD235	本文参照（55頁）
SD236	(18.0)	110～200	40～120	50	U字形	N－5°－E	SD236→SD180・235	本文参照（55頁）
SD237	2.4	80	30	20	U字形	E－25°－S	SD172→SD237	地山粒を含む黒褐色粘土質シルト（自然）
SD250	(34.4)	60～180	20～120	45	逆台形	E－27°－N	SD38・43→SD250→SD104、D群小溝	地山粒を含む黒褐色粘土質シルト（自然）
SD251	(34.7)	30～45	10～25	25	U字形	N－8°－E～N－9°－W	B群小溝→SD251→SD136・137、C・D群小溝	地山粒を含む黒褐色シルト質粘土（自然）
SD264	(6.0)	20～40	10～25	10	U字形	真東	SD153・295→SD264→SD50	地山ブロックを含む暗灰黄色粘土（自然）
SD265	11.6	95～120	65～100	15	U字形	N－22°－W	SD136・137・153→SD265	
SD266	5.8	20～30	10～20	5	U字形	円弧状	SD136・153→SD266	黒色粘土（自然）
SD286	(4.0)	100	－	10	－	N－45°－W	SK161→SD43・286	黒褐・褐灰色シルト（自然）
SD294	7.8	30～50	15～30	20	U字形	E－9°－N	SD50・153→SD294	地山ブロックを含む褐灰色粘土（自然）
SD295	(5.2)	25～35	10～15	10	U字形	E－11°－N	SD295→SD264、SK196	地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルト（自然）
SD297	(4.3)	50～70	25～40	10	U字形	N－21°－E	SD297→SD137、D群小溝	
SD298	14.0	25～40	10	5	U字形	N－0～6°－W	SD298→SK168、B・C・D群小溝	地山ブロックを含む黒褐色砂質シルト（自然）
SD299	(4.5)	20～40	10～20	20	U字形	円弧状	C群小溝→SD299	
SD301	6.5	40～20	10～30	5	U字形	N－9°－E		
SD305	(15)	80～110	30～50	20	U字形	N－36°－W	SD43・301	黒褐・褐灰色シルト（自然）
SD306	(2.5)	55	35	5	U字形	E－23°－N	SD306→SK196	黒褐色粘土（自然）
SD311	(4.2)	30～40	10～20	15	U字形	E－31°－N	SD209→SD311	
SD312	(7.7)	110～200	70～105	15	U字形	N－8°－E、E－3°－S		
SD313	(8.8)	60	10	30	逆台形	E－22°－N	SD43・313→SD172	にぶい黄褐色粘土

溝跡属性表

遺構名	平面形	断面形	規模(長軸×短軸：cm)	深さ(cm)	重複関係	堆積土などその他の特徴
SK5	長方形	箱形	230×120	38		火山灰ブロックを含むオリーブ褐色粘土質シルト（人為）
SK9	不整形	皿状	90×60	5		
SK10	不整楕円形	皿状	120×95	8		
SK16	楕円形	擂鉢状	160×135	68	SD49→SK16	地山土粒を多く含む暗褐色粘土質シルト（自然）
SK20	長楕円形	皿状	56×40	8		地山ブロックを含む暗灰黄色シルト（人為）
SK29	長楕円形	箱形	192×80	46	SI26→SK29→C群小溝	本文参照（56頁）
SK30	楕円形	皿状	350×270	20	SI26→SK30→C群小溝	本文参照（57頁）
SK31	長楕円形	皿状	190×65	10		炭・地山砂を含む暗灰黄色砂質シルト（人為）
SK32	円	皿状	180×170	14	SI22→SK32→C群小溝	黒褐色シルト（自然）
SK33	長楕円形	U字形	182×64	40	SK34→SK33→C群小溝	本文参照（59頁）
SK34	長楕円形	皿状	144×(40)	5	SK34→SK33、C群小溝	地山砂を多く含む暗オリーブ褐色シルト（人為）
SK56	長楕円形	皿状	178×64	12		
SK59	隅丸方形	皿状	94×73	16		黒褐色シルト（自然）
SK60	隅丸長方形	皿状	175×(35)	3	SD49→SK60	炭・地山砂粒を含む黒褐色シルト（自然）
SK65	溝状	U字形	104×28	11	SD55→SK65	
SK66	隅丸長方形	皿状	102×56	14		
SK67	楕円形	皿状	88×58	7	SK67→C群小溝	炭・焼土粒を多く含む黒褐色シルト（自然）
SK68	楕円形	皿状	84×68	5	SK68→C群小溝	黒色シルト（自然）
SK74	不整楕円形	皿状	280×200	20	SK74→SD113、C群小溝	地山ブロックを含む黒褐色シルト
SK77	(楕円形)	皿状	192×(88)	56	SD40→SK77→SD73・76	黒褐色シルト
SK78	長楕円形	U字形	90×40	17	SK78→SD48	
SK96	不整楕円形	逆台形	480×340	54	SK96→SI27	炭粒と地山砂を含む黒褐色シルト（自然）
SK97	楕円形	擂鉢状	114×(88)	43	SI27→SK97→SD43・48・99	地山砂ブロックを多く含む黒色シルト（人為）
SK98	隅丸方形	擂鉢状	122×112	35	SD58→SK98	
SK101	(隅丸方形)	逆台形	188×(130)	26		炭粒と地山砂・火山灰ブロックを含む黒褐色シルト（人為）
SK102	長楕円形	U字形	144×58	32	SK102→SI47、SX19	地山ブロックを多く含む黄灰色シルト（人為）
SK103	(楕円形)	皿状	(98)×(58)	11	SK103→SI100、SD48	地山ブロックを含む暗灰黄色シルト
SK109	楕円形	皿状	90×70	12	SI62→SK109	
SK110	隅丸長方形	皿状	116×80	5	SK110→C群小溝	
SK111	楕円形	皿状	122×96	5	SK111→C群小溝	
SK112	隅丸方形	皿状	90×90	8	SK112→C群小溝	
SK114	隅丸方形	皿状	66×58	14	SK114→C群小溝	
SK115	楕円形	皿状	88×66	6	SK115→SI24	
SK116	楕円形	逆台形	(82)×(62)	12	SK116→SI26	
SK117	楕円形	皿状	86×(52)	12	SI47→SK117→SI25	
SK118	楕円形	擂鉢状	71×56	32	SK74→SK118	
SK119	楕円形	皿状	70×44	9	SD76→SK119	
SK120	楕円形	皿状	76×58	26	SI21→SK120	炭・焼土粒と地山ブロックを含む灰黄褐色シルト（人為）
SK121	不明	皿状	－	62	SK121→SD73	地山ブロックを含む暗灰黄色シルト
SK133	隅丸長方形	逆台形	458×336	20	SK133→SH135、B群小溝	本文参照（60頁）
SK155	楕円形	皿状	400×280	30	SK155→SX157,SD167	本文参照（60頁）
SK171	溝状	U字形	120×32	8	SK171→B群小溝	
SK191	長楕円形	U字形	(150)×(48)	32	SD43・136→SK191	地山ブロックを含む褐灰色砂質シルト（人為）
SK196	不整楕円形	皿状	270×150	50	SD49・295・306→SK196	スクモ層を挟む黒褐色粘土（自然）
SK281	楕円形	皿状	60×40	10		
SK285	楕円形	皿状	118×70	21		
SK287	楕円形	皿状	120×(95)	4	SD179→SK287	
SK288	溝状	皿状	(215)×52	5	SK288→SD153	
SK289	隅丸長方形	皿状	234×100	21		
SK291	隅丸長方形	皿状	100×(47)	15	SK291→SD43	
SK292	楕円形	擂鉢状	106×88	44	SD49→SK292	
SK302	楕円形	皿状	126×84	24		
SK303	楕円形	皿状	100×92	17	D群小溝→SK303	
SK304	楕円形	皿状	102×(72)	10		
SK307	長楕円形	皿状	(106)×60	6	SK307→SD206	
SK308	長楕円形	皿状	(110)×(70)	6	SK308→SD206	
SK309	楕円形	皿状	86×62	18	SD206・207→SK309	

土壙属性表

遺構名	平面形	断面形	規模（長×幅：cm）	深さ（cm）	方向（°）	群	棺の法量（長×幅×高：cm）	重複関係	埋土・堆積土などその他の特徴（埋：掘方埋土　棺埋：棺内流入土　埋崩：埋土崩落土　堆：自然堆積土）
SX1	楕円形	逆台形	98×（20）	16	N－24°－W				埋：暗オリーブ褐色粘土
SX3	楕円形	逆台形	90×40	18	N－28°－W				埋：地山粒を含む暗褐色粘土質シルト
SX19	楕円形	逆台形	88×62	17	E－25°－S			SI27、SK102→SX19	埋：地山砂ブロックを含む暗灰黄色砂質シルト
SX45	楕円形	逆台形	96×54	12	N－10°－E				埋：黒褐色シルト
SX75	楕円形	逆台形	88×（73）	28	N－36°－W				埋：地山砂を多く含むオリーブ黒シルト質砂
SX157	楕円形	逆台形	68×58	8	E－5°－N			SK155→SX157→SD167	埋：地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルト
SX238	楕円形	逆台形	84×36	18	N－2°－W			D群小溝→SX238	埋：地山ブロックを多く含む黒褐色粘土
SX244	楕円形	皿状	36×（14）	8	N－5°－W				埋：地山粒を含む褐灰色粘土質シルト
SK7	隅丸長方形	逆台形	116×58	24	N－10°－E	B			埋：地山ブロックを含むオリーブ褐色砂質シルト
SK8	隅丸長方形	逆台形	200×54	20	E－1°－N	B			埋：地山ブロックを多く含む黄褐色砂質シルト
SK11	長楕円形	逆台形	152×40	20	N－22°－E	B			埋：地山ブロックを含む暗褐色粘土質シルト
SK12	長楕円形	箱形	224×50	24	N－11°－W	B			埋：地山ブロックを含む暗褐色粘土質シルト
SK35	隅丸長方形	逆台形	228×84	26	N－4°－E	B		SI62→SK35→C群小溝	埋：地山粒を含む灰色砂質シルト
SK46	隅丸長方形	U字形	158×74	48	真北	B		SK46→SD72	埋：地山砂ブロックを多く含む褐灰色シルト質砂
SK51	隅丸長方形	逆台形	170×68	36	E－27°－S	B		SI26→SK51→C群小溝	埋：地山ブロックを含む黒褐色シルト
SK52	隅丸長方形	逆台形	180×78	22	E－25°－S	B		SI26→SK52→C群小溝	埋：地山ブロックを含む黄灰色シルト
SK64	隅丸長方形	逆台形	140×30	16	E－2°－S	B			埋：地山砂ブロックを多く含む暗灰黄色砂質シルト
SK71	隅丸長方形	箱形	206×56	22	E－7°－N	B		SD56→SK71	埋：地山砂ブロックを多く含む暗灰黄色砂質シルト
SK141	隅丸長方形	箱形	204×82	22	N－16°－W	B			埋：地山ブロックを多く含む黒褐色シルト　堆：火山灰（2次）
SK142	不整長方形	皿状	210×90	14	N－6°－E	B			埋：地山ブロックを多く含む褐灰色シルト
SK143	隅丸長方形	箱形	192×64	22	N－9°－E	B			埋：地山ブロックを含む灰黄褐色シルト　堆：火山灰（2次）
SK144	隅丸長方形	箱形	214×80	10	N－8°－W	B			埋：地山砂ブロックを含む灰黄褐色シルト
SK145	隅丸長方形	箱形	213×70	22	N－13°－E	B			埋：地山ブロックを多く含む褐灰色砂質シルト　堆：暗灰黄色砂質シルト
SK146	隅丸長方形	皿状	218×72	14	N－4°－E	B			埋：地山ブロックを含む灰黄褐色砂質シルト
SK147	（隅丸長方形）	箱形	（182）×54	20	N－4°－W	B		SK147→SD48	埋：地山ブロックを含む灰黄褐色砂質シルト
SK148	隅丸長方形	箱形	220×72	28	N－12°－W	B			埋：地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルト
SK149	隅丸長方形	逆台形	218×72	23	N－20°－E	B			埋：地山ブロックを含む褐灰色シルト　堆：火山灰（2次）
SK156	隅丸長方形	逆台形	132×57	15	N－3°－E	B		SK156→SD70	埋：地山ブロックを含む灰黄褐色砂質シルト　堆：灰黄褐色砂質シルト
SK158	隅丸長方形	逆台形	212×80	28	N－13°－W	B			埋：地山ブロックを含む黒褐色シルト
SK159	隅丸長方形	逆台形	218×75	30	N－5°－W	B		SD137→SK159	埋：地山ブロックを含む黒褐色シルト
SK160	隅丸長方形	逆台形	204×62	30	N－16°－E	B			埋：地山ブロックを多く含む黒褐色シルト
SK161	隅丸長方形	（箱形）	152×（48）	12	N－19°－W	B		SK161→SD286	埋：地山ブロックを含む黒褐色シルト
SK162	隅丸長方形	箱形	228×98	28	N－3°－W	A	196×86×17		本文参照（37頁）
SK164	隅丸長方形	箱形	220×64	24	N－23°－W	B			埋：地山ブロックを多く含む黒褐色粘土　堆：黒褐色粘土
SK165	隅丸長方形	逆台形	244×84	25	真北	B			埋：地山ブロックを多く含む黒褐色粘土　堆：黒褐色粘土
SK168	楕円形	逆台形	186×100	25	N－1°－W	B		SK168→C群小溝	埋：地山ブロックを多く含む暗灰黄色粘土質シルト　堆：火山灰（2次）
SK169	隅丸長方形	逆台形	223×100	24	N－19°－W	A	164×50×18		埋・埋崩：地山ブロックを多く含む黒褐色シルト質粘土　堆：地山土・炭粒を含む黒褐色シルト質粘土
SK170	（隅丸長方形）	逆台形	（172）×128	26	N－11°－W	A	（124）×（72）×2	SK170→SD198、D群小溝	埋：地山ブロックを多く含む黒褐色シルト　棺埋：黒褐色シルト
SK173	隅丸長方形	逆台形	205×82	28	N－12°－E	A	172×54×14		埋：地山ブロックを多く含む褐灰色シルト質粘土　棺埋：褐灰色シルト質粘土　埋崩：地山ブロックを多く含む褐灰色シルト
SK174	隅丸長方形	逆台形	180×58	18	N－23°－W	A	150×40×10		埋：暗オリーブ褐色シルト質砂　埋崩：地山砂ブロックを多く含む褐灰色シルト
SK175	隅丸長方形	箱形	188×78	18	N－20°－W	A	172×44×10	SK175→SD43	本文参照（37頁）
SK176	（隅丸長方形）	逆台形	（146）×84	18	N－36°－E	B		SK176→SD43	埋：地山砂主体の灰黄褐色シルト質砂
SK177	長楕円形	逆台形	168×44	37	N－3°－E	B		SD55→SK177	埋：地山ブロックを多く含む黒褐色砂質シルト　堆：黒褐色砂質シルト
SK181	隅丸長方形	皿状	188×94	16	N－13°－E	A	（82）×60×4		埋：地山ブロックを多く含む褐灰色粘土　棺埋：灰黄褐色粘土質シルト
SK182	（隅丸長方形）	箱形	（120）×42	27	N－22°－E	B			埋：地山ブロックを多く含む褐灰色粘土
SK183	隅丸長方形	箱形	192×68	38	N－30°－E	B			埋：地山ブロックを多く含む黄灰色砂質シルト
SK184	隅丸長方形	（箱形）	220×（66）	44	N－34°－W	A	194×42×26		本文参照（39頁）
SK185	隅丸長方形	箱形	168×60	30	N－41°－W	A	－		埋：地山砂を多く含む灰褐色粘土　埋崩：地山ブロックを多く含む灰黄褐色粘土質シルト
SK186	隅丸長方形	逆台形	（133）×62	14	N－30°－W	B		SK186→SK187	埋：地山砂を多く含む褐灰色粘土
SK187	隅丸長方形	箱形	210×93	34	N－25°－W	A	154×44×10	SK187→SK186	埋・埋崩：地山砂ブロックを含む黄灰・暗灰黄色粘土質シルト　堆：地山砂を含む褐灰色粘土
SK188	隅丸長方形	逆台形	146×56	36	N－22°－W	B		SD136→SK188	埋：地山砂ブロックを多く含む褐灰色粘土

SK189	隅丸長方形	逆台形	201×80	24	N−21°−W	A	158×40×6		埋：地山ブロックを多く含む黒褐色粘土　柏堆：黒褐色粘土　埋崩：地山ブロックを多く含む黒褐色シルト質粘土
SK190	隅丸長方形	箱形	102×40	25	N−19°−W	B			埋：地山砂ブロックを多く含む褐灰色粘土
SK192	長楕円形	箱形	178×67	28	N−13°−W	B		SK201→SK192	本文参照（46頁）
SK193	(隅丸長方形)	逆台形	(160)×84	30	N−5°−W	A	(100)×48×8	SK193→SD49	埋：地山ブロックを多く含む黒褐色シルト　柏堆：暗灰黄色粘土　埋崩：地山ブロックを多く含む黒褐色粘土
SK194	(隅丸長方形)	逆台形	(128)×60	14	N−11°−W	B		SK194→SD50	埋：地山ブロックを多く含む黒褐色粘土
SK195	(隅丸長方形)	逆台形	(192)×70	20	N−30°−W	A	(176)×52×7	SK195→SD50	埋：地山ブロックを多く含む褐灰色シルト質粘土　柏堆：暗褐色粘土　埋崩：地山ブロックを多く含む黒褐色シルト質粘土
SK199	隅丸長方形	箱形	206×68	20	N−13°−W	A	176×44×12		本文参照（40頁）
SK201	隅丸長方形	U字形	56×214	20	N−23°−W	B		SK201→SK192	埋：地山砂ブロックを多く含む褐灰色粘土
SK204	長楕円形	箱形	198×56	34	E−29°−N	B		B群小溝→SK204	埋：地山ブロックを含む褐灰色シルト質粘土
SK210	隅丸長方形	箱形	208×68	32	N−42°−W	A	180×48×7		埋・埋崩：地山砂ブロックを多く含む黒褐色粘土　堆：地山粒を含む黒褐色シルト質粘土
SK211	長楕円形	逆台形	214×98	36	N−16°−W	A	147×48×18		埋・埋崩：地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルト　堆：火山灰（2次）と褐灰色粘土質シルト
SK212	隅丸長方形	箱形	124×58	34	N−26°−W	B			埋：地山砂を多く含む黄灰色粘土
SK213	隅丸長方形	逆台形	101×60	14	E−39°−S	B		SK213→SK214	埋：地山砂を多く含む褐灰色粘土質シルト
SK214	長楕円形	逆台形	254×164	45	N−42°−W	A	(125)×(28)×4	SK213→SK214	埋：地山砂主体の暗灰黄色シルト質砂　埋崩：地山砂を多く含む暗灰黄色粘土　堆：火山灰（2次）を挟む灰黄褐色シルト質粘土
SK215	長楕円形	ロート状	218×95	29	N−3°−W	A	191×60×14		埋：地山砂を多く含むにぶい黄褐色粘土　埋崩：地山砂を多く含む灰黄褐色粘土　堆：火山灰（2次）と灰黄褐色粘土
SK216	隅丸長方形	U字形	190×46	24	N−22°−W	B			埋：地山砂を多く含むにぶい黄褐色粘土
SK217	隅丸長方形	箱形	152×62	28	N−34°−W	A	124×46×18		本文参照（40頁）
SK218	隅丸長方形	箱形	204×30	22	E−3°−N	B			埋：地山砂を多く含む褐灰色粘土　堆：灰黄褐色粘土
SK219	隅丸長方形	逆台形	224×74	52	N−17°−E	B			埋：地山砂を多く含む灰黄褐色粘土質シルト　堆：火山灰（2次）と灰黄褐色粘土
SK220	隅丸長方形	逆台形	193×53	24	N−45°−E	B			埋：地山ブロックを多く含む黒褐色粘質土　堆：黒褐色粘質土
SK221	隅丸長方形	箱形	192×42	21	真東	B			埋：地山砂を多く含む褐灰色粘土質シルト　堆：灰黄褐色粘土
SK222	隅丸長方形	箱形	110×52	24	N−13°−E	B			本文参照（46頁）
SK223	隅丸長方形	箱形	204×69	36	N−18°−E	A	160×52×25		埋：地山ブロックを多く含む黒褐色粘土　柏堆・埋崩：地山ブロックを含む黒褐色粘土
SK224	隅丸長方形	箱形	82×(48)	29	N−15°−W	B			埋：地山ブロックを多く含む褐灰色粘土
SK225	隅丸長方形	逆台形	204×66	25	N−37°−W	B			埋：地山ブロックを多く含む褐灰色粘土
SK226	長楕円形	逆台形	134×35	20	N−26°−W	B			埋：地山ブロックを含む黒褐色粘土
SK227	隅丸長方形	箱形	190×48	22	E−34°−N	B			本文参照（46頁）
SK228	隅丸長方形	箱形	105×40	12	N−21°−E	B		SK229→SK228	埋：地山ブロックを含む黒褐色粘土
SK229	隅丸長方形	逆台形	208×48	20	N−35°−W	B		SK229→SK228	埋：地山ブロックを多く含む褐灰色粘土
SK230	隅丸長方形	逆台形	214×100	27	N−41°−W	A	168×65×14		本文参照（40頁）
SK231	隅丸長方形	逆台形	111×44	28	N−7°−E	B			埋：地山ブロックを多く含む褐灰色粘土
SK232	(隅丸長方形)	箱形	(190)×60	10	N−29°−W	B			埋：地山ブロックを多く含む褐灰色粘土
SK233	隅丸長方形	箱形	214×56	29	N−23°−E	B			埋：地山ブロックを多く含む褐灰色粘土
SK234	隅丸長方形	箱形	220×78	28	N−32°−E	B			埋：地山ブロックを多く含む褐灰色粘土
SK239	長楕円形	逆台形	160×52	10	N−4°−E	B			埋：地山ブロックを多く含む黒褐色粘土　堆：炭粒を含む黒褐色粘土
SK240	長楕円形	箱形	170×54	29	真北	B		B群小溝→SK240	埋：地山ブロックを多く含む黒褐色粘土　堆：黒褐色粘土
SK241	(隅丸長方形)	皿状	(148)×48	10	N−18°−E	B			埋：地山砂主体のオリーブ褐色砂
SK242	隅丸長方形	箱形	86×34	14	E−40°−N	B			埋：地山ブロックを含むにぶい褐色粘土質シルト
SK243	(隅丸長方形)	(箱形)	166×36	8	N−25°−W	B			埋：地山ブロックを多く含む褐灰色粘土
SK246	隅丸長方形	箱形	206×47	17	N−19°−W	B		SK246→SD48	埋：地山砂ブロックを多く含む黄灰色粘土
SK247	隅丸長方形	逆台形	232×49	26	N−6°−W	B		SK246→SD48	埋：地山砂ブロックを多く含む褐灰色粘土
SK248	長楕円形	皿状	136×48	8	真北	B			埋：地山砂を多く含む褐灰色粘土
SK249	隅丸長方形	逆台形	86×49	15	N−6°−W	B			埋：地山砂ブロックを多く含む褐灰色粘土
SK259	隅丸長方形	箱形	148×76	18	N−3°−W	B		SI131→SK259	埋：地山ブロックを多く含む黒褐色粘土質シルト
SK269	長楕円形	逆台形	116×30	13	N−23°−W	B			埋：地山ブロックを多く含む黒褐色シルト
SK272	隅丸長方形	逆台形	145×46	12	N−13°−E	B			埋：地山砂を多く含む褐灰色粘土質シルト
SK283	長楕円形	逆台形	158×60	14	E−16°−N	B		SK283→SD134	埋：地山ブロックを多く含む黒褐色粘土
SK284	隅丸長方形	逆台形	80×44	14	N−4°−W	B			埋：地山粒を含む褐灰色粘土質シルト
SK290	隅丸長方形	逆台形	178×(55)	17	N−6°−W	B			埋：地山砂ブロックを多く含む褐灰色粘土
SK296	溝状	箱形	294×41	15	N−10°−E	B			埋：地山ブロックを含む灰黄褐色砂質シルト

土器埋設遺構・土葬墓属性表

写　真　図　版

A区竪穴住居跡群全景（SE→）

A区全景（SE→）

B区西側全景（S→）

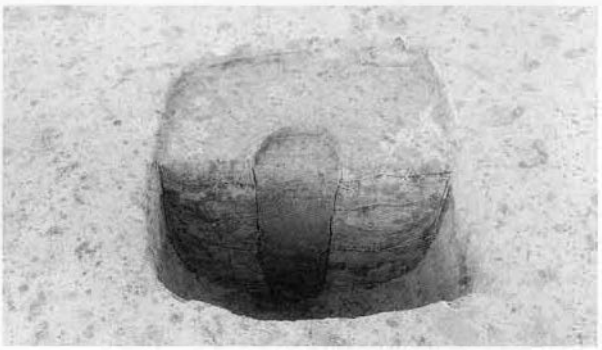
B区中央部全景（SE→）

B区東側全景（SW→）

図版 1

SB135建物跡（S→）

SB135建物跡N1E1柱穴断面（S→）



SB135建物跡N3E4柱穴断面（S→）

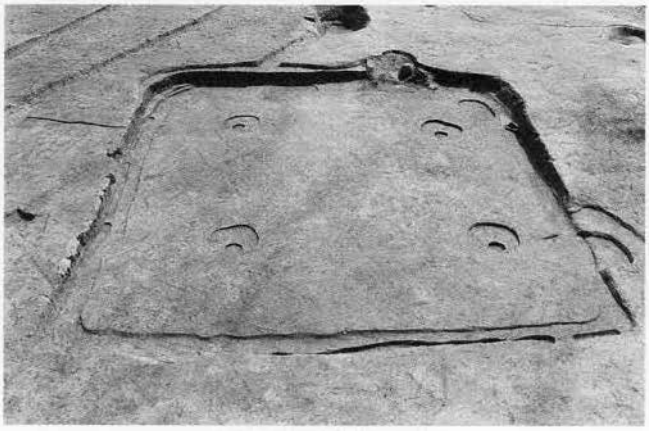
SI21住居跡（S→）

SI21住居跡カマド（S→）

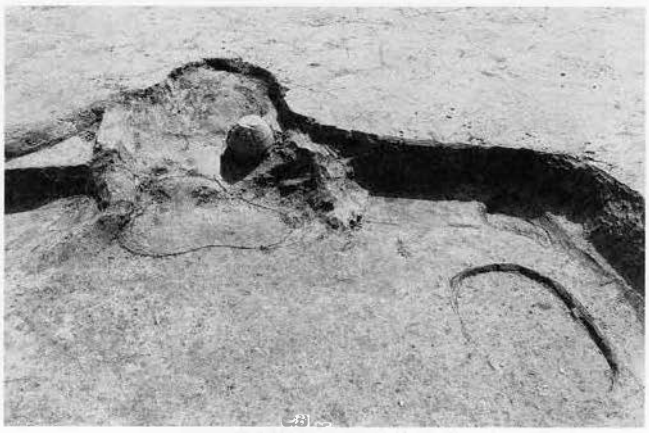
SI23住居跡（NW→）

SI23住居跡カマド（NW→）

図版 2



SI25住居跡（W→）



SI25住居跡カマド（W→）

SI26住居跡（SW→）

SI26住居跡カマド（SW→）

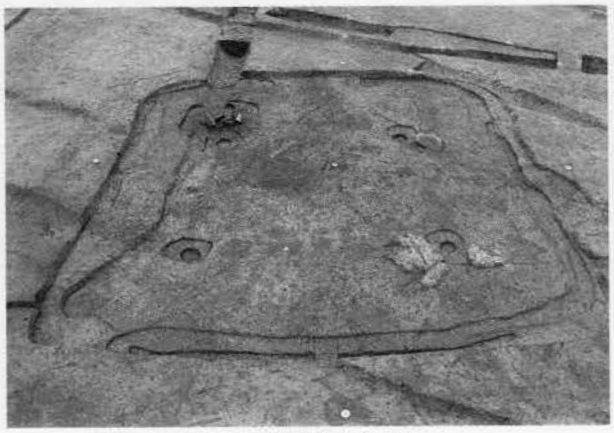
SI27住居跡（S→）

SI27住居跡カマド（S→）

SI47住居跡（SW→）

SI47住居跡カマド（SW→）

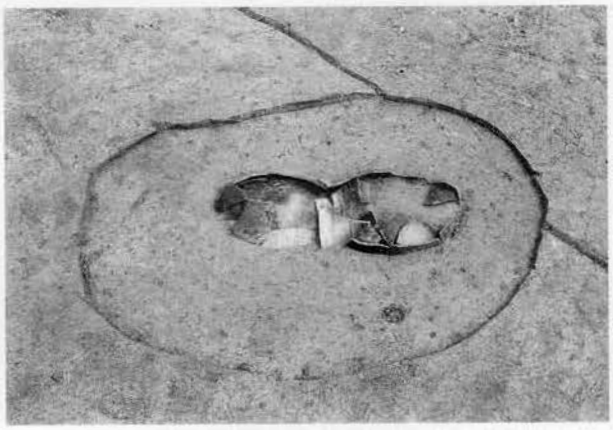
図版 3



SI24住居跡（S→）

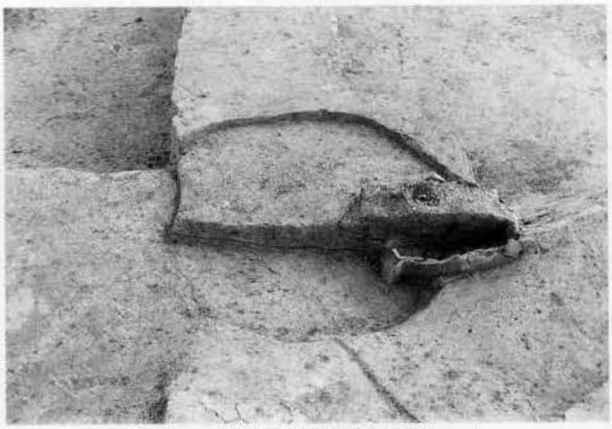
SI131住居跡（S→）

SX3土器埋設遺構断面（SW→）



SX19土器埋設遺構（SW→）

SX45土器埋設遺構断面（NE→）

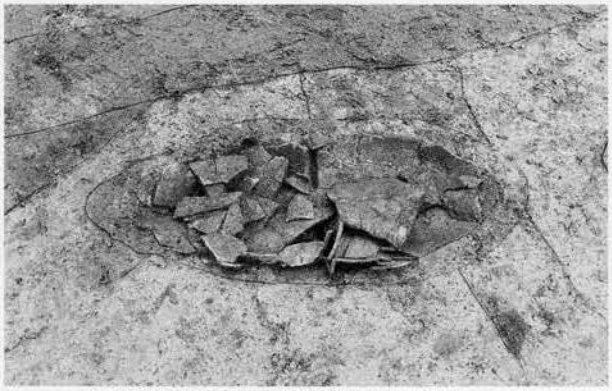


SX157土器埋設遺構断面（N→）

SX75土器埋設遺構（NE→）

SX75土器埋設遺構断面（NE→）

図版4

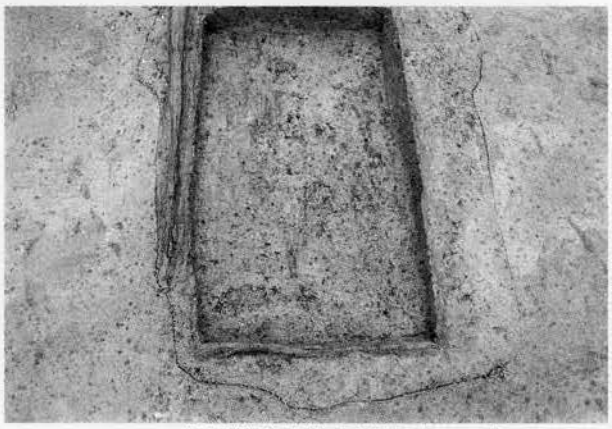


SX238土器埋設遺構（W→）

SX244土器埋設遺構断面（W→）

SK175土葬墓検出（SE→）

SK175土葬墓棺内検出南側（NW→）



SK175土葬墓棺内検出北側（NW→）

SK175土葬墓検出南側拡大（SE →）

SK175土葬墓棺材北側細部（SE→）

図版 5

SK175土葬墓精査（SE→）

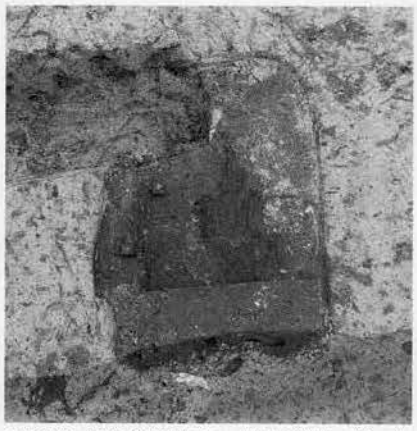
SK175土葬墓完掘（SE→）

SK162土葬墓検出（S→）

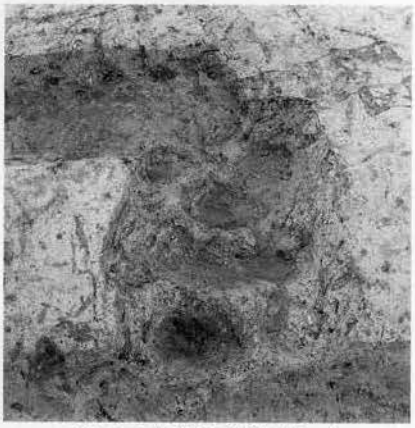
SK162土葬墓棺内検出（SW→）

SK162土葬墓遺物出土状況（S→）

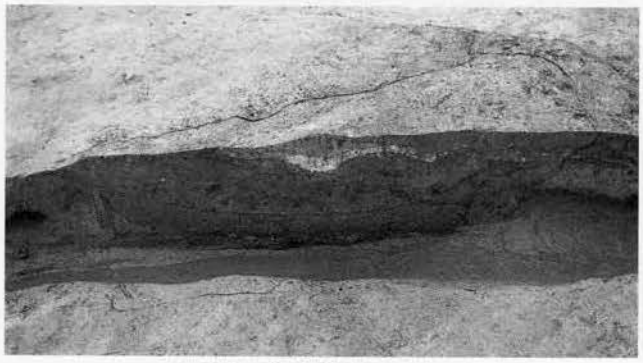
SK162土葬墓完掘（S→）



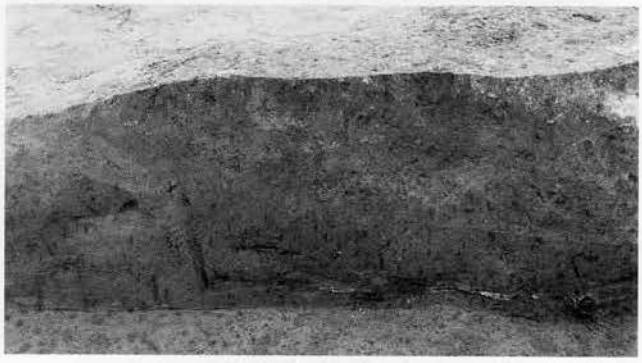
SK170土葬墓棺底板・歯牙検出（S→）



SK170土葬墓完掘（S→）



SK184土葬墓断面（NE→）



SK184土葬墓断面南側拡大（NE→）

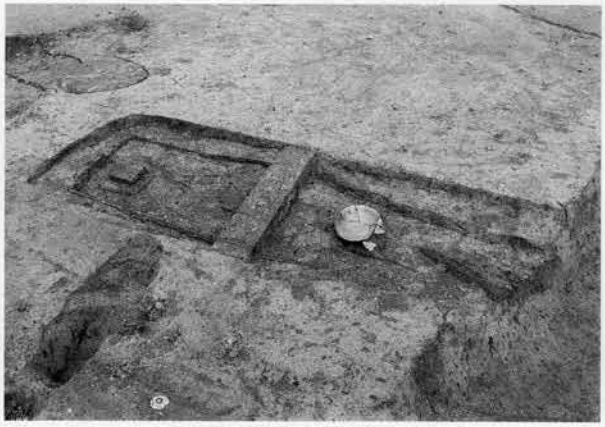
図版 6

SK184土葬墓棺内検出（SE→）

SK184土葬墓棺材南西隅細部（N→）

SK174土葬墓棺内検出（SE→）

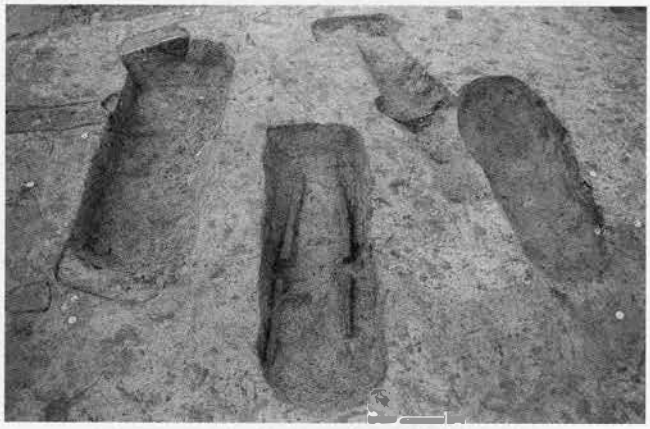
SK187土葬墓完掘（SE→）



SK195土葬墓棺内検出（SW→）

SK195土葬墓歯牙検出（NE→）

SK199土葬墓棺内検出（S→）



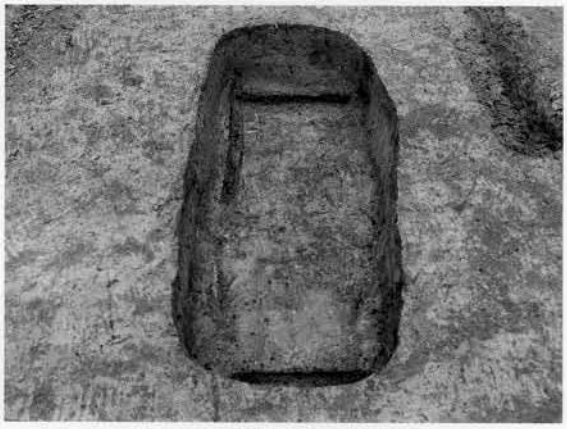
SK165・192・199・201土葬墓完掘（S→）

図版 7

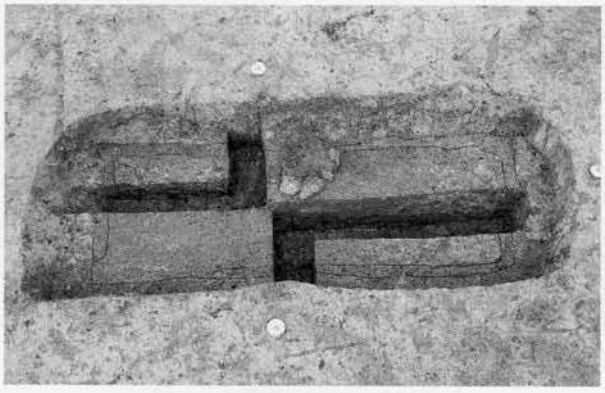
SK210土葬墓完掘（SE→）

SK211土葬墓断面（SE→）

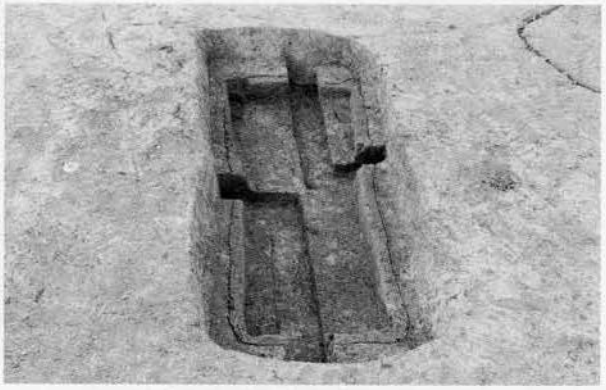
SK211土葬墓棺内検出（SE→）



SK211土葬墓完掘（SE→）



SK217土葬墓棺検出（SW→）



SK217土葬墓棺内検出（SE→）

SK214土葬墓完掘（SE→）

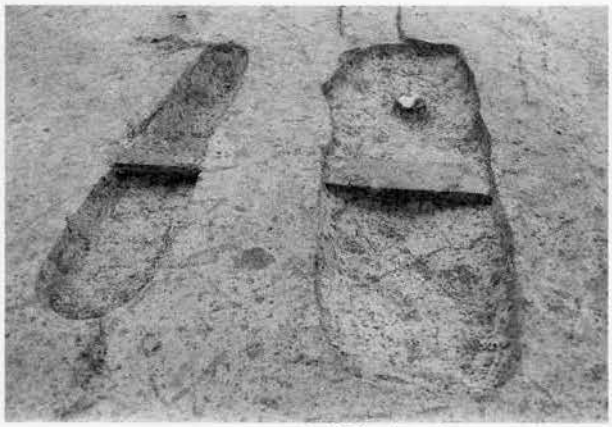
SK230土葬墓断面（E→）

図版8

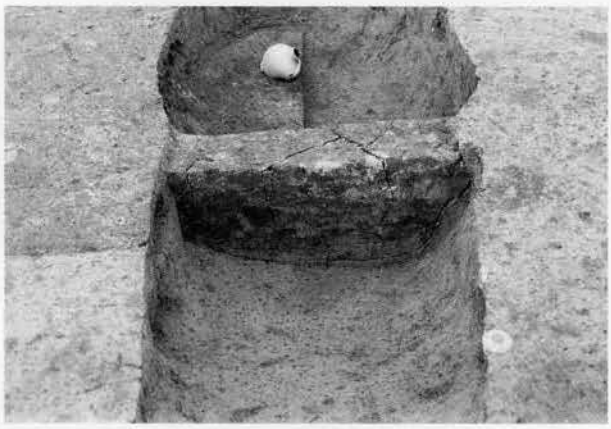
SK230土葬墓棺内検出（SE→）

SK223土葬墓棺内検出（SW→）

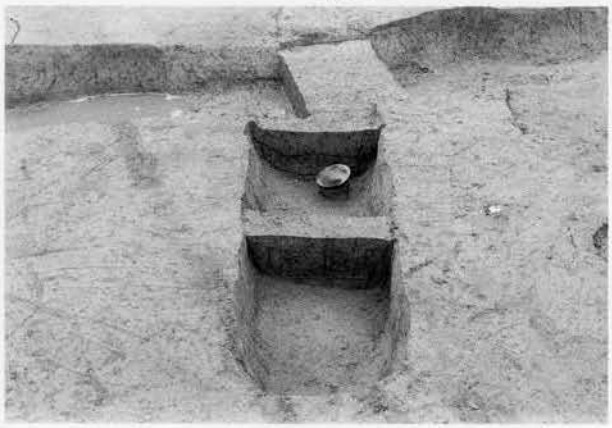
SK192土葬墓（S→）



SK146・296土葬墓（N→）

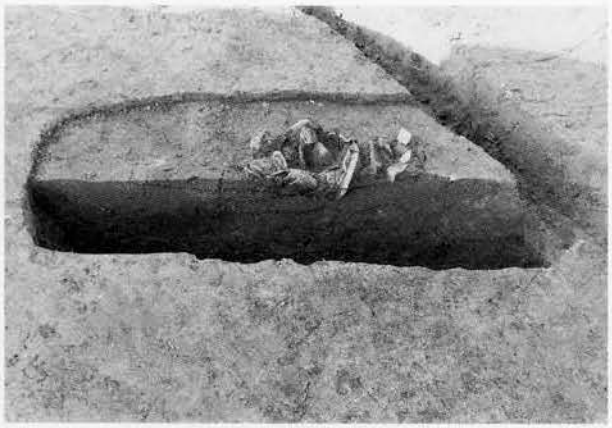


SK192土葬墓断面（S→）



SK147土葬墓（N→）

SK158・159土葬墓（S→）



SK183土葬墓断面（SE→）

SK246土葬墓遺物出土状況（S→）

図版9

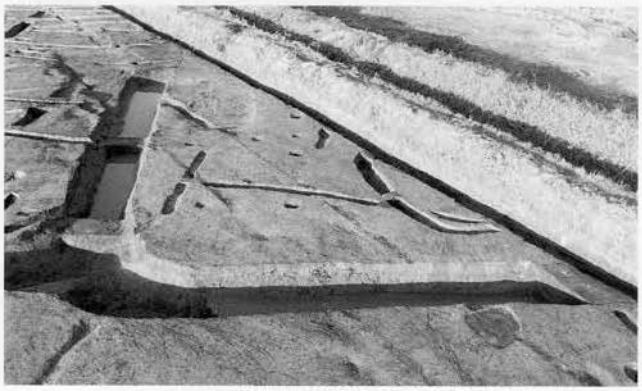
SK190土葬墓（SE→）

SK212土葬墓（SE→）

SK222土葬墓（N→）

SK227土葬墓（SW→）

SD40溝跡北西隅部分（N→）



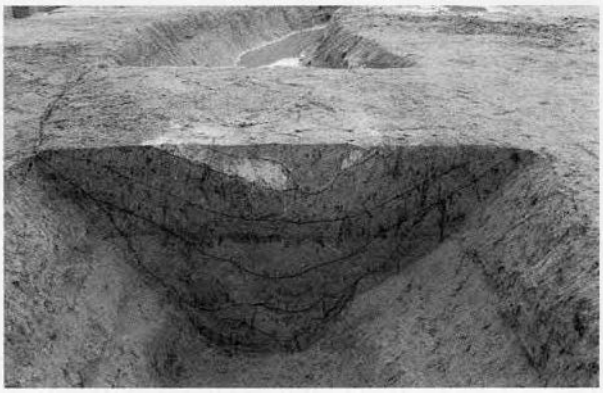
SD40溝跡南西隅部分（S→）

SD40溝跡北辺断面（W→）

SD40溝跡西辺断面（N→）

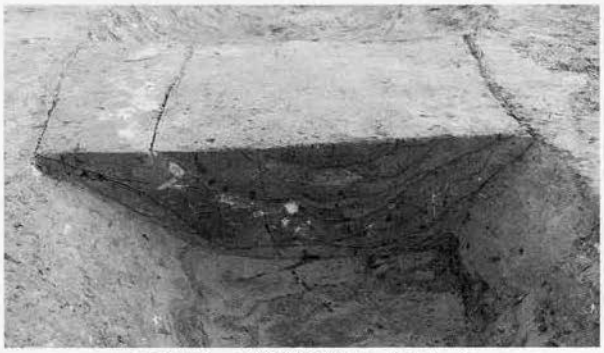
SD43溝跡北端部（SW→）

図版10



SD43溝跡南辺断面（NE→）

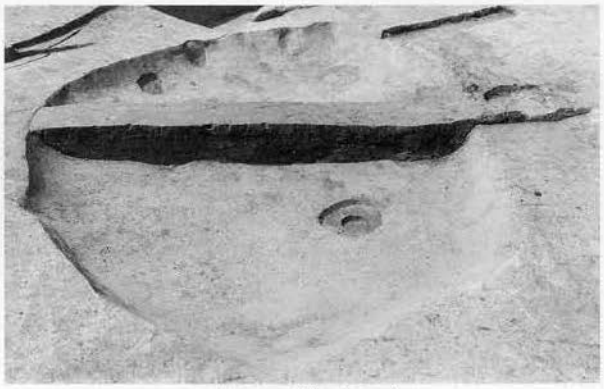
SD49溝跡断面（SW→）



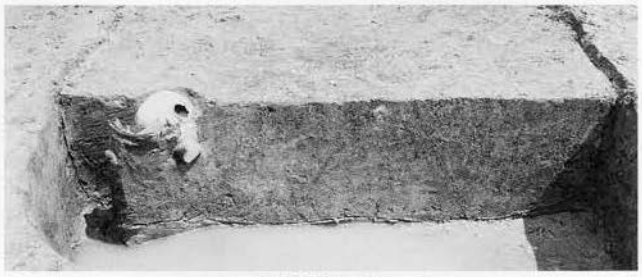
SD206・207溝跡断面（NW→）

SD235・236溝跡（SW→）

SD235溝跡断面（NE→）



SK155土壙（E→）



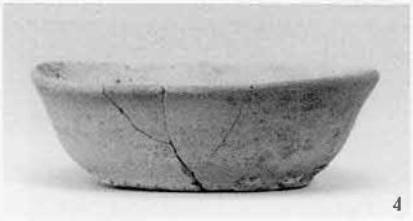
SK5土壙断面（W→）

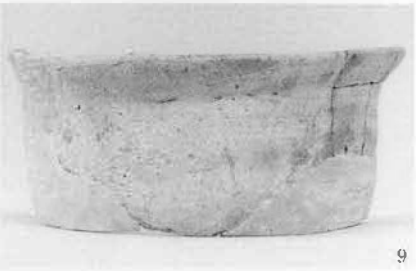
SK133土壙断面（W→）

B区北部小溝状遺構（W→）

B区中央部小溝状遺構（NW→）

図版11



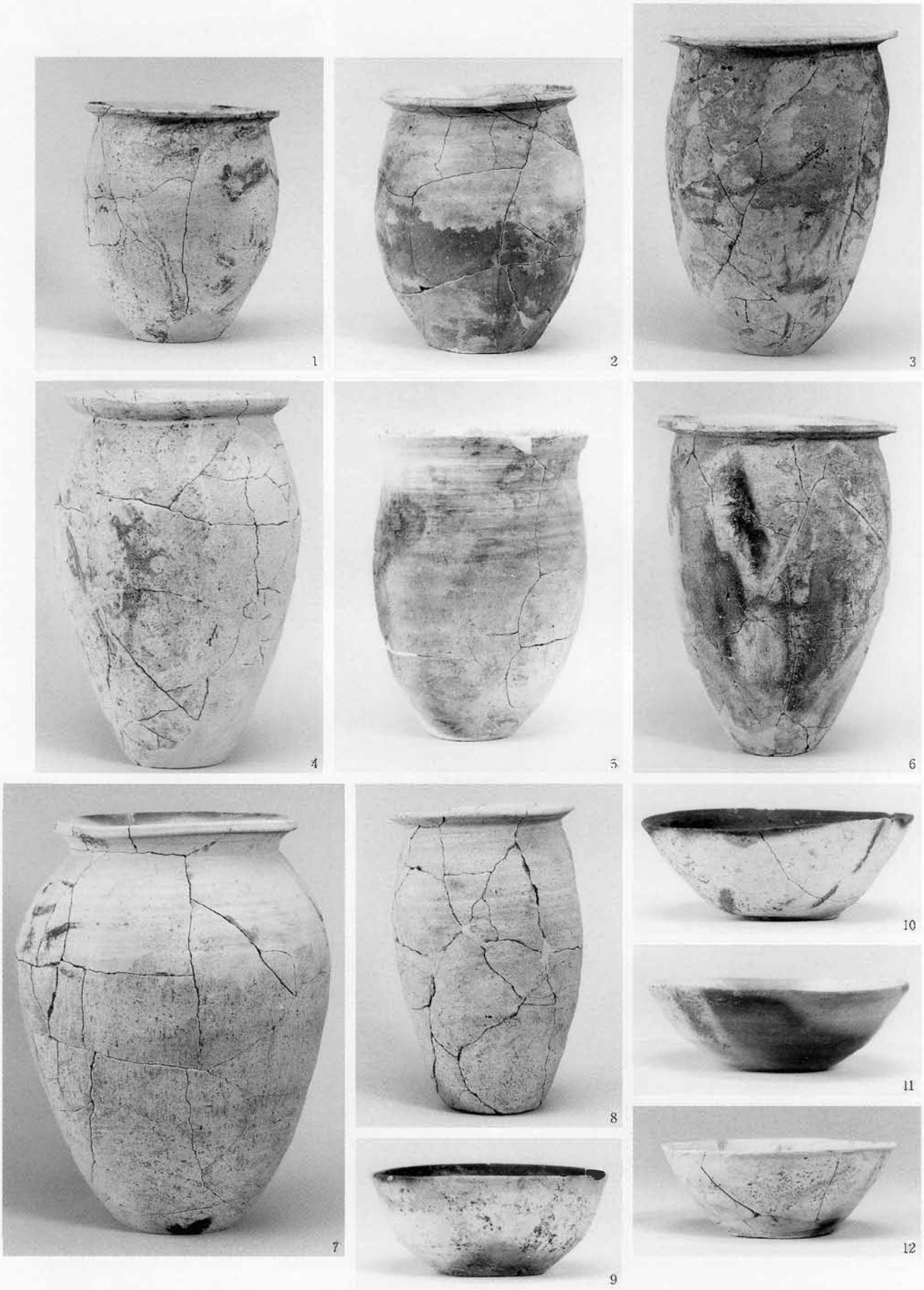


1：7－1（挿図番号－挿図内番号）　2：10－1　3：10－2　4：12－1　5：12－6　6：10－4　7：12－2　8：12－3　9：12－4
10：14－1　11：14－2　12：16－1　13：16－3　14：16－2　15：11－1　16：14－3　（縮尺1～5・7～14：1/3、6・15・16：1/4）

図版12　出土遺物1（土器）

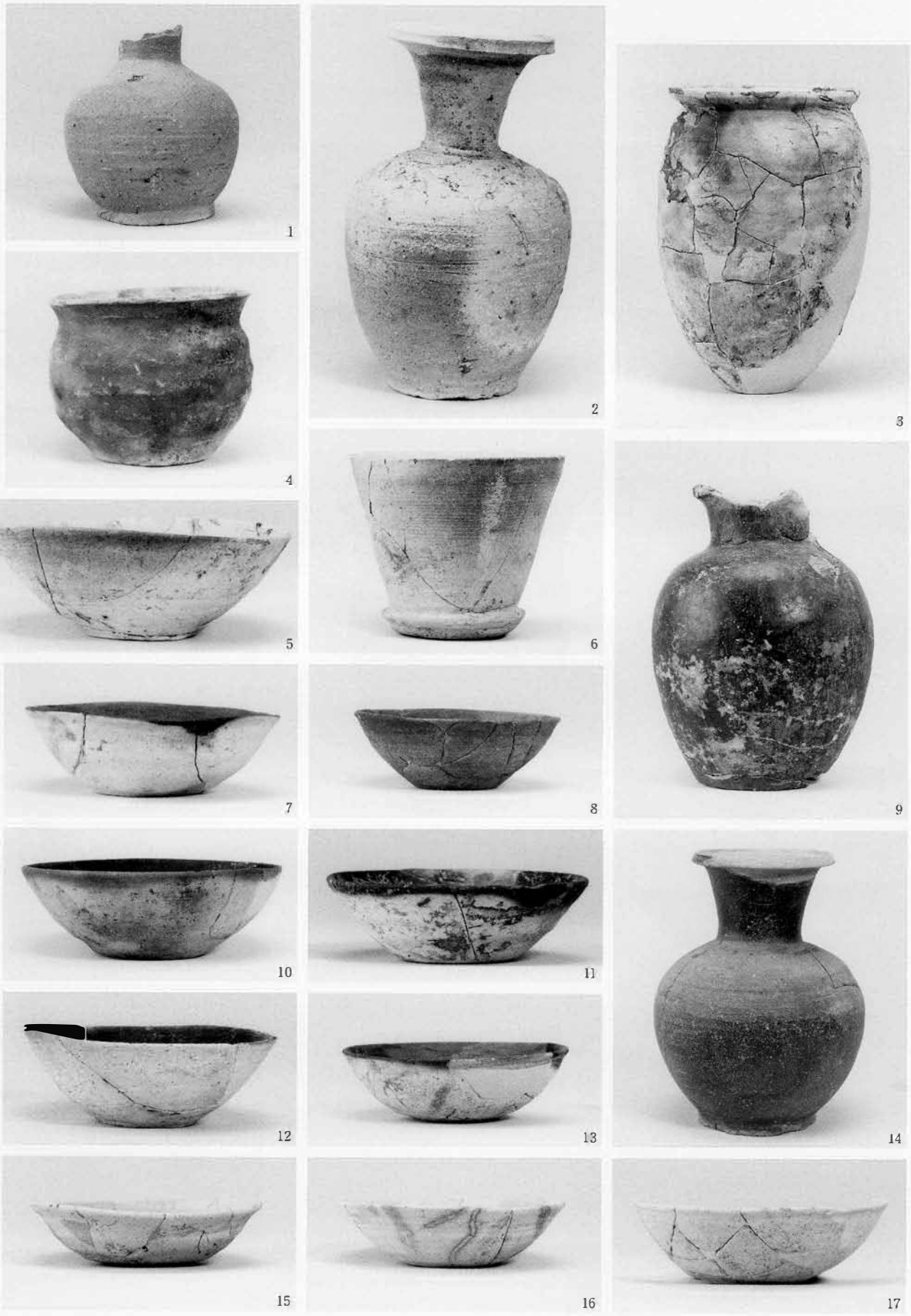
1：19－2（挿図番号－挿図内番号）　2：19－3　3：19－4　4：33－1　5：33－2　6：33－3　7：33－4　8：33－5
9：14－4　10：24－1　11：24－2　12：土器埋設遺構の土師器甕（1・2列目とも左からSX1・19・8・238・75・157、SX157のみ単体）
（縮尺1～8：1/3、9：1/4、10・11：1/6、12：任意）

出土遺物2（土器）　図版13



1：24－3（挿図番号－挿図内番号）　2：25－1　3：27－2　4：24－4　5：25－2　6：27－1　7：26－2
8：26－1　9：33－6　10：33－7　11：33－8　12：33－9　（縮尺1～8：1/6、9～12：1/3）

図版14　出土遺物3（土器）



1：33－10（挿図番号－挿図内番号）　2：33－14　3：33－15　4：33－12　5：33－11　6：35－3　7：36－1　8：36－2
9：35－4　10：36－3　11：36－4　12：36－5　13：36－6　14：36－18　15：36－7　16：36－8　17：36－9
（縮尺1・4・5・7・8・10～13・15～17：1/3、2・6・9・14：1/4、3：1/6）

出土遺物4

図版15

1：36−10（挿図番号−挿図内番号）　2：36−11　3：36−12　4：36−13　5：36−14　6：36−17　7：39−2　8：39−3
9：39−1　10：37−2　11：37−3　12：39−4　13：39−5　14：39−6　15：39−7　16：39−8　17：39−9　18：39−12
（縮尺1～10・12～17：1/3、11：1/4、18：1/6）

図版16　　出土遺物5（土器）

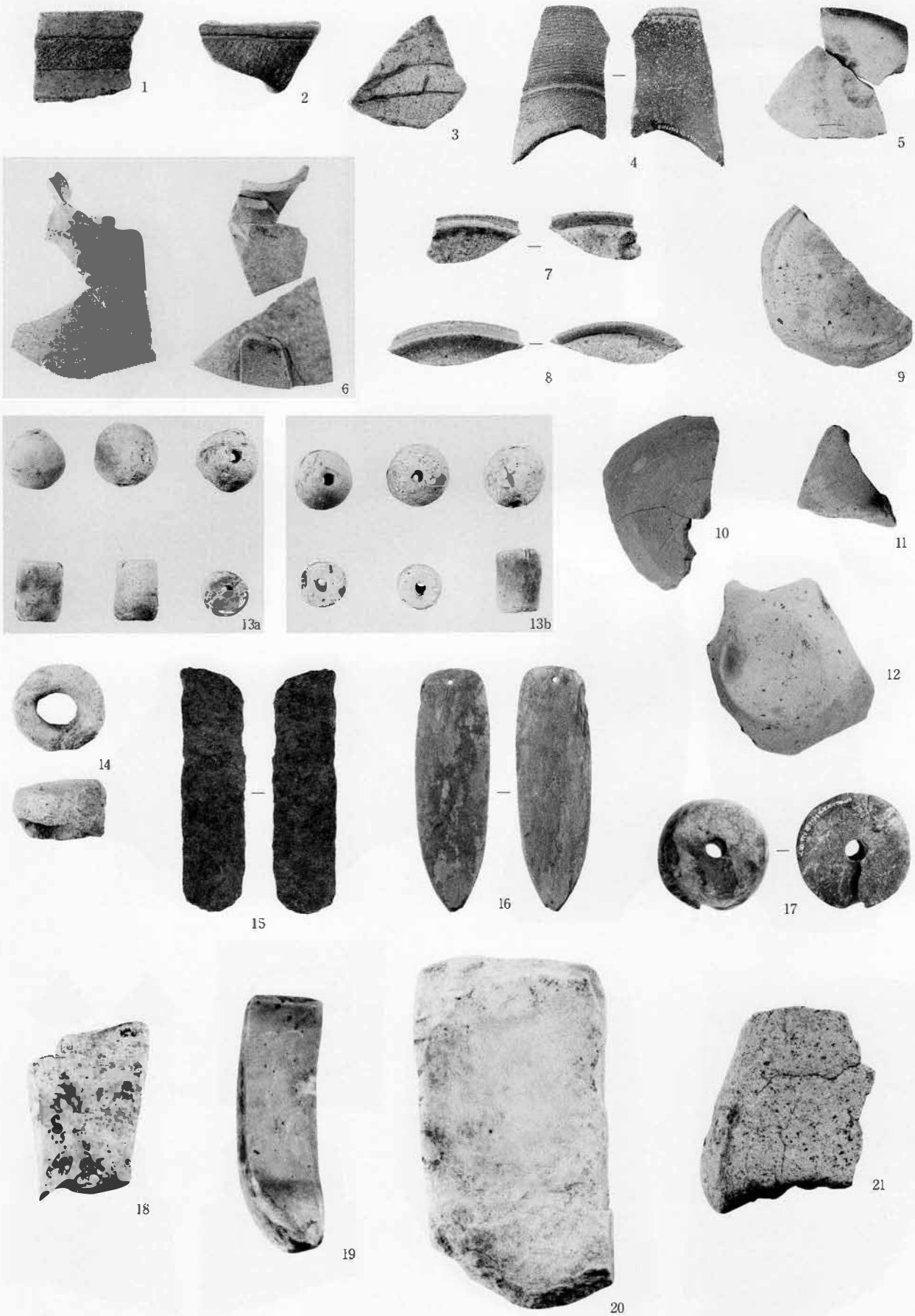
1：39－10（挿図番号－挿図内番号）　2：39－11　3：40－2　4：40－7　5：40－3　6：40－5　7：40－6　8：40－8
9：40－10　10：40－11　11：40－12　12：40－14　13：40－13　14：42－2　15：42－3　16：42－4　17：42－5　18：42－1
19：42－8
（縮尺1～10a・11～17：1/3、10b：任意、18・19：1/4）

出土遺物6（土器）

図版17

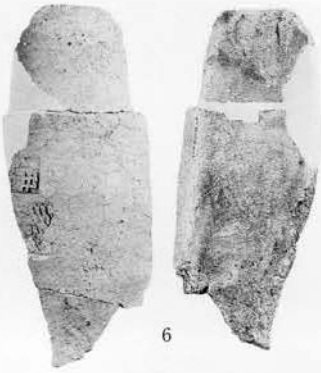
1：42－6（挿図番号－挿図内番号）　2：42－7　3：43－1　4：43－3　5：43－5　6：43－6　7：43－7　8：43－8
9：46－2　10：43－9　11：46－3　12：46－4　13：46－7　14：46－9　15：46－11　16：46－12　17：46－14　18：46－15
19：46－13
（縮尺1～3・7～19：1/3、4～6：1/4）

図版18　出土遺物7（土器）

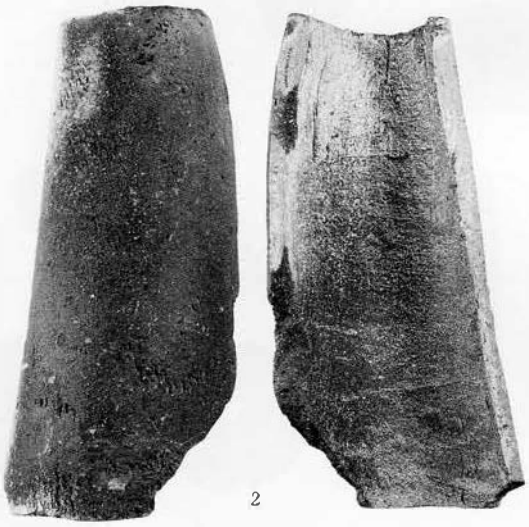


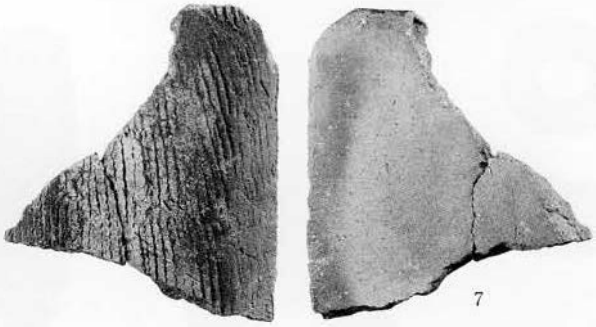
1：47－1（挿図番号－挿図内番号）　2：47－2　3：47－3　4：37－1　5：46－8　6：46－16　7：33－13　8：36－16
9：7－2　10：46－10　11：40－4　12：40－9　13：38－1～4など　14：46－17　15：47－4　16：47－6　17：47－5
18：19－5　19：42－9　20：48－1　21：39－15　（縮尺1～3・15～17：1/2、3～14・18～21：1/3）

出土遺物8（土器類、土製品、鉄製品、石製品）　図版19



6．刻印拡大



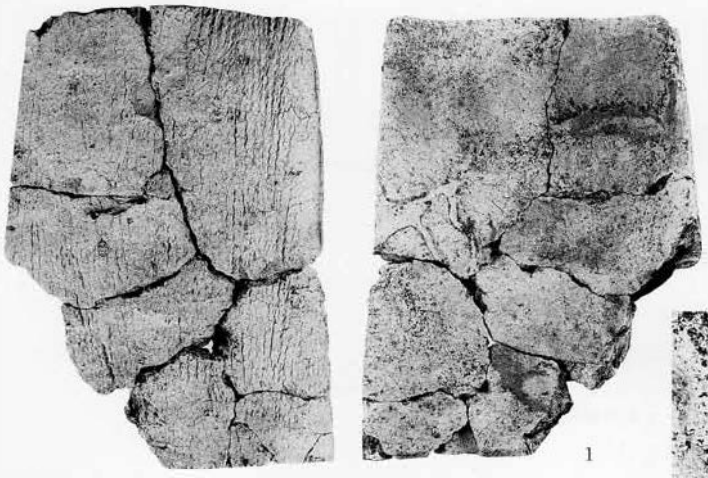


3．刻印拡大

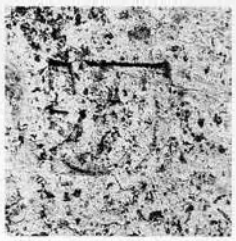
1：8－1（挿図番号－挿図内番号）　2：8－3　3：8－2　4：8－4　5：39－13　6：12－7　7：11－2　8：46－18
9：35－6

（縮尺1～9：1/6、刻印拡大：任意）

図版20　　出土遺物9（瓦）

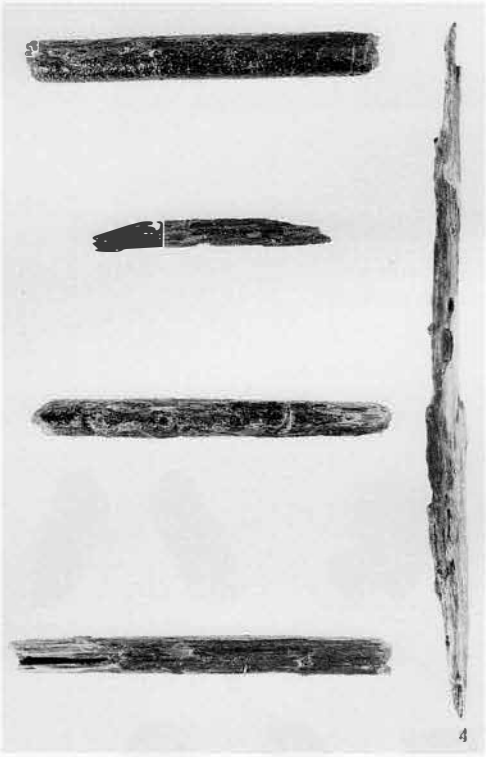


1



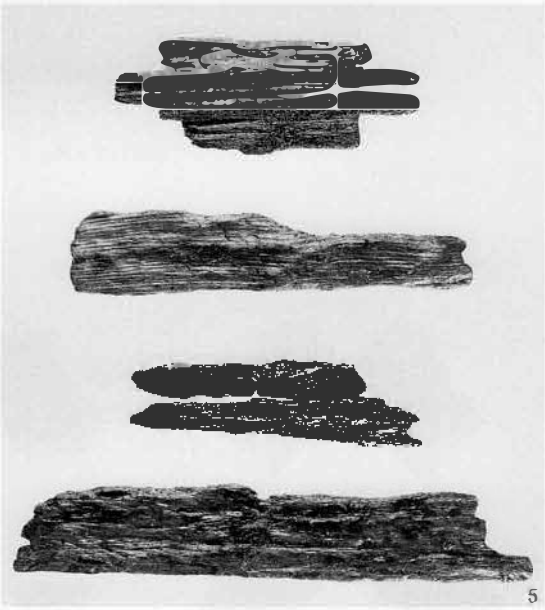
1．刻印拡大

2　3



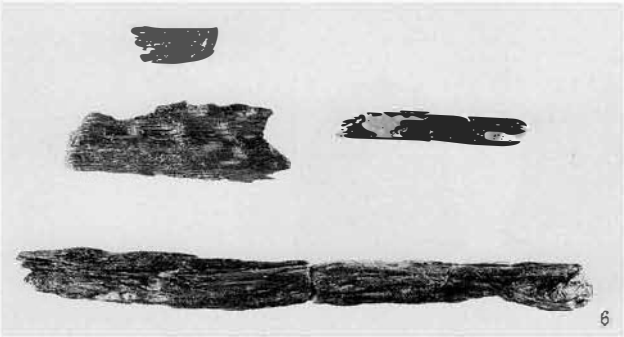
4

SK175棺下材　左側：上から横木1、2、3、5
右側：棺脇押え板



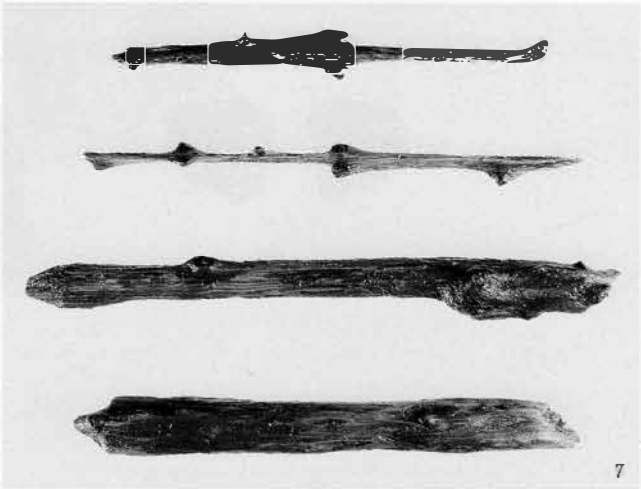
5

SK175棺材　上から東側板、西側板、南木口板
北木口板



6

SK184棺材と棺下材　1列目：南木口板
2列目左：西側板
右：横木4
3列目：横木1



7

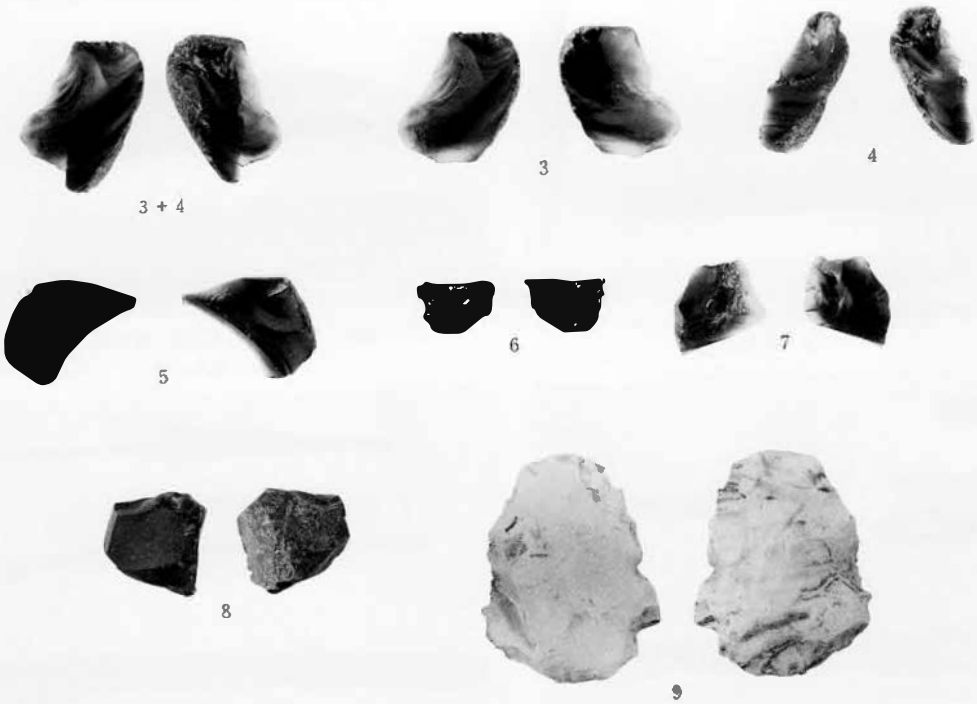
SK190出土材

1：39－14（挿図番号－挿図内番号）　2：33－16　3：40－15　4～7：註記参照
（縮尺1・5～7：1/6、刻印拡大：任意、2・3：1/2、4：1/12）

出土遺物10（瓦、木製品）　図版21

SK187棺下材　上から縦木、横木1、2

SK214棺下材　上から横木1、3、2



1・2：註記参照　3：44－1（挿図番号－挿図内番号）　4：44－2　5：44－3　6：18－2
7：15－1　8：19－1　9：48－2
（縮尺1・2：1/12、3～9：1/2）

出土遺物11（木製品、石器）

図版22

報告書抄録

ふりがな	いちかわばしいせき
書名	市川橋遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第193集
編著者名	吉野　武
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980-8423　宮城県仙台市青葉区本町３－８－１　TEL 022－211－3685
発行年月日	西暦2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
いちかわばしいせき 市川橋遺跡	みやぎけん 宮城県 たがじょうし 多賀城市 いちかわあざ 市川字 なかやち 中谷地	042099	18008	38度 18分 4秒	140度 59分 5秒	20000801～ 20000901 20010409～ 20010608 20020902～ 20021206	7,500	名古曾川遊水池造成に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市川橋遺跡	集落跡	古墳後期	竪穴住居跡、溝跡、土壙、小溝状遺構	土師器、須恵器 土製品（土錘） 石製品（剣形、黒曜石製スクレイパー）	隣接する山王遺跡の自然堤防上の大集落のほかに、北側の丘陵上にも集落があることが明らかになった。
	集落跡	奈良	竪穴住居跡 溝跡、 小溝状遺構	土師器、須恵器、瓦、 石製品（砥石）	多賀城外郭西門の近くに営まれた集落。外郭南辺、西辺と同じ方向をとる溝跡に囲まれた集落で、その外側には耕作域が広がる。
	都市	平安	掘立柱建物跡、土器埋設遺構、土葬墓、溝跡、土壙、小溝状遺構	土師器、須恵器、 赤焼土器、灰釉陶器、 木製品（木棺、斎串）	前代の集落廃絶後の平安時代には耕作域や墓域となっている。 墓域は、100基以上の墓からなる大規模なもので、木棺墓や土器埋設遺構（甕棺墓）を含むものである。多賀城下に施行された方格地割外の河原に形成された墓域であり、立地の点で都城の墓域に類似する。

宮城県文化財調査報告書第193集

市　川　橋　遺　跡

平成15年３月25日印刷
平成15年３月31日発行

発　行　宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町三丁目８番１号
印　刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町24－24